



国際日本文化研究センター
International Research Center for Japanese Studies

世界の日本研究 2015

JAPANESE STUDIES AROUND THE WORLD

「日本研究」を通じて人文科学を考える

CONTEMPLATING THE HUMANITIES THROUGH JAPANESE STUDIES

郭南燕・白石恵理 編

Edited by Nanyan Guo and Shiraishi Eri



世界の日本研究 2015
JAPANESE STUDIES AROUND THE WORLD

「日本研究」を通じて人文科学を考える
**Contemplating the Humanities through
Japanese Studies**

郭 南燕・白石 恵理 編
Edited by Nanyan Guo and Shiraishi Eri

国際日本文化研究センター
International Research Center for Japanese Studies

©2016 International Research Center for Japanese Studies

All rights reserved by the International Research Center for Japanese Studies.
No part of these proceedings may be used or reproduced without written permission,
except for brief quotations embodied in critical articles and reviews.

First edition published 2016

by the International Research Center for Japanese Studies

3-2 Goryo Oeyama-cho, Nishikyo-ku, Kyoto 610-1192, Japan

Telephone: (075) 335-2222 Fax: (075) 335-2091

URL: <http://www.nichibun.ac.jp>

ISBN 978-4-901558-80-8

目次

Table of Contents

序——「日本研究」の必要性とは？ Introduction: Why Do We Study Japan?	郭南燕 Nanyan Guo	5
日本研究の有意義性 The Relevance of Japanese Studies		
Reshaping the Baton: The Enduring Relevance of Intellectual History Takashi Shogimen		13
バトンを新たに形づくる——思想史の永続的有意義性について 将基面 貴巳		27
Youthful Rebellion as a Stage towards Freedom and Originality: The Case of Tada Tomio, Immunologist, Essayist, and Playwright Yuzo Ota		41
Overlap between Victims and Perpetrators in HottaYoshie's Novel <i>Jikan</i> Takeuchi Emiko		55
日文研が輩出した中国の医学史研究者たち 梁 嶸		71
中国大陸における日台関係史研究の概説 王 鍵		80
近代日中関係史研究の新しい視点 ——黄自進『蒋介石與日本』を中心に 高 文勝		92
魯迅の翻訳に関する研究の現状 陳 紅		98
東アジア（日中韓）比較文学研究という視座 竇 新光		105
越境する「大衆文学」の力 ——中国における松本清張文学の受容 王 成		111
Comparative Sociological Research in the Field of Japanese Studies in Bulgaria Maya Keliyan		127
A Style of the Literati: Reconsidering the Aesthetics of <i>Wabi</i> and <i>Sabi</i> in World Culture Emilia Chalandon		136
韓国における日本研究——陶磁工芸を中心に 朴 正一		141

海外の大学における日本研究 Japanese Studies in Overseas Universities

Europe

- スウェーデンの日本研究 トウンマン武井 典子 145
- リトアニアにおける日本研究——歴史・現状・課題 高馬 京子 149
- Japanese Studies in Ireland
Aisling O'Malley, Louis Cullen, Donagh Morris 158
- Challenges and Perspectives: Japanese Studies in Bulgaria
Gergana Petkova 164

Australia

- アデレード大学アジア研究学部の歩み 米山 尚子 174

Latin America

- Japanese Studies in the Ibero-American Context
Amaury A. García Rodríguez 180

私の日本研究 My Research on Japan

- Living in the Bermuda Triangle: Prague, Toronto, Nara
Anthony Liman 185
- 日本史研究の春秋 趙 建民 208
- My Four Decades at McGill University Yuzo Ota 220
- 日本との出会い30年 楊 際開 227
- Studying Japanese Contemporary (and Traditional) Music from Italy
Luciana Galliano 232

日文研からの視点 A View from Nichibunken

- 日文研随想——やぶにらみ私論 琴浦 香代子 241
- 執筆者一覧 246
- 編集後記 248

序——「日本研究」の必要性とは？

Introduction: Why Do We Study Japan?

郭 南燕

Nanyan Guo

本号では「日本研究」を通じて人文科学の存在意義について考えたいと思う。

現在は人文科学 (the Humanities) の有用性が問われている時代である。日本だけではなく海外でも、大学の学科調整や経費削減の必要があるたびに、「人文科学」が狙上に載せられる。2015年6月8日、文部科学省は全国86の国立大学に既存の学部を見直すよう通知を出し、「特に教員養成系や人文社会科学系学部・大学院は、組織の廃止や社会的要請の高い分野に転換する」ことを求めた。

「社会的要請」によってのみ、人文科学の必要度を測ることは賢明な方針とは言えないだろう。なぜならば、人文科学にはそもそも、人間の言語と思想を批判的に分析し、人間社会を成熟させ、「社会的要請」を生み出す役割があるからだ。例えば、作曲家、画家、作家などは、「社会的要請」に応えるよりは、むしろ個性と才能によって優れた作品を創り出して社会で享受され、研究者や評論家はそれらの作品の意義と社会的効果を解明し、鑑賞と受容を導く。このように人文科学は、「社会的要請」より先に進んでいるものでなければならない。

海外からの視点で行われる「日本研究」は、人文社会科学の多くの分野にまたがり、日本の言語・文学・歴史・経済・経営・政治・外交・社会・教育・法律・美術・音楽・映画・環境などを対象とする。1970年以降、世界で展開されてきた「日本研究」には、日本経済の「奇跡」の解明という目的が働いたことが大きかった。1990年代にバブルがはじけてからは、国によって研究者数が減り、いくつかの国で日本語教育の規模が若干縮小されたことはあっても、長年の蓄積と、活発な学術交流により、日本研究は質的成長と深化を見せている。

国際交流基金の調査によれば、2012年現在、海外の日本語学習者数は400万人近い。1970年代前半の日本語学習者数10万人と比べれば、40倍の増加である。学習者の動機の1位は日本語 (62.2%)、2位は日本語でのコミュニケーション

ン(55.5%)、3位はマンガ・アニメ・J-POP(54%)、4位は日本の歴史・文学(49.7%)などへの関心からであり、5位は就職(42.3%)に有利なためという¹。日本語、日本文化そのものが外国人に魅力を感じさせていることがわかる。

世界の日本研究を支援するために1987年に京都に設立された「国際日本文化研究センター」(日文研)は30年近く、多くの研究者のために役立てられている。本誌は、世界各地の日本研究の状況を集め、発信することによって、日本研究者のネットワーキングに貢献しようとしている。本号の寄稿者は皆、日文研を訪れたことのある研究者であり、本誌のミッションを支持してくれている。「日本」を比較的に見て、研究者自身の居場所の文化的情報を活用し、広い視野を用いている。

また、寄稿者たちの「日本研究」の内容は、人文科学の必要性を考える上での示唆も与えてくれている。つまり、歴史から現代生活に有益な啓示を汲みとるため、科学技術の引き起こした環境破壊と倫理的問題を解決するため、日本の戦争史を検証するため、他国の科学技術史を解明するため、アジアの地政的緊張を緩和させるため、東アジアの近代文学を理解するため、世界の消費形態の行方を見通すため、海外で形成された美意識の源流を探るためには、まさに人文科学の多分野の知識と方法を用いなければならない。

学際性、国際性、比較性を伴う「日本研究」は、「日本を通して世界を知る」という目的意識によって支えられている。本号の論文と報告は、人文科学研究者の姿勢についても考えるきっかけを与えてくれている。内容は大きく分けて、「日本研究の有意義性」「海外の大学における日本研究」「私の日本研究」である。

第1部「日本研究の有意義性」では、まずニュージーランド・オタゴ大学歴史学科の将基面貴巳氏による「教授就任講演」(2015年5月)の英語原稿を掲載する。氏は自身の西洋政治思想史と日本政治思想史との比較研究を振り返ることによって、英語圏大学が直面する人文科学の教育と研究の危機的状態に対処すべきヒントを与えてくれる。これらのヒントは、日本の人文科学研究者にとっても重要なので、本講演の日本語訳も併載する。

1 国際交流基金『海外の日本語教育の現状：海外日本語教育機関調査』(くろしお出版、2013年、7-9頁)によれば、海外の日本語学習者は2012年現在、3,985,669人で、2009年より9.2%増である。この数字は日本語の独学者を含まない。

将基面氏は、中世神学者ウィリアム・オッカムと、20世紀日本の経済学者でキリスト教思想家矢内原忠雄との異議申し立てを比較して、歴史的洞察は、現代の政治経済に関し先見の明をもたらすものだと考える。また、人間の条件と価値を探究する人文科学という学問の自由が、経済的有効性をもって学問の価値を測ることによって脅かされている昨今、研究者は個人の「興味」や「知識愛」だけではなく、研究目的と社会的効果に関する明確な意識を持ち、それを示すことが大切だと指摘する。

Yuzo Ota (太田雄三) 氏の論文は、世界的に著名な免疫学者で随筆家・戯曲家でもある多田富雄の人生と価値観を紹介する。多田は2007年に「自然科学とリベラルアーツを統合する会」を設立して、地球環境を破壊し人類最大の脅威となった科学技術の問題を解決できるのは、「科学の知」と「人文の知」の統合だけだと信じていた。多田は、広い意味での教養と「リベラルアーツの知」を科学研究の基盤とし、既存価値観への反逆と伝統価値の継承との間でバランスを取り続けた人である。その魅力的な人間像がOta論文の中で躍動している。

第二次世界大戦から70年が経った。戦後日本文学の大半は、日本人の蒙った被害を描写することに専念し、加害という事実を目を瞑っている。明治大学のTakeuchi Emiko (竹内栄美子) 氏の論文は、被害者意識と加害者意識を同時に描写する数少ない文学者の一人である堀田善衛の作品を取り上げて、戦争体験を客観的に清算することの必要性を示している。そして、人間の意識改革における人文科学の重要性を際立たせてくれる。

北京中医薬大学の梁嶸氏は、日文研で研究方法を取得してから、中国医学史の研究を推進してきた中国研究者5人を紹介する。医学史の研究は、現代医学の促進と深い関係にあり、梁氏自身も先人の知恵を吸収して、新しい診療方法を開拓している。すなわち、「日本研究」は「日本」に終わらず、「東アジア」への貢献に密接につながっていることがわかる。

中国社会科学歴史研究院の王鍵氏は、1980年から現在まで中国大陸で行われてきた日本と台湾との関係に関する研究成果を丁寧に概説してくれる。網羅された文献は、学術的に貴重であるばかりでなく、台湾・日本・中国の相互関係の平和的発展に寄与できるものでもある。天津師範大学の高文勝氏は、蒋介石と日本と中国共産党の間の複雑な利害関係を分析した、台湾中央研究院黄自進氏の著書『蒋介石與日本』を客観的に批評する。黄氏の著書と高氏の評論から

読み取れるのは、国際社会の平和には、紛争の歴史を越えて、経済的・文化的相互利益を求めることが大切だというメッセージである。

浙江工商大学の陳紅氏は、魯迅文学の重要な一部である「翻訳文学」を取り上げる。魯迅が中国語訳した外国文学 216 篇のうち、約 8 割が日本文学と日本語訳ヨーロッパ文学であった。陳氏は、魯迅の使用した日本語訳ヨーロッパ文学の底本を通して、魯迅の翻訳観と特色を分析している。周知のように、近代初期の日本文学と日本語訳文学は中国だけではなく、朝鮮半島にも大きな影響を与え、東アジアの近代文学の形成にとっては不可欠なものであった。神戸大学の竇新光氏は、中国語・韓国語・日本語を駆使して、東アジアの比較文学を研究し、日本文化の幅広い影響を突き止めて、日本文化を客観的に理解しようとしている。

清華大学の王成氏は、中国において松本清張の推理小説およびその映画化が 1980 年代から現在まで絶大な人気を誇っている実情を紹介し、清張が描いた日本社会の問題は、文化大革命（1966～76 年）を経験した中国人に人間性の矛盾を反省させ、1990 年代以降の中国で横行する汚職と犯罪を予告し、中国人読者は清張の小説から、自国の文学では得られない社会批判の精神を読みとっていることを指摘する。

ブルガリア科学アカデミーの Maya Keliyan 氏は、日本とブルガリアにおける社会の近代化、中産階級の特徴、農村地域の発展、消費形態の変化、国際化などの比較研究を行っている。氏は、日本の消費形態は世界に先駆けているため、日本社会をよく理解すれば、ブルガリアを含む国際社会のこれからの見通しを把握することができる。また、社会と経済の大きな変動下における知識人の倫理観と道徳的責任の重要性を強調する。

京都大学研究員 Emilia Chalandon 氏の報告は、日本の「わび」「さび」という美意識の流行が欧米の政治・経済・文化の発展と密接な関係を持ち、欧米から逆輸入された経緯があることを指摘し、「日本的」と思いがちなものは、実は「国際的」であり、「日本研究」には国際的視野がなければならないことを示唆する。さらに、釜山外国語大学の朴正一氏の報告は、16 世紀の日本の茶道における韓国陶磁の役割の大きさを指摘し、日本茶道の持つ「国際性」を示してくれる。

第2部「海外の大学における日本研究」は、海外の大学における日本研究の歴史と現在を教えてくれる貴重な情報である。スウェーデン、リトアニア、アイルランド、ブルガリア、オーストラリア、ラテンアメリカの諸大学において、日本語・日本文化の教育と日本研究とは助け合うものである。

ヨーテボリ大学のトゥンマン武井典子氏は、スウェーデンの大学の日本語教育と日本研究の現状を紹介し、近年、学生の日本語能力の向上は顕著であるが、予算編成上、研究テーマの選択が助成金取得の可能性を左右するため、文学研究のテーマでは資金獲得が非常に困難になっている点に触れている。これは言うまでもなく、「人文科学」の一分野である日本文学研究の存在意義が疑問視されているということである。高馬京子氏もまた、リトアニアの日本研究の歴史と現状と成果物を詳しく紹介した上で、「日本研究」が「アジア学」の一部として扱われている現在、学際性と国際性を利用しながら、「日本研究」の必要性を以前にもまして主張していく必要があることを教えてくれる。一方、アイルランドでは、予算困難のため、日本語・日本文化教育の規模が大幅に縮小され、日本研究も脅かされていることを、O'Malley 諸氏の報告から読むことができる。

ソフィア大学の Gergana Petkova 氏は、ブルガリアでは日本語・日本文化の教育が盛んで、日本研究の刊行物（書籍、学術誌論文、新聞雑誌記事等）が多数出版されているため、ブルガリア人は日本に特別な親近感を持ち、日本大衆文化に対する関心度が極めて高いことを紹介する。氏は、日本文化の伝達に大きな役割を果たしたソフィア大学の日本語教育と日本研究の現状、学生の学習動機、進路について具体的に教えてくれる。学生の3分の1が卒業時に日本語能力試験1級に合格し、残りが2級に合格している、という日本語学習熟の高さには目を見張ってしまう。ソフィア大学では、日本語は必ず、日本の文学・歴史・文化・経済などの知識と共に習得するよう教育を行っているという。

オーストラリア・アデレード大学の米山尚子氏の報告では、当大学の日本語教育と日本研究の現状、「地域研究をしながら言語も学ぶ」という教育方針、日本の大学との交流、豪州の日本研究に寄与した状況が詳しく紹介されている。また、日本研究と中国研究は相互作用の関係にあり、日本研究者たちは、日本を通して世界を見るという明確な目的意識を持っている点にも触れる。

メキシコ大学アジア・アフリカ研究センターの Amaury Rodriguez 氏は、スペイン語圏における日本研究にリーダーシップを発揮しているメキシコ大学の教育、研究、図書館の状況を紹介している。スペイン語圏で日本研究を発展させていくには、スペイン語で刊行した日本研究の成果物を英語や日本語に翻訳していかなければならない、とも指摘する。

第3部「私の日本研究」には、日本研究に人生を捧げた5名の研究者に寄稿していただいている。チェコ出身の Anthony Liman 氏はカナダ・トロント大学の名誉教授であり、私がトロント大学に留学した1990年から2年半、私を指導してくださった方である。ある日、私が借用していた研究室の引き出しの中に、氏がノーベル文学賞審査委員会に宛てて井伏鱒二を推薦した文書を見つけて驚いた。ノーベル文学賞は自ずとやってくるものではなく、海外の文学研究者が力を合わせて推薦してようやく獲得できるものだと、その時初めてわかった。Liman 氏がある日、新宿の居酒屋で井伏鱒二と酒を飲んでいると、ある編集者が井伏の文学を外人が理解できるのかと聞いてきて、井伏は「この人は外人ではなく、昔の日本人だ」と答えたそうである。今回の報告にもあるこのエピソードは、氏がなぜ日本文学に魅力を感じたのか、その研究がどれほど日本人のみなさんに助けられたのかを教えてくれる。さらに、日文研の先達である梅原猛、中西進、山折哲雄、芳賀徹、河合隼雄諸氏についての思い出も綴られている。氏は12年をかけて『万葉集』のチェコ語訳を完成して、2008年に刊行している。

復旦大学の趙建民氏は、上海事変（1937年）が起こった直後に誕生した方である。それが因縁となり、日本の歴史と日中関係史の研究に駆り立てられたという。氏の文章を通して、社会主義国設立後の中国は、政治的要因によって、日本に関する学術的研究が極めて困難だったことがわかる。文化大革命の終息後、氏は日本と中国の頻繁な学術交流によって幅広く研究を行い、数多くの論考を上梓したことを振り返っている。

カナダ・マギル大学の Yuzo Ota（太田雄三）氏は、日本の思想文化史、対外交流史の研究に貢献してきた研究者である。掲載稿は、McGill で38年の勤務を終えた際に行った「退官記念講演」録である。氏の多くの著書のうち英語で書かれたものは2冊で、1冊はバジル・チェンバレン、もう1冊は神谷美恵子に関する評伝である。チェンバレンを取り上げたのは、その思想と経験に共鳴

を覚えたからだという。すなわち、各国文化の特殊性よりも普遍性を求めるということであった。この講演に見られるのは、日本の特殊性を主張せず、文化の普遍性に信頼を置こうとする Ota 氏の信念である。

杭州師範大学の楊際開氏は、中国と日本の関係において革命家たち（章太炎、宋恕、梁啓超、譚嗣同、魏源、吉田松陰など）の果たした役割に注目し、独自の視点を紹介してくれる。氏の文章に、中国と日本の近代史上における思想家たちの相互影響を見ることができ、30 年来、常に日本との比較によって中国研究を行ってきた足跡がわかる。氏は、日文研のこれから果たすべき役割にも言及する。

イタリアのカ・フォスカリ大学の Luciana Galliano 氏は、日本現代音楽の研究者であり、1960 年代が日本だけではなく、欧米においても現代音楽の最も豊饒な時代ではなかったかと指摘する。人間の情緒を最大限に表現できる言語ともいえる音楽を研究すれば、各民族の特色をよりの確に把握できるという考えの下、音楽によるコミュニケーションの有効性を体験し続けていることを報告する。

最後に、日文研で 6 年間にわたり海外研究交流プロジェクト員として勤務した、琴浦香代子氏の感想文を掲載する。氏は外国人研究者の受け入れ、シンポジウムの開催と学術交流に携わった経験が豊富であり、日文研がいかによりよく海外の日本研究に協力することができるかについての意見を吐露してくれる。傾聴すべき点が多くある。氏はまた、本号の原稿募集にも尽力された。

海外の日本研究者は、日本内外の資料と研究成果を利用しつつ、独自の立場と視点によって、日本文化の性質を問い続けている。また、日本国内の人文科学の発展があったからこそ、海外の日本研究も大きく発展できた、という例は数多い。「日本研究」という学問がなければ、どれだけ多くの歴史的、社会的、文化的現象が不問に付されたかを、本号それぞれの論考によって知ることができるだろう。

「日本研究」が必然的に持つ国際性、学際性、比較性は、人文科学研究がこれから目指すべき方向性ではないかと思う。また、人文科学の研究成果が国際社会の相互理解に大きく貢献できることは、今後ますます明瞭になっていくだろう。

Reshaping the Baton: The Enduring Relevance of Intellectual History

Takashi Shogimen

What follows is my Inaugural Professorial Lecture delivered at the University of Otago on 21 April 2015. The lecture was introduced by Professor Harlene Hayne, the Vice-Chancellor of the University, followed by an biographical account of the speaker by Professor Tony Ballantyne, the then Head of the Department of History and Art History. Professor Ballantyne also offered concluding remarks after my Lecture.

* * *

Just a moment ago Professor Ballantyne kindly outlined my academic career thus far. After hearing that, you might wonder why I have been working on disparate topics. When I was still a postgraduate student at the University of Sheffield, a number of people used to ask me: why on earth do you study a dead monk? Now the boot is on the other foot: since I have been known as a medievalist for nearly two decades, when some realize that I also work on Japanese topics, they ask: why do you study Japanese history? So, I think some justification is due.

In this lecture I propose to offer a personal reflection on how and why I came to study intellectual history, especially the history of political thought in both Western Europe and Japan. But obviously I do not wish my talk to be too personal or trivial and to be of interest to anyone but myself. Rather, through a personal reflection I would like to address an issue of contemporary relevance in the academy at least in the Anglophone world: that is, the so-called crisis of humanities. Of course I shall not make any audacious claim that I have a solution to the crisis. My ambition is far more modest in that, through a reflection of the trajectory of my academic formation, I hope to highlight some points that, I think, are worth considering in relation to the contemporary problems surrounding humanities. I am thus only aiming to provide food for thought from the viewpoint of an intellectual historian for those who care about the future of research and teaching in humanities.

I. Exploring Two Traditions of Political Thought

Let me begin by sketching what I have been doing in my research in intellectual history. My work has revolved around two pillars: one is the history of political thought in medieval Europe, and the other is the history of political thought in modern Japan. I began my academic career with research in the political thought of William of Ockham, the fourteenth-century Franciscan theologian. My study highlighted Ockham's theory of heresy and his program of dissent from heretical popes.¹ Ockham was originally a theologian and logician at Oxford, who did not write anything about politics. However when he was asked by his superior to examine papal bulls, which condemned the Franciscan ideal of evangelical poverty, he realized that the contemporary pope had fallen into heresy. Withdrawn from papal obedience, Ockham was excommunicated. Exiled in Munich, he produced a general theory of heresy, and envisaged a program of legitimate dissent from the heretical pope. On that basis, he wrote anti-papal polemical works to warn contemporary Christians of the danger of papal heresy. Thus I offered a new interpretation of Ockham as a political thinker, who attempted to rescue the autonomy and freedom of individuals from unjust political power such as that of a heretical pope (see Figure 1).

My more recent work is a historical narrative of medieval European political thought for a Japanese audience. The book entitled *The Birth of European Political Thought* examines the historical process whereby “political thought” emerged in medieval Christendom (see Figure 2).² Historians of political thought, who work

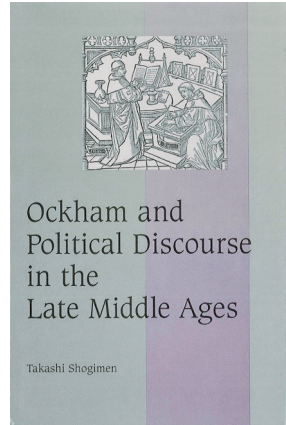


Figure 1



Figure 2

1 Takashi Shogimen. *Ockham and Political Discourse in the Late Middle Ages*. Cambridge: Cambridge University Press, 2007.

2 Shōgimen Takashi 将基面貴巳. *Yōroppa seiji shisō no tanjō* ヨーロッパ政治思想の誕生. Nagoya Daigaku Shuppankai, 2013.

on the modern period, often argued that there was no such thing as “political thought” in the Middle Ages, because in medieval Europe there was nothing comparable to the modern state. Typically medieval political thought took the form of ecclesiology, the theory of church government. Supposing that “political thought” is necessarily secular, one would struggle to find any intellectually significant attempt to theorize politics in the medieval world.³

Meanwhile, it was precisely in the Middle Ages that a unified culture emerged in the geographical region, which we today call Europe. Generations of medieval historians from Henri Pirenne and Christopher Dawson to Jacques Le Goff and Robert Bartlett have firmly established that the ancient Roman Empire was not Europe.⁴ Europe as a cultural unit was born in the Middle Ages. In my book, I tried to answer the question: what kind of political thinking emerged in the time when a unified culture appeared in the geographical area that is today called Europe? I responded to this question by tracing two types of discursive traditions: one is the emergence and development of ecclesiological discourses on power. That is, it was theological and legal scholarship in the medieval Church that generated sophisticated theories of power. The other tradition I highlighted is the rise of the theory about civil community under the influence not only of Aristotle and Cicero but also of the ancient Roman medical scientist Galen. The metaphor of the body politic, which was prevalent in the Middle Ages, constituted the interface between medical understanding of the human body and the political understanding of the civil community. New theories of the political community in the Middle Ages were modeled on the new physiological understanding of the human body.

In this argument, methodologically, I have been developing a new approach to intellectual history by deploying the cognitive linguistic theory of metaphor. Metaphor is not just figurative language; it constitutes our construal of one conceptual domain in

3 A classic account of the difficulties associated with the study of medieval political thought is J. H. Burns, “Introduction,” in *The Cambridge History of Medieval Political Thought, c.350–c.1450*, ed. Burns. Cambridge: Cambridge University Press, 1988, pp. 1–8.

4 Henri Pirenne. *Mohammed and Charlemagne*, trans. Bernard Miall. London: Allen and Unwin, 1939; Christopher Dawson. *The Making of Europe: An Introduction to the History of European Unity*. London: Sheed and Ward, 1946; Jacques Le Goff. *The Birth of Europe*. Oxford: Blackwell, 2005; Robert Bartlett. *The Making of Europe: Conquest, Colonization, and Cultural Change, 950–1350*. Princeton: Princeton University Press, 1993.

light of another.⁵ The metaphor of the body politic therefore represents the understanding of the structure and functions of political community in light of those of the human body. What follows from this is that the metaphor of the body politic helps us hypothesize that political thinkers in the past deployed medical knowledge in order to conceptualise the political community in the likeness of the human body. So I have been exploring a new method whereby metaphor constitutes a clue for reconstructing an intellectual context, in my case, the medical context of political theorizing.⁶

I would like to touch upon the second pillar of my work briefly, that is, the study of the history of Japanese political thought. Much of my research has revolved around political ideas in wartime Japan, in the 1930s and 40s. I have especially focused on the life and work of Tadao Yanaihara, an economist and a Christian thinker. A professor of colonial policy at the Imperial University of Tokyo, he wrote extensively to criticize contemporary Japanese colonial policy in Taiwan, Manchuria, and the South Pacific, and also to attack the chauvinistic nationalism and militarism of contemporary government. I have examined his discussions of pacifism and patriotism in contemporary intellectual and political contexts.⁷ Also my recent book in Japanese offered a micro-historical analysis of the event, where in 1937 Yanaihara was forced to resign from the University due

-
- 5 The literature on the cognitive linguistic theory of metaphor is enormous. The most influential account is unquestionably George Lakoff and Mark Johnson, *Metaphor We Live By*. Chicago: University of Chicago Press, 1980.
 - 6 See especially Takashi Shogimen, “Medicine and the Body Politic in Marsilius of Padua’s *Defensor pacis*,” in *A Companion to Marsilius of Padua*, ed. Cary J. Nederman and Gerson Moreno-Riaño. Leiden: Brill, 2012, pp. 71–115; Shogimen (co-authored with Cary J. Nederman), “The Best Medicine? Medical Education, Practice and Metaphor in John of Salisbury’s *Policraticus* and *Metalogicon*,” *Viator* 42 (2011), pp. 55–74; Shogimen, “Treating the Body Politic: The Medical Metaphor of Political Rule in Late Medieval Europe and Tokugawa Japan,” *The Review of Politics* 70 (2008): Special Issue on Comparative Political Theory, pp. 77–104; Shogimen, “‘Head or Heart?’ Revisited: Physiology and Political Thought in the Thirteenth and Fourteenth Centuries,” *History of Political Thought* 28 (2007), pp. 208–229.
 - 7 Takashi Shogimen. “‘Another’ Patriotism in Early Shōwa Japan (1930–1945).” *Journal of the History of Ideas* 71 (2010), pp. 139–60. Reprinted in *Critical Readings on Christianity in Japan*, ed. Mark R. Mullins, 4 vols. (Leiden: Brill, 2015), vol. 3; Shogimen. “The Legacies of Uchimura Kanzō’s Patriotism: Tsukamoto Toraji and Yanaihara Tadao.” In *Living for Jesus and Japan: The Social and Theological Thought of Uchimura Kanzō*, ed. Shibuya Hiroshi and Chiba Shin. Grand Rapids: Wm B. Eerdmans Publishing, 2013, pp. 93–112; Shōgimen Takashi 将基面貴己. “Yanaihara Tadao to ‘heiwa kokka’ no risō” 矢内原忠雄と「平和国家」の理想. *Shisō* 思想, vol. 938 (June 2002), pp. 27–47.

to his controversial—that is, pacifist—extramural speech.⁸ The suppression of his speech did not come only from the government; media and his colleagues at the university contributed to the expulsion of the liberal academic. Thus the suppression of freedom of speech is a complex phenomenon, and university autonomy is indeed very difficult to defend when the state and society are going mad.

II. Two Questions, Two Teachers

So my work crosses geographical, cultural and temporal boundaries. Crossing boundaries however is quite natural to me. It is because I do not think that boundaries are given. They are artificial and fictional. Disciplinary boundaries in particular result merely from utilitarian arrangements for the division of labor. New questions have given birth to new disciplines, and existing disciplines are constantly changing in response to changing questions. So although it is customary to identify ourselves as historians, political scientists, literary scholars and so forth, our own enquiries should not be dictated primarily by the needs of the discipline; rather it should be driven by questions because the discipline is the result, not the origin, of knowledge, which is generated in response to questions.

As for me, enquiring into the history of European and Japanese political thought is consciously dictated by two generic questions: one concerns the cultural specificity of political thinking. I am exploring the cultural characteristics of political theorizing with special reference to Western Europe and Japan. What is distinctively European about European political thought? And what is characteristically Japanese about Japanese political ideas? One cannot appreciate an intellectual tradition's distinctiveness unless one compares it with another. Hence, an exploration into the cultural specificity of European political thinking requires comparison. In my case, this has been the Japanese tradition.

The other question that dictates my enquiries concerns the dissenting tradition. Political theory is, in one respect, a theoretical pursuit of political ideals. Political theorists conceptualize their normative theories through critical engagement with a wide range of political visions such as liberalism, republicanism, communitarianism, feminism, socialism, and so forth. By contrast, I am more interested in how political thinkers theorized

8 Shōgimen Takashi 将基面貴巳. *Genron yokuatsu: Yanaihara jiken no kōzu* 言論抑圧: 矢内原事件の構図. Chūō Kōron Shinsha, 2014. See also Shogimen, "Censorship, Academic Factionalism, and University Autonomy in Wartime Japan: The Yanaihara Incident Reconsidered," *Journal of Japanese Studies* 40:1 (2014), pp. 57–85.

unjust, tyrannical, or “diseased” government and how and why they legitimized dissent from it. Ockham was a dissenter in fourteenth-century Europe, while Yanaihara was a dissenter in twentieth-century Japan. The contexts in which the two men operated were entirely different, yet they both wrestled with the question of legitimate dissent from unjust power.

So how did I come to focus on these questions? In retrospect, I do not think I did so in my postgraduate years. I was immersed in the British tradition of intellectual history during most of the 1990s, and I owe a great deal to the academic training at the University of Sheffield in terms of research skills and methodology. However, in terms of my academic mindset and questions, I cannot help thinking that I am ultimately a son of Japanese scholarship. My fundamental attitude to academic enquiry was shaped profoundly by my undergraduate education at Keio University in Tokyo. I am delighted to be able to talk, with sincere gratitude, about two teachers at Keio University: Professor Seiichi Sumi and the late Professor Katsumi Nakamura. Professor Sumi was Professor of the History of Political Thought and one of the few specialists in medieval political thought in Japan; he advised me to continue studying for postgraduate degrees, and to choose medieval political thought as my specialized area. Professor Nakamura was Professor of Economic History, and his research field was the history of early modern English economic and social thought. And I can say gratefully that I am indebted to them for my two key research questions: Professor Sumi inspired me to investigate the cultural specificity of political thinking, and Professor Nakamura cultivated my interest in the dissenting tradition.

What is common to both professors and is deeply inspiring to me about their teaching is that they lectured on their specialized areas with frequent references to modern Japan. Their historical discussions on European intellectual history were often connected with their critical observations on modern Japanese politics, economy and society. That is not to say, to be sure, that they turned the classroom into a place for political campaigning. They never commented on any specific policy issues. Rather they often highlighted long-term, structural *problems* with politics, society and the economy in modern Japan. Professor Sumi often discussed the fragility of Japanese democracy in light of modern European political ideas, while Professor Nakamura lectured on the origin of modern capitalism, and discerned what the German sociologist Max Weber called “pariah capitalism,” that is, the pursuit of wealth by anti-social and unethical means, in the practice

of contemporary Japanese capitalism. Notice that they taught me in the late 1980s. This was the time when Japanese economic power was at its zenith. Some commentators even argued seriously that the twenty-first century would belong to Japan. The two professors, by contrast, criticized the contemporary practice of Japanese democracy and capitalism and reflected anxiously on their future. Their lectures demonstrated that historical insights could lead to foresight into the political economy of their own time.

You might wonder, however, about the present-tensed tendency of such undergraduate lectures on intellectual history. Indeed, historicism requires historians to restrict their enquiry into the past without reference to the present.⁹ The lectures by the two professors I am talking about clearly manifested a tension between the historicist scrutiny of past ideas and the philosophical concerns with the present. But their presentist impulse did not originate in an anachronistic desire to see the past through the prism of the present. Rather the two professors' concerns with the present manifested their ambition to shed new light on the present from the perspective excavated from the past. They re-presented past ideas, which may be alien to us moderns, in order to gain alternative perspectives onto the present.

Viewed from another perspective, their lectures did not merely communicate knowledge. Their concerns with the present suggest that their scholarly engagement did not constitute merely the production and communication of historical knowledge but was intended to serve a purpose beyond the pursuit of new knowledge.

To clarify my point, let me give you an example. One of the key lessons they taught is that while it is crucially important to be well versed in existing scholarship in the field, one should not delve into research simply because a certain topic presents itself as a gap in current research, or because a certain set of archival materials has not been examined previously. A gap in scholarship does not necessarily mean that it is worth filling. The fact that a set of archival materials has remained unexamined does not *ipso facto* mean that it is worth exploring. The key question here is: is it worth knowing? Indeed, some topics may not have been explored because they are not significant enough. The choice of research topics and questions is inseparable from some kind of value judgment.

9 "Historicism" is notorious for the multiplicity of its meaning. A useful overview of the concept is Robert D'Amico, "Historicism," in *A Companion to the Philosophy of History and Historiography*, ed. Aviezer Tucker. Oxford: Blackwell, 2009, pp. 243–52.

We can certainly think of a variety of standards by which to make value judgments on the choice of research topic, but I just would like to single out one issue. Some of you might wonder how the two professors I am talking about thought of value-neutrality in their scholarly enquiries. Like many Japanese social scientists of their generation, they were Weberian. They both embraced and enshrined Max Weber's idea of *Wertfreiheit*, "value-free" academic enquiry. Indeed when they examined their object of historical enquiry in their monographs and research papers, they did so dispassionately to observe value-neutrality. However, studying historical objects dispassionately in the Weberian, "value-free" fashion, they underscored, does not necessarily mean that researchers should not make any value judgments at all. Professor Nakamura conveyed this idea by an interesting metaphor: he said, one must learn how to read what is written *before* the front cover of a monograph. Obviously nothing is written physically *before* the front cover because there is nothing. What Professor Nakamura meant was that one should be able to read what value judgment motivated the author to write the book, even if the author does not make that motivation explicit in the book—that is the tacit assumption on which the study is predicated.

What I would like to underline here is that the two professors, I think, did not teach their academic disciplines merely as intellectual exercise. They tried to show that there are existential dimensions to research in historical scholarship. Asking certain questions in historical enquiries should not derive from mere "interest" or "love of knowledge." Historical research ought to be anchored in the researcher's fundamental outlook on human life *in our own times*. That outlook is a *sine qua non* because historical studies are, unlike natural sciences, inseparable from the questions of human conditions and values.

In the case of the two professors I have been talking about, their research into European intellectual tradition was clearly motivated by the disastrous experience of modern Japan, which culminated in 1945. From the middle of the nineteenth century, Japan transformed itself in a very short period of time into a modern nation state. The reception of Western institutions, customs and technologies was a top priority for Japanese government and society, but the rapid Westernization and modernization also led to the rise of chauvinistic nationalism and aggressive militarism among other things. The two professors experienced the demise of militarist Japan in their youth, so they desired to understand what went wrong with the modernization of Japan. Their research in European intellectual history was thus closely rooted in their life experience.

But they approached European intellectual tradition differently. Professor Sumi explored the cultural specificity of European political thinking because he desired to understand European culture in contrast with something “European” that became an alter ego of modern Japan. Professor Nakamura turned to excavate the dissenting tradition, which counters patrimonialism in modern Japan. Despite their differing approaches, however, they shared a common concern: their scholarly research was motivated by the question of the demise of modern Japan in 1945, which underpinned their cautious hope for new ideals in postwar Japan. Their research into the European historical world was integral to their engagement with the world in which they lived. I find it fascinating that academic research, which is deeply motivated by personal experience, is not reduced to a pursuit of the strictly personal, which, frankly, no one else cares about, but is, instead, tied to a moral and civic commitment to illuminate the problems of their day. However, precisely because their academic work was ultimately rooted in *personal* experience and conviction, what ultimately motivated them to study was only implied in lectures, and was certainly not mentioned explicitly in their books—that was indeed written *before the front cover*.¹⁰

III. The Growing Threat to Humanities—and the University

Meditating on lessons the two teachers taught me, I would like to single out three points that may be worth pondering for the present and future of research and teaching in humanities from the viewpoint of an intellectual historian. First, I think that the lifeline for humanities consists in our ability to show to the public how and why our research really matters today. But obviously this cannot be achieved by claiming merely that our work is “cool” or “interesting.” The ultimate outlook to human life that underpins research,

10 Allan Megill is one of the very few historians who acknowledge this point explicitly: “Since the historical account is necessarily written from a present perspective, *it is always concerned with the meaning of historical reality for people now and in the future—even if, on an explicit level, it denies that it has any such concern.* To the extent that the concern with present meaning comes to the fore, the historian becomes not simply a historian but a social and intellectual critic as well. Here, too, the historical account may well cease to be primarily a narrative of past events and existents (my emphasis)” (Megill. *Historical Knowledge, Historical Error: A Contemporary Guide to Practice*. Chicago: University of Chicago Press, 2007, pp. 97–98). See also J. H. Hexter’s remarks: “History thrives in measure as the experience of each historian differs from that of his fellows. It is indeed the wide and varied range of experience covered by all the days of all historians that makes the rewriting of history—not in each generation but for each historian—at once necessary and inevitable” (Hexter. “The Historian and His Day.” In *Reappraisals in History*. London: Longman, 1961, pp. 1–13, at p. 13).

I think, determines to a considerable extent how and to what extent our research sheds new light on human conditions and values that are *meaningful in the present*. Often, however, our research is influenced and dictated by mundane needs such as performance evaluation of various kinds. Thus research productivity can even become an objective in itself, which might make us blind to the ultimate purpose for which we engage in research. Reflecting on what our research means not only to ourselves but also to people around us, and why we study what we have been studying, perhaps helps us not only to be relevant but also to remain sane.

Second, reflecting on the legacy of my two teachers reminds me of the importance of lectures in the undergraduate program. Small classes with lots of hands-on exercises might be more efficient in communicating knowledge accurately. However, most knowledge becomes out of date quickly. Indeed, I can hardly recall anything about courses from my undergraduate days that only communicated knowledge. Undergraduate teaching, I think, should be more than infusing knowledge. Cardinal Newman famously claimed when asked about the end of university education that: “knowledge is capable of being its own end.”¹¹ This assertion, however, may require qualification in our time of hyper-specialization where more and more is known about less and less. Both teachers and students are facing a tsunami of ever increasing specialized knowledge. In such an environment, it is crucial for a teacher to help students not merely gain important knowledge but also to understand the problems that the knowledge presents in the present. And in lectures, a teacher should lay out systematically not only knowledge that students should know, but also the meaning and significance of the knowledge in the context where the teacher and students are situated. In such lectures, students will learn not only facts and theories but also questions that are worth asking. And through such lectures, teachers not only communicate knowledge but also inspire.

Third, it is important to acknowledge our own standpoint in the communication of our research. There is no such thing as a global standpoint; we are necessarily situated somewhere in the globe and we are also in the present, not in the past or in the future. My two teachers lived and worked in Japan mainly in the second half of the twentieth century as Japanese citizens. They taught Japanese students predominantly, and wrote for the Japanese audience. Hence they asked questions that are tied to the historical destiny of

11 John Henry Newman. *The Idea of a University*. New Haven: Yale University Press, 1996, p. 78.

modern Japan. But they are not the contexts in which I live my academic life. At a certain point in the past, I made a decision to live my life in the Anglophone world, and that decision eventually took me to this country. As a result, a vast majority of my students are Pakeha New Zealanders. My work in English is read by academics and students in the relevant fields in the West and elsewhere, while my work in Japanese is read by the academic and informed lay audience in Japan. Clearly, as an author and teacher, I am situated in multiple contexts that my teachers did not know. Therefore, although I inherited fundamental questions from the two teachers, I should not answer *their* questions in *their* ways. The questions must be digested fully to be entirely *mine* and must be answered in *my* own way, if I take to heart their lesson that academic research in historical enquiries should be ultimately rooted in some sort of existential motivations.

My challenge is therefore threefold: First, I write works in English for the audience in the West in response to my first question, that is, the cultural specificity of political thinking. This way, I seek to understand the cultural distinctiveness of the tradition of political thinking in Western Europe and Japan, thereby modestly contributing to historical self-understanding of readers in the West and Japan, although ultimately it is rooted in my personal desire for historical, cultural and political self-understanding as an individual who was born and bred in modern Japan.

Second, I write works in Japanese for the audience in Japan in response to my second question, that is, dissent from unjust rule. This way I aspire to disseminate knowledge and understanding of the dissenting tradition, which is, in my view, relatively weak in Japan. But that is not the only reason why I single out the dissenting tradition. Dissent is a form of resistance to injustice. Resistance to injustice, whether it be of earthly powers, a majority of society, or even the divinity, is an undercurrent of European culture, which was crystalized long before Europe emerged—in *Antigone* of Sophocles, one of the three Ancient Greek tragedians. Hence, my second question is in fact a key leading me to the first.

And third and finally, as a teacher at this institution, I hope to continue teaching European history, especially medieval intellectual traditions and political ideas, in order to serve the pedagogical purpose for students who, in my view, ought to learn about the European pursuit of ideals and values such as the authority of individual conscience: a main theme I aim to explore through enquiries into my two fundamental questions.

One might ask how “useful” it is to teach and learn such things as the pursuit of the authority of individual conscience in European history, especially in connection with

employability and business-related skills of students. My response would be as follows: I do not think that history teaching is merely about infusing knowledge and skills. History serves a variety of other purposes. The great English historian, R.H. Tawney, wrote:

What is certain is that ... issues which were thought to have been buried by the discretion of centuries have shown in our day that they were not dead, but sleeping. To examine the forms which they have assumed and the phases through which they have passed, even in the narrow field of a single country and a limited time, is not mere antiquarianism. It is to summon the living, not to invoke a corpse, and to see from a new angle the problems of our own age, by widening the experience brought to their consideration.¹²

Studying history is thinking about issues which men and women of past generations wrestled with in contexts different from our own. And the same issues emerge repeatedly to the surface of human history in different forms and contexts. The question of the authority of individual conscience was indeed addressed and examined again and again in European intellectual history.

But remember: the authority of individual conscience was discussed especially when it came under threat. In the European past, it was attacked by religious authority and political power. Today, it is subject to the threat of economic power. One such symptom is that the discourse prevalent today in the universities and in societies around the world subjugates the university's research and teaching to economic values, and judges academic disciplines in light of economic benefit and efficiency.

The modern world has witnessed what Weber once called "the unceasing struggle of deities." As long as a variety of values such as political, economic, intellectual, religious and aesthetic ones remain mutually in tension, human life in a society maintains a healthy, if precarious, balance. In our world of global capitalism, however, economic values, such as profit and efficiency, penetrate and dominate every aspect of human life.

12 R.H. Tawney. *Religion and the Rise of Capitalism*. London: Peter Smith, 1926, p. 5. In this connection, Constantin Fasolt kindly drew to my attention Thomas Macaulay's famous dictum: "It is now time for us to pay a decent, a rational, a manly reverence to our ancestors, not by superstitiously adhering to what they, in other circumstances, did, but by doing what they, in our circumstances, would have done" (Thomas Babington Macaulay, "Speech on Parliamentary Reform [2 March 1831]," in *University of Chicago Readings in Western Civilization*, Chicago: University of Chicago Press, 1986–87, p. 47).

The encroachment of economic values and language is now witnessed in academia as well. But obviously the university is primarily not a business corporation that pursues and enshrines profit. The purpose of the university is the intellectual pursuit of knowledge and, for that end, we, university academics, value academic freedom. Academic work as the pursuit of intellectual rationality requires freedom of research and teaching. I shall not delve into the conceptual intricacies of academic freedom, suffice to say it is largely accepted that academic freedom is a necessary condition for the intellectual pursuit of knowledge, which serves the public good of a society and ultimately of humankind. But the public good that academic freedom serves is often construed today as being merely economic. As a result, it is increasingly prevalent to evaluate academic research and teaching, in terms of economic sustainability and profit. This argument in turn puts a question mark on the legitimacy of academic disciplines that have little impact on the national economy. It is highly problematic that this view subjugates academic research and teaching to economic values, because the legitimacy and *raison d'être* of academic disciplines should be judged primarily on academic grounds, and ought to be free from the sway of economic or political power. That is, in an important respect, what academic freedom is about.¹³ Attack on humanities on the basis of economic uselessness is indeed a threat to academic freedom.

Seen in this light, the so-called “crisis of humanities” is not a problem for humanities alone. It is symptomatic of a crisis for the university as a whole, if academic freedom genuinely remains the supreme value that we collectively uphold. American academics are acutely conscious that academic freedom has been under fire since the time of the Bush administration. Legal philosopher Robert Post, literary theorist Stanley Fish, historian Joan W Scott, and philosopher Judith Butler, among others, have been engaging in vigorous debate on academic freedom in recent years.¹⁴ New Zealand is rather unique in that authoritative answers to the questions regarding aspects of academic freedom are provided legally in the Education Act of 1989.¹⁵ However, the fact that the idea of

13 It is surprisingly rare that this has been pointed out. See for instance Judith Butler, “Academic Norms, Contemporary Challenges: A Reply to Robert Post on Academic Freedom,” in *Academic Freedom after September 11*, ed. Beshara Doumani. New York: Zone Books, 2006, p. 140.

14 See for instance Akeel Bilgrami and Jonathan R. Cole, eds., *Who's Afraid of Academic Freedom?* New York: Columbia University Press, 2015.

15 On academic freedom in New Zealand, see *Troubled Times: Academic Freedom in New Zealand*, ed. Rob Crozier. Palmerston North: Dunmore Press, 2000.

academic freedom is legally written down obviously does not dispel all potential threats. Furthermore, the history of academic freedom suggests that it is often very difficult to defend it. And the defence of academic freedom is the onus with which humanities scholars ought to bear, precisely because it is typically humanities scholarship which has questioned and reshaped human conditions and values including academic freedom. Humanities researchers are facing a challenge. The first step towards overcoming the problem of our day, I think, is to ensure that we do not lose sight of the ultimate purpose of our individual academic enquiries. That is, to ask ourselves what is written before the front cover of *our own* monographs.

バトンを新たに形づくる ——思想史の永続的有意義性について

将基面 貴巳

以下は、私が2015年4月21日にニュージーランド・オタゴ大学で行った教授就任講演の日本語訳である。講演会はオタゴ大学学長ハーリン・ヘイン教授の挨拶に始まり、続いて、歴史学科長トニー・バラントイン教授が講演者である私を紹介した。バラントイン教授は私の講演の後、結びの言葉も述べた。

*

先ほど、バラントイン教授が、私の学問の世界におけるこれまでのキャリアを素描してくださいました。皆さんは、それをお聞きになられて、一体なぜ雑多なトピックについて研究しているのだろうか、と訝しく思われたのではないのでしょうか。私がまだシェフィールド大学の大学院生だった頃、なぜ、とうの昔に死んでいる修道僧を研究するのだね、と多くの人々に尋ねられたものです。

ところが、今では事態は逆になっており、私が日本に関連したトピックについて研究していると気づかれると、なぜ日本史をあなたが研究するのか、と聞かれる始末です。というわけで、私の研究のあり方についてなんらかの形で自己弁護することが必要のように思います。

そこで、この講演では、私がなぜ、そして、どのような経緯を経て、思想史（インテレクチュアル・ヒストリー）、とりわけ西洋と日本双方の政治思想史を学ぶに至ったのかについて個人的な考察をしたいと考えます。しかし、当然のことながら、私の話を、あまりに個人的にすぎたり、あまりに些末にすぎて、私以外の誰も興味を持たないようなものにするのは避けたいと思います。そうではなく、考察を通じて、少なくとも英語圏の学問の世界で関心を呼んでいる、ある一つの問題を取り扱いたいと思います。いわゆる人文学の危機が、それです。

もちろん、その危機に対する解決策を私が持っているというような大胆な主張をなすつもりはありません。私が試みたいことは、ずっとささやかなものでありまして、私の学問的遍歴の考察を通じて、人文学を取り巻く今日の問題に

関連して、考慮に値する幾つかの論点を指摘するにとどめます。つまり、人文
学の研究や教授活動の未来を憂慮する方々のために、一思想史家の観点から考
えるヒントを提供する試みにすぎない、ということです。

I

まず、思想史研究において私がこれまで行ってきたことを素描することから
始めます。私の仕事は二つの柱をめぐって展開してきており、その一つは中世
ヨーロッパの政治思想史、もう一つは近代日本の政治思想史です。

私が学問的キャリアを始めたのは、14世紀のフランシスコ修道会士で神学者
だったウィリアム・オッカムの政治思想研究によってでした。私の研究は、オッ
カムの異端理論、および異端的教皇への異議申し立てのプログラムに光を当て
るものでした。オッカムは元来、オックスフォード大学の神学者・論理学者で
あり、政治については何一つ執筆していませんでした。しかし、(フランシスコ
会における)上位者の依頼を受けて、フランシスコ会が理想としていた福音的
清貧の理念を教皇が非難した教令を吟味したところ、オッカムは、当時の教皇
が異端に陥ってしまっていることに気づいたわけです。教皇に服従することを
拒否した結果、オッカムは破門されました。ミュンヘンの地に亡命し、異端に
ついての一般理論を編み出し、異端的な教皇への正当な異議申し立てのプログ
ラムを構想しました。その基礎に立って、オッカムは、反教皇的な一連の論争
的作品を著し、当時のキリスト教徒たちに向けて、教皇が異端に陥ったことの
危険性を警告しました。このように、私は、異端的教皇のような不正な政治権
力から、個人の自律性と自由を守ることを試みた一人の政治思想家として、オッ
カムの新しい解釈を提示したわけです。

私の、より最近の仕事は、日本の読者を対象とした中世ヨーロッパ政治思想
を歴史的に叙述したものです。『ヨーロッパ政治思想の誕生』と題する拙著は、
中世キリスト教圏に「政治思想」がどのようにして出現したのか、その歴史的
プロセスを検討するものです。近代を研究対象とする政治思想史家たちは、し
ばしば、中世には「政治思想」は存在しなかったと論じたものですが、その主
張の根拠は、中世には近代国家に相当するようなものが存在しなかったという

ことでした。確かに、中世政治思想は教会論、すなわち、教会統治の理論の形をとるのが典型的です。「政治思想」というものが必然的に世俗的であると仮定するなら、中世世界において、政治を理論化する知的に有意義な試みを見出すことはなかなか難しいでしょう。

ところで、今日我々がヨーロッパと呼ぶ地域に一つの統一文化が出現したのは、まさしく中世でした。アンリ・ピレンヌやクリストファー・ドースンからジャック・ル・ゴフやロバート・パートレットまでの数世代の中世史家たちは、古代ローマはヨーロッパではなかったことをしっかり示しました。一つの文化単位としてのヨーロッパは中世に誕生した、というわけです。そこで、拙著では、次の問題に解答を与えることを試みました。すなわち、今日ヨーロッパと呼ばれる地理的領域において一つの統一的文化が現れた時代に、どのような種類の政治的思惟が出現したのか、という問いです。

この問題に応答するに際して、二種類の言説的伝統を辿りました。一つは、権力に関する教会論的言説の生成と発展です。すなわち、権力について洗練された理論を作り出したのは、中世教会における神学や法学といった学問だったのです。私が注目したもう一つの伝統は、政治共同体の理論の台頭です。それはアリストテレスやキケロの影響によるものだけでなく、古代ローマの医学者ガレノスの影響もあって展開されました。中世に広く見られた政治体のメタファーは、人体についての医学的理解と政治共同体についての政治的理解の接点をなしています。中世における政治共同体についての新しい理論は、人体についての新しい生理学的理解をそのモデルとしていたのです。

このように論じることで、方法論的にいえば、メタファーに関する認知言語学的理論を適用することにより、思想史への新しいアプローチを考案しています。メタファーは、単なる装飾的なことばではありません。メタファーとは、ある概念領域を別の概念領域に照らして解釈することです。したがって、政治体のメタファーは、人体の構造と機能に照らした時に政治共同体の構造と機能について得られる理解を表現するものなのです。このような知見からすると、政治体のメタファーによれば、過去の政治思想家たちは、政治共同体を人体に似たものとして概念化するために医学的知識を動員した、という仮説を立てることが可能となるでしょう。そういうわけで、私は、ある知的コンテキスト（それは私の場合、政治理論化のための医学的コンテキストで

すが)を歴史的に復元する上でメタファーを一つの手がかりとする新しい方法を開拓しつつあります。

私の研究上の第二の支柱、つまり日本政治思想史研究について、手短に触れたいと思います。私の研究の大半は、1930年代と40年代という戦時下における日本の政治思想をめぐるものです。とりわけ経済学者でキリスト教思想家でもあった矢内原忠雄の生涯と思想に関心を絞ってきました。東京帝国大学の植民政策学教授として、台湾や満州、南洋における日本の当時の植民政策を批判して多くの著作をなし、政府の排外的なナショナリズムと軍国主義を攻撃しました。当時の知的、政治的コンテクストにおける彼の平和主義や愛国心についての議論を、私は検討してきました。最近日本語で出版された拙著『言論抑圧—矢内原事件の構図』は、1937年、矢内原がその論議を呼んだ(つまり平和主義的な)公的発言がきっかけとなって、大学を去ることを余儀なくされた事件を、マイクロ・ヒストリー的手法を用いて分析したものです。彼の言論に対する抑圧は、政府によるものだけではありませんでした。メディアや大学の同僚たちも、このリベラルな学者を追放することに一役買ったのです。言論の自由の抑圧は複雑な現象であり、大学の自治を守ることは、国家と社会が狂気に走る時、困難極まりないことだったわけです。

II

さて、私の研究は地理的にも、文化的にも、時間的にも、境界を越える性格のものであります。境界を越えるということは、私にとって全く自然なことなのです。なぜなら、境界は所与ではないと考えるからです。それは人工的であり、虚構です。学問分野の境界は、分業の便宜的な取り決めに由来するにすぎません。新しい問題が新しい学問分野を生み出し、既存の学問分野も、変化してゆく問題に対応して常に変化しつつあります。したがって、我々は自分のことを歴史家であるとか、政治学者であるとか、文学者であるとか自称する習慣になっていますが、我々の研究は、第一義的にはその学問分野が要請するところによって方向づけられるべきではありません。むしろ問題によって方向づけられるべきなのです。なぜなら、学問分野というのは知識の原因ではなく結果であり、その知識とは問題に応答する中から生じるものだからです。

私にとって、ヨーロッパと日本の政治思想史を探求することは、二つの一般的问题によって意識的に導かれています。その一つは政治的思惟の文化的特性に関するものです。政治を理論化するという営為の文化的特徴を、特に西欧と日本に関して探っているわけです。つまり、ヨーロッパ政治思想の何が、独特な仕方でもヨーロッパ的なのか。そして、日本政治思想の何が日本的な特徴なのか。ある知的伝統の独自性は、それを他のものと比較しなければ、理解することができません。したがって、ヨーロッパの政治的思惟の文化的特性について探求するならば、他者との比較が必要となります。私の場合、その比較対象が日本の伝統であるわけです。

私の研究を導くもう一つの問題は、異議申し立ての伝統に関するものです。政治理論は、ある側面において、政治的理想を理論的に追求することです。政治理論家たちは、その規範的理論を概念化するにあたって、多種多様な政治的ヴィジョン——例えば、自由主義、共和主義、コミュニタリアニズム、フェミニニズム、社会主義など——を批判的に検討します。

これとは対照的に、私が関心を持つのは、不正で暴政的で「病んでいる」統治を、政治理論家たちがどのように理論化したのか、そして、そのような政府に異議申し立てをすることをどのように、また、いかなる理由によって正当化したのか、という問題です。オッカムは、14世紀ヨーロッパで異議申し立てをし、矢内原は20世紀の日本で異議申し立てをしました。彼ら二人が活動したコンテクストは全く相異なりますが、不正権力への正当な異議申し立てという問題と取り組んだという点では、二人は共通しています。

それでは、どのようにして私はこれらの問題に焦点を絞るようになったのでしょうか。振り返ってみますと、私がそのように考えるに至ったのは大学院時代ではなかったかと思います。1990年代の大半をイギリス的な思想史の伝統に浸って過ごし、研究技法や方法論の面で、シェフィールド大学における学問的トレーニングに多くを負っています。

しかし、私の学問的思考の枠組みや問題関心という点では、自分が究極のところでは日本の学問を受け継ぐ者であると考えざるを得ないのです。学問的探求に対する根本姿勢は、慶應義塾大学における学部教育によって決定的に形づくられたわけです。ここで、衷心からの感謝の念をもってお話ししたいのは、慶應義塾大学における二人の師についてです。すなわち、鷲見誠一教授と故中村勝己教授です。

鷺見先生は政治思想史の教授を務められ、日本で数少ない中世政治思想の専門家のお一人です。先生の助言を得て、私は大学院に進学し、中世政治思想を自分の専門領域に選択しました。中村先生は経済史教授を務められ、その研究領域は近代初期イギリスの経済社会思想史でした。感謝の念をもって断言できるのは、私が自分の二つの重要な研究問題をこのお二方に負っているということです。鷺見先生にインスパイアされて、私は政治的思惟の文化的特性を探求するようになりましたし、中村先生のおかげで、私は異議申し立ての伝統に関心を持つようになったわけです。

このお二人に共通し、私にとってインスピレーションをかきたてられたのは、お二人ともに自分の専門領域について講義をする際、現代日本についてもしばしば言及されたことです。ヨーロッパの思想史についての歴史的議論が、現代日本の政治や経済、社会についての批判的観察と頻繁に結びつけられていたのです。念のため申し添えますが、二人の先生は、教室を政治的キャンペーンの場にしたわけではありません。お二人とも特定の政策論的争点にはコメントなさいませんでした。むしろ先生方が光を当てられたのは、現代日本の政治、社会、経済における長期的、構造的諸問題でした。

鷺見先生は、近代ヨーロッパの政治思想に照らして日本民主主義の脆弱性を論じられ、一方、中村先生は近代資本主義の起源を講義され、ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーのいわゆる「賤民資本主義」、つまり反社会的、反倫理的手段による富の追求を、当時の日本資本主義の実践の中に見出されました。

ここでお気づきいただきたいのは、二人の先生が私に講義されたのは1980年代後半だということです。当時は日本の経済力がその頂点にありました。21世紀は日本の世紀になる、と大真面目に論じた評論家がいたくらいです。それとは対照的に、お二人の先生方は当時の日本民主主義や資本主義の実際を批判し、その未来を憂慮されたわけです。先生方の講義が示したのは、歴史的洞察は、自分自身の時代の政治経済に関し先見の明をもたらすということだったのです。

しかしながら、そのような思想史の学部生向け講義が、現在志向的傾向を持つことを怪訝に思う方がおられるかもしれません。確かに、歴史主義は歴史家に対して、その過去についての探求を、現在を参照しないで行うことを要求するものです。私がお話ししている二人の先生方による講義は、明らかに、歴史主義的な過去の思想の探求と、現在に関する哲学的関心との間の緊張関係を示

すものです。しかし、そのような講義の現在主義的衝動は、過去を現在というプリズムを通して見ようというような時代錯誤的な欲求に端を発するものではありませんでした。むしろ二人の先生方の現在に対する関心は、過去から発掘された視座から、現在に新しい光を投げかけようという意図を表すものだったのです。お二人は、我々現代人にとって疎遠なものとなっている過去の思想を再提示することで、現在に対する新たな視座を獲得しようと試みたのです。

このことは視点を変えれば、お二人の講義はただ単に知識を伝達するだけではなかったということです。現在に対する関心は、先生方の学問的営為が歴史的知識の生産と伝達だけではなく、新しい知識を追求することを越えたところにある目的に資することを意図していたわけです。

この論点を明瞭にするために、一例を挙げましょう。お二人が教授された重要な教訓の一つとは、特定の研究領域における既存の業績について十分な知識を持つことは決定的に重要であるとはいうものの、その一方で、ただ単に、あるトピックが現在の研究において未だに手をつけられていないからとか、ある史料がこれまで検討されてきていないから、というだけの理由で研究に着手するというようなことがあるべきではない、ということです。既存研究において、まだ埋められていないギャップがあるからといって、そのことは直ちにそのギャップを埋める価値があるということを必ずしも意味しません。ある一式の史料が手つかずのままにいるという事実は、それ自体として、その史料が研究に値するということを意味するわけではありません。つまり、ここで重要な問題はこうなります。それは知るに値するのか、ということです。あるトピックがこれまで探求されてこなかったのは、それが十分に有意義なものではないからであるかもしれないのです。したがって、研究トピックや問題の選択は、ある種の価値判断とは切り離すことができないのです。

確かに、研究トピックの選択に関して、価値判断を下す上での評価基準には多様なものを考えることができますが、ここでは一つの論点を特に取り上げたいと思います。私がお話ししている二人の先生方は、学術研究における価値中立性についてどのように考えたのだろうか、と訝しむ方がおられるのではないのでしょうか。この先生方の世代の多くの日本人社会学者がそうだったように、お二人もまたヴェーバー主義的でした。お二人とも、ヴェーバーの「価値自由」、価値中立的な学術的探求という考え方に賛成し、重要視しました。実際、先生

方が専門研究書や研究論文において歴史的探求の対象を検討される際には、価値自由の立場を守って冷静沈着に研究されたわけです。

しかしながら、お二人が強調されたことですが、ヴェーバー的な「価値自由」な仕方、冷静に歴史の対象を研究するということは、研究者は一切いかなる価値判断もしないということを必ずしも意味しません。この考え方を中村先生は興味深いメタファーで表現されました。曰く、「研究書の表紙の前に書かれていることを読み取らねばならない」。当然のことですが、表紙の前には、物理的には何もありません。中村先生が意味されたのは、著者がその書物を著す動機となった価値判断とは何だったのかを、たとえ著者がその動機を著書の中で明示していなくても、読者は読み取ることができなければならない、ということです。そこに読み取らなければならないのは、すなわち、その研究を規定する暗黙の前提なのです。

ここで強調したいことは、思うに、二人の先生はその専門の学問分野を単なる知的営為としてのみ教えたわけではない、ということです。お二人が示そうとしたのは、歴史的学問の研究には実存的次元が存在するということです。歴史的探求において、ある問題を問うということは、単なる「興味」や「知識愛」に由来すべきではありません。歴史的研究は、自分が生きている時代の人間生活に対して、研究者が抱いている根本的観点に根ざしているべきなのです。そのような観点が必要不可欠なのがなぜかといえば、それは、歴史研究が、自然科学の場合と異なり、人間の置かれている条件や人間の価値についての問題と切り離すことができないからです。

これまでお話ししている二人の先生の場合、ヨーロッパの知的伝統に関するお二人の研究は、明らかに、1945年に決定的となった近代日本の悲惨な体験に動機づけられたものでした。19世紀半ばから、日本は極めて短時日の間に近代国民国家へと変貌を遂げました。西洋の制度や習慣、テクノロジーの受容は、日本政府と社会にとって最優先課題でした。しかし、急速な西洋化と近代化は様々な帰結をもたらし、排外的ナショナリズムや攻撃的な軍国主義の台頭ももたらしました。二人の先生は、若い時分に軍国日本の滅亡を経験したために、日本の近代化の何が問題だったのかを理解なさりたかったわけです。このように、お二人のヨーロッパ思想史研究は、自身の人生体験にしっかりと根を下ろしていたのです。

しかし、二人の先生はヨーロッパ思想史に相異なる仕方でアプローチされました。鷺見先生はヨーロッパ的政治思惟の文化的特性を探求されましたが、それは近代日本のもう一つの自我となっている、なにがしか「ヨーロッパ的」なるものと比較対照する形でヨーロッパ文化を理解なさりたかったからでした。中村先生は、異議申し立ての伝統の発掘に関心を向けられましたが、それは、異議申し立ての伝統が、近代日本に根を張る家産制に対抗するものだったからでした。このようにアプローチの仕方が異なっているとはいえ、お二人には共通する関心事がありました。それは自身の学問研究が1945年の近代日本の崩壊という問題に動機づけられており、そして、それは戦後日本の新しい理想に、楽観的でなかったとはいえ、希望を抱くことの基礎ともなっておりました。ヨーロッパの歴史世界についての二人の先生の研究は、お二人が生きた世界との関わりにしっかりと結びついたものでした。

私が興味を大いにかきたてられるのは、個人的な体験に深いところで動機づけられている学問研究が、率直に言って自分以外の誰の関心も呼ばないような、全く個人的な事柄の追求へと収束してしまうのではなく、むしろ、その研究が道徳的政治的コミットメントと結び合わされていたことで、自分が生きている時代の諸問題を照らし出したという点です。しかしながら、お二人の学問的仕事が、究極的には個人的な体験や信念に根を下ろしているというまさにその理由により、二人の先生を研究へと駆り立てたのが究極的には何だったかということについては、講義の中では含意されたにとどまり、その著書の中では明示的には言及されることはありませんでした。それは実際、表紙の前に書かれていたのです。

III

二人の師が私に教えてくださった事柄に思いをめぐらせてきましたが、ここで、人文学の研究と教授活動の現在と未来について深慮するに値すると思われる三つの論点を、思想史家の観点から特に取り上げてみたいと思います。

第一に、人文学の生命線は、我々の研究が今日、どのように、また、なぜ本当に重要であるのか、を我々が示すことにかかっていると考えます。しかし、

当然のことですが、我々の仕事が「クール」だからとか、「面白い」からだというだけでは話になりません。人間の生に関して、研究を根底から支える究極的な観点こそが、現在において有意義な人間の条件や価値を明らかにすると思います。しかしながら、しばしばあることですが、我々の研究は様々な種類の業績評価のような俗世間的な必要によって影響・左右されます。こうして研究の生産性は、それ自体として一つの目的と化し、その結果、そもそも我々が研究に従事するのはいかなる目的によるのかという問題について目を曇らせることになってしまいます。我々の研究が、自分自身だけでなく周囲の人々にとってどのような意味を持つのか、そして、我々は、自分が取り組んできている研究をなぜ行っているのか、について考えをめぐらせることは、自分の研究を現代において有意義たらしめるだけでなく、我々自身が正気を保つ上でも役立つのではないかと考えます。

第二に、二人の先生が残した遺産について考えてみるにつけても、学部用プログラムにおける講義がいかに重要であるかを思わされます。少人数のクラスで実地練習を多く行うような教育は、知識を正しく教えるには効率的かもしれません。しかし、大抵の知識というものは時代遅れになるのも速いのです。実際、知識を伝達するにすぎなかった学部時代のコースについては、私はほとんど何も思い出すことができません。学部生用の授業とは、知識を吹き込む以上のものであるべきだと考えます。周知のことでしょうが、ニューマン枢機卿が、大学教育の目的について問われた時、次のように答えました。「知識はそれ自体目的たりうる」。しかし、より瑣末なことについて、より一層多くのことが知られるまでに過度に専門分化の進んだ今日、このような主張には保留が必要ではないでしょうか。教師も学生も共に、増大する一方の専門知識の津波に直面しています。そのような状況下において教師がなすべきことで重要なのは、学生に重要な知識を身につけさせることだけではなく、現在においてその知識が指し示す問題を理解させることです。そして、講義においては、教師は学生が知るべき知識だけでなく、教師も学生も置かれている状況（コンテキスト）において、その知識がどのような意味と意義を有するのかについて体系的に提示すべきなのです。そのような講義では、学生は事実や理論だけでなく、問うに値する問題を学ぶことになるでしょう。そして、そのような講義を通じて、教師は知識を伝達するだけでなく、インスピレーションをも与えることになるでしょう。

第三に、我々の研究内容を伝達するに際して、我々の立ち位置を確認することが重要です。グローバルな立脚点というようなものは存在しません。我々は必然的に、地球上のどこかある場所に位置づけられているのであり、それはまた、過去や未来ではなく現在に他なりません。私の二人の師は、主として20世紀の後半を日本国民として生き、活動しました。お二人が教えたのは、大半が日本人の学生であり、日本人読者を対象に著作を発表しました。したがって、お二人にとっての問題は、近代日本の歴史的運命と結びついていました。

しかし、それらは、私が学問的生を生きつつあるコンテクストではありません。過去のある時点において、私は英語圏で生きて行く決心をし、その決断は最終的に、私をこの国（ニュージーランド）へと導くことになりました。結果、私の学生の大半はパケハ（白人）のニュージーランド人です。私の英語の著作は西洋やその他の地域で関連専門領域の学者や学生によって読まれ、一方、私の日本語著作は、日本の学者や一般読書人によって読まれています。明らかに、著者としても教師としても、私は、私の師が知らなかった多様なコンテクストの中に置かれています。したがって、根本問題を二人の師から受け継いでいるとはいっても、私は、お二人の問題に彼らの仕方では解答すべきではありません。歴史探求における学問研究が、究極的には、ある種の実存的動機に根ざすものであるべきだという先生方の教えを心に刻むならば、それらの問題は十分に血肉化して、私のものでなければなりませんし、私自身の方法によって解答せねばなりません。

したがって、私にとっての課題とは次の三つとなります。一つ目は、私の第一の問題、つまり政治的思惟の文化的特性に関して、西洋の読者のために、英語で作品を執筆することです。このようにして、西欧と日本の政治的思惟の伝統の文化的特徴の理解に努め、また、そうすることで、西洋と日本の読者の歴史的自己理解にささやかながらも貢献することです。とはいえ、究極的には、そのような仕事は、現代日本に生を享け成長した一個人として、私が歴史的、文化的、政治的に自己を理解したいという欲求に根ざしています。

二つ目には、私の第二の問題、つまり不正な支配に対する異議申し立てについて、日本の読者に日本語で作品を執筆することです。こうして、異議申し立ての伝統についての知識と理解を広めることを志しているわけですが、それは、私の見るところでは日本において異議申し立ての伝統が相対的に弱いからです。

しかし、それだけが異議申し立ての伝統に私が特に注目する唯一の理由ではありません。異議申し立てとは、不正義に対する抵抗の一形態です。不正義への抵抗という主題は、それがこの世の権力に対するものであれ、社会の多数に対するものであれ、あるいは神的なものに対する場合であれ、ヨーロッパ文化の底流をなしており、それはヨーロッパが出現する遥か以前に、古代ギリシャの三大悲劇作家の一人であるソフォクレスのアンティゴネーに結実しています。したがって、私の第二の問題は実際のところ、第一の問題へと私を導くカギであるわけです。

さて、最後に三つ目の点ですが、この大学の一人の教師として、ヨーロッパ史、とりわけ、中世の思想的伝統や政治思想を教え続けることを望んでいます。それは、個人の良心の権威というようなヨーロッパの理想と価値の追求について学生が学ぶべきだということを、私が教育上の目的としているからです。それこそが、二つの根本問題の探求を通じて私が解明しようと望んでいる一大テーマなのです。

しかし、ヨーロッパ史における個人の良心の権威の追求というような事柄について教えたり学んだりすることが、特に学生の就職やビジネス用のスキルとの関連で、どのように「役立つ」のかと問う向きがあるかもしれません。これに対する私の回答は次のようになります。歴史を教えることは知識やスキルを吹き込むにとどまるものではないと考えます。歴史は他の多様な目的に資するものです。偉大なイギリスの歴史家 R. H. トーニーはこのように記しています。

「幾世紀にもわたって思慮分別をめぐらした結果、葬り去られたとばかり思われていた問題も、実は死んでいたのではなくて、眠っていたに過ぎないのだ、ということが、今では明らかになっている。このことはたしかなことだ。これらの問題がどんな形をとってきたか、またどんな段階を経てきたかを研究することは、ただひとつの国、ひとつの時代というように範囲をかぎっておこなう時でさえ、単なる尚古趣味とは言えない。そういう研究は、しかばねに呼びかけることではなくて、生あるものを呼び出すことであり、また、現代の問題を考えるに当たっても、思考上の経験をゆたかにすることによって、これを新しい視角から見直すことにもなるのである」(『宗教と資本主義の興隆』上巻、出口雄三・越智武彦訳、岩波文庫、1951年、29頁)。

歴史を研究することは、我々の置かれているのとは異なる状況下で、過去の

何世代にもわたる人々が格闘してきた争点について思考することです。そして、同様の争点は、人類の歴史において、異なった形やコンテキストにおいて、繰り返し立ち現れています。個人の良心の権威という問題は、事実、ヨーロッパ思想史において何度も提示され、吟味されてきました。

しかし、ここで想起していただきたいことがあります。それは、個人の良心の権威が論じられてきたのは、特にそれが危機にさらされた時だということです。ヨーロッパの過去においては、個人の良心は、宗教的権威や政治権力から攻撃を受けました。今日では、経済権力の脅威のもとにあるのです。その一つの兆候は、今日、世界中の大学や社会に流布する言説が、大学における研究や教授活動を経済的価値に従属させ、専門的学問分野に関して、経済的利益や効率性の観点から判断を下すようになっている現状に認められます。

近現代世界では、ヴェーバーがかつて述べたように「神々の闘争」が進行しています。政治、経済、学知、宗教、美などの多様な価値が、相互に緊張関係を保つ限り、社会における人間の生は、危ういとはいえ健康なバランスを維持します。しかし、グローバル資本主義の世界においては、利益や効率性という経済的価値が、人間生活のあらゆる側面に浸透し、これを支配しています。

経済的な価値観とそれに基づいた物言いは、今では学問の世界にも忍び寄っています。しかし、当然のことですが、大学は第一義的には、利益を目的としてこれを重要視するビジネス会社ではありません。大学の目的は知識の探求であり、その目的のために我々大学人は学問の自由に価値を認めるのです。知的合理性の追求としての学問的営為は、研究と教授活動の自由を要求します。ここでは、学問の自由という概念の複雑さには立ち入りませんが、とりあえず次のように述べておけば十分でしょう。すなわち、学問の自由とは、知識の知的探求に必要な条件であり、それはひとつの社会、ひいては人類一般の公共善に資するものである、ということです。

しかし、学問の自由が目的とする公共善は、今日では単に経済的なものにすぎないとされることが少なくありません。結果、学問的研究と教授活動を経済的持続可能性と利益の観点から評価することが広く一般的になっています。このように論じることは、翻って、国民経済にほとんど貢献しないような学問分野の正当性に疑問符を付けることとなります。このような見解が、学問的研究と教授活動を経済的価値に従属させる事態は、大きな問題をはらんでいます。

なぜなら、ある特定の学問分野の正当性と存在理由は、第一義的には学問的な場において判断されるべきであり、経済や政治の権力による支配から自由であるべきだからです。それこそが、ある重要な側面において、学問の自由の意味するところなのです。経済的に役に立たないという理由で人文学が被っている攻撃は、実際、学問の自由への脅威なのです。

このように見てきますと、いわゆる「人文学の危機」とは人文学にとってだけの問題ではないこととなります。それは大学全体にとっての危機の兆候です——もし、学問の自由が、我々が集団として掲げる至上価値で真にあり続けているならばの話ですが。アメリカの学者たちは、ブッシュ政権時代以来、学問の自由が攻撃にさらされていることを敏感に意識しています。法哲学者のロバート・ポスト、文芸評論家のスタンリー・フィッシュ、歴史家のジョーン・W・スコット、そして哲学者のジュディス・パトラーやその他にも多くが、近年、学問の自由をめぐり白熱した議論を戦わせています。

ニュージーランドの事情はユニークで、1989年の教育法で、学問の自由の諸側面に関する問題について、権威ある解答が法的に与えられています。しかし、学問の自由の理念が法的に記されているからといって、それだけで潜在的な脅威をすべて駆逐することはできません。さらに、学問の自由の歴史は、それを防衛することがしばしば極めて難しいことを物語っています。そして、学問の自由の防衛という課題は、人文学の学者が担うべき重荷であります。と言うのは、学問の自由を含む人間の条件や価値を問い、形づくってきたのは、主として人文学の学識に他ならないからです。

人文学の研究者は、一つの挑戦的課題に直面しているのです。我々の時代の問題を克服するための第一歩とは、我々一人ひとりの学問的探求の究極的目的を見失わないことだと思います。すなわち、我々自身の著書の表紙の前には何が書かれているのか、を自問することなのです。

Youthful Rebellion as a Stage towards Freedom and Originality: The Case of Tada Tomio, Immunologist, Essayist, and Playwright

Yuzo Ota

A fascinating figure born in twentieth-century Japan who impressed both Japanese people and those outside Japan was Tada Tomio 多田富雄 (1934–2010). He was both a scientist of great international reputation, and an extremely versatile essayist and playwright. Although he started writing essays and other books not directly related to his scientific work fairly early on, this became very noticeable in the last nine years of his life from 2001. In 2001 he suffered a cerebral infarction which completely paralyzed his right side. This left him with difficulty in swallowing his food, and in talking without the aid of a machine. During this period, Tada showed not only amazing productivity as a playwright, an essayist, and, to some extent as a poet, but he also found the energy to take the lead in the campaign to fight against the restriction of the maximum number of days in which disabled people were allowed to receive rehabilitation treatment, at the time restricted to 180 days.¹

Tada was awarded the Kobayashi Hideo Prize in 2008 for *Kamokunaru kyojin* 寡黙なる巨人 (The Giant of Few Words) published in 2007; it includes an essay with the same title that describes how he reemerged from despair after his crippling stroke.² Even before his stroke, Tada was an extremely good essayist. A collection of his essays, *Dokushaku yoteki* 独酌余滴 (Drops of Sake Left after Pouring It for Yourself, 1999; repr. Asahi Shinbunsha, 2006), won a prize in 2000 from the Japanese Essayist Club. As a prominent immunologist, he was invited to various places, and took advantage of his travels to obtain materials for his essays. For example, when he attended an international conference in Cameroun, he set out on a long and adventurous journey to the land of the Dogons. He had seen a sixteenth century Dogon sculpture of a hermaphrodite human being, and had wanted to visit the

Acknowledgement: I would like to thank Mrs. Elizabeth McLaughlin, a friend in the province of Quebec, Canada, who read my manuscript and made many valuable suggestions.

1 See, for example, *Kamokunaru kyojin* (Shūeisha, 2007), pp. 237–42.

2 I have supplied the English translation of Tada's works in Japanese in the text.

land of the Dogons ever since.³ On another occasion, after an international conference in Bangkok, Tada visited Northern Thailand to observe activities of an NGO led by a Thai schoolteacher who ran a center for drug addicts among ethnic minorities.⁴

As I became further acquainted with his writings, I sensed that there was something in Tada in which he differed from the majority of people. His relationship with the University of Tokyo was revealing in this respect. In 1977, when he was Professor of Chiba University, a recipient of the Noguchi Hideyo Commemorative Medical Prize in 1976 and of the Bälz Prize in 1977,⁵ Tokyo University offered him a professorship. Tada accepted this offer and apparently had a successful career there until his retirement in 1994. He characterized his relationship with Tokyo University as follows: “Tokyo University is a strange place. It was a world completely alien to me.”⁶ I came to feel that his remarkable freedom and creativity were what he gained by going through a phase of youthful rebellion. I would now like to proceed to substantiate this view.

1. “Golden Years of Youth” in Denver, Colorado

In the postscript to *Dauntaun ni toki wa nagarete* ダウンタウンには流れて (Time Flows in the Downtown) dated October 2009, Tada writes, “I recalled from memory my ‘golden years of youth.’ What came out of my memory was so real that many times I could not see the keyboard because of tears.”⁷ This remark referred to three stories set in Denver, Colorado, where he lived as a researcher in a medical research institute from 1964 to 1966 and then for a year from 1968. In the first story Tada recalls an elderly American couple, a taciturn, seemingly unsociable husband and his more sociable wife. He rented the second floor of their house during his first stay in Denver. A good relationship gradually developed between Tada and the couple. The mistress of the house suddenly fell ill. Tada repeatedly urged her to call an ambulance, but she stubbornly refused, because she had

3 See the essay first published by Asahi Shinbunsha in 2002, “Dogon e no michi” ドゴンへの道 in *Seimei no ki no shita de* 生命の木の下で (Shinchōsha, 2009), pp. 8–46.

4 “Mēkokku fāmu no hiru to yoru” メーコック・ファームの昼と夜 in *Seimei no ki no shita de*, pp. 47–76.

5 “Tada Tomio ryaku nenpu 多田富雄略年譜 (1934–2010)” in Kasai Ken’ichi 笠井賢一, ed., *Tada Tomio shinsaku nō zenshū* 多田富雄新全集 (Fujiwara Shoten, 2012), p. 314.

6 Dialogue with Yonehara Mari 米原万里 first published in 2001 in Tada Tomio, *Natsukashii hibi no taiwa* 懐かしい日々への対話 (Daiwa Shobō, 2006), p. 149. All the dialogues took place before he had a cerebral infarction as Tada explains on p. 244.

7 *Dauntaun ni toki wa nagarete* (Shūeisha, 2009), p. 213.

no medical insurance to cover her expenses. After her death, Tada went to the funeral home and made the arrangements for her funeral. On the day of the funeral, he learned from the niece of the deceased that she had been very proud of the doctor living on the second floor.

Tada's second story (*Downtown*, pp. 45–86) is also not quite what “the golden years” would conjure up in the minds of most middle-class people. He discovered a shabby looking but strangely alluring district in downtown Denver. There he started frequenting a bar whose patrons were poor people, social dropouts, and also, at the time of the annual livestock show, neighborhood farmers. Among the unforgettable friends he met there were a virtually blind unknown musician whom Tada thought had real genius (*Downtown*, pp. 65–68), and a native American man who, hearing that Tada was not so eager to return to Japan, urged him to become his adopted son and remain in the United States (*Downtown*, pp. 68–70). Nobody in the Japanese community in Denver or his research institute would have appreciated his frequenting such a place, but Tada was glad that he got acquainted not only with rich and middle class Americans but also with poor people.

The third story is about a woman called Chieko, who was working for a Chinese restaurant, Lotus Room. She was overly made-up, over-friendly, and induced Tada to order far more than he could eat. When he was about to pay the bill, he realized that he had left his wallet in the research institute and had no money with him. Chieko rescued him from this embarrassing situation by offering to pay his bill. She said simply that he could pay her back next time. Her kindness to a virtual stranger like him impressed Tada and led to their friendship. He writes: “Our friendship lasted for as long as thirty years even across the Pacific Ocean until it came to an end by her sudden tragic suicide” (*Downtown*, pp. 95–96).

Tada became one of the Lotus Room's regular patrons. When there were few patrons, Chieko would sit at his table and would talk about herself. She came from a respectable middle class family in Japan, she told him. During the Occupation period, she fell in love with an American sergeant and became pregnant. Chieko, with their baby boy, followed her husband to America; once there Chieko realized that he had badly deceived her. Contrary to his claims, he was not an owner of a big shoe factory; he had not even finished high school. After the birth of her second child, Chieko obtained a divorce to protect herself and her two children from his violence. She then moved from one place to another before settling down in Denver. Tada invited Chieko to a Thanksgiving Day

party as his guest and introduced her as his new friend. Chieko would perhaps have seemed out of place at the party where most of the women were the wives of medical doctors. However, her cheerful and tactful behavior made others accept her despite her social status. After that, Tada took Chieko to every party at the research institute.

In later years, when alarming letters arrived from the depressed Chieko, Tada sent an express letter to his close Japanese-American friend in Denver, asking him to look her up and make sure that she received the necessary help from a doctor and a social worker. Neither the friend nor a doctor he consulted could persuade Chieko to be hospitalized to receive treatment, and she committed suicide, forsaken even by her children who had changed their telephone numbers to prevent her from calling them. In his letter written after Chieko's suicide, Tada's Japanese-American friend said, "Her life was a gloomy and unhappy one. The only bright spot in it was her friendship with you" (*Downtown*, p. 123). Tada did not brand her life as a failure: "A Japanese woman who lived courageously in pursuit of freedom in the postwar period, died a lonely death in a foreign land when her strength finally gave out. ... Her life evokes in our mind transience of blossoms and poignancy of fallen leaves. It was in its own way an admirable 'life of a woman,' I believe" (*Downtown*, p. 123).

In his Denver days Tada often judged matters according to criteria which differed from the usual middle class values. He frequently took his newly wedded wife, Norie, to a rough bar "to show her how the poor in the United States lived" (*Downtown*, p. 111). Tada's attitude towards poor people continued to be different from that of the typical middle class. When his pet dog disappeared, an eyewitness told Tada that he saw a man who looked homeless walking with the dog, so Tada went to Ueno Park and another place where many homeless people lived. His commentary on them was very positive: "Their life did not convey any sense of misery. On the contrary I felt that it had been a long time since I had encountered people leading a life worthy of a human being as well as they did."⁸

8 "Inu ga kaetta hi" 犬が帰った日 in *Dokushaku yoteki*, p. 80.

2. Student Days in Japan with “Dubious” Friends

Tada’s *Zanmu seiri: Shōwa no seishun* 残夢整理: 昭和の青春 (Trying to Make Sense of Lingering Dreams: Youth in the Shōwa Period, Shinchōsha, 2010),⁹ completed in the year of his death, contains clues which help us to understand the Tada of Denver days. Chapter Three portrays three friends from the period when Tada was enrolled in the pre-medical program at Chiba University. Two of them, Seki and Hata, both sons of doctors, were also enrolled in the same program. The third, Doi, their former high school classmate, was studying at Hitotsubashi University. The three friends all frequented brothels. Seki had a proud arrogant air; he needed crutches, due to having suffered polio in his childhood. He was an extremely heavy drinker. Since his father owned a big hospital in Toyama Prefecture, Seki received an enormous amount of money for his expenses which he squandered through his daily sprees with Hata, who also came from an affluent family. Tada, “a well-known heavy drinker when young,”¹⁰ may have already drunk a lot, but there is no indication that he led the life of a debauchee. Nevertheless, just like his three friends he was also driven by a passion or passionate energy that he could hardly control, which he called ‘nue,’ borrowing the name of a legendary monster. He writes: “I rarely attended classes. Instead, I spent all day in a Shinjuku coffee shop, smoking and discussing literature” (*Lingering Dreams*, p. 60).

Tada did not judge his friends on moralistic grounds. Tada found Doi’s constant visits to brothels rather moving as a form of youthful rebellion of a gentle, very sensitive young man against his family (*Lingering Dreams*, p. 64). Hata showed astounding promiscuity with numerous women. In a state of drunkenness, he forced sexual intercourse on a refined widow of roughly 60 years of age, the mistress of the house where he lived as a lodger. This incident deeply disturbed Tada. Still, Tada seemed to continue to cherish the energy or passion manifested by people like Seki and Hata (*Lingering Dreams*, p. 78).

9 In the last chapter, “Hogarakana Dionisosu” 朗らかなディオニソス, Tada recalls Hashioka Kyūma 橋岡久馬, an immensely talented Noh actor with some eccentric habits. Hashioka Kyūma played with great success the main character in “Mumyō no i” 無明の井, the first Noh play Tada wrote—the man who was declared brain dead and whose heart was given to a woman. It was first performed in Japan in 1991 and later in the United States in 1994. See the records of the performance of this play with Hashioka Kyūma as the main character in *Tada Tomio shinsaku nō zenshū*, p. 319. Hashioka died in 2003 at the age of 80.

10 In the afterword to *Dokushaku yoteki* (1999), p. 303.

The year before he graduated from the Faculty of Medicine, Tada learned about Doi's suicide. He had died by throwing himself from the roof of the TV station where he had been working. The second to die was Hata, who died suddenly from a cerebral hemorrhage. Having completely renounced debauchery and managing to graduate from a medical college a few years before, he had become affianced to a doctor, and was planning to return to his hometown and run his family medical business with her. Tada writes: "Doi's nue and Hata's nue somehow died. That is why they could not go on living" (*Lingering Dreams*, p. 82). He suspected that the death of the nue within us might entail our own physical death. As for Seki, Tada realized that he "lived as his nue dictated" (*Lingering Dreams*, p. 93) until his death at the age of 76. Although Seki's actions entailed a lot of sacrifice on the part of his family, Tada's remark "It would have been impossible to live as he did had he not been sustained by an extraordinary drive for life. That passion was what we nurtured together when we were young. In him it continued to live to the end" (*Lingering Dreams*, p. 93) reflects his admiration for Seki who died virtually penniless.

Tada's passion also remained very much alive until his death. This is reflected in the way he lived during the last nine years of his life. When he became an invalid, his wife unhesitatingly quit her job as a hospital internist to devote herself wholeheartedly to nursing him. Tada apparently assumed that his life as an invalid would last at most ten years, after which time his wife would be liberated as she would richly deserve to have some years left to enjoy her own life.¹¹ He devoted much of what he must have regarded as the last few years of his own life to recalling his younger days when he and his friends were most clearly driven by their nue.

Other friends of his youth were also far from embodying ordinary conventional values. Friend "N," recalled in Chapter 1 (*Lingering Dreams*, pp. 5–13), was Tada's middle school classmate. When they met again in Tokyo, they found they shared a passionate interest in literature. N was studying French at Athénée Français. He read aloud the poems of Stéphane Mallarmé and Charles Baudelaire in fluent French for Tada; this plunged the latter into ecstasy. Writing well over half a century later, Tada says, "I still know by heart the poems of Rimbaud and Mallarmé in the original French that I read around that time" (*Lingering Dreams*, p. 8).

¹¹ "Itoshi no Aruhentīna" いとしのアルヘンティナー in *Dauntaun ni toki wa nagarete*, p. 185.

Some years later Tada learned that N had been arrested for stealing a bicycle in Kamagasaki, an area in Osaka where many day laborers and unemployed people lived. Tada prepared a petition in the name of N's three former middle school classmates, including himself, all respectable persons judged by their titles, and submitted it to the court. He made a statement to the effect that N was a good citizen who had been a talented poet when young and that they believed that he was not the kind of person who would commit theft. N was released shortly afterward. However, Tada sunk into self-hatred later for submitting this petition (*Lingering Dreams*, p. 11); he was not ready to identify himself fully with the law-abiding middle-class values.

In Chapter 2 Tada writes about Nagai Shunsaku 永井俊作, a painter and his friend, who, Tada was convinced, was a real genius (*Lingering Dreams*, pp. 50–51). Nagai died of cancer in 1976 one year after his initial diagnosis. Tada visited Nagai in his hospital room every single day spending time with the dying Nagai, who was wracked by terrible pain. His friendship with Nagai spanned thirty years and dated from their middle school days in Ibaragi Prefecture. Nagai “was eccentric from the beginning” (*Lingering Dreams*, p. 27). For example, he was arrested by the police for using a forged ten yen banknote just to see if the banknote he had drawn so well could pass as a real one.

When the middle school under the old system that Tada and Nagai had attended was abolished, Nagai returned to Tokyo from where he had been evacuated to escape the ravages of war. Their paths crossed again in Tokyo. Tada had been preparing himself for an examination for a medical program. Nagai himself was to take an entrance examination to Tokyo University of the Arts before long. They agreed to study together. After they succeeded in passing their respective entrance examination in the same year, Tada was absorbed in literature, and Nagai was absorbed in Buddhist statues in Nara. They came to share each other's interest. Nagai started to publish poems and criticism in journals in which Tada was involved, and Tada started to visit Nara often. Referring to his frequent trips there with Nagai, Tada writes, “What a rich time it was! In our youth we had neither money nor material wealth, but we had a brimful of something precious” (*Lingering Dreams*, p. 32).

Like Tada, Nagai was interested in both natural sciences and liberal arts. It was Nagai who first awakened Tada's interest in Einstein's principle of relativity nearly half a century before Tada wrote a Noh play about it, “Isseki Sennin” 一石仙人.¹² Nagai was also

12 See *Tada Tomio shinsaku nō zenshū*, pp. 88–89 (“Sōsaku nōto” 創作ノト by Tada) and pp. 305–306 (“Kaidai” 解題 by Kasai Ken'ichi).

an inventor with a solid knowledge of natural sciences. When Tada pointed out that some of his inventions, such as a clock, which told the time based on the quinary system of numbers, had no practical use, Nagai explained that he did not aim to produce something practically useful; such things belonged to the “practical new device” category, and were inferior to real invention. Through his invention, he aimed to produce an object which would embody a new principle. Tada felt that from Nagai he learned an attitude that was to guide his medical research in later years when he left the question of practical application of his findings to other people. People found Tada’s scientific papers unusually speculative, and he attributed that to Nagai’s influence (*Lingering Dreams*, p. 37). Tada’s family, now enlarged by three children, lived in a unique new house in Chiba that Nagai had designed after their return from the United States. “The life in this house virtually determined my entire life. Nagai was the source of my research ideas,”¹³ writes Tada.

Today, as the results of a Google search suggest, some people came to know who Nagai was because Tada wrote about him. That was what Tada had hoped to achieve through *Lingering Dreams*. Alluding to this book in his season’s greetings sent in December 2008, Tada writes, “Without finishing it, I can not [sic] die, as they will be forgotten if I don’t remember them and describe their lives. They indeed deserve being remembered.”¹⁴

3. Balance between Rebellion and Acceptance of Tradition

One of the most famous defense of rebels and rebellions in modern Japanese history was a talk titled “Muhonron” 謀叛論 (On Rebellion) that Tokutomi Roka 徳富蘆花 (1868–1927), a modern Japanese writer of major status, gave in 1911 at the Number One Higher School in Tokyo shortly after Kōtoku Shūsui 幸徳秋水 (1871–1911) and eleven others were executed for their alleged involvement in a conspiracy to assassinate the Emperor Meiji. He told the students to be afraid of “neither rebels, rebellions, nor becoming rebels yourselves.” He added, “What is new is always a rebellion.”¹⁵ He pointed out that the people who directly or indirectly worked to bring about the Meiji Restoration, a blissful event in his

13 *Tada Tomio shinsaku nō zenshū*, p. 38.

14 Tada’s season’s greetings of 23 December 2008 in English in *Hana kuyō* 花供養, ed. Kasai Ken’ichi (Fujiwara Shoten, 2009), p. 178.

15 Tokutomi Roka, *Muhonron (sōkō)* 謀叛論 (草稿), http://www.aozora.gr.jp/cards/000280/files/1708_21319.html, accessed on 13 January 2011. My references to Tokutomi’s talk are all based on the same source.

eyes, were rebels in the eyes of the Tokugawa rulers. In fact, a significant number of the leaders of the Meiji government were themselves initially youthful rebels. For example, Itō Hirobumi 伊藤博文 (1841–1909), who left Japan in 1871 as one of the Vice-Ambassadors of the Iwakura Mission to the United States and Europe, was at barely thirty years old already a major leader of the Meiji government.

According to Konrad Lorenz (1903–89), a Nobel Prize winner as a pioneer in ethology, a certain kind of youthful rebellion is a phylogenetically evolved program of human behavior that helps to give some flexibility to culturally rigid norms of behavior.¹⁶ However, if that youthful rebellion totally rejected cultural inheritance from the previous generation, it would cause irremediable loss.¹⁷ There should be a balance between rebellion against, and appreciation for, the culture of the previous generation.

Tada achieved such a balance. He identified himself strongly with the new and valuable achievements of the Shōwa period, such as “freedom, equality, peace, human rights, and other values that we have acquired for the first time through our suffering.”¹⁸ Tada believed that those who were, like him, born either in 1933 or 1934 produced the first real boys of the post-WWII period, who, liberated from stereotypical labels, such as gunkoku shōnen 軍国少年 (boys of the military nation), enjoyed to the full the freedom that was beginning to take root in Japan.¹⁹ At the age of thirteen, he read *Lady Chatterley’s Lover* with a friend. Tada was absorbed in music, learned to play the piano and the clarinet, practiced oil painting, and wrote poems.²⁰ At the same time he identified himself with much cultural heritage, including a special nutritious inexpensive dish called sumitsukare handed on down for one thousand years.²¹

The most notable example of this cross-fertilization of what was old and what was new in Tada’s case was his use of the traditional Noh theatre to deal with new themes. Though he had taken a passionate interest in the Noh theater from “the age of 17 or 18,”²²

16 See, for example, Konrad Lorenz, *Die acht Todsünden der zivilisierten Menschheit* (München: Piper, 1973), pp. 74–75.

17 *Ibid.*, p. 83.

18 *Rakuyō sekigo: Kotoba no katami* 落葉隻語: ことばのかたみ, p. 14.

19 “Sengo hajimete no shōnen” 戦後初めての少年 in *Kamokunaru kyojin*, p. 156.

20 *Ibid.*, p. 155 and p. 157.

21 “Kyōdo ryōri sennen no chie” 郷土料理 千年の知恵 in *Rakuyō sekigo*, pp. 15–18.

22 Dialogue with Matsuoka Shinpei 松岡心平 first published in 2000 in Tada Tomio, *Natsukashii hibi no taiwa*, p. 173.

he started writing Noh plays fairly late. His first Noh play, “Mumyō no i” 無明の井 (The Well of Ignorance), which dealt with the ethical question of transplanting an organ taken from a person declared brain dead as mentioned in Footnote 9 was written in 1989 and first presented on stage in 1991.²³ In Noh Drama a dead person usually appears and re-enacts what he did while he was still alive and questions its meaning.²⁴ Tada was convinced that “Noh theatre was an excellent medium to deal with contemporary issues,”²⁵ and wrote Noh plays dealing with themes such as the battle for Okinawa (*Okinawa zangetsuki* 沖縄残月記)²⁶ and the dropping of the atomic bomb on Hiroshima (*Genbakuki* 原爆忌).²⁷

In his later years Tada emphasized the importance of Japan’s traditional culture. He said, “If we do not have enough knowledge of Japanese culture to explain it to others, we shall not be able to interact and have discourse with the scientists of the world.”²⁸ In a talk given in 2008, he advised young medical researchers in Chiba to join the international community of scientists as Japanese scientists. “I say ‘as Japanese scientists,’”²⁹ he emphasized. At the beginning of Chapter 9, titled “Aimaisa no genri” あいまいさの原理 (The Principle of Ambiguity), of *Seimei no imi ron* 生命の意味論 (Meaning of Life), he declared his intention to shed new light on “the positive significance ambiguity can have for life,” and wrote immediately afterwards, “This is related to my hope for Japanese culture as a biologist.”³⁰ When science presents problems that cannot be clearly and logically solved, Japanese scientists, nurtured in a seemingly ambiguous culture, could hope to make a significant contribution.³¹

23 “Hashigaki” written by Kasai Ken’ichi, *Tada Tomio shinsaku nō zenshū*, p. 2.

24 “Sōsaku nōto,” *ibid.*, p. 27.

25 *Ibid.*, p. 34.

26 *Ibid.*, pp. 186–201.

27 *Ibid.*, pp. 123–52. “Anniversary of the Bomb,” the English translation by Christopher Midville is printed on pp. 55–76.

28 “Ureuru koto” 憂うこと in *Rakuyō sekigo: Kotoba no katami*, p. 118.

29 “Wakaki kenkyūsha e no messēji: Oshierareta koto, tsutaetai koto” 若き研究者へのメッセージ 教えられたこと、伝えたいこと, *ibid.*, p. 210.

30 *Seimei no imi ron* (Shinchōsha, 1997), p. 190.

31 See Tada’s remarks in his dialogue with Kawai Hayao 河合隼雄 titled “‘Aimaisa’ no naka ni atarashii genri o saguru” “曖昧さ”の中に新しい原理を探る in *Natsukashii hibi no taiwa*, p. 15.

4. Unique but an Excellent Communicator

Tada openly admitted his fondness for eccentrics.³² This was related to his high esteem for true originality. One of his former students writes, “His love of doing what other people do not do also manifested itself in his daily life. He wore glasses with a white frame and wore a business suit without a collar ... He taught me that the same thing could be seen from diverse points of view, and that helped me to solve (research) problems many times.”³³

However unique Tada might have been, he was not isolated. According to the “Postscript”³⁴ in *Men’eki no imi ron* 免疫の意味論 (Meaning of Immunity), for which he received the Osaragi Jirō Prize in 1993, Tada tried not only to explain in laymen’s terms the progress in immunology, but also to discuss the meaning of the phenomenon of immunity in the larger context of life itself. In doing so, he applied the concept of a “super-system”³⁵ not to the immune system only, but to other fields also; this attracted the attention of many people who were not immunologists. Those books which have collected Tada’s dialogues with people³⁶ suggest that few other contemporaries were as engaged in dialogue with people of various backgrounds, such as philosophers, psychotherapists, and life scientists, as Tada was.

After he became an invalid in 2001, he began “dialogues” through letters, and co-authored three books with uniquely prominent women of modern Japan. These books are *Kaikō* 邂逅 (Encounter, Fujiwara Shoten, 2003), co-authored with Tsurumi Kazuko 鶴見和子 (1918–2006), a sociologist who continued to be very active as a poet and an author after she herself suffered a stroke in 1995; *Tsuyu no mi nagara: Ōfuku shokan inochi e no taiwa* 露の身ながら: 往復書簡いのちへの対話 (Though Ephemeral Like a Drop of Dew: Correspondence: A Dialogue for Life, Shūeisha, 2004), co-authored with Yanagisawa

32 Furusawa Shūichi 古澤修一, “Tada sensei o shinonde” 多田先生を偲んで in *Tada Tomio no sekai* 多田富雄の世界, ed. Fujiwara Shoten Henshūbu 藤原書店編集部 (Fujiwara Shoten, 2011), p. 138. Hereafter, this book will be cited as *Tada Tomio no sekai*.

33 Taniguchi Masaru 谷口克, “Ten wa nibutsu o ataeta” 天は二物を与えた in *Tada Tomio no sekai*, p. 117.

34 *Men’eki no imi ron* 免疫の意味論 (Seidosha, 1993), pp. 234–36.

35 Tada explains a super-system as a system that does not pursue any particular aim, creates itself, and contains a lot of ambiguity (see, for example, Tada, *Seimei no imi ron*, Shinchōsha, 1997, pp. 34–35, p. 33, and p. 15 respectively).

36 See *Seimei e no manazashi: Tada Tomio taidanshū* 生命へのまなざし: 多田富雄対談集 (1996; Seidosha, 2006) and *Natsukashii hibi no taiwa* (2006).

Keiko 柳澤桂子 (b. 1938), a biologist whose promising career in research was cut short by a serious illness but who continued to be productive as an author; and *Kotodama* 言魂 (The Spirit in Words, Fujiwara Shoten, 2008), co-authored with Ishimure Michiko 石牟礼道子 (b. 1927), a writer famous for her book on mercury poisoning from polluted water from a factory which affected people around the Minamata 水俣 area. His “dialogues” with the three women reflects the important position women occupied in Tada’s world.

Tada was also quite active as an editor or co-editor. “The talent for ‘the editor-in-chief’ was one of the most outstanding of the many talents Mr. Tada exhibited,”³⁷ writes a person who once worked for Oxford University Press and had some opportunities to talk with Tada, who was instrumental in creating *International Immunology*, a journal published by the Oxford University Press on behalf of the Japanese Society for Immunology.³⁸ Tada also edited or co-edited various books. A man who possessed a voracious appetite for reading a variety of books³⁹ and “limitless curiosity and love for life,”⁴⁰ he could even edit *Ningen* 人間 (Human Beings) in the series *Nihon no mei-zuihitsu* 日本の名随筆 (Masterpieces of Japanese Essays).

Tada’s various activities were supported by his remarkable memory. Yamaguchi Yōko 山口葉子, Tada’s secretary for twenty-seven years, writes, addressing the deceased Tada, “Mr. Tada, you remembered everything you had once read or seen, and stored them in various ‘drawers’ in your brain, and used them in your writing by taking them out of respective ‘drawers’ when necessary. When your conception for a Noh play was fixed, you finished writing its text within a single night. I felt from the bottom of my heart what an amazing person you were.”⁴¹

37 Onji Toyoshi 恩地豊志, “‘ICHIRO jānaru’ o tsukuru” 「ICHIRO ジャーナル」を創る in *Tada Tomio no sekai*, p. 77.

38 Onji Toyoshi, *ibid.*, pp. 75–78.

39 Tada Tomio, ed., *Ningen: Nihon no mei-zuihitsu*, special volume 90 (Sakuhinsha, 1998), p. 250. Hereafter cited as *Ningen*.

40 Sakano Masataka 坂野正崇, “Tada Tomio to iu ōkina ki no shita de” 多田富雄という大きな木の下で in *Tada Tomio no sekai*, p. 285.

41 Yamaguchi Yōko, “Tada Sensei no ‘hikidashi’” 多田先生の「引き出し」 in *Tada Tomio no sekai*, p. 351.

Conclusion

Many years after his student days, although he was in the midst of leading an extremely busy life as the head of the program committee for the fifth congress of the international society of immunology in Kyoto, Tada resumed taking lessons in playing a small hand drum, *kotsuzumi* 小鼓, for a Noh play in 1983, a drum from which you can rarely produce any sound at all after taking a lesson for one year as Tada had apparently managed to do when he first learned it when he was a student. He did not want to lose his autonomy as a person by allowing his circumstances to excessively dictate the way he lived.⁴² It seems that through these lessons he gained not only a deep insight into Noh music but also deeper insights into Japanese culture in general. Tada felt that important things are neglected in this age of globalization. The sight of Moroccan women who had come out of their house to watch the setting sun, chatting with other women who had also come to watch it, deeply moved Tada. He felt that “if judged by the criteria, such as the availability of amenities of modern life, annual income and welfare,” Morocco “must be rated much below Japan,” but “Morocco is higher than Japan in terms of the cultural quality of people’s lives ... For example, in Japan we no longer watch the setting sun.”⁴³

In his last book published a month after his death, Tada suggested to Japanese readers to make “nature (life) and tradition”⁴⁴ a basis of their life, and added, “Nature is value that everyone must acknowledge. Tradition teaches the norm of the Japanese. We must acknowledge the value of diversity and maintain our identity at the same time. I hope that my readers will create the future of our planet from this basis.”⁴⁵ He was keenly aware that the unrestrained pursuit of wealth would not only seriously destroy the environment but also create many other problems.⁴⁶ Tada thought it important to “observe things from a

42 See Tada’s talk with Ms. Terashima Sumiyo 寺島澄代, a specialist of *kotsuzumi* in *Natsukashiki hibi no taiwa*. On pp. 223–24, Tada explains why he resumed studying *kotsuzumi* in 1983 after a long interval from his student days with Terashima as his teacher. As for the beginning of his deep involvement in the Noh, that began when he, as a student of Chiba University, learned that Ōkura Shichizaemon 大倉七左衛門, an expert of a large hand drum and a small hand drum, lived in Chiba and started taking lessons from him (see his dialogue with Matsuoka Shinpei in *Natsukashii hibi no taiwa*, p. 173).

43 Tada Tomio, “Morokko de kangaeta koto” モロッコで考えたこと in *Ningen*, pp. 245–46.

44 *Rakuyō sekigo*, p. 128.

45 *Ibid.*, p. 127.

46 *Ibid.*, p. 128.

distance to get the whole picture” and to look at them from “more than one perspective.”⁴⁷ He suggested his readers to make Japanese tradition, formed largely before the Industrial Revolution, one of the two basic components of their life to enable them to observe things “from a distance” and from more than one point of view, without taking things like the importance of economic growth for granted.

Tada was deeply concerned about the future of mankind. According to him, “The lifespan of our planet will become shorter and shorter. I would think it fortunate if mankind could survive another two hundred years from now.”⁴⁸ He created the society INSLA (Integration of Natural Science and Liberal Arts) in 2007 with the conviction that “it is only through integration of ‘knowledge of natural science’ and ‘knowledge of liberal arts’ that problems natural science poses could be solved.”⁴⁹ In the prospectus of INSLA, Tada mentions nuclear technology first as a problem natural science poses.⁵⁰

The nuclear crisis following the Great Earthquake of Eastern Japan occurred less than a year after Tada’s death. A contributor to the special issue of a quarterly featuring the Great Earthquake, obviously depressed by the failure to deal effectively with the nuclear crisis at the Fukushima Daiichi nuclear power plant, saw its long-term cause in the failure to train people “with wide knowledge of both liberal arts and science and a high ethical sense.”⁵¹ Tada, who campaigned for INSLA until shortly before his death, was a far-sighted person.

Tada was not an aloof scholar in an ivory tower. He may inspire many people both in Japan and outside of Japan to live their life in the way they really want and to endeavor to create a brighter future for mankind, as Tada hoped.

47 Ibid.

48 As quoted by Kotaki Chihiro 小滝ちひろ, “Furō fushi motomezu” 不老不死求めず in *Tada Tomio no sekai*, p. 279.

49 Tada Tomio, “Setsuritsu shuisho” 設立趣意書, *ibid.*, p. 33.

50 Ibid., p. 32.

51 Nishigaki Tōru 西垣通, “Chi no sakeme kara riaru ga nozoku” 知の裂け目からリアルが覗く, *Kan 環*, vol. 49 (Spring 2012), p. 167.

Overlap between Victims and Perpetrators in Hotta Yoshie's Novel *Jikan*

Takeuchi Emiko

Introduction

Many works of postwar Japanese literature took as their subject matter the military or scenes of war, reflecting the fact that the postwar period's starting point was the reality of war. The harsh experience of the Asia-Pacific war was the subject matter not only for postwar literary works but also the many memoirs and written records published during the period. Here I am using the term "postwar literature" to refer to a period that spans from the publication of Noma Hiroshi's 野間宏 (1915–91) *Dark Pictures* (*Kurai e* 暗い絵) in 1946 to roughly the year 1970, including works by authors such as Umezaki Haruo 梅崎春生 (1915–65), Takeda Taijun 武田泰淳 (1912–76), Haniya Yutaka 埴谷雄高 (1909–97), Shiina Rinzō 椎名麟三 (1911–73), Ōoka Shōhei 大岡昇平 (1909–88), Nakamura Shin'ichirō 中村真一郎 (1918–97), Fukunaga Takehiko 福永武彦 (1918–79), Shimao Toshio 島尾敏雄 (1917–86), and Hotta Yoshie 堀田善衛 (1918–98).

The short stories and novels by these and other authors differed somewhat from the numerous written accounts that were published in the postwar years with regard to how the question of victims and perpetrators was addressed. That is, instead of simply viewing themselves as victims of war, there is the recognition in postwar literary works of *the other* in war on the "enemy" side, and an understanding that this aspect of oneself as perpetrator cannot be neglected. This can include a variety of scenarios, whether it is an act perpetrated as a non-combatant or one committed against one's fellow soldiers. The fact of depicting oneself in this way as a perpetrator is one important characteristic of postwar literature.

It may prove insightful to contrast that approach with another book from the postwar period. I am referring to *Listen to the Voices of the Sea* (*Kike wadatsumi no koe* きけわたつみのこえ), a collection of letters written by university graduates who perished in the war, described as "one of the spiritual sources of the postwar peace movement, creating a great stir among readers upon its publication in 1949,"¹ and still published as part of the Iwanami Bunko series of classic works.²

1 From the Preface to its Iwanami Bunko edition.

2 The first printing was in 1995 and the most recent printing (the 24th) was in 2010.

Another postwar work that has remained in print is *Leaving These Children Behind* (*Kono ko o nokoshite* この子を残して, 1948) by Nagai Takashi 永井隆 (1908–51).³ The blurb for the book’s Aruba Bunko edition, first issued in 1995, describes it as a “tale of love and peace.” There are many other authors who related painful wartime experiences in the form of memoirs or journals, including the record of wartime suffering in Fujiwara Tei’s 藤原てい (1918–) *The Shooting Stars Are Alive* (*Nagareru hoshi wa ikiteiru* 流れる星は生きている, 1949), the remembrances of war widows who struggled to raise their children after their husbands were killed in the books *Bearing Hardship with Beloved Children* (*Itoshi go to taete yukamu* いとし子と耐えてゆかむ, 1952) and *In the Southern Sea Depths You Are Sleeping* (*Kono hate ni kimi aru gotoku* この果てに君ある如く, 1950). Such works are written from the perspective of seeking to convey to the reader the extreme cruelty of war and the terrible suffering of people during it. These are undeniably valuable works, based on the anti-war/pacifist stance of preventing future wars, drawing on their terrible first-hand experiences of the Asia-Pacific war. These are works that *had to be written*.

Yet even though these are works in which the authors repeatedly emphasize the harm caused by war, there is not always much said about the inflicting of that harm. Indeed, it seems difficult for these authors to touch on this subject, for to raise the question would be to torment themselves with feelings of guilt. The view of oneself as an innocent victim brings a surprisingly carefree feeling (although the term “carefree” is probably not appropriate to describe those who have had such cruel experiences). But one gets the impression that the authors made the utmost effort to avoid placing themselves in the position of the perpetrator. Most of the accounts in the books on the war are stories of victims—stories told by the perpetrators are rare.⁴ Why is it that the perpetrators are

3 The first printing of the Aruba Bunko edition (published by Sanpauro) was in 1955; the most recent printing (the 16th) was in 2008.

4 One of the earliest works to depict perpetrators is the 1957 book *Sankō* 三光 [Three Exterminations] edited by Kanki Haruo 神吉晴夫, which is subtitled: *Nihonjin no Chūgoku ni okeru sensō hanzai no kokuhaku* 日本人の中国における戦争犯罪の告白 (Japanese Confessions of War Crimes Committed in China). The book is a record of confessions made by former Japanese soldiers held at the War Criminals Management Centre in Fushun and in Taiyuan regarding their acts of wartime brutality. There are also the 2005 books *The Two Battlegrounds of a Japanese Soldier: Kondō Hajime’s Unending War* (*Aru Nihon hei no futatsu no senjō: Kondō Hajime no owaranai sensō* ある日本兵の二つの戦場: 近藤一の終わらない戦争), edited by Utsumi Aiko 内海愛子 et al; and Inoue Toshio’s 井上俊夫 book *I Killed a Man for the First Time* (*Hajimete hito o korosu* 初めて人を殺す). These texts include testimonies made by former Japanese soldiers who in recent years have become aware of themselves as perpetrators.

nowhere to be seen? They must be somewhere, because the existence of victims presumes their own existence. So it is simply impossible for there to be only victims and no perpetrators. Particularly in the case of war there are, even among non-combatants, those who provide support to soldiers, such as the fervent Japanese women comprising the *Jūgo no mamori* 銃後の守り [Protection of the Home Front] organization, whose own responsibilities for harm inflicted has been elucidated by past research.⁵ In considering pacifism and opposition to war one must of course clarify the harm caused by war, but it may be even more vital to analyze the mindset of those who inflicted the harm and elucidate issues pertaining to the social structure underlying the injury inflicted.

To avoid any misunderstanding, I should add that my comments are not meant to suggest that such works are at all deficient with regard to clarifying reality from the victim's perspective. Rather, as noted already, these are valuable works that simply had to be written. Based on this understanding, I would like to consider the characteristics of postwar literature that sets them apart from those works of non-fiction by examining the novel *Jikan* 時間 [Time] by Hotta Yoshie, published in 1955 by Shinchōsha. By examining the layered structure of victims and perpetrators in this book, I intend to look at the problems raised by postwar literature and clarify their significance.

1. Viewing Oneself as the Perpetrator

Prior to examining Hotta's novel, let me touch briefly on two other works of fiction: *Shinpan* 審判 [Judge] by Takeda Taijun and *Kao no naka no akai tsuki* 顔の中の赤い月 [A Red Moon in Her Face] by Noma Hiroshi. Both are well-known postwar literary works that address the theme of the perpetration of harm on others.

Takeda's novel *Shinpan* is set in Shanghai, just after Japan's defeat in the war. The focus of the book is a letter written to the first-person narrator by a man named Jirō, who had been a soldier stationed in China. In his letter he confesses to having killed a civilian Chinese farmer who had not been resisting the occupation. Because of this act he decides to stay in China rather than return to Japan, a decision that stems from an awareness of his own guilt and the harsh view he has of himself for having callously killed a civilian of the enemy nation. The "judge" refers to his own self-punishment, that is, his decision to live while carrying the burden of guilt.

5 See Kanō Mikiyo's 加納実紀代 book *Women Protecting the Homefront (Onna tachi no "jūgo" 女たちの〈銃後〉)*, 1987).

Similarly, Noma's novel *Kao no naka no akai tsuki* tells the tale of a man named Kitayama Toshio, who has returned from the war, and of a war widow named Horikawa Kurako. After witnessing the horrors of war in the South Pacific, Kitayama is trapped in the mindset whereby he rejects human beings and life itself. His affection for Kurako grows, and she feels affection for him in return, but when he remembers how he abandoned his suffering comrades-in-arms, he realizes his own inability to make her happy and does not seek to deepen their relationship. Kitayama sees the reflection of a tropical red moon on Kurako's white face and is overwhelmed by his sense of guilt toward his old army companions. This red moon that manifests the trauma of the war zone is featured in the work's title.

These novels depict "survivor's guilt," a term referring to the trauma experienced by those who lived through the Holocaust or atomic bombings or other such catastrophic events; the same feeling was experienced by survivors of the Asia-Pacific war. For example, underlying the writing of Katō Shūichi 加藤周一 and Ayukawa Nobuo 鮎川信夫 is a profound sense of how they had lived through a war that had claimed the lives of close friends.⁶ This phenomenon of survivor's guilt is an important contributing factor in the formation of postwar literary discourse.

Another characteristic of postwar literary works is how they depict the reality of the "human being" laid bare by the experience of war and the army. One such character, to be discussed later, appears in Hotta's novel *Jikan*: the commissioned officer Kirino Taii, a highly-cultured former university professor who, despite this background, directs those under him to inflict torture. This is an example of how postwar literature depicts

6 In Katō Shūichi's book *Nijusseiki no jigazō* 二十世紀の自画像 [Self-Portrait in the 20th Century] (2005), he writes: "I had two close friends around the same age as me, one a doctor and the other a literary man; and these men who were like brothers to me were killed. I strongly questioned why it was that I had lived, while they had been killed, and I become obsessed with the structure and character of the war that my country Japan had waged" (p. 31). Another example of the phenomenon of survivor's guilt can be seen in the poem "Shinda otoko" 死んだ男 [Dead Man] by Ayukawa Nobuo (published in the February 1947 issue of *Junsui shi* 純粋詩), a work written in memory of his friend Morikawa Yoshinobu 森川義信. There is also the following passage from Takeda Taijun's work "Ikinokori no kangai" 生き残りの感慨 [Deep Emotion of Survival] (published in the August 13 and 14 issues of *Tōkyō shinbun* 東京新聞): "Even though everyone who had died had an equally valid right or reason to survive, they did in fact die, whereas we survived. No matter how insensitive or irresponsible it might be, thinking of this gives me a feeling of suffocation" (*Takeda Taijun zenshū*, p. 262).

the reality of the human condition not as a problem of others but rather as one's own problem—in this case showing the way in which a man who had led an ordinary life in peacetime can be transformed by the upheaval of war into a brutal person. The desire to somehow understand this human reality that cannot be grasped by reason is certainly one reason why the French existentialist thought of Sartre and Camus was the subject of considerable interest in postwar Japan. The experience of war forced people to bear witness for the first time a harsh reality.

We can see, then, that postwar Japanese literature is characterized in part by its treatment of the issues of survivor's guilt and the reality of human behavior. Yet this is not a characteristic limited to postwar Japanese literature. For instance, there are novels, films, and reportage depicting traumatized US soldiers who returned home from the wars in Vietnam or Iraq. The same clear sense of guilt at one's own actions committed against civilians of the enemy country, or against one's own friends and comrades, is depicted in Japanese novels such as *Shinpan* or *Kao no naka no akai tsuki*. In such works, a major factor underlying the various characters' anguished thoughts resulting from the war is not so much their experience as victims as the acts they perpetrated themselves.

At issue is not whether the experiences written about in the novels of Takeda Taijun and Noma Hiroshi actually took place or not. What is worth bearing in mind, rather, is that their works deal with the aspects of both victim and perpetrator in war, and scrupulously depict the figure of the perpetrator.

2. Hotta Yoshie's *Jikan*—Viewed from Four Perspectives

Hotta Yoshie's *Jikan* was first published in full book form in April 1955 by the publishing company Shinchōsha. The parts comprising the book were previously published separately, as follows: “Jikan” [Time] (November 1953 issue of *Sekai* 世界), “Shihen” 詩篇 [Poetry Selection] (February 1954 issue of *Bungakukai* 文学界), “Sansen Sōmoku” 山川草木 [Mountains, Rivers, Grasses, Trees] (July 1954 issue of *Kaizō* 改造), “Junanraku” 受難楽 [The Pleasure of Suffering] (August 1954 issue of *Bungakukai*), “Sonzai to kōi” 存在と行為 [Existence and Action] (October 1954 issue of *Sekai*), and “Kikan” 帰還 [Repatriation] (January 1955 issue of *Sekai*). As is clear from these separate parts, Hotta's work portrays wartime perpetrators in a manner that is even more multifaceted than the depictions in *Shinpan* or *Kao no naka no akai tsuki*.

Hotta's *Jikan* is a novel in diary form that deals with the Nanjing Massacre. The diarist is a 37-year-old man named Chen Ying Di, a highly capable Chinese government official assigned to work for a naval unit in the Kuomintang government. His diary depicts his life with his five-year-old son Ying Wu and his pregnant wife from 30 November 1937 to 3 October 1938, the period of the fall of Nanjing. In sharp contrast to the top government officials who fled to the city of Hankou, Chen remains at his post in Nanjing, using a wireless to communicate the situation within the city to those on the outside. His older brother abandons Chen and his family for the safety of Hankou, telling Chen to safeguard the family wealth—a remark that seems quite selfish coming from someone who has escaped to a safe zone. Moreover, Chen's uncle, upon whom he had hoped to rely, commits the traitorous act of working for the Health Department of Japan's puppet Nanjing government, which traffics opium and heroin. This uncle even stands by in silence, after the Japanese army enters the city, when Chen's wife and son are dragged away by Health Department personnel from the neutral zone set up by the International Committee on the campus of Jinling University to be killed in a group execution. This person is quick to transform himself and acts only with his own safety in mind. Unable to turn to his elder brother or uncle for help, Chen and his pregnant wife and son do whatever they can to protect themselves after the Japanese army enters the city, but he also clandestinely continues his work.

Here I want to examine the character of Chen Ying Di from four perspectives. Chen's diary does not cover the half year beginning from 11 December 1937: the last entry is recorded at 11 a.m., in which he writes that the city of Nanjing has fallen, and the next entry is not until 10 May 1938. The subsequent entries include passages where he remembers what has occurred during the six months not covered by the diary. One assumes that he has not had the opportunity to write in the diary during the half year after the city fell. In the new diary entries we see that the Japanese army has commandeered his large compound and that he is now a subordinate of the Japanese officer Captain Kirino who is stationed there. His wife and child have already been killed. There is no longer anything left for him to protect. He has the following thoughts on the invasion of the Japanese army, which is responsible for so many deaths:

Those who have already died, and those who are about to die, are not a mass of tens of thousands, but the deaths of individuals. All of those individual deaths have add-

ed up to those tens of thousands. This way of counting—tens of thousands together or individual upon individual—here is the difference between war and peace, the difference between a newspaper article and literature. (p. 55)⁷

Here is a way of thinking that does not fit in neatly with a sort of numerically based ethics, but rather esteems the individual. The difference between journalism and literature is the degree to which the individual is taken into consideration. Literature emphasizes the individual. The first point to bear in mind regarding *Jikan* is this perspective of viewing each individual person as precious and irreplaceable.

Captain Kirino recognizes Chen as a fellow intellectual and thinks it a waste for him to be content with just being an errand boy. The captain invites Chen to utilize his talents by cooperating with the Japanese army, an offer that Chen cannot accept, as he explains: “I loved my wife and child, and now I have no desire to do anything.” For him the central fact of his life is that he has lost the irreplaceable people in his life; the question of honor or self-preservation means nothing to him at this point. Clearly he has no intention whatsoever of becoming a collaborator with the enemy like his uncle had done. The memory of his murdered wife and child continually comes to mind. This is a wound too deep to ever heal. Additionally, however, Chen, before becoming a subordinate to Captain Kirino, had been forced to dispose of corpses. The bodies of still breathing Chinese had been thrown into a creek. He writes repeatedly in his diary of how the people he had killed in treating them like corpses were just like his own wife and child.

Chen, a capable and highly knowledgeable government official who had worked in several foreign countries, is both a victim who has lost his wife and child and a perpetrator toward the still-living individuals whose bodies he got rid of. Chen is fully aware of this fact. This double awareness—as victim and perpetrator—is an important point to bear in mind. Of course, what underpins the novel is the depiction of the misery arising from the Japanese army's siege of Nanjing and the three weeks of murder, pillage, and rape that followed. The real perpetrators, without question, are the Japanese soldiers, and Chen is undeniably a victim. Yet the war as depicted by Hotta Yoshie is broken down into further categories. Within the victims of the Japanese invasion we also find types like Chen's elder brother and uncle. And the author also depicts the crime committed by

7 All quotations from this novel and page numbers are from Hotta 1955.

Chen himself. This overlapping of victim and perpetrator is the second key point to keep in mind.

This brings us to the question of why the novel is titled *Jikan*: Chen, having lost his wife and child, longs for an impersonal, inorganic world. We find the following entries in his diary:

The ideal place for me would have no trees and not a single blade of grass. It would be a desolate and hard landscape, made up of rock and metal. Everything is transformed over time, but now I cannot endure this. Even though I am the one who suffers most if these circumstances of mine were to be transformed utterly by time...In fact, if time—the time of human beings and of history—were to become stronger and flow even faster, the different time of other countries would intrude and increase the separation of death. (p. 88)

He repeatedly writes about how in this time of human beings and of history his wife Bakushū “is now walking in the netherworld of rock and metal with the child” (p. 90); he says, “I want to go to that world of only rocks and minerals and no time” (p. 108), and “They are wandering around the boundary between the inhuman and the human world—between that time-less world of rock and metal and the lush June world of mountains, rivers, and trees” (p. 112).

Certain that his wife is wandering around this rocky, metallic netherworld with their child, he wants to join them there. On the one hand, he cannot bear the fact that time transforms everything; but time is also needed if his hopeless present is to be changed. For him, time is what brings misery, and is also what transforms the unhappiness of the present.

Time is something that seems connected to the activities of human beings, both good and bad. In this sense, it encompasses two meanings. This double meaning is the third point that merits attention. Upon reflection, we can see that Chen himself has a double-sided existence as both victim and perpetrator. He is wandering along the boundary between the *inhuman world* that is beyond time and the *human world* that is full of life, unable to find refuge in either one. Losing his connection to wife and child turned Chen into a torn man, with this sort of wandering mind.

From the description above, some may imagine that Chen’s feelings about his wife and son are those of a naïve man. But that is not necessarily the case. It is certainly

true that his feeling of love for his wife and son was very strong, but in fact he is a tough-minded man who is the antithesis of a naïve figure. Indeed, it is very much for that reason that he became involved with military espionage. And this leads us to the fourth important point, that is, that several characters involved with espionage appear in the novel.⁸ For instance, one associate of Chen is a painter who works as a spy for the Kuomintang government under the initial “K” as his codename. But Chen suspects he may in fact be a double agent. Another character, called “Blade” because he works as a knife-sharpener, is a spy for the Communist Party. Above all there is Chen himself, who while working under Captain Kirino carries on the intelligence work of transmitting information regarding Nanjing by wireless to Hankou. In grilling “K” to find out whether he is a double agent, Chen says that he is not appealing to the man’s patriotism: “I don’t believe in any ideologies. Doctrines and policies are just tools used in work—not something to be believed in...Undercover agents like us are all Judases” (pp. 183–84).

Whatever the goal of espionage may be, everyone involved in such work is like Judas Iscariot in the eyes of Chen. Even while labeling himself Judas-like, Chen also thinks that a “state of bondage” has been imposed on him and writes that “no matter how much I am turned into a slave, the question is how to live with a spirit far removed from slavery” (p. 37). He can never forgive the double agent “K” or his traitorous uncle who assists the Japanese army’s trafficking of opium. Yet he still has an awareness of himself as a Judas figure. He lives in a convoluted world where pure principles cannot exist.

3. Foundation of Hotta Yoshie’s Thought: His Depiction of China

We have taken a quick look at Hotta’s novel *Jikan* from the four key perspectives of (1) respect for the individual, (2) the overlapping of victim and perpetrator, (3) the double meaning of time, and (4) the Judas-like nature of espionage work. Now we can touch on the fact that most of the stories recounted by Chen do not depict himself as a noble-minded warrior or hero animated by a sense of justice. Certainly he is a narrator we can trust, though. The occupied city of Nanjing, where the story is set, is characterized by the discord between three separate powers: the Japanese army, the Communist Party, and

8 In the article “Hotta Yoshie—Shanghai kara hisenryōka no Nihon e” 堀田善衛：上海から被占領下の日本へ [Hotta Yoshie: From Shanghai to Occupied Japan] (September and October 2003 issues of *Bungaku* 文学), which details the espionage work depicted in Hotta Yoshie’s works, the author Yazaki Akira 矢崎彰 discusses the ruthless espionage of the female spy 陳秋瑾 in the work *Haguruma* 齒車 [Gears].

the Kuomintang government. As noted at the outset, the “perpetrator” theme of postwar literature takes on even more complex aspects in *Jikan*, a novel that depicts the tragedy of Chen’s family, who were victims of the massacre committed by the Japanese army during the three weeks of murder, pillage, and rape; and the despair, sense of emptiness, and anger of Chen as the survivor. The novel unfolds within this world without innocence, with its array of different layers. No one here is crying the tears of the innocent.

The key characteristic of the novel is that the Japanese writer Hotta Yoshie shaped a character like Chen, choosing to take his protagonist from the side of the occupied Chinese. As for why Hotta adopted this approach, we can bear in mind the following comment he made during a trip he took with Takeda Taijun to Nanjing in May 1945, which can be found in the “Author’s Afterword” to the second volume of Hotta’s completed works:

The evening light striking Zijin Mountain reflected off the minerals to give off a purple and gold hue. The unique beauty of the sight was intensely beautiful.

I thought of how in this city of Nanjing, with this beautiful mountain scenery at dusk, was attacked and captured by the Japanese army in December of 1937 and of the massacre that followed. The victims were not just the surrendering Chinese soldiers but civilian residents, including women and children—the attacks, arsons, pillaging, rapes, and other brutal acts continued for weeks. Considering that the deaths among Chinese soldiers numbered in the tens of thousands, some believe as many as 430,000 people perished. Within Japan this massacre was kept hidden from the people.

The massacre stands in complete contrast to the scenic beauty of the Kōnan region (Ch. Jiangnan) and ranks among the most disgraceful acts in the long course of Japan’s history. I remember now how, when I was lying on my bedding atop the ramparts of Nanjing, I had the sense that eventually I would have to write this story. It was eight years later, in 1953, that I began writing the tale and it was in 1955 that it was published as a novel under the title *Jikan*. (p. 649)

We can see then that there were three important episodes, each separated by a period of eight years: the Nanjing massacre committed by the Japanese army in 1937; Hotta’s trip to Nanjing in 1945; and the beginning of his writing of *Jikan* in 1953. Eight years after his

May 1945 trip to Nanjing, when he had looked back on the massacre of eight years earlier, Hotta's work began to crystallize. At the time he realized that a Japanese person must write about the Nanjing massacre, Hotta thought that choosing a Chinese protagonist might be a way of better appreciating the pain experienced by those on the other side of the conflict. Yet Hotta did not turn his protagonist into a simple victim; rather, from the four perspectives already discussed, he created a complexly nuanced character, based on his own harsh view of human understanding.

Here it is worth touching on the novel Hotta wrote immediately prior to *Jikan*: his 1953 novel *Rekishī* 歴史 [History]. The two novels together should in fact be seen as comprising a longer work. The earlier novel *Rekishī*, set in Shanghai after Japan's defeat, centers on a Japanese character named Tatsuta who was forced to serve in the Kuomintang government, a character that calls to mind Hotta's own life. In his "Afterword" to the second volume of his collected works, Hotta describes himself at the time as "a sort of captive who had been bound up in the straightjacket of the Japanese ideology centered on the Emperor system" (p. 648). The novel *Rekishī* is a work in which he describes the process whereby he escaped from that straightjacket, depicting the situation as China moved from a civil war between the Nationalists and Communists to a revolution, as well as the scene in Shanghai, which continued to be subject to the same colonial rule in the postwar period by the same capitalists and socio-economic forces as during the war period. A proper discussion of *Rekishī* would require analyzing the novel while referring to the recently published book *Hotta Yoshie Shanhai nikki* 堀田善衛上海日記 [Hotta Yoshie's Shanghai Diary], but there is not adequate space to do so here.⁹

As for the connection of *Rekishī* to the later work *Jikan*, both works depict China, with the former set in 1946 Shanghai and centering on the Japanese character Tatsuta, and the latter novel taking place in 1937 Nanjing and centering on the Chinese character Chen Ying Di. In this sense they are like two sides of the same work. Although one novel is told from the perspective of a Japanese and the other from the perspective of a Chinese (both of whom are among the vanquished), both of them offer a depiction of China.

This long novel in two parts, written in the early 1950s, stems from the awareness Hotta came to have in Shanghai, where he was at the moment of Japan's defeat in 1945, regarding the hidden aspects of organizations of stateless individuals and politics, and

9 See Kōno 2008.

his keen awareness of the fundamentally flawed Japanese policy of seeking to invade and occupy China.

Hotta's 1959 book *Shanghai nite* 上海にて [In Shanghai], published four years after *Jikan*, is based on the trip he took in the autumn of 1957 to China at the invitation of the Chinese Writer's Association, traveling with a group of other writers that included Nakano Shigeharu 中野重治, Inoue Yasushi 井上靖, Honda Shūgo 本多秋五, Yamamoto Kenkichi 山本健吉, Togaeri Hajime 十返肇, and Tada Yūkei 多田裕計. In the book, Hotta also draws on his memory of Shanghai in 1946, recalling how living in the city around that time, both prior to and after Japan's defeat, brought about "something decisive" in his life.¹⁰

According to Hotta, the war on the Chinese continent was "a three-way war waged between the imperial Japanese army, the army of the Kuomintang government (based in Chongqing), and the army of the Chinese Communist Party (based in Yan'an). Japan's defeat in August 1945 led to a steep escalation in the conflict between the Kuomintang and Communist armies, as Hotta recalls in the same "Afterword" quoted earlier:

It was some time in early 1946 that I saw the Chinese newspaper headline "Pitiful Victory," which probably meant to say that even though the Japanese army was defeated, the Chinese victory had a horrible aspect to it. This sort of self-awareness on the part of the state and its citizens shined brightly when compared to the insidious view in Japan where the term *haisen* [defeat in the war] was completely replaced by the use of the term *shūsen* [end of the war]. (p. 648)

Around the time that Hotta was forced to serve in the propaganda unit of the Kuomintang Party in Shanghai, following Japan's defeat, he had a strong desire to meet "those who had the fierce spirit to join the resistance movement based on a deep animosity against Japan," but he realized that in fact "there were no such one-dimensional people and Chinese youth in particular did not exist in an environment where they could be divided into such simple categories." Hotta noted this in his article "Kurai kurai chika kōsaku"

10 The same seems to have been the case with Takeda Taijun. After the restoration of diplomatic ties between Japan and China, however, Hotta made no comments about the issue of the Chinese state. Later the conversation between Hotta and Takeda was published under the title *Watashi wa mō Chūgoku o kataranai* 私はもう中国を語らない [I'll Speak No More of China], 1973.

暗い暗い地下工作 [Maneuverings in the Pitch Black Underground] in the journal *Zuihitsu Chūgoku* 隨筆中国 (September 1947), in which he also recalled: “Even among those active in the bloody underground resistance from beginning to end one could see, after China’s victory, a tainted quality, a noticeable eerie fatigue particular to the partisans that had no sense of consolation or emancipation.”¹¹

There is a conspicuous contrast between easy-going yet insidious Japan and the wretchedness of China with its noticeable eerie fatigue. The reason Hotta felt obliged to make the Chinese character Chen Ying Di the protagonist of his novel *Jikan*, after his work *Rekishī*, is likely based on this experience he had of the profundity and complexity of China. And one underlying factor of this was precisely the actions committed by Japan. The novels *Jikan* and *Rekishī* are both works that have their basis in the ideas that Hotta came to acquire in Shanghai.

Conclusion

Hotta Yoshie was dispatched to Shanghai along with the *Kokusai Bunka Shinkō Kai* 国際文化振興会 [International Culture Promotion Society] on 24 March 1945, two weeks after he experienced the 10 March firebombing of Tokyo. After Japan’s defeat, as mentioned already, Hotta wrote *Rekishī* and *Jikan* in the early 1950s, but he would later also write extensively about the period prior to arriving in Shanghai in his 1971 book *Hōjōki shiki* 方丈記私記 (Personal Account of My Hut). In this work, he recounts how at age 27 he had been speechless at the sight of residents in a completely bombed-out working-class district of Tokyo throwing themselves at the feet of the Emperor to apologize. These people suffering from the calamity of war had their heads bent in apology while those responsible for the war were sitting at their desks with maps spread out before them and being saluted by their subordinates. This is an upside-down situation if one considers who is actually to blame. The young Hotta found it impossible to understand the attitude of those rulers or of the common people.

However sad this spectacle seen in Japan might have been, it was also quite curious. In contrast, what Hotta saw in Shanghai, as mentioned already, was profound and complex in nature, having a “decisive” impact on his own way of living. His character Chen Ying Di expressed the following thought: “Peace is not so much the negative state

11 *Hotta Yoshie zenshū*, vol. 14, 1994, p. 448.

of there being no war, but rather the condition of not being bound to servile fatalism or to a catastrophic view of life” (p. 96). In his view peace is not something brought about by kowtowing to rulers but rather something one must win for oneself. Chen, even while serving the Japanese occupation under Captain Kirino, still resists that rule by using a wireless to convey military intelligence. In his diary he describes how “life is something that has to be discovered many different times.”

Most conspicuous of all in the three-way war fought in China was the image of *human beings*. If Hotta had not traveled to Shanghai as a young man it seems unlikely that he would have been able to depict the Nanjing of 1937 or Shanghai of 1946. Those who have never taken one step beyond their own country’s borders cannot grasp anything outside of that national framework. But Hotta was able to understand the perspective of the perpetrator, not only the victim, thus making possible a fuller depiction that included nuances in thought and behavior. Within Japan, to return to a point I made at the outset, the overriding postwar narrative theme was the enormous damage that the war had caused. Of course, the accounts of this damage are indeed precious testimonies, but if we also take into account the view from the other side we are likely to get a completely different story. As we have seen, this is what Hotta Yoshie accomplished in *Jikan* and *Rekishū*, two novels he felt compelled to write, which bring into view the perspective of “the other” (China).

Postwar literature is of this type had not existed previously in Japan. Literary works appeared that might be described as “philosophical novels.” The postwar literary works that start from a profound impression regarding the perpetrating of damage upon others are well-worth re-reading on several occasions when examining the postwar mentality in Japan as well as the effectiveness of antiwar and pacifist thought. These are works that are certain to benefit contemporary readers by offering us a different perspective.

(Translated by Michael Schauerte)

Notes: This paper is based on my presentation in the session “War Literature and War Memory in Shaping Japanese Culture” at the annual conference of the Association of Asian Studies in Honolulu on 3 April 2011. Recent research publications on Hotta Yoshie’s *Jikan*, such as Hikosaka Tai 彦坂諦, *Bungaku o tōshite sensō to ningen o kangaeru* 文学をとおして戦争と人間を考える (Renga Shobō Shinsha, 2014), and Henmi Yō 辺見庸, *1★9★3★7* (Kinyōbi, 2015) are not mentioned in this paper.

REFERENCES

Ayukawa 1947

Ayukawa Nobuo 鮎川信夫. “Shinda otoko” 死んだ男. *Junsui shi* 純粹詩 (February 1947).

Chūō Kōron Sha 1950

Chūō Kōron Sha 中央公論社, ed. *Kono hateni kimi aru gotoku* この果てに君ある如く. Chūō Kōron Sha, 1950.

Fujiwara 1949

Fujiwara Tei 藤原てい. *Nagareru hoshi wa ikiteiru* 流れる星は生きている. Hibiya Shuppansha, 1949.

Hotta 1947

Hotta Yoshie 堀田善衛. “Kurai kurai chika kōsaku” 暗い暗い地下工作. *Zuihitsu Chūgoku* 随筆中国 (September 1947).

Hotta 1953

Hotta Yoshie. *Rekisho* 歴史. Shinchōsha, 1953.

Hotta 1955

Hotta Yoshie. *Jikan* 時間. Shinchōsha, 1955.

Hotta 1959

Hotta Yoshie. *Shanghai nite* 上海にて. Chikuma Shobō, 1959.

Hotta 1971

Hotta Yoshie. *Hōjōki shiki* 方丈記私記. Chikuma Shobō, 1971.

Hotta and Takeda 1973

Hotta Yoshie and Takeda Taijun 武田泰淳. *Watashi wa mō Chūgoku o kataranai: Taiwa* 私はもう中国を語らない: 対話. Asahi Shinbunsha, 1973.

Hotta Yoshie zenshū

Hotta Yoshie. *Hotta Yoshie zenshū* 堀田善衛全集, vols. 2, 14, 16. Chikuma Shobō, 1993–1994.

Inoue 2005

Inoue Toshio 井上俊夫. *Hajimete hito o korosu: Rō-Nihonhei no sensō ron* 初めて人を殺す: 老日本兵の戦争論. Iwanami Shoten, 2005.

Kanki 1957

Kanki Haruo 神吉晴夫, ed. *Sankō: Nihonjin no Chūgoku ni okeru sensō hanzai no kokuhaku* 三光: 日本人の中国における戦争犯罪の告白. Kōbunsha, 1957.

Kanō 1987 (1995)

Kanō Mikiyo 加納実紀代. *Onna tachi no “jūgo”* 女たちの〈銃後〉. Chikuma Shobō, 1987; 1995 (revised version).

Katō 2005

Katō Shūichi 加藤周一. *Nijusseiki no jigazō* 二〇世紀の自画像. Chikuma Shobō, 2005.

Kōno 2008

Kōno Kensuke 紅野謙介, ed. *Hotta Yoshie Shanghai nikki: Kojō tenka 1945* 堀田善衛 上海日記: 滬上天下一九四五. Shūeisha, 2008.

Nagai 1995 (2008)

Nagai Takashi 永井隆. *Kono ko o nokoshite* この子を残して. Sanpauro, 1995 (1st edition); 2008 (16th edition).

Nihon Senbotsu Gakusei Kinenkai 1995 (2010)

Nihon Senbotsu Gakusei Kinenkai 日本戦没学生記念会, ed. *Kike Wadatsumi no koe* きけ わだつみのこえ. Iwanami Shoten, 1995 (1st edition); 2010 (24th edition).

Noma 1946

Noma Hiroshi 野間宏. *Kurai e* 暗い絵. *Kibachi* 黄蜂 (April 1946).

Noma 1947

Noma Hiroshi. *Kao no naka no akai tsuki* 顔の中の赤い月. *Sōgō bunka* 総合文化 (August 1947).

Takeda 1947

Takeda Taijun 武田泰淳. *Shinpan* 審判. *Hihyō* 批評 (April 1947).

Takeda 1957

Takeda Taijun. “Ikinokori no kangai” 生き残りの感慨. *Tōkyō shinbun* 東京新聞 (13–14 August 1957).

Takeda Taijun zenshū

Takeda Taijun. Vol. 13 of *Takeda Taijun zenshū*. 武田泰淳全集. Chikuma Shobō, 1979.

Uemura et al. 1952

Uemura Tamaki 植村環 et al., eds. *Itoshigo to taete yukamu: Sensō mibōjin no sakebi* いとし子と耐えてゆかむ: 戦争未亡人の叫び. Shufu no Tomosha, 1952.

Utsumi et al. 2005

Utsumi Aiko 内海愛子 et al., eds. *Aru Nihonhei no futatsu no senjō: Kondō Hajime no owaranai sensō* ある日本兵の二つの戦場: 近藤一の終わらない戦争. Shakai Hyōronsha, 2005.

Yazaki 2003

Yazaki Akira 矢崎彰. “Hotta Yoshie: Shanhai kara hisenryōka no Nihon e” 堀田善衛: 上海から被占領下の日本へ. *Bungaku* 文学 (September–October 2003).

日文研が輩出した中国の医学史研究者たち

梁 嶸

現在、中国大陸の医学史界では100人規模の学者グループが活躍している。その主要メンバーの一部は、日本の京都にある国際日本文化研究センター（以下、「日文研」と称する）から輩出された研究者たちである。

日文研には名高い科学技術史研究の基地があり、医学史はその最も重要な一つである。日文研の科学技術史研究の最初の代表者は山田慶兒氏であり、栗山茂久氏と Frederik CRYNS 氏がその後を継いでいる。中国大陸の一部の医学史研究者は、日文研という系統だった研究体系、緊張感のある研究環境、厳格な研究風土、活発な雰囲気を持つ殿堂で学術の養分を多く吸収した。日文研を出た研究者たちは、中日医学史の研究と交流活動を継続し、中国大陸の学者と学生に日本医学史研究の状況を知らせる架け橋となり、国際医学史研究分野でも活躍している。ここでは5人の学者をご紹介します。

1. 廖育群

中国科学院自然科学史研究所研究員、元中国科学院自然科学史研究所所長、中国科技史学会理事長、『中国科技史雑誌』責任編集などを担当。1994年、廖育群氏は山田慶兒氏の招きにより、外国人研究員として日文研に1年間滞在した。日文研にいる間、廖氏は日本の漢方医学の特徴を検討し、漢方医学の脚気と腹診について深く考察した。

廖氏が山田慶兒氏と知り合ったのは、1983年、大学を卒業したばかりの廖氏が中国を訪問された山田氏を空港まで出迎えに行った時のことである。これをきっかけに、山田氏から医学史を教わり始める。廖氏は山田氏の論文の翻訳を始め、それを通して山田氏の研究方法を学んだ。「私はもう一つの研究方法と思考を知った。目からウロコが落ちたような感じだ。それは分析の方法というものだ。すなわちよく見られる歴史的現象をできる限り詳細に描写したり、わざと「成果」や「科学性」などを掘り出したりするという当たり前の「パターン」から抜け出して、歴史現象に理性的な分析と考証を加え、現象の後ろに隠

された思想の脈絡、異なる時代に存在する多数の現象間の関連性と発展の脈絡、関係がないように見える現象のつながりなどを考察することだ。ある部分の欠如が原因で、脈絡の発見と構築が阻まれた場合は、大胆な仮説（作業仮説）でシステムを構築し、また博引旁証で緻密に考察して仮説を裏付ければよい」と、廖氏は語る¹。

廖氏が翻訳して中国の医学史界に紹介してきた山田慶兒氏の主要な論文と著作は、『夜鳴之鳥』『古代東亜哲学と科技文化—山田慶兒論文集』（図1）、『中国古代医学的形成』（図2）などである²。

廖氏は医学の史料分析の方法によって、中国医学史上の重要な典籍『黄帝内经』『傷寒論』および歴史的時期を考察し、『岐黄医道』『重構秦漢医学図象』『繁露下の岐黄春秋—宮廷医学と生生之政』『医者意也』『医工』『伝統医学縦横談：漫歩在科学与人文之間』等の代表作を著した³。また、日本医学史に関しては、『遠眺皇漢医学』（図3）、『扶桑漢方的春暉秋色：日本伝統医学と文化』（図4）、『吉益東洞—日本古方派的“岱宗”与“魔鬼”』（図5）等を発表している⁴。

廖氏は日本の漢方医学を研究する代表的な研究者であり、分析考察を重んじる日本医学史の研究方法を中国に紹介した。近年、復旦大学・浙江大学・北京中醫薬大学などで医学史教育を行っている。廖氏の著書を通して多くの若い研究者が医学史研究に携わり、日本の漢方医学およびその歴史を知るようになった

1 廖育群「我所認識的山田慶兒先生」『国際漢学』2000年2月、57-65頁。

2 廖育群「夜鳴之鳥」劉俊文主編・杜石然等訳『日本学者研究中国史論着選訳』（第10巻）、北京：中華書局、1993年、231-269頁；山田慶兒著・廖育群訳『古代東亜哲学と科技文化—山田慶兒論文集』沈陽：遼寧教育出版社、1996年；山田慶兒著・廖育群等訳『中国古代医学的形成』台北：東大図書股份有限公司、2003年。

3 廖育群『岐黄医道』沈陽：遼寧教育出版社、1991年；『重構秦漢医学図象』上海：上海交通大学出版社、2012年；『繁露下の岐黄春秋—宮廷医学と生生之政』上海：上海交通大学出版社、2012年；『医者意也：認識中医』桂林：広西師範大学出版社、2006年；『行走辺縁の医工師徒：周潜川と廖厚沢』鄭州：大象出版社、2013年；『伝統医学縦横談：漫歩在科学与人文之間』上海：上海交通大学出版社、2014年；廖育群『遠眺皇漢医学—認識日本伝統医学』台北：東大図書股份有限公司、2007年；『扶桑漢方的春暉秋色：日本伝統医学と文化』上海：上海交通大学出版社、2013年；『吉益東洞—日本古方派的“岱宗”与“魔鬼”』上海：上海交通大学出版社、2009年。

4 廖育群『遠眺皇漢医学—認識日本伝統医学』台北：東大図書股份有限公司、2007年；『扶桑漢方的春暉秋色：日本伝統医学と文化』上海：上海交通大学出版社、2013年；『吉益東洞—日本古方派的“岱宗”与“魔鬼”』上海：上海交通大学出版社、2009年。

た。廖氏はまた、医学者と歴史・文化研究者との共同国際医学史シンポジウムや、青年医学史研究会を主催する他、国内の雑誌で若手研究者の論文を紹介するなど、中国・日本・欧米の医学史に関する研究、医学者と歴史・文化研究者間の学術交流を推進している。



图1. 訳著『古代東亜哲学与科技文化』



图2. 訳著『中国古代医学的形成』

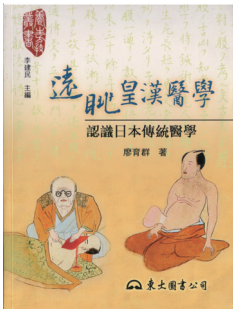


图3. 『遠眺皇漢医学』



图4. 『扶桑漢方の春暉秋色：日本伝統医学与文化』



图5. 『吉益东洞—日本古方派的“岱宗”与“魔鬼”』

2. 鄭金生

中国中医科学院医史文献研究所研究員、元所長。1995年、茨城大学人文学部の真柳誠教授が、北里研究所医学史研究部で研修中の王鉄策氏とともに中医科学院医史文献研究所を訪れた際、所長だった鄭金生氏は「日本現存中国散逸古医籍の分析」という研究計画を紹介された。この研究は翌96年に日本国際交流基金アジアセンターから3年間の資金援助を受け、以来、鄭氏は日本に現存する中国散逸古医籍の調査・復刻・帰還に十余年にわたって取り組むことになる。

1999年、鄭氏は真柳氏の助力を得て、日本学術振興会の助成により日本で10カ月にわたって中国散逸古医籍を調査している。その期間中、鄭氏は日文研の栗山茂久氏の招きで医学史研究班のメンバーとなった。鄭氏は海外研究者との交流を通して、医学史に対する歴史文化研究者と医学者の異なるアプローチに着目し、相互間の交流に積極的に貢献している。現在、北京大学・南開大学・復旦大学・陝西師範大学等の多くの大学の歴史学者が中華医学会・医学史学会に加入して、共同で広い視野の下に医学史研究を行っている。

鄭氏は、中国散逸古医籍の帰還の責任者でもある。『日本現存中国稀覯古医籍叢書』⁵、『海外回帰中医善本古籍叢書』⁶、『海外回帰中医善本古籍叢書・続』⁷、『海外回帰中医古籍善本集粹』⁸、『珍版海外回帰中医古籍叢書』（復刻版）という5種類の叢書シリーズを出版している（図6-10）⁹。これに関連し、鄭氏は日本内閣文庫所蔵古医籍調査に関する論文も発表した¹⁰。

また、鄭金生氏主編の『海外中医珍善本古籍叢刊』が、2016年に中華書局より復刻出版されることになっている。世界各地から中国に帰還した散逸古籍は総計427部で、うち397部は日本で保存され、全体の92.5%を占めている。日本から中国に帰還した散逸古医籍は、現代中国の医学研究において重要な役割を果たしている。中日研究者が共同で日本現存の中国散逸古医籍の調査・復刻・帰還に取り組むことは、現代中日医学文化研究者の学術交流と友好の現れであり、中国古代医学から日本が恩恵を蒙ったことに対する日本医学会からの恩返しとも受け取れる。

3. 梁永宣

北京中医薬大学医学人文学部教授、北京中医薬大学図書館館長、中華医学会医史学会主任委員。梁永宣氏は、1999年と2007年に笹川医学奨学金を得て、茨城大学で1年ずつ客員研究を行っている。1999年の滞在中には、日文研の栗

5 馬繼興等編『日本現存中国稀覯古医籍叢書』北京：人民衛生出版社、1999年。

6 馬繼興等編『海外回帰中医善本古籍叢書』北京：人民衛生出版社、1999年。

7 馬繼興等編『海外回帰中医善本古籍叢書・続』10冊、北京：人民衛生出版社、2010年。

8 曹洪欣主編『海外回帰中医古籍善本集粹』北京：中医古籍出版社、2005年。

9 曹洪欣主編『珍版海外回帰中医古籍叢書』北京：人民衛生出版社、2008年。

10 「日本内閣文庫所蔵元明医籍の初歩考察」第三屆國際漢学会議論文集曆史組『性別与医療』台北：中研院近史所、2002年、213-241頁。



図 6. 『日本現存中国稀覯古醫籍叢書』



図 7. 『海外回帰中医善本古籍叢書』



図 8. 『海外回帰中医善本古籍叢書・続』



図 9. 『海外回帰中医古籍善本集粹』



図 10. 『珍版海外回帰中医古籍叢書』

山茂久氏の招きで医学史研究班のメンバーとなり、帰国後は医学史教育において、学生に日本の医学史研究の現状と、日本の図書館を利用した古医籍の研究方法を詳細に紹介してきた。これらの授業は学生に歓迎されるだけでなく、医学史研究機関に注目され、2003年以降、梁氏は講座の内容を整理して『中華医史雑誌』に発表している¹¹。中国の若手研究者が集まる「中国中医薬古籍整理研究業務培訓會議」や国家図書館などで、研究者や市民を対象に日本の医学図書資源を紹介し、日本の図書館を利用する古医籍研究の方法を広げようと尽力した¹²。目下、日本の図書館のネット上の資料は、中国の医学史研究者、特に大学院生にとっては欠かせない重要な資料となっている。

梁永宣氏は帰国後、日本の医学史研究者を招いて北京中医薬大学で学術交流

11 梁永宣「網絡資源在医史文献研究中的应用」『中華医史雑誌』33(2)(2003年)、65-69頁。

12 梁永宣・甄雪燕「網絡中新資源信息在医史研究中的应用」『中華医史雑誌』42(6)(2012年)377-379頁。

を展開した。例えば、日本医史学会理事長小曾戸洋氏からは「五十二病方」の研究を、真柳誠教授からはアジア文化圏の古医籍調査研究を紹介していただいた。日本の医学史研究者が新たな成果を発表すると、梁氏はすぐに彼らを北京中医薬大学に招いて学生と交流する機会を作り、中国の新聞で発表するようにしている¹³。2015年5月、梁氏は北京中医薬大学を代表して、第1回中日韓三国共同参加の『傷寒論』学術シンポジウムを主催した。

現在、梁氏は中華医学会医学史分会の主任委員として、2013年には中華医史のQQ公式アカウントを、また2014年には医学史研究のWechat公式アカウントを開設している。QQには全国から313名の医学史教育研究者や、修士・博士課程在学生在が加入し、Wechatにはほとんどが若手の112名の中国医学史研究者が加入している。これらの現代的な情報交換を通して、中国各地ないし世界の医学史研究者たちが迅速に研究の現状や会議の情報を交換し、新たな問題についての議論もできる。活発な学術交流を行い、すばらしい成果を生み出している。

4. 郭秀梅

1992年に日本へ留学した郭秀梅氏は、順天堂大学医学部医史学博士課程を修了し、現在は北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部客員研究員、日本医史学会代議員を務める。

1995年、北里研究所と順天堂大学に留学中だった郭秀梅氏は、茨城大学・真柳誠教授の推薦により、日文研・山田慶兒氏の医学史研究班に参加して、日本における20年に及ぶ医学史研究を開始した。郭氏は毎年日中間を往復し、中国に日本の医学史研究の進展を伝え、第23回日本医史学会矢数道明賞を受賞している。

郭氏は主に日本の漢方医学研究者の書籍の校注・編集・翻訳を行っている。森立之の『傷寒論攷注』『素問攷注』『本草経攷注』『本草経集注』、山田業広の

13 梁永宣「日本各地収蔵中医古籍的図書館（一）宮内廷書陵部」『世界中西医結合雑誌』8（1）（2013年）；「日本各地収蔵中医古籍的図書館（二）国立公文書館内閣文庫」同8（3）（2013年）；「日本各地収蔵中医古籍的図書館（三）静嘉堂文庫」同8（5）（2013年）；「日本各地収蔵中医古籍的図書館（四）杏雨書屋」同8（7）（2013年）；「日本各地収蔵中医古籍的図書館（五）京都大学」同8（11）（2013年）；「日本各地収蔵中医古籍的図書館（六）東京大学」同8（12）（2013年）；「収蔵中医古籍的日本図書館（七）早稲田大学」同9（2）（2014年）；「日本各地収蔵中医古籍的図書館（八）蓬左文庫」同9（4）（2014年）。



図 11. 校注『金匱要略集注』

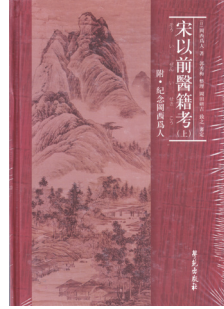


図 12. 校注『宋以前医籍考』



図 13. 校注『素問釋義』

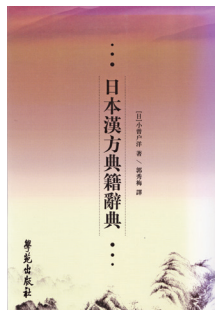


図 14. 訳著『日本漢方典籍辞典』

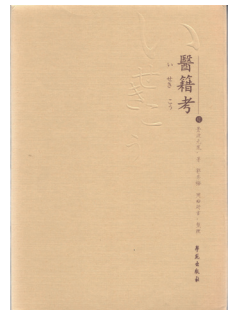


図 15. 校注『医籍考』

『素問次注集疎』『九折堂医書・千金・外臺札記』『金匱要略集注』、伊沢棠軒の『素問釋義』『金匱玉函要略私講』、鈴木良知の『傷寒論解故』、丹波元胤の『医籍考』、岡西為人の『宋以前医籍考』などが、既に中国で出版されている。また、『日本医家傷寒論注解輯要』『日本医家金匱要略注解輯要』の編集出版の他、小曾戸洋の『日本漢方典籍辞典』も翻訳出版している(図 11-15)¹⁴。現在、真柳誠

14 郭秀梅・岡田研吉編『傷寒論攷注 上・下(附 金匱要略攷注)』北京:学苑出版社、2001年;『素問攷注 上・下(附 四時經攷注)』学苑出版社、2002年;『本草經攷注 上・下(附 枳園叢攷)』学苑出版社、2002年;郭秀梅・岡田研吉編、森立之ら定補『本草經集注』学苑出版社、2014年;郭秀梅・岡田研吉編、山田業広著『素問次注集疎 上・下』学苑出版社、2004年;郭秀梅・岡田研吉編『九折堂医書・千金・外臺札記』学苑出版社、2008年;郭秀梅・岡田研吉編、伊沢棠軒著『素問釈義 上・下』学苑出版社、2005年;郭秀梅・岡田研吉編『金匱玉函要略私講』学苑出版社、2005年;郭秀梅・岡田研吉・崔為編、山田業広著『金匱要略集注』学苑出版社、2009年;郭秀梅・岡田研吉・王少麗編、鈴木良知著『傷寒論解故』学苑出版社、2010年;郭秀梅・岡田研吉編、丹波元胤著『医籍考』学苑出版社、2007年;郭秀梅・岡田研吉編、岡西為人著『宋以前医籍考 上・下』学苑出版社、2010年;郭秀梅・岡田研吉編『日本医家傷寒論注解輯要』北京:人民衛生出版社、1996年;『日本医家金匱要略注解輯要』北京:学苑出版社、1999年;郭秀梅訳、小曾戸洋著『日本漢方典籍辞典』北京:学苑出版社、2008年。

氏が2015年に出版した『黄帝医籍研究』の翻訳に着手している。郭氏は、『皇漢医学叢書』以来、中国で日本の漢方医学著作を最も多く翻訳・紹介してきた研究者である。

5. 梁嶸

私は北京中医薬大学中医診断学部教授、中国中西医结合学会診断学分会秘書長、中華医学会健康管理学分会常委を務める。1994年に、中国教育部の派遣で、日本一般財団法人霞山会の資金提供により、初めて日文研で学术交流を行った。その後来訪研究員と外国人研究員として日文研に滞在している。

山田慶兒、栗山茂久、Frederik CRYNS 諸氏の指導を受け、三氏の伝統医学の論理的思考方式の探求や、民間生活に根ざした医学問題の提起、証拠重視の方法論の重要性を認識した。これを基本に、私は中医の舌診の科学的意味を中心とする研究を始め、舌診における色の定量的研究を行い、舌診を人間ドックに応用し、舌診史および舌診技術の応用に関する研究論文を60余本発表してきた¹⁵。

中日間の学术交流を促すために、私は日文研の山田慶兒、栗山茂久、山田奨治諸氏、そして京都大学、日本歯科東洋医学会の研究者を北京中医薬大学に招いて学术交流を行い、大学院生と学部生の授業において、日本漢方医学の歴史、診断学の知識、日本漢方医学の研究状況を紹介してきた。また、大学生を組織して日本の漢方医学教育の現状を調査し、それに対する学生の認識を深めた。

15 梁嶸「中日伝統医学中舌診図の特徴及其医学観的探討」『自然科学史研究』22(4) (2003年); 同「《敖氏傷寒金鏡録》在日本流伝情况的若干調査」『中華医史雑誌』33(1) (2003年); 同「1949年以前中医舌診学術發展歷程的探究」『自然科学史研究』23(3) (2004年); 同「清末清初的舌診研究特征探討」『江西中医学院学报』17(3) (2005年); 同「日本江戸時代漢方舌診專着的研究」『中華医史雑誌』35(3) (2005年); 同「日本漢方医学興衰的歴史啓示」『國際中医中藥雜誌』28(2) (2006年); 梁嶸「舌診的歴史沿革」『江西中医学院学报』18(3) (2006年); 梁嶸・王盛花・李燕・侯楊方・李方玲「清代舌診医案外感病与内傷病的舌象特征研究」『江西中医薬』20(2) (2008年); 梁嶸「中日伝統医学の舌診—相違点の背景」『漢方の臨床』55(2) (2008年); 梁嶸・楊新宇・王召平「從《黄帝内經》看中医健康観与健康維護」『中華健康管理学雑誌』5(4) (2011年); 梁嶸・楊新宇・王召平「探索食物“性味”理論的科學內涵,更好地為治未病服務」『世界科学技術—中医薬現代化雑誌』13(4) (2011年); 梁嶸「外感病に対する舌診の形成」『中医臨床』33(4) (2012年); 梁嶸・王召平「論感知的身体在医学診断学研究中的重要性」『江西中医学院学报』24(5) (2012年)。

2016年、日文研は創立29年目を迎える。日本に滞在したことのある中国の医学史研究者にとって、日文研に滞在した日々は人生の中で忘れがたい経験となっている。ここで私たちは中日医学交流の絆を結び、これからも私たちの手でこの絆を深めていきたいと思う。私たちはいつか日文研に再び集まり、医学史の元教員と現教員と一緒に記念写真を撮りたいと思う。

(翻訳：陳凌虹)

中国大陸における日台関係史研究の概説

王 鍵

戦後の日本と台湾の関係は、国際政治学、経済学、歴史学において重要な研究領域であり、中国大陸の学界は一貫してそれに高い関心を払ってきた。第二次世界大戦前、台湾は日本の植民地統治 50 年を経験した。戦後はアメリカ主導の下、日本とまた密接な関係を持ち、東アジア地域における米日台三国間関係の枠組みを形成した。冷戦期の 1952 年以降も、日台は「外交関係」を維持していたが、1972 年、中日が国交を正常化し、日台関係は「断絶」した。外交関係樹立後の中日は依然として「冷戦」の二大敵対陣営に分かれ、中国政府は一貫して日台関係が中日関係に影響を与える最も直接的な要因であるとしていた。冷戦終結後、それまでの大陸と台湾の関係が急速に改善し、平和的に発展したのに伴って、日台関係にも大きな変化が生じた。

時代の影響や制約を受けて、中国大陸の学界では、戦後の日台関係に関する研究は長く不十分であった。陳奉林氏によれば、「40 年代後半から 80 年代末まで、東西が厳しく対立していた『冷戦』期に、中国と日本は異なる二大陣営にそれぞれ属していた。したがって日本の対台湾政策の如何が直接中国の平和と安全に関係し、中国はこれを重要視した。戦後の半世紀、中日両国の公私機関はこの間の歴史について効果的な研究を行い、価値のある研究成果を発表した」が、「国内の特殊な政治環境によって、中日関係に関する我々の研究は不十分、かつ不完全であった。研究領域のタブーが多く、関心や支持も少なかったため、多くの現実的意味のある問題が敬遠されてきた」と考えられている。1980 年代の改革開放後になって、中日関係研究の一環として、大陸でも必然的に日台関係が重要な観察対象とされるようになった。

1 陳奉林「国内外戦後日台関係研究綜述：以中国大陸、台湾和日本為中心」『台湾研究集刊』2001 年第 3 期。

これまでに日台の政治・軍事・文化・経済関係などの研究はすでにある程度行われ、研究成果も重ねられ、日台関係についての分析は相対的の深度を備えている。しかし、客観的に言えば、中日関係研究と比較すると、専門に戦後日台関係を研究した成果は依然として豊富ではない。日台関係史研究については、中国大陸の日本研究と台湾研究の二大領域に散見されるのみである。

1. 1980年代から20世紀末までの日台関係史研究

現在までの代表的な戦後日台関係の研究書としては、陳奉林『戦後日台関係史（1945–1972）』²、王俊彦『戦後日台関係秘史』³、臧士俊『戦後日、中、台三角関係』⁴、賈超為『日台関係の歴史和現状』⁵、呉寄南『冷戦後の日台関係』⁶等、研究水準の比較的高い学術著作がある。

外交学院の陳奉林『戦後日台関係史』は、大陸の学界で初めて明確に日台関係史を研究対象とした著書である。著者は研究の中で、中華人民共和国外交部檔案、台湾国史館大溪檔案、日本外務省記録や当事者の日記、回想録など、中国語・日本語の一次資料や公文書を大量に利用している。本書は総合的な研究を目的とし、体系と分析モデルに独自のスタイルを持ち、日台関係について集約的かつ狙いを定めた整理を図っている。日本と台湾の「国交樹立」から「断絶」までの全過程を、日本の内閣交代に沿って追ひ、政治、経済などの様々な面から読者に日台関係の全貌を示している。著者は、日本の対台湾政策が日台「国交」期間に一定の完全性、継続性を保ち、冷戦時代の顕著な特徴を持っていたとする。日台関係の主要な歴史的結節点において、著者は詳細な叙述と独特の分析を行っている。例えば、日本が台湾の国民党政府を中日講和条約締結の相手に選んだ問題に関して、著者は国際的背景の複雑性を指摘している。同時に、吉田茂政府が対台湾講和によってアメリカと駆け引きした点にも注目する。

2 陳奉林『戦後日台関係史（1945–1972）』香港社会科学出版社、2004年。

3 王俊彦『戦後日台関係秘史』福建人民出版社、2000年。

4 臧士俊『戦後日、中、台三角関係』台湾前衛出版社、1997年。

5 賈超為『日台関係の歴史和現状』華芸出版社、2011年。

6 呉寄南『冷戦後の日台関係』上海人民出版社、2009年。

中華文化促進会の賈超為『日台関係の歴史和現状』も通論的性格の著書であり、対象とする時期は陳春林『戦後日台関係史』よりもさらに長い。王俊彦『戦後日台関係秘史』は、戦後の日台関係の変遷過程について詳細で正確な実証的考察を行っている。

上海国際問題研究所の呉寄南『冷戦後の日台関係』は、冷戦終結後 20 年来の日台関係の発展を重点的に論述し、日台それぞれの主要な領域や問題に触れている。著者は歴史的推移から、冷戦後の日台関係はその起源について言えば、やはり冷戦期の日台関係の延長・発展であるとする。冷戦後の日台関係が一連の新しい特徴を示し得るのは、多く国際構造の変化に起因している。特に、中国の総国力の急速な増強と密接な関係がある。同時に、日本、台湾それぞれの政治構造の変化も日台関係に若干の新しい内在的要素を注入している。これについて、著者は「人文紐帯、すなわち日台関係の変遷における社会的文化的要素」として、日台関係の維持に対して、知らず知らずのうちに影響を持つ文化的要因や人脈関係を分析している。また、日本の「台湾グループ」、台湾の「日本通」について比較的詳細に整理・分析を行い、日台双方に冷戦後の相互接近を促した深層原因を明らかにしている。これを基礎に、日本と台湾の当局者が二国間関係の発展を維持するための戦略的意図とその制約要因を分析し、新世紀の日台関係の方向に初歩的な展望を示している。

日中関係の視点から日台関係を取り扱うことも、中国人研究者の研究動向の一つの特徴である。北京大学の林代昭『戦後中日関係史』⁷は系統的・包括的に中日関係を研究した著書であり、第 8 章「中日関係の新しい発展」の中で特に日台関係問題を検討し、台湾問題における日本政府のいくつかの方法について整理・分析を行っている。大連外国語学院の張耀武『中日関係中的台湾問題』⁸は、台湾問題の由来、「日華平和条約」の中日関係への影響、中日国交正常化と台湾問題、冷戦後の中日関係における台湾問題について詳細な分析を行い、戦後の台湾問題の形成と発展の過程において、日本は一貫して主要な役割を演じ、台湾問題は歴史問題と同様に、中日関係に影響を与える主要な問題の一つであったと指摘している。

7 林代昭『戦後中日関係史』北京大学出版社、1992 年。

8 張耀武『中日関係中的台湾問題』新華出版社、2004 年。

上海国際問題研究所の臧士俊『戦後日、中、台三角関係』⁹は、戦後日本と大陸、台湾の三角関係を論じた著書である。その全15章のうち5章で日本と台湾の関係を検討し、日台関係を東西「冷戦」構造の大きな枠組みの中に置くことによって問題の複雑性をより具体的に考察している。「吉田茂内閣以降の日本歴代政府の中華人民共和国に対する外交政策について論じ、1950年から1996年までの日本の対中華人民共和国外交の全貌を比較的全面的に表している」¹⁰と云えよう。

吉田茂は日本の著名な政治家・外交家として、戦後日本の対台湾政策体制の確立に極めて重要な役割を果たした。北華大学の鄭毅「日本対台政策策略研究：以“吉田書簡”為中心」¹¹、南開大学の殷燕軍「戦後日台関係框架制定過程」¹²、井上正也・王田「第二次吉田書簡與日台関係：台湾当局の対日戰略與自民党政治（1963–1964）」¹³などは、「吉田書簡」を手がかりに、吉田茂内閣期に次第に確立された日本の対台湾政策の基本的枠組みについて踏み込んで検討、議論している。

上述の著書と論文の他、古運全、劉江永、范跣江などの中國大陸の日本研究者も相次いで異なる視野によって日台関係を検討している。これらの成果は現実性、創造性を有しているが、不十分なところもある。まず、関連する一次資料の不足である。次に、著者の多くが日本研究者であって、台湾研究領域の研究者が極めて少ないことである¹⁴。

9 同前、臧士俊『戦後日、中、台三角関係』。

10 同上、20頁。

11 鄭毅「日本対台政策策略研究：以“吉田書簡”為中心」『北華大学学报』2010年第6期。

12 殷燕軍「戦後日台関係框架制定過程」『日本学刊』1995年第2期。

13 井上正也・王田「第二次吉田書簡與日台関係：台湾当局の対日戰略與自民党政治（1963–1964）」『国際政治研究』2008年第1期。

14 古運全「浅析近年来的日台關係」『日本問題研究』1986年第2期、劉江永「馬関条約百年後の日台關係」『日本学刊』1995年第6期、范跣江「試析影響日本對華政策的“台湾情結”」『日本学刊』1999年第2期、聯文「对近年来日台關係發展的幾点思考」『日本学論壇』1998年第4期、黃道余「九〇年代以来的日台關係」『党史縱横』2002年第12期、李伯軍「二〇世紀五〇年代以来日台關係的演變與中日關係」『解放军外國語學院学报』2001年第4期、馬王安「日本近期調整對台政策的原因和意圖」『國際關係學院学报』1997年第3期など。

2. 21世紀日台関係の変化の趨勢

2000年から現在まで、戦後日台関係史に関する研究はさらに深まった。この間、日本の右翼勢力と台湾独立勢力の結びつきがますます明らかになり、大陸の研究者はよりいっそう日台関係史研究に関心を持つようになった。中国社会科学院の武寅「日本対外戦略與台湾問題」¹⁵は歴史的角度から、日本の対外戦略における台湾問題の位置について比較的踏み込んで分析している。著者は、日本の対台湾政策は日本の対外戦略全体の中の一部であり、日米関係がいかに重要であっても特定の条件下で日本とアメリカが台湾問題で異なる行動をとる可能性を決して排除できず、日中関係の良し悪しは日本の対台湾政策の実質に必ずしも影響せず、ただその外在的な表現形式に影響するにすぎないと見ている。日本の対台湾政策の一挙一動は、すべて日本の対外戦略の基本目標によって決定され、これに従属し、同時にこの制約を受けている。したがって、台湾問題を日本の対外戦略全体の大きな背景の中に置き、台湾のその中での位置づけや台湾問題と日本の対外戦略全体の関係を明らかにする。これは我々が日本の対台湾政策を正確に把握し、日本と台湾の関係を把握する基本的方向性にとって、欠くことのできない前提であり、基礎である。

陳奉林「戦後日本対台湾政策的来龍去脈」¹⁶では、1950年代以降の日本の対台湾政策はおおよそ3段階に分けられるとする。(1) 1952年から72年までは、日台の「外交」関係樹立、発展の段階である。双方の関係は政治・経済・軍事・外交など諸領域に及んだ。(2) 1972年から90年代初めまでは、日台「国交断絶」後の非公式関係の段階である。その特徴は日台「国交断絶」の表層下に多くの動きがあって、しばしば日中関係の大局に衝撃を与え、日台関係に依然として半公式の性質を持たせていた。(3) 1990年代以降は、日台関係が冷戦後ますます密接で活発になった段階である。その後、陳奉林は2001年から04年までにさらに多くの日台関係史の論文を発表している¹⁷。これまでに、戦後日台関係史に関する研究は、比較的単一的な日本の対中政策研究の範疇を脱却し、その領

15 武寅「日本対外戦略與台湾問題」『世界歴史』2000年第2期。

16 陳奉林「戦後日本対台湾政策的来龍去脈」『日本学論壇』2000年第4期。

17 陳奉林「中日邦交的恢復與日台“外交”關係的終結」『外交学院学報』2003年第3期、陳奉林「吉田茂執政後期的日台關係初探」『台湾研究』2003年第2期、陳奉林「關於日本與台灣關係的一些思考」『台湾研究』2002年第3期。

域はますます広範囲に及んでいる。孫雲、翟新、臧佩紅、林曉光、何妍などの研究テーマにその一端が見られる¹⁸。

中国海洋大学の管穎「回顧與展望：冷戦後の台日関係」¹⁹は近年の日台関係の発展の歴史と趨勢を総括している。同稿の視角は冷戦後の台湾当局の対日政策に立脚し、これに基づいて国際情勢に深刻な変化が生じた背景下における日台関係を観察、分析している。冷戦後の日台関係は、李登輝、陳水扁、馬英九の三つの時期を経験した。主流の民意と民族アイデンティティーに基づいて、著者は台湾当局が兩岸関係の改善と発展を政策の優先的方向にしたとしつつ、同時に日本との「特殊なパートナー関係」についても指摘している。

上海国際問題研究所の李秀石「論中日復交前日本的“兩個中国”政策：対中日関係現実的啓示」²⁰は、国民党政権の「以德報怨（徳を以て怨みに報いる）」という対日外交の失敗から、日本の対中戦略の実質と特徴を分析し、その実際の影響についても分析を行っている。著者は、日本の「二つの中国」政策は、アメリカの対中戦略の需要に順応し、戦後の経済重視、軍事軽視の国家発展総合戦略に寄与するものであったとする。また、周辺で日本経済の発展に必要な資源供給地と製品市場を構築するために、日本が台湾海峡兩岸で双方が互いに防備、敵対、競争する局面を作り出し、そこから兩岸の中国人が日本を取り合う漁夫の利を得たとしている。

冷戦期の日台関係全体の過程について、王鍵「冷戦時期日台関係的演變軌跡」²¹、「冷戦時期的日台関係」²²などは、1950年代初め、日本政府はアメリカの

18 孫雲「冷戦後の日台関係浅析」『台湾研究』2001年第1期、林曉光「戦後日本的“台湾幫”與日台関係」『台湾研究』2004年第4期、臧佩紅「佐藤内閣時期“日台”關係」『日本問題研究』2000年第4期、林曉光「吉田書簡、“日台和約”與中日關係(1950-1952年)」『抗日戦争研究』2001年第1期、何妍「“周鴻慶事件”與美日台三角關係」『当代中国史研究』2006年第5期、翟新「戦後初期日本の対華政策(1945-1952)」『上海交通大学学报(哲学社会科学版)』2002年第4期など。さらに、何達霽「20世紀70年代初期台日關係研究」廈門大学台湾研究院修士論文、2005年6月など。

19 管穎「回顧與展望：冷戦後の台日關係」『中国海洋大学学报』2012年第2期。

20 李秀石「論中日復交前日本的“兩個中国”政策：対中日關係現実的啓示」『日本学刊』2006年第1期。

21 王鍵「冷戦時期日台關係的演變軌跡」『日本研究』2007年第4期。

22 王鍵「冷戦時期的日台關係」『台湾歴史研究』第一輯、中国社科文献出版社、2013年。

意思に従って、台湾に撤退した国民党政権と「外交関係」を樹立したが、72年9月、中日国交正常化と同時に日台は「国交断絶」し、日台関係は「公式」から「民間」へ転化したとする。冷戦終結後、日台の経済関係は日増しに密接になり、政治関係もしだいに熱くなり、冷戦期全体を通して、日台関係は起伏に富み、熱くなったり冷めたりしたと見ている。著者は日本が日台関係を維持した最大の要因はその国家利益であって、対台湾政策の取捨は主にアメリカの対台湾戦略の影響を受けると同時に、中日関係対立の影響も受けたという。

3. 日台経済関係の研究

日台経済関係に関心が寄せられていることも一つの特徴である。中国社会科学院近代史研究所の王鍵『戦後日台経済関係的演変軌跡』²³は、日台経済関係を研究した著書である。本書が扱う期間は長く、第二次世界大戦終結から、祖国への台湾返還、日台経済関係の形成を経て、今世紀初めに至るまでの日台経済関係を研究している。その領域は広く、日台それぞれの経済発展、日台経済関係に対する米台関係、日台関係、兩岸関係の影響の研究を基礎として、日台経済関係全般にわたっている。著者は実証分析の方法をとり、戦後日台経済関係の歴史過程の追跡と描写を通して、また台湾の工業化や工業の高度化などの経済発展段階、日台経済関係についての論述を通して、系統的なデータと多角的な比較分析によって、客観的に戦後日台経済関係の発展情勢や各発展過程の基本的特徴を描写し、日台経済関係の交流モデルや諸特徴を総括して、日台経済関係発展の規律性を明らかにしようとしている。

中国社会科学院台湾研究所の胡石青「簡述二戦以来台日経済関係及其発展趨勢」²⁴も、戦後台湾の対外経済関係における台日経済関係の地位は、対米経済貿易関係や新進の兩岸経済貿易関係に次ぐものであって、日本は台湾の主要産業の鍵となる技術や原材料の主要な源であるだけでなく、台湾経済の発展に対して重要な影響を与え続ける国であるとする。台日は経済貿易交流によって密接な産業分業関係を形成し、台湾の諸産業は日本の技術の支えによって大きく発展した。日本もまたこれによってその産業競争力を持続させてきた。今に至っ

23 王鍵『戦後日台経済関係的演変軌跡』台海出版社、2009年。

24 胡石青「簡述二戦以来台日経済関係及其発展趨勢」『台湾研究』2004年第6期。

てもなお、台湾における日本の経済利益はさらに拡大の趨勢にあり、台湾経済の方向性に重要な影響を生じさせている。

佐藤栄作内閣期（1964–72）の日本と台湾の経済関係は、中日国交正常化前の日台公式関係の中で重要な役割を果たした。蘇州大学の苗雨茂「佐藤栄作内閣時期的日台経済関係（1964–1972）」²⁵は、日台双方の政治的・経済的背景や国際情勢を分析し、貿易・投資・融資の三方面から佐藤内閣の日台経済関係を系統的に整理した結果、その関係を戦後資本主義経済の急速な発展、資本主義国際産業構造の調整、日本と台湾それぞれの政治・経済の発展状況の現れと見ている。本論は佐藤時代の日台経済関係は実質的に「新型従属経済関係」「先進国と発展途上国あるいは地域の経済協力の新モデル」「日本経済外交の産物」であると指摘し、同時にそれが日本や台湾、日米貿易、中日関係に与えた影響について論述している。佐藤内閣期の日台経済関係の考察・分析を通して、中日関係研究の構想を広げ、政治と経済の相互影響関係についての理解を深めることができ、同時に現在の日台関係、中日関係、日米関係の参考にもできる。

また、南開大学（現在は桜美林大学）の李恩民『中日民間経済外交（1945–1972）』²⁶は、主に戦後中日民間経済交流を論述するとともに、日台経済関係についても若干の紹介を行っている。

代表的な日台経済関係の論文には、徐鎧新「戦後日本在台湾的直接投資」²⁷、何長綱「台湾與美、日貿易的特点及其發展趨勢」²⁸、高群服「台湾対日貿易逆差問題芻議」²⁹、林長華「論戦後の日台貿易関係」³⁰「論戦後の日台投資関係」³¹などがある。さらに、大橋英夫「台湾的産業昇級與日台経済関係」³²など、日本人研究者の関連論文も中国に紹介されている。これらの論文は異なる領域、異なる視野から日台経済関係を検討し、リアリティーや切迫性、

25 苗雨茂「佐藤栄作内閣時期的日台経済関係（1964–1972）」蘇州大学修士論文、2010年。

26 李恩民『中日民間経済外交（1945–1972）』人民出版社、1997年。

27 徐鎧新「戦後日本在台湾的直接投資」『現代日本経済』1986年第2期。

28 何長綱「台湾與美、日貿易的特点及其發展趨勢」『台湾研究集刊』1985年第1期。

29 高群服「台湾対日貿易逆差問題芻議」『台湾研究』1997年第1期。

30 林長華「論戦後の日台貿易関係」『台湾研究集刊』2002年第1期。

31 林長華「論戦後の日台投資関係」『台湾研究集刊』2002年第2期。

32 大橋英夫「台湾的産業昇級與日台経済関係」（汪慕恒訳）『台湾研究集刊』1993年第4期。

展望性に富んでいる。中国大陸学界の日台経済関係に関する研究の広がりを力強く推進している。

4. 日台関係の多角的観察

近年、中国の社会科学の急速な発展に伴って、日台関係についても多角的な方法によって観察・研究されるようになってきた。中国社会科学院アジア太平洋研究所の張蘊嶺主編『転変中的中、美、日関係』³³は、複雑に錯綜した中米日三国関係における台湾要因について丹念に整理・解析し、台湾は中米・中日の二国間関係にとって重要な影響力を持つだけでなく、中米日関係にとっても非常に重要であるという。台湾の中米日関係への影響は、間違いなく中米・中日関係への影響を基礎としているが、この影響の単なる重ね合わせではない。本書は、日本がこれまで一貫して台湾の戦略的位置を重視し、中国に先んじてアジア太平洋地域の指導的地位を奪取するための最も重要な前線基地として台湾を見なしてきたと指摘する。中日両国には台湾問題で歴史的、現実的に摩擦や衝突が存在しているので、「台湾要因は冷戦後の中日関係における重要な不信任要因であり、その影響は決して過小評価できない」と見ている。

王鍵『戦後美日台関係史研究（1945-1995）』³⁴は、米日台三角関係について歴史的考察を行っている。本書が対象とする時期は50年の長きにわたり、その領域は戦後国際関係史、冷戦史、台湾現代社会のプロセスについての歴史研究にまたがっている。孫立祥『日本右翼勢力與“台独”：台湾問題中的日本因素研究』³⁵は、日本の右翼勢力と台湾独立の相互作用について長期的考察を行っている。著者は、日本の右翼勢力の持続的支援と介入が、「台湾独立」勢力が盛んに台湾海峡問題でくすぶり続ける主要な外部要因の一つを作り出しているとする。日本の右翼勢力が「台湾独立」を支持した歴史過程を系統的に整理するとともに、支援に至った真の原因を全面的に分析して、日本の右翼勢力の影響を排除しその作用を弱めるための具体的な対策にまで踏み込んだ検討を行っている。

33 張蘊嶺主編『転変中的中、美、日関係』中国社会科学出版社、1997年。

34 王鍵『戦後美日台関係史研究（1945-1995）』九州出版社、2013年。

35 孫立祥『日本右翼勢力與“台独”：台湾問題中的日本因素研究』人民出版社、2012年。

日台関係を多角的に観察した著書としては他に、復旦大学の任曉他『中美日三辺関係』³⁶、中央党校の劉建飛『中美日戦略関係演変（1899-1999）』³⁷、上海国際問題研究所の廉徳魂『美国與中日關係的演變』³⁸、南開大学の趙学功『戦後美国的東亜政策』³⁹などがある。代表的な学術論文には、張也白「対美中日相互關係的一些認識」⁴⁰、唐永勝「中美日三角關係與中国戰略姿態的選択」⁴¹、馮昭奎「走向平衡的三角關係：關於亞太地区大国關係的思考」⁴²、李長久「不平衡的中美日關係」⁴³、時殷弘「中美日“三角關係”：歷史回顧・实例比較・概念辨析」⁴⁴、賈慶国「中美日三国關係：对亞洲安全合作的影響」⁴⁵などがあり、これらの研究成果はいずれも中米日三角關係下の日台関係について重点的に関心を払っている。

2000-08年の民進党の政権期間、兩岸関係は厳しく対峙し、日台関係は異常に熱くなった。馬千里「論民進党執政時期的日台關係」⁴⁶は、民進党当局執政期間の対日關係工作の重点は安全關係と政治關係の昇格にあり、經濟關係を基礎としていたと指摘する。2008年3月22日、馬英九が高得票で台湾地域の最高指導者に当選したことは、日台關係が新たな發展段階に入ったことを予見していた。民進党当局執政期間の日台關係の「不正常」な發展、また中日の間でたびたび誘発された矛盾や葛藤によって、馬英九の当選はその後の日台關係の發展に新たな変数を導入する結果となった。

当時、日本も民主党政権の時期にあたり、鳩山由紀夫内閣が積極的に「東アジア共同体」を推進して、アメリカ軍の沖縄撤退を要求したので、一時日米関

36 任曉・胡泳浩『中美日三辺關係』浙江人民出版社、2002年。

37 劉建飛『中美日戰略關係演變（1899-1999）』中央文獻出版社、2001年。

38 廉徳魂『美国與中日關係的演變』世界知識出版社、2006年。

39 趙学功『戦後美国的東亜政策』天津人民出版社、2002年。

40 張也白「対美中日相互關係的一些認識」『美国研究』1996年第3期。

41 唐永勝「中美日三角關係與中国戰略姿態的選択」『戰略與管理』1997年第1期。

42 馮昭奎「走向平衡的三角關係：關於亞太地区大国關係的思考」『當代亞太』1998年第1期。

43 李長久「不平衡的中美日關係」『世界經濟與政治』1998年第10期。

44 時殷弘「中美日“三角關係”：歷史回顧・实例比較・概念辨析」『世界經濟與政治』2000年第1期。

45 賈慶国「中美日三国關係：对亞洲安全合作的影響」『國際政治研究』2000年第2期。

46 馬千里「論民進党執政時期的日台關係」『重慶科技学院学報』2010年第5期。

係の「不安定」を誘発するに至った。同時に中日関係の親密さが増したことにより、日台関係の発展を制約する圧力もそれに応じて増大したが、菅直人内閣になって、日米関係はある程度回復し、再び日台関係に新しい要因が注入される。王鍵「対近年来日台関係走向的帰納與預測」「馬英九執政時期日台関係之演變」⁴⁷などは、次のように指摘している。現実の戦略的利益を基礎に樹立された日台関係には、より多くの不安定性、不確実性がある。客観的に見れば、冷戦期およびその終結後の今日、日台関係が日米台三角関係に従属する構造に何ら大きな変化はない。中日関係の大構造も日本の台湾海峡政策の調整に影響を与え続けている。馬英九執政期間、日台関係の外部環境に大きな変化はありえず、中日関係にも根本的な突破口があるはずはない。すべてが日米関係に実質的な逸脱がないのと同じである。したがって、日台関係が低調で平穏な発展時期に入ったのもまた歴史的必然である、という考えである。その他、軍事科学院の江新鳳「日台関係明送秋波」、中国社会科学院日本研究所の呉万虹「日台関係の新走向」「日台関係の若干新動向」⁴⁸なども、日本が台湾独立勢力との関係を絶えず強化していることに対して憂慮を示している。

陳奉林「国内外戦後日台関係研究綜述：以中国大陆、台湾和日本為中心」⁴⁹、中国社会科学院当代中国研究所の葉張瑜「近年来關於中日關係中台湾問題的研究述評」⁵⁰などは、中国大陆の学界における戦後日台関係史の研究動向について全面的な総括を行っている。

中国大陆の日台関係史研究の動向については、おおよそ以下の特徴をまとめることができる。第一に、研究テーマが日々増え、研究領域も絶えず広がって、学術研究はしだいに以前の狭い枠組みを打破し、重大な現実的意味のある問題に対する探求に積極的に関心が向けられるようになった。第二に、研究構成から見れば、マクロの全体分析を重視するだけでなく、ミクロ問題の研究にも

47 王鍵「対近年来日台関係走向的帰納與預測」『中日關係史研究』2011年第3期、王鍵「馬英九執政時期日台關係之演變」『大連大學學報』2010年第4期。

48 江新鳳「日台關係明送秋波」『世界知識』2004年第23期、呉万虹「日台關係の新走向」『日本學刊』2005年第2期、呉万虹「日台關係の若干新動向」『世界知識』2010年第5期など。

49 陳奉林「国内外戦後日台關係研究綜述：以中国大陆、台湾和日本為中心」『台湾研究集刊』2001年第3期。

50 葉張瑜「近年来關於中日關係中台湾問題的研究述評」『当代中国史研究』2003年第1期。

重点が置かれている。第三に、学問分野を越えた多領域の研究方法が採用されるようになった。例えば、中米日三角関係あるいは米日台三角関係など多角的な視野で日台関係を観察し、その学術研究の発展を推進している。第四に、従来の日台関係研究には、依然として不均衡な現象が存在している。例えば、日台関係の研究については多くが政治・経済関係に集中し、日台の文化交流や軍事交流などの研究にはあまり関心が払われていない。第五に、大陸の学界の日台関係史の研究にかんがみて、日本研究と台湾研究の二領域に分散し、対日事務や対台湾事務もまた外交部と台湾事務辦公室の二系統に帰属している。

日本研究者は日本の対台湾政策には通じているが、台湾社会の内情には通じておらず、台湾研究者は台湾社会の内情には通じているが、日本の社会文化に通じていないばかりか、日本語資料を読むこともできない。今後、両者が意思疎通を深め、積極的に協力し、効果的に整合させることを期待する。

(翻訳：小都晶子)

近代日中関係史研究の新しい視点 ——黄自進『蒋介石與日本』を中心に

高 文勝

はじめに

近代日中関係史を読み解くには、蒋介石（1887-1975）への理解を避けては通れない。なぜなら、近代中国に、蒋介石ほど日本に深い関わりを持った政治家はいないからである。

蒋介石は1906年、19歳で日本に留学し、日本の軍学校で3年、士官候補生として高田連隊で1年実習するなど青年期の4年を日本で過ごして、その後も数回訪日している（最後の訪日は1927年9月）。このような日本体験と日本への特別な思いは、彼の人生と彼の抱く日中関係のビジョンに大きな影響を与えた。

孫文の後継者として中華民国の統一を成し遂げた蒋介石は、国民政府と中国国民党の最高指導者として、長らく中国の内政と外交に君臨してきた。その彼は日中関係についてどのような将来像を持ち、どのような対日外交策をとり、今日の日中関係に如何なる示唆を与え、教訓をもたらしたのかを明らかにすることは極めて重要な課題である。

しかし、蒋介石と日本との関係に対する評価は難しい。彼の対日感情が多面的であるため、蒋介石研究だけでなく、国民党史や中国政治史の研究も深く関係しているからである。ゆえに、その評価は政治的立場によって極端になりやすいし、時代の変化にも大きく左右されている。

近年は、中国大陸と台湾の政治状況の変化、兩岸関係の進展、新たな史料公開（とりわけ、2006年の米国スタンフォード大学フーヴァー研究所所蔵「蒋介石日記」の公開）に伴って、より詳細な検討が可能となり、政治的立場を離れた実証的研究も着実に進んでいる。その代表的研究者が黄自進氏である。

黄氏は現在、台湾の中央研究院近代史研究所研究員であり、近代日中関係史と近代日本政治思想史の専門家である。氏は日本留学の経験（慶応義塾大学法学研究科にて法学博士号を取得）を持つ知日派で、日中の友好と相互理解を熱心に推進している。日本留学中には、吉野作造の中国観を研究したことがある。近年、蒋介石と日中関係とのつながりに重点を置き、関係著書と論考を数多く

刊行し、台湾国史館所蔵の蒋介石日記を利用して『蔣中正總統五記』も編集している。その中で特筆すべきは、黄氏の日本語著書『蒋介石と日本一友と敵のはざままで』（武田ランダムハウスジャパン、2011年）であり、スタンフォード大学の「蒋介石日記」等の史料を基礎に、蔣の視点を軸に近代日中関係史を構築している。

これらの研究成果を踏まえてさらに高い学術レベルに達したのが、黄氏の中国語著書『蒋介石與日本：一部近代中日關係史的縮影』（蒋介石と日本：近代日中關係史の縮図）（台北：中央研究院近代史研究所、2012年）である。本書は、日本留学から第二次世界大戦後に至るまで、蔣の軍事的、政治的経歴を詳細に分析し、日本に対する敵・味方意識の変化、中華民国と日本の外交関係を検証したものである。従来の説と異なる蒋介石像を提示し、日中関係史に新たに貢献したため、台湾では2013年度（第48回）中山學術文化基金会の人文・社会科学分野の學術著作賞と、2014年度（第3回）中央研究院の人文・社会科学分野の學術専門書賞を受賞している。

以下、本書の内容を概観し、その意義を略述してから、私見を若干提起したい。

1. 概要

本書は6章で構成され、序章と結論が付されている。序章では、まず蒋介石に関する先行研究と問題点を紹介する。第一章「人格形成と日本一学習、認知、拠り所」では、蔣の日本体験を、留学期・青年期・壮年期に分けて論じる。日本留学が蔣の革命参加のきっかけとなったこと、日本の近代思想に啓発を受け、孫文の日本支援者の人脈を受け継いで日本を再起のための基地としたこと、日本人が孫文以上に自分を高く評価したことに自信を強めたこと、などについて論述する。そして、日本での軍隊体験と長期にわたる日本観察の結果、S・スマイルズの格言「天は自ら助くる者を助く」を信奉した蔣が、中国は日本を近代化の手本として学ぶべきだという信念を生涯にわたって中国人に訴え続けたことを詳述する。

第二章「北伐期における友から敵への変化」は、北伐戦争（1926–28）による中国統一の過程で、蒋介石にとって中国共産党と日本政府が最大の敵となったことに言及する。蒋介石が1927年4月に上海で反共クーデターを起こしたのは日本政府の勧告を受け入れたことによる。日本の対中策には地域優先順位（第一は満蒙地域、第二は華北地域、第三は華中地域）があり、日本の支援には、

蔣の勢力を華南・華中地方に封じ込める狙いがあり、三度にわたる山東出兵もそのためだった、と著者は見る。1928年5月の済南事件が日中関係の転換点となり、イギリスを主敵としていた中国のナショナリズムは反日に向けられ、蔣も日本に警戒心を抱き、対日関係が友好から敵対へと変化したと分析する。

第三章「九一八事変と『不抵抗政策』」は、「不抵抗政策」の由来と満州事変後の蔣介石の対応を論じる。蔣介石は、緊迫した状況下で、関東軍と国民政府との対立を回避することは不可能だが、日本政府も軍部も中国と戦争するつもりはないし、日中衝突は避けられると判断して、緊張緩和のために二つの方策を講じた。一つは、反共政策をとり、日本と軍事協力を結び、陸軍中央との関係改善を図ろうとした。もう一つは、関東軍の挑発に「不抵抗政策」をとった。この「不抵抗政策」に対して、東北の張学良も異議はなかった、と分析している。

黄氏によれば、蔣介石が「不抵抗政策」をとったもう一つの理由は、国民政府が近代国家としての体制を整えていなかったからであった。満州事変直前の中国では、南京と広州に二つの国民政府が存在し、南京政府の内部には満州の張学良の勢力が、外部には共産党や各自の地域を持つ軍閥があり、諸政治集団の間では満州事変に対する認識も対応も一致していなかった。そのため、蔣は「不抵抗政策」をもって日本との全面対決を避け、時間を稼ごうとしたわけで、「絶交せず、宣戦せず、講和せず、締約せず」という蔣の4原則は、絶対的な無抵抗と領土放棄を意味したものではないと指摘する。

第四章「華北危機と『安内攘外』」では、満州事変後の国民政府の「安内攘外」政策に焦点を当てる。これはすなわち「西南地方の経営」と「日ソ開戦」である。前者は、国民政府の権力が及ばない西南地方を掌握して抗日戦争の後方基地としたことであり、後者は、日本が米・ソとの摩擦を解決しないまま中国に大軍を派遣することは不可能なため、中国と本格的な戦争を行う前に、日ソ戦争が勃発するだろうと期待されたことである。蔣は「敵の敵は味方」と思い、「反共」を掲げ、軍事行動以外の手段で日本軍の挑発に対応し、華北地方での主権を図ろうとした。この「安内攘外」政策によって、共産党への打撃、中央政府の勢力拡大、対日戦争の回避という「一石三鳥」の効果が得られた、と著者は論じる。

第五章「全面戦争への対応」では、日本軍の戦略を「軍事決戦期」「政治主導期」「辺境封鎖期」「太平洋戦争期」の4期に分けて説明し、蔣介石の対応を、政略的・戦略的と、軍事的という側面から分析する。政略的・戦略的対応

については、日ソ摩擦と日本の反共・恐共心理を利用し、中ソ関係、国共関係、日中関係、汪兆銘政権との関係が絡み合う複雑性をうまく操り、日本軍に戦略の見直しと不断の調整を迫り、中国の抗日戦争に有利な状況を作り出した、と論じる。一方、軍事的対応とは、「上海出撃」に続いて「華中保衛」（武漢護衛）、「以緩応急」（緩をもって急に應じる）、「苦戦待変」（苦戦をもって変化を待つ）などの諸策であった。黄氏は、日中戦争において中国は軍事的に日本に戦勝したわけではないが、勝利へ導いた要因の一つは蒋介石の正しい戦略だったと説明する。

第六章「戦後配置と『以德報怨』」では、「徳を以て怨みに報いる」という蒋介石の戦後対日政策の内実とその時代背景を論じる。その政策は彼の対日態度を反映し、最初は具体策ではなかったが、のちに日本への寛大政策の代名詞となっている。この政策の主な内容は、天皇制維持への支持、日本分割統治への反対、中国在留日本人の早期帰国の実現、対日賠償請求権の放棄である。賠償放棄は蒋介石の本意ではなかったが、戦後日本の早期復興に大きな役割を果たし、東アジアの国際政治にも大きな影響を及ぼしたと論じる。つまり、蒋介石が日本と反共統一戦線を築き、日本の復興を促進し、米国の対ソ封じ込め策を成功させ、日本の持つ「反共要塞」の役割を可能にしたからこそ、台湾に撤退した後も、態勢を整えて中共との対峙を継続できたと論じる。つまり、「以德報怨」は、日中和解に寄与するとともに、最大敵の中国共産党やソ連に対抗するための政策であったという。

2. 本書の意義

本書の最大の特徴は、「蒋介石日記」に依拠するとともに、日本の関係史料を多く利用し、蒋介石の考えを深く分析したことである。特に次の五つがオリジナルな論点として挙げられる。

一つ目は、蒋介石像の複雑性と、親日派ゆえに抱えたジレンマに関すること。中国は日本に学ぶべきと主張した蔣は、日中戦争期でも日本の武士道精神を高く評価し続けるなど、文化的にはアジア主義者だったと著者は見ている。しかし、日本の「裏切り」は、知日派・親日派のジレンマと悲哀を物語ると指摘する。

二つ目は、全書を貫く重要な鍵観念である反共に関すること。済南事件後、日本を敵に回したが、対日・対共の同時戦争を避けるために、反共を掲げて日

本と協力を図り、日中戦争の過程でも反共を旗印に日本との関係を維持した。対日戦後処理も反共・反ソという立場からのものだったと指摘している。

三つ目は、最も議論を呼ぶ蒋介石の「不抵抗政策」と「安内攘外」に関する解釈である。いずれも近代国家体制の不備を背景に、共産党の殲滅、中央政府の勢力拡大、対日衝突の回避を企図したことだという。

四つ目は、満州事変後、東北地方の速やかな回復は関東軍の綿密な計画だけではなく、関東軍に協力した中国人が数多くいたことに関係するという指摘である。東北地方の政界と実業界の多くの有力者が旧張作霖政権を支え、関東軍の「新国家建設計画」に加わり、「満州国建国」の礎の一部をなしていたと分析する。

五つ目は、従来の説と違い、対日賠償請求権の放棄は蒋介石の「以德報怨」政策の一部に過ぎず、その政策の主な内容は天皇制の維持、日本分割の阻止、日本人の早期帰還にあったと論じた点である。

3. 若干の疑問

本書には説得力の弱い部分もあるが、著書全体の価値を損なうものではないことは言うまでもない。ここで私見を述べさせていただく。

第一に、著者は蒋介石を先見の明のある政治家として、その対日戦略を高く評価している。だが、「敵の敵は味方」という方針の下での「西南地方の経営」と中央勢力の拡大、戦後の「対日政策」は戦術的には成功したかもしれないが、戦略的に成功したとは言えないだろう。満州事変を予見できなかったことや、過大に期待した日ソ戦争が勃発しなかったことなどが示すように、蒋介石の国際情勢の判断に常に偏ったものがあることは否めない。

第二に、蒋介石の対日政策が日本の対中政策にどのような影響を与え、日本が蒋介石の対日の意図をどの程度まで把握していたかについてはいまだ分析されていない。

第三に、著者は蒋介石の日中友好論や日中提携論を高く評価するが、その本質は、日中両国民に向けられたというよりも、中国共産党とソビエトに敵対して政権維持を図るためであり、日中友好・和解にならないばかりか、皮肉にも政権自体が日本に見捨てられる結末を招いたのである。為政者は、政権維持を国益と両立させるべきだが、蒋介石は反共による政権維持を最優先し、反共が

日本の国益にもなると確信した。一方、日本は反共よりも日本の国益を優先するのが常であった。蔣の対日関係において悲劇を免れなかった原因の一つはここにあるのではないかと思う。

第四に、著者は「敵か、友か」と題する蔣介石の文章を引用し、満洲事変について、中国側にも責任がある、すなわち、国民政府による「革命外交」は関東軍を刺激し、満洲事変を誘発したという見解を示している。これは『昭和の動乱』¹と『重光葵外交回想録』²における重光葵の主張と同じである。事変後の事態推移を見る限り、たとえ日本側の主張する東北地方の商租権が解決されても、満洲事変ひいては日中戦争が本当に回避できるものであったかは非常に疑問である。

おわりに

2006年以來、スタンフォード大学の「蔣介石日記」を活用した研究は主流となっている。日本でもそうした研究成果が続々と発表されている。例えば、家近亮子『蔣介石の外交戦略と日中戦争』（岩波書店、2012年）では、蔣日記を参照しながら、日中戦争期における蔣介石の外交指導を評価し、蔣介石解釈を困難にする複雑な要因を「多面体のプリズム」と表現している。山田辰雄・松重充浩編著『蔣介石研究—政治・戦争・日本』（東方書店、2013年）では、蔣介石と日中関係を実証して、新説を試みている。他に、野嶋剛『ラスト・バタリオン—蔣介石と日本軍人たち』（講談社、2014年）は、戦後台湾の政治に大きな役割を果たした「白団」の人物群を通して、蔣介石の対日観に関する理解を深めている。上記の諸書は、近代日中関係史の研究に新しい観点を提供し、今日の日中関係にも示唆を与えているが、ここでは詳述しない。

蔣介石研究を通して日中関係史を見直すにはさらに課題がある。一つは、「蔣介石日記」には後世を意識して書かれたところがあるため、それと蔣の大量の演説と文書をいかに総合的に利用するべきか、という点である。また、研究者の政治的バイアスがどのように蔣介石と日中関係との研究に影響しているかを解明する必要もある。今後、新史料を利用した客観的、実証的な研究を期待し続けたい。

1 重光葵『昭和の動乱』中央公論社、1952年。

2 重光葵『重光葵外交回想録』毎日新聞社、1953年。

魯迅の翻訳に関する研究の現状¹

陳 紅

はじめに

魯迅の翻訳は、魯迅研究において極めて重要な課題である。魯迅の翻訳とは、魯迅が翻訳したものと、魯迅の作品が外国語に翻訳されたもの2通りに分けられる。本論で取り上げるのは前者の方である。

前者はさらに3種類に分けられる。一つは魯迅が外国語作品を中国語に訳したものであり、魯迅の翻訳の中で最も多い。二つ目は、魯迅自身が外国語で書いたのを中国語に訳したもので、全部で9篇あり、いずれも『魯迅日文作品集』の中に収められている。三つ目は魯迅が自身の中国語作品を外国語に訳したもので、「兎と猫」という1篇だけある。ここでは一つ目の、魯迅が外国語作品を中国語に翻訳したものを対象に検討していきたいと思う。

魯迅は1903年から1936年までの33年間にわたって翻訳事業に取り組んでいる。合わせて14カ国、106名の作家の216篇の作品を中国語に訳しており、総字数は300万字にも上るといわれる。

その中で日本語から訳したものは175篇で、全訳本の約8割を占めている。日本語の原本から訳したものは96篇で、他言語作品の日本語訳から中国語に翻訳したものは79篇である。その他に、ドイツ語から訳した作品が29篇、英語から訳した作品が2篇、底本がまだわかっていないものが10篇である(表1)。

表1 魯迅が翻訳した作品の概況

底本言語	直接訳	間接訳	不明	件数
日本語	96	79		175
ドイツ語	2	27		29
英語	0	2		2
合計	98	108	10	216

1 本研究は、浙江省哲学社会科学重点研究基地浙江工商大学東亜研究院項目(14ZDDYZS04YB)の助成による。

魯迅の翻訳に関する研究は1920年代から現在に至るまで、およそ100年近くにわたっている。中国においてこれらの研究は次のような視点から行われてきた。

1. 訳本について

訳本の考察に関する研究には、大体次のような二つの視点が見られる。一つは、魯迅が具体的にどのような本を訳したのかについてである。魯迅が翻訳し始めた頃は、彼の翻訳理念はまだはっきりしていなかったので、「斯巴達之魂」(「スパルタの魂」)などのような作品は著作なのか、訳本なのかかわかりにくい。だが、そのような考察は、1938年出版の『魯迅全集』や1958年の『魯迅訳文集』、2005年の『魯迅全集』、2009年の『魯迅訳文全集』等では既に厳密に行われ、戈宝権らは「哀塵」などの作品の底本を考察している²。現在、魯迅の翻訳だったかどうかについてはほぼ確認されている。

もう一つは、魯迅の翻訳した作品の底本についての考察である。一部は既に突き止められている。上記の『魯迅全集』などの資料においては、底本の一部が紹介されている。また、李允経ら研究者が「落谷虹児の詩」等の底本を考察している³。しかし、底本についてはいまだはっきりしないところも多い。例えば、アンドレエフの『書籍』や『黯澹的煙靄里』の底本は日本語訳だったのか、ドイツ語訳だったのかは不明である。『青湖遊記』『波蘭姑娘』『生活的演劇化』『關於劇本的考察』『現代電影与有産階級』などの底本もまだ明らかにされていない。また、魯迅の訳本の底本を系統的にまとめた資料もない。

前述のように、魯迅の訳本の約8割は日本語の原本あるいは日本語訳を底本としたものである。しかし、既に究明された魯迅の訳本の底本に関する情報はほとんど中国語で紹介されているので、それらを基に日本語の底本を見つけるのは難しく、魯迅の研究者にとっては大変不便である。底本に関する情報が不足しているために魯迅研究に悪い影響をもたらしている例がよく見られる。例えば、『魯迅翻訳文学研究』では、ジュールス・ヴェルネ著の『地底旅行』の日本語訳の底本を朝比奈弘治の訳本としている⁴。しかし、それは間違いで、実

2 戈宝権「關於魯迅最早の兩篇訳文—「哀塵」、「造人術」」『文学評論』1963(4)、133-134頁。

3 李允経「魯迅和落谷虹児」『魯迅研究動態』1987(3)、21-23頁。

4 吳鈞『魯迅翻訳文学研究』濟南：齊魯書社、2009年、115-130頁。朝比奈弘治訳『地底旅行』は1997年に岩波書店から刊行。

際は三木愛華と高須治助の共訳⁵によるものであった。また、『魯迅研究月刊』に発表された「從＜亜歴山大・勃洛克＞三個訳本看魯迅的思想矛盾及整合」⁶では、「亜歴山大・勃洛克」（アレクサンドル・ブローク）の底本そのものを間違えている。この論文は魯迅の訳本と、韋素園・李雲野の共訳による訳本と、王凡西が訳した訳本を比較しながら、その相違点を見出し、またその理由について検討している。しかし、そこに問題がある。それは、三つの訳本の底本がそれぞれ違うからである。魯迅の訳本は日本語訳を底本にしてできたもので、他の二つの訳本は英語訳から訳したものである。魯迅の使用した訳本の底本が日本語で明記されていれば、そのような間違いは避けられたことだろう。

2. 訳本の特徴について

魯迅の訳本の特徴についての研究は主に次の2種類に分けられる。一つは、訳本を通して魯迅の翻訳姿勢を紹介するものである。例えば、「關於魯迅翻譯武者小路實篤劇作＜一個青年的夢＞的態度与特色」「＜羅生門＞魯迅訳文探析」などは、魯迅が原作の内容を削除する理由等について実例を挙げながら検討している⁷。

もう一つは、訳本自体の特徴を紹介するものである。例えば、『魯迅傳統漢語翻譯文体論』は、文体という視点から留学時代の魯迅の訳本の特徴を分析し、初期の魯迅の翻訳文体の変遷やその理由を検討している⁸。『魯迅作品中的日語借詞』は言語学という視点から、『月界旅行』や『地底旅行』が日本語からどんな影響を受けてきたかについて分析している⁹。また、『魯迅的欧化文字』は、近代化された中国語に注目し、魯迅の訳本を考察している¹⁰。

5 三木愛華・高須治助訳『地底旅行：拍案驚奇』東京：九春堂、1885年。

6 楊姿「從＜亜歴山大・勃洛克＞三個訳本看魯迅的思想矛盾及整合」『魯迅研究月刊』2014(4)、24-33頁。

7 楊英華「關於魯迅翻譯武者小路實篤劇作『一個青年的夢』的態度与特色」『魯迅研究月刊』2004(4)、66-71頁；何家蓉「『羅生門』魯迅訳文探析」『解放軍外國語學院學報』2009年(3)、83-87頁。

8 李寄『魯迅傳統漢語文体論』上海：上海訳文出版社、2008年。

9 常曉宏『魯迅作品中的日語借詞』天津：南開大學出版社、2014年。

10 老志鈞『魯迅的欧化文字—中文欧化的省思』台北：師大書苑、2005年、376-381頁。

これらの研究は素晴らしい成果を上げていると同時に、問題点も併せ持つ。例えば、張全之が指摘したように、上記の『魯迅伝統漢語翻訳文体論』は底本の文体を抜きに、訳本の文体だけを考察しているため、正真正銘の翻訳文体論とは言い難く、その結論もさらに検討する余地があるように思われる¹¹。

また、『月界旅行』の魯迅の翻訳姿勢についての研究にも問題がある。例えば、「幻興中華：論魯迅留日時期之科幻小説翻訳」「翻訳家魯迅的“中間物”意識」「翻訳与文学之間」「翻訳家魯迅」などは、魯迅が『月界旅行』を翻訳する際に、清末の翻訳家林紓のように抄訳の姿勢をとったと主張する¹²。一方、卜立德の「魯迅的兩篇早期翻譯」は全く違う結論を導き出している。卜立德によると、魯迅は『月界旅行』の底本を抄訳せず、誤訳もほとんどないという¹³。このような大きな違いが出たのは、抄訳とされた論文が『月界旅行』の底本を取り入れておらず、卜立德は魯迅の翻訳の底本ではない英語訳を参考にしたからである。『月界旅行』に対するそれぞれの意見の是非を問うには、底本である井上勤訳『九十七時二十分間月世界旅行』（大阪：三木佐助、1886年）を視野に入れなければならないだろう。

3. 翻訳観について

魯迅の翻訳観に関する研究は、魯迅の翻訳観とはどういうものか、また、なぜそのような翻訳観を持つに至ったのかという二つの視点に集中している。翻訳観の内容に関する研究では、主に直訳と「硬訳」との関係に重点が置かれてきた。「能够“容認多少的不順”？」「論魯迅的“直訳”与“硬訳”」などがその代表的な論文である¹⁴。双方とも、魯迅が「硬訳」の翻訳姿勢をとったのは中国語をよりよくするためだと主張している。前者は、魯迅の直訳を「逐次訳」

11 張全之「冷僻的選題，新穎的解析—評李寄『魯迅伝統漢語翻訳文体論』」『魯迅研究月刊』2009(1)、83-86頁。

12 李広益「幻興中華：論魯迅留日時期之科幻小説翻訳」『漢語言文学研究』2010(4)、88-93頁；崔峰「翻訳家魯迅的“中間物”意識—以魯迅早期翻譯方式的變換為例」『中国翻譯』2007(6)、14-18、95頁；王宏志「翻訳与文学之間」南京：南京大学出版社、2011年、276-277頁；王友貴『翻訳家魯迅』天津：南開大学出版社、2005年、7頁。

13 卜立德「魯迅的兩篇早期翻譯」『魯迅研究月刊』1993(1)、27-34頁。

14 王宏志「能够“容認多少的不順”？—論魯迅的“硬訳”理論」『魯迅研究月刊』1998(9)、39-50頁；陳福康「論魯迅的“直訳”与“硬訳”」『魯迅研究月刊』1991(3)、10-17頁。

と見なし、あまりにも「逐次訳」にこだわるあまり、かえって文章がごつごつして読みにくくなる場合は「硬訳」になってしまうと説明する。

一方、後者は、魯迅は文芸理論のような作品を訳す場合にだけ、「硬訳」の姿勢をとったと述べている。両者とも一理あるように見えるが、底本を取り入れて考察していないため、少し説得力が足りないように思われる。

魯迅の翻訳観の出所に関する研究成果はいくつもあるが、いずれもヨーロッパや中国の視点から考察されてきた。例えば、アメリカの翻訳理論家ヴェヌティは *The Scandal of Translation* で、ドイツのゲーテやシュライアマハーが魯迅の翻訳観の形成に影響を与えたと主張している¹⁵。また、『中国翻訳文学史』や「訳経意識：魯迅的直訳法」によれば、魯迅の直訳理念は「訳経意識」と深く関わっているという¹⁶。しかし、これらの問題について見逃してはいけないのは、日本と魯迅の翻訳との関わりである。魯迅は日本に留学した翌年（1903年）から翻訳を始め、日本で『月界旅行』『地底旅行』『域外小説集』などの訳本を出版した。ただし、1906年出版の魯迅訳の「地底旅行」は抄訳であり、1907年と1908年に書いた「摩羅詩力説」「人之歴史」などは、まだ著作なのか翻訳なのか明らかにされておらず、1909年出版の「域外小説集」は忠実な直訳である。つまり魯迅は日本に留学した時、抄訳から直訳調の全訳へと翻訳の理念を変えたのである。したがって、魯迅の翻訳観の形成を考察するには、魯迅が留学した当時の日本人の翻訳観を見逃してはいけないのである。

4. 翻訳から思想形成へ

これに関する研究成果は数多く見られるが、最も多いのは魯迅と魯迅が訳した外国の作家との対照研究である。また、「魯迅所撰訳文序跋之於俄蘇文学的批評概説」「從「訳文序跋」看魯迅的比較文学観及び方法論意義」などは、魯迅の訳本の序跋と外国文学の関係を論じており¹⁷、いずれも魯迅が序跋で外国文学に対してすばらしい見解を述べていると主張する。

15 Venuti L. *The Scandal of Translation*. London and New York: Routledge, 1998, pp. 178-89.

16 孟昭毅、李載道『中国翻訳文学史』北京：北京大学出版社、2005年、325頁；李文革「訳経意識：魯迅的直訳法」『求索』2005（11）、181-182、121頁。

17 高文波「魯迅所撰訳文序跋之于俄蘇文学的批評概説」『文艺理論与批評』2011（2）、101-108頁；李卓文「從「訳文序跋」看魯迅的比較文学観及其方法論意義」『华中師範大学学报（哲社版）』1995（6）、104-107頁。

しかし、魯迅の序跋はすべて本人が考え出したものだとは言えず、この問題に触れる論文はいまだ見当たらない。「比亚兹莱」的中国旅程」と「略参己見」：魯迅文章中的“作”、“訳”混雑現象」では、「<比亚兹莱画選>小引」と『凱綏・珂勒惠支版画選集』序目』の出所を考察しているが、2篇とも翻訳の序跋に関する研究ではない¹⁸。

魯迅の翻訳活動を紹介した成果は多くある。例えば、『魯迅翻訳研究』は魯迅の翻訳を三つの時期に分けて、それぞれの代表作を紹介している¹⁹。魯迅の翻訳は非常に多く、すべての訳本について考察することはまだできていない。これは、今後魯迅の翻訳を研究するうえで極めて重要な課題と言えよう。例えば、魯迅がなぜ長谷川如是閑の『聖野猪』を翻訳したかについてはまだ誰も触れていないようである。実は『聖野猪』は、当時の時代背景や魯迅の生活と深く関わっており、当時の魯迅の考えを読み解くには大切な資料である。

5. 私の研究

以上、中国における魯迅の翻訳研究の現状と問題点をまとめてみた。魯迅の翻訳に関する研究は、魯迅の文学の研究ほど盛んではないようであるが、近年、孫郁などの呼びかけによって、徐々に注目を集めるようになってきた。研究の内容に関してはそれぞれに傾向があり、その多くが底本を取り入れずに行われている。

私は先行研究を踏まえて、博士学位論文「魯迅の翻訳に関する研究—日本語の底本を元に」において、次のようなことを試みた。まず、「日本語の底本についての一考察」という一章では、前述の『青湖遊記』『波蘭姑娘』などの訳本も含め、魯迅が日本語から翻訳した作品の底本を系統的に整理し、インデックスを作成した。アンドレエフの『書籍』については、その底本が日本語訳『書物』（中村白葉訳、叢文閣、1920年）であることも解明した。

また、「魯迅の翻訳の特徴」という章では、今まで意見が分かれていた『月界旅行』における魯迅の翻訳の姿勢について、底本と魯迅訳とを照らし合わせ

18 徐霞「“比亚兹莱”的中国旅程—魯迅編《比亚兹莱画選》有關文化、翻譯、芸術的問題」『魯迅研究月刊』2010(7)、4-24頁；黄乔生「“略参己見”：魯迅文章中的“作”、“訳”混雑現象—以《<凱綏・珂勒惠支版画選集>序目》為中心」『魯迅研究月刊』2012(4)、17-28、34頁。

19 顧鈞『魯迅翻訳研究』福州：福建教育出版社、2009年。

て、その訳し方を研究し、当時の清末の翻訳家である林紘のような抄訳の姿勢との共通点と相違点をまとめることができた。

さらに「魯迅の直訳観と日本」という章では、魯迅が留学していた当時の日本人の翻訳観を紹介し、特に、森田思軒と二葉亭四迷が魯迅の直訳観に与えた影響を分析している。また、訓読や和文漢読法、日中言語比較という視点からもこの問題について論じている。

最後に「日本語底本を元に見た魯迅の文学翻訳」という章では、魯迅の訳本の序跋の出所を考察している。魯迅の訳本の序跋に書かれた一部の内容は、日本語の文学著書や日本人訳者が書いた「解題」や「序」などから書き写したものの、あるいは書き直したものであることを証明した。また、魯迅の留学時の生活状況や出版物、時代背景なども視野に入れて考察し、『聖野猪』²⁰の中国語訳は、1924年冬から1926年に及ぶ北京女子師範大学の学生運動「女師大風潮」と深く関わっており、許広平をはじめとする北京女子師範大学の学生会を支持する行動の一環だったことを指摘した。

以上、魯迅の翻訳に関しては、拙論によってほんの一部は解決されたが、研究課題はまだたくさん残されている。例えば、『我独自行走』他、数篇の底本はいまだ不明である。『聖野猪』の他に、まだ翻訳の意図がわからないような訳本がいくつもある。また、ドイツ語訳の底本を基に魯迅の翻訳を考察することもいろいろできるはずだが、ドイツ語に通じていないため、引き続き日本語の底本を利用した研究を徹底させ、今後の課題としたい。

20 「聖野猪」は1925年6月1日に『旭光旬刊』で発表されたとされているが、私の考察では1925年5月26日に既に完訳されている。

東アジア（日中韓）比較文学研究という視座

寶 新光

はじめに

私が初めて来日したのは2010年10月である。中国山東大学修士課程に在籍中の私は交換留学生として神戸大学に来たのである。1年間の交換留学を終えた私は、2011年9月に帰国して修士論文を提出した。そして2012年4月、また日本に戻り、神戸大学大学院修士課程に正式に入学し、現在博士課程に至っている。

中国で韓国語・韓国文学・中韓比較文学を専攻した私が、なぜ韓国ではなく、日本に留学したのか。私の選択について質問する人が多い。日常生活では「日本を知りたいから」とか、「東アジア的な研究方法を身につけたいから」という理由で、その場しのぎをしてきたが、ここでは、来日までの過程を振り返り、現在の研究内容を紹介させていただくことにする。

1. 日本留学の決意——日中韓比較文学への目覚め

私は2005年から4年間、山東大学韓国学院で韓国語を専攻した。その間、韓国ソウルの国民大学に留学したことがある（2007年）。2009年、同山東大学大学院修士課程に進学し、中韓近代比較文学を専攻した。近代以来、中韓両国の文学は日本から多大な影響を受け、日本的な要素が大量に流入しているため、中韓文学の比較研究には日本との関わりを視野に入れる必要性を感じていたから、日本にも興味を持ち、日本語を本格的に学習し、日本文化を理解し、日本留学を考えるようになった。

当時、中国の大学で韓国語を専攻する学生や韓国文化を専攻する院生にとって、学問を深めるには、韓国の大学へ留学し、大学院（修士・博士）課程に入るのとは当たり前で、主たる選択肢であった。そのため、私の「日本留学」は異例のことであった。

当時、私の日本留学の決心に影響を与えたのは、牛林傑先生と崔博光先生のアドバイスであった。指導教授であった牛先生¹は、梁啓超と韓国開化期文学との影響関係研究の専門家であり、幅広い研究視野を持つ優秀な研究者である。来日前の牛先生の話は印象深く、今でも心に残っている。

「あなたの日本留学に賛成する。日本に行って専攻を考える時、韓国文学か、日本文学か、中国文学かではなく、東アジア文学を研究する意識が必要だ。今の時代、将来の時代に必要な人材は、日・中・韓の言語に精通し、東アジア文学を研究し、三か国の文学を包括的に理解する研究者である。短期間の交換留学だけでは不十分だ。博士課程まで長期間の日本留学を勧めたい」と。

自分の最も尊敬する先生からの激励は、私の日本留学の決意を固めさせてくれた。特に「日中韓の言語に精通し、東アジア文学を研究し、三か国の文学を包括的に理解する」という言葉は、来日してから何をいかに研究するべきかと悩むたびに、「指針」的役割を果たしてきたと言える。

また、崔先生²も私の日本留学を積極的に支持してくださった。日本留学（東京大学博士課程）の経験を持つ先生は、その重要性を教えてくださいただけでなく、生活費の斡旋から受け入れ教員への連絡まで、多くの面で助けてくださった。崔先生のアドバイスは次のようであった。

「学術交流が日増しに活発になる東アジアにおいて、一国の文学、あるいは二国だけの比較文学を研究する時代はもう過ぎている。現在、日中、日韓、中韓の二国視点の比較文学研究者は多いが、日中韓を視点に入れる研究者はあまりいない。若いうちに早く日本語を身につけて、将来東アジア（日中韓）文学を研究することのできる研究者を目指さなければならない。全力で支えるから、日本留学にためらわずに早く行ってください」と。

今振り返ると、崔先生の積極的な支援とやや家父長的な「強制的」意見のおかげで、私の日本留学が実現できたのではないかと、感動する次第である。2015年7月、韓国成均館大学比較文化研究所客員研究員としてソウルに滞在した折に、5年ぶりに崔先生と再会できた。

1 牛林傑：1965年生まれ、中国山東大学韓国学院教授・院長。

2 崔博光：1941年生まれ、元韓国比較文学会会長・成均館大学教授・東京大学客員教授・山東大学教授。

両先生はいずれも、日中韓の文学研究という視座を強調している。その意見を聞いた後、「東アジア」をキーワードとする三か国での学会、国際会議、研究論文、図書などを調査してみた。すると、「東アジア文学」をテーマとする国際学術会議の開催や学会などの組織の成立、研究論文の発表、関連図書の出版が盛んに行われており、日中韓の文学を総括する「東アジア文学」の研究は、広範に認められた、今日的な研究課題であることが確認でき、両先生が日中韓の研究を強調した理由を改めて理解したのである。

日本留学の計画については、まず山東大学修士課程の履修期間、交換留学制度を利用して日本に留学し、日本語を習得し（2010年10月～2011年9月）、次に山東大学修士課程を卒業後、日本に戻って修士課程をもう一度履修し、研究の基礎をしっかりと身につけ（2012年4月～2014年3月）、そして日本で博士課程に進学して研究を深める（2014年4月～2017年3月）という三段階に分けて実行することにしたのである。

2. 東アジア比較文学研究の現状

計画通りに私は2010年10月に来日することができ、神戸大学において交換留学・修士課程・博士課程を経て現在に至っている。私の指導教授は朴鍾祐先生で³、身近な力強い助言者である。

来日後、日中韓という視座から考察する東アジアの比較文学は、時代の趨勢に合致し、将来性のある研究領域であると確信するようになったが、研究の現状については以下のような問題点を感じ、発展の余地が大きいと考えた。

第一に、「東アジア文学」をキーワードとする会議・論文・図書の内容を見ると、その多くが二国間（日中・日韓・中韓）の文学関係だけを扱っており、第三国については完全に言及されていないことがわかった。第三国の欠けた「東アジア文学」の研究が、本当の意味での「東アジア文学」研究と言えるのかという疑問が持たれる。

第二に、三か国各自の文学論の組み合わせを「東アジア文学研究」とする点である。例えば、多数の研究者によって執筆された各国の文学論を集め、「東アジア〇〇〇」のように書名を付けて出版した論文集・編著・共著があるが、こ

3 朴鍾祐：神戸大学大学院人文学研究科教授・留学生センター教授、日韓比較文学研究者。

のような研究は各国文学を、日中韓を含む東アジア全体の視野に入れて議論する意識を示してはいるものの、三か国文学の相互関係、各自の特徴の深層の比較、「東アジア的」なものへの帰納など、三か国の文学を包括的に理解する論点が不足し、「東アジア文学研究」としての質が問われるものと思われる。

第三に、東アジアの比較文学は質量ともに古代に偏っていることである。これは、漢字文化の歴史的背景が強く働いているからだと考えられる。古代の日中韓は漢文学の伝統を共有し、共同の文字と文体が比較研究に便利である。しかし、東アジアの近代・現代比較文学研究のうち三か国の視点を持つものは残念ながら多くはない。それは三か国の視点を持つ意識の不足が一因ではあるが、近代以降、日中韓それぞれの言文一致運動の展開と民族語（白話文・簡体字・ハングルなど）の確立に伴い、漢文が共通言語ではなくなり、日本語・中国語・韓国語にそれぞれ通じなければ、三か国視点からの比較研究が難しくなったためであると考えられる。

それで、私は東アジア比較文学の研究範囲を、転換期としての「近代」（あるいは「近代初期」）の日中韓文学に狭めることにした。東アジア文学において、近代初期・近代転換期とは、19世紀末から20世紀初め、外来文学を受容しながら伝統文学から近代文学へ転形・移行した時期を意味する。日本にとっては明治時代の中後期、中国にとっては清朝末期から民国初期、韓国にとっては旧韓末期から日帝初期である。しかし、日本の学界において、明治文学の比較研究は、主に西洋から受けた影響に焦点を当てており、中韓に与えた影響については比較的粗略に扱われているため、明治文学を日中韓の全体に入れて考察する必要があると思ったのである。

3. 進行中の博士論文の研究

現在、私は「日中韓近代初期文学の関連様相研究—明治小説の伝播と受容を中心に」を博士論文のテーマと決め、次のような構想に従って執筆を進めている。

近代初期における日中韓三か国の文学的つながりは非常に密接であった。1890年代後半から1910年代後半に至るまでの20年余りの間、明治日本で発表された小説作品は、中国語と韓国語に大量に翻訳（翻案）され、中韓两国によって広範に受容されていた。この期間における東アジアの文学伝達の経路は、中国から徐々に韓国と日本に伝播した古代と違い、日本で発表されたもの

がすぐに中国と韓国へ伝わったという特徴がある。明治小説の伝来は、当時の中韓両国の文学の新旧交代に重要な役割を果たしただけでなく、両国の社会にも大きな影響を与えた。この時期の日中韓文学の関連性を把握するため、二国視点からの既存研究の不足を克服し、日中韓の視座から、明治小説の伝播・受容の状況を体系的に研究しなければならない。

では、一体どれほどの、どのような明治小説が中韓両国に受容されたのか、その受容において中国と韓国は独自にどのような特徴があり、どのような共通点と相違点があったのか、なぜそのような相違を示したのか。これらの問題を究明するために、論文では二部に分けて論述を展開しようと考えている。

第一部は「巨視的データ論—作品全般から見る明治小説の伝播」である。一般的に明治小説の伝播状況を把握・分析するために、中韓両国に伝わった明治小説の日本原作、中韓の翻訳（翻案）本の題目、発表日、ジャンル、翻訳経路、作者・訳者、掲載誌・出版社、出版地、出版（重版）状況、原文保存状況などの基本情報を調査し、「近代初期日本小説の中文訳・韓文訳総目録（1895-1919）」を作成し、統計的処理によって中韓両国における明治小説受容の特徴を読み取る予定である。（現在まで、合計405点の明治小説の日本原作、中韓訳本の情報の集積がある。）

第二部は「微視的ケース論—個別作品のケースから見る明治小説の受容」である。具体的な作品を通して検討するために、『不如帰』の中韓両国におけるそれぞれの受容（中←日→韓）、『鉄世界』の中国経由の韓国受容（日→中→韓）、『佳人の奇遇』の中国での受容と韓国の不受容（日→中）、『金色夜叉』の韓国での受容と中国の不受容（日→韓）をそれぞれ分析する（矢印は伝播の方向を示す）。

そして、明治小説の伝播と受容を中心に展開された日中韓の近代初期文学に関するデータ論とケース論を総括し、三か国の近代初期文学の関連性・共通性・異質性を結論づけたいと考えている。

4. おわりに

来日して以来5年、私はいつも意識的に日中韓の文学視座から文献を読み、問題意識を持ち、論文を書き、研究生活を楽しんできた。こういう視野からの研究にふさわしい能力をさらに身につける必要性を痛感している。将来、三か

国の言語に精通して東アジア文学を研究し、「日中韓文学を包括的に理解する研究者」になることを目標にしたいと考えている。

越境する「大衆文学」の力 ——中国における松本清張文学の受容¹

王 成

はじめに

2014年11月、俳優高倉健が亡くなった際、中国のマスコミでも一斉に報道された。国営テレビ CCTV では追悼特集が組まれ、外務省の報道官が国を代表して追悼のメッセージを述べた。私の世代では高倉健はアイドル的な存在である。それは、高倉健主演『追捕』（『君よ憤怒の河を渉れ』、1976年製作、佐藤純弥監督、西村寿行原作）が中国で大ヒットしたからである。『追捕』はサスペンス・アクション映画で、中国の「改革開放」が始まった1978年に上映された外国映画の第一号である。50歳以上の中国人は例外なく、ほぼ全員が『追捕』を見ていた。その震撼力は今では想像できないほどであった。それまで閉塞状況にあった中国人は、その画面に釘づけになった。映画の芸術性というより映画を通じて同じ東アジアにある日本という国の文化を見たのである。

清張作品が映画化された『砂の器』も、その流れの中で大ヒットした。松本清張の小説もその勢いに乗り、中国で広く読まれた。『点と線』は中国で出版された「推理小説」の第1号である。当時、翻訳された外国文学は、旧ソ連をはじめとする東ヨーロッパのもの以外なかった。実は、『点と線』は、最初に警察官の参考書として出版されたのである。1979年1月に出版された同書は、「内部出版」という形だった。「改革開放」の政策が決まって間もない時期であり、資本主義の文学と見なされた探偵小説はまだ解禁されていなかった。しかし、「内部発行」という形でも公開出版だったため、警察だけではなく、一般読者にまで広まったのである。

本稿では、中国の「改革開放」と「社会主義市場経済」という時代背景に合わせて、中国における松本清張文学の受容の歴史について考えてみたいと思う。

1 本稿は、2014年12月11日に開催された日文研・アイハウス（国際文化会館）連携フォーラム2の講演を基に書き直したものである。

1. 映画『砂の器』をめぐる論争

1980年代、日本映画が中国にもたらしたカルチャーショックは非常に大きかった。1980年5月に超大作として中国で公開された『砂の器』は、人物の描写、画面、カメラワークという優れた芸術性や、深いテーマ性など、それまで見たことのない映画表現によって、中国の観客に強い衝撃を与えた。一般の映画評論を越えて、映画『砂の器』をめぐる大衆読者が参加する論争にまで発展した。

中国の大新聞『光明日報』に「日本の映画『砂の器』について」という紹介文が掲載され²、外国映画の情報がまだ少なかった時代において、読者への衝撃は大きかったのである。特に、1979年に復刊された発行部数965万部の映画専門誌『大衆電影』³では、『砂の器』の中国上映に合わせ、連続的に関連記事が掲載された（1980年5月号にグラビア広告掲載、7月号に映画紹介と主演の加藤剛を紹介する文章を掲載）。『大衆電影』の投書欄には、『砂の器』というタイトルや映画のテーマ、登場人物等をいかに理解するかをめぐる、読者の声に掲載され、10月号では、「いかに『砂の器』を見るべきか」という読者投書特集も組まれた。

「文化大革命」のトラウマを引きずっていた当時の中国人の人間関係は、イデオロギー、あるいは階級社会など、様々な要因で引き裂かれていた。親子の関係も、裏切ったり裏切られたりするなど、深刻なものだった。「和賀英良はなぜ恩人を殺すのか」というテーマに対し、当時の中国の観客は、文化大革命中に「恩人を殺す」というようなことが多発したので、この映画を通して追体験ができたのではないと思われる。

また、『大衆電影』の読者欄に寄せられた投書の中には、『砂の器』が「血統論」（血統によって人格や身分を評価する理論）を批判しているという指摘もあった。それは、和賀英良はハンセン病の父親を認めたくないがために、殺人の罪を犯した。けれど、人生がどんなに変わっても、親子の血筋は変わることなく、日本の資本主義が「封建制を引きずった資本主義」であるため、血統論が根強く残っているという主張である⁴。

2 「日本の映画『砂の器』について」『光明日報』、1980年6月2日。

3 『『大衆電影』元副編集長唐家仁回想録』www.zhebeijingnews.com（2004年9月14日）。

4 金鐘国「『砂器』主題小議」『大衆電影』、1980年10月。

当時、血統論という「宿命」みたいなものが若者たちを苦しめ続けていた。『砂の器』が「文化大革命」直後の中国の観客を引きつけたのは、ハンセン病の父親を持つ和賀英良の「宿命」によって、「文革時代」の悲痛な記憶を想起させられたことが大きい。出身家庭によって本人の階級が限定され、社会的地位が決められるということは、「文革期」には支配的な考え方だった。親とともに吊し上げられ、激しい迫害を受けることもしばしばあった。親子の間で、絶縁や密告といった、様々な葛藤が生じていた。また、紅衛兵世代の若者たちはその後、「下放」によって辺鄙な農村での貧困生活を強制されるようになった。故郷を離れて流浪の身となった彼らは、「父親殺し」というトラウマを抱え続けていたのである。

社会主義的に「一斉平等」と言われながら、「出身」によって、運命が大きく違っていった。「血筋により人生が違う」ということがよく議論されていた。プロレタリア・労働者階級の家産に生まれた人々は将来が明るい。しかし、元々ブルジョワ・有産階級だった家に生まれれば、将来は真っ暗であった。

「文化大革命」で失脚した幹部の子弟などは、差別と排除の対象になった。若者の間では、身分論や、「宿命」は自分と親との関係によって変わるという議論がよく交わされていた。そういう意味で、和賀英良の抱える、ハンセン病の親を抹消しなくてはならないという気持ちは、当時の若者の心の奥にもあったと思われる。

映画の公開とほぼ同じ時期の1980年5月、『中国青年』という雑誌に、「潘曉」という読者の投書が掲載されている。そのタイトルは、「人生の道はなぜ歩めば歩むほど狭くなる一方なのか」というものである。筆者は人生に困惑し、どんなに頑張ってもあがいても現状への打開策が見つからず、苦しい状況だった。それまで受けた教育は、人間は社会のために、人民のために生きるというものだったが、自分の人生経験では必ずしもそうではなく、むしろ、人間は主観的に自分のため、客観的に他人のためである、と書かれていた。つまり、この投書は、当時の中国人を苦しめていたエゴイズムと共産主義の葛藤が、「思想の開放」によって議論できることに気づかせたのだ。これは直ちに大きな反響を呼んで、議論は翌年3月まで続き、中国全土で数百万人の若者たちがいわゆる「人生観討論」に参加した。

雑誌『中国青年』の月間発行部数は369万部に上り、読者からの投書は6万通に上る、大きな社会現象となった。そういう時代背景の中で、「宿命とは生

まれること、生きていること」という映画『砂の器』のセリフが、人生問題に悩む青年の心に響いたのは当然だろう。多くの人々が、和賀英良という複雑な人物像に自分の姿を重ねて、『砂の器』を観たのではないかと思われる。すなわち、和賀英良は「不幸」や「成功」や「破滅」の人生を背負った若者の代表だったのだ。和賀英良という人物は、「立身出世」の観念が効かなくなった時代の若者にとって、単純に批判する対象ではなく、その人生から教訓を得るところがあった。「人生観討論」の時期に中国全土で公開された映画『砂の器』は、その受容の風土によく浸透したと思われる。

2. 中国映画への影響

『砂の器』は、善悪の二項対立的な描写だけではなく、人間の複雑性をよく表現した映画である。登場人物の内面もよく表現されていることから、和賀英良に同情を寄せた観客も、少なくなかった。この映画の物語性、表現手法のユニークさ、ピアノ協奏曲『宿命』の挿入など、豊かな芸術性は高く評価され、その技法は中国の映画界に大きな影響を与えた。

例えば、陳凱歌監督の『黄色い大地』（1984年）や『子供たちの王様』（原題『孩子王』、1987年）に頻繁に登場する、橙色を背景に登場人物のシルエットを写すショットは、『砂の器』の冒頭の、海岸で砂の器を作る子供のシルエットを強く想起させる。それ以降、陳監督は苦労を重ねながら、子供をヴァイオリニストに育て上げていく父親の姿を描いた『北京ヴァイオリン』（2000年）という映画においては、まさにこの『砂の器』のコンサートシーンにオマージュを捧げるような技法を取り入れた。ヴァイオリンを演奏するシーンと親子二人の回想シーンが交互に映し出される演出は、紛れもなく『砂の器』から発想されている⁵。

『風狂な歌姫』（原題『瘋狂歌女』、劉国権監督、1988年）という映画もまた、『砂の器』との類似点が多い。それは当時の毛阿敏（モーアミン）という人気歌手を起用して作られた映画である。一人の有名な歌手がいて、表向きは輝いているが、実は非常にみじめな子供時代の過去を持っている。孤児になったヒロインは養父母に育てられ、その息子と婚約する。しかし、やくざにレイプされたヒロインはそのやくざを殺して、行方をくらます。やがて、苦労を重

5 劉文兵『中国10億人の日本映画熱愛史』集英社新書、2006年、96-97頁。

ねて歌手として有名になったヒロインが長年夢見ていたソロコンサートの開催を実現させた時、田舎から婚約者が訪ねてくる。ヒロインは自分の過去を隠すために、訪ねてきたその婚約者を殺してしまう。まさに『砂の器』の和賀英良と似たような物語である。

3. 清張作品の大量翻訳・出版

1980年代、映画『砂の器』のヒットの余波を受け、中国全土において清張ミステリーの出版がラッシュ状態にあった。出版事業が復興していた時期にあたり、中国各地の出版社から清張ミステリーがおびただしく出版され、北京や上海などの大都会だけに集中する現象ではなかった。当時、推理小説を扱う出版社による単行本の初版部数は、3万～4万部が普通であった。1980年代には、中国各地の出版社40社以上から清張ミステリーが出版された。推理小説の大量出版が、読書ブームを牽引したと言える。

しかし、大量出版は、言い換えれば、一種の無秩序とも言える。出版社は著作権者の許可なしに好き勝手に清張の著作を出したのである。大衆読者の趣味に合わせるように、例えば、『霧の旗』＝『復讐女』（呂立人訳、1987年2月）、『球形の荒野』＝『重重迷霧』（謝志強・張素絹訳、1987年10月）、『塗られた本』＝『女人の代価』（柯森耀訳、1987年）、『夜光の階段』＝『女性階梯』（朱書民訳、1988年3月）、『翳った旋舞』＝『迷茫的女郎』（王翠訳、1989年5月）など、文学的表現を無視し、女性のイメージを赤裸々に出して、通俗的な表現に変えられた。装丁も通俗的というより、「低俗化」する傾向が顕著である。

その時代、中国は「ベルヌ条約」に加入しておらず、著作権意識も薄かったのである。皮肉なことに、このような海賊版が横行した結果、清張ミステリーには大衆向けの文学というイメージが定着した。と言うのも、推理小説を大衆の娯楽に対応する「低俗的」な読み物と見なす出版社や翻訳者が多かったためである。

中国の代表的な歴史ある大手出版社はいまだに推理小説をあまり出していない。その中で唯一清張の許可を取ったのが、文潔若訳の『深層海流』である。文氏によれば、1986年6月に清張と面会した際に、清張に中国版への序文を書いてもらったという⁶。中国語版の『深層海流』は、清張直筆の序文を写真で載

6 文潔若「松本清張と社会派推理小説」『芸芸報』、1991年6月1日。

せている。その意味で、この小説は実録小説とも言うべきものである。日本の内閣調査室誕生の裏側を、日米講和条約成立前後の日米関係を通して描いたノンフィクション小説である。清張はそれを、『日本の黒い霧』を執筆した際の取材内容を使って書いたという。

文潔若氏は、中国において最初に松本清張の作品を翻訳した翻訳家である。文氏が翻訳した『日本の黒い霧』は1980年代、3度にわたって別々の出版社から刊行された。1980年4月は外国文学出版社、1983年5月は福建人民出版社、1987年1月は国際文化出版公司、となっている。度重なる出版社の変更は、読者の期待が高かった証と言える。1965年の作家出版社による文氏翻訳の『日本の黒い霧』と、台湾志文出版社（徐沛東訳、1987年）の『日本の黒い霧』を加えて、中国では5種類の『日本の黒い霧』を読むことができる。

『日本の黒い霧』は、1960年1月から12月まで『文芸春秋』に連載されたノンフィクションである。「黒い霧」が流行語となるほど日本で流行したこの作品のために、清張は1945年から52年まで、米軍占領下の日本に起きた重大事件を調査し、独自の推理によって追求した。『日本の黒い霧』は帝国主義や資本主義を批判した作品として、イデオロギーが先行する当時の中国の読者にも愛読された。歴史の真相を究明する清張の姿勢は作品を通じて読み取ることができる。中国の読者は、遠い歴史の謎にももちろん興味を持っていて、第二次世界大戦後の中国では、共産党と国民党の間に繰り広げられた内戦、1949年後の政治運動、1966年から76年までの文化大革命などの歴史の中に、謎めく事件や人物が多い。それに挑む書物もあるが、長い間、政治的に抑圧されていた一般の読者は目にすることができなかつた。だから、推理小説という文体で書かれたノンフィクションである『日本の黒い霧』は、中国の読者に新鮮な読書感覚を与えたと考えられる。

4. 清張の中国訪問とその影響

1980年代、中国の読者が松本清張に注目したもう一つの出来事は、1983年5月25日～6月13日の氏の中国訪問である。清張は、朝日放送制作の特別報道番組『清張、密教に挑む』の取材班に同行して、初めて中国を訪問した。中国の無錫、福州、西安、蘭州を歩き、北京で中国文学芸術連合会主席周揚と文学について会談している。清張は、「文学は面白いことが第一。説教調のもの

では読者に倦きられる」と主張した⁷。その主張はさらに、歴史小説作家の姚雪垠氏との対談中でも強調された⁸。それは清張文学の基本理念である。彼の推理小説の理論を表す「推理小説の読者」には、「小説は面白さが本体である。この面白さを喪失した小説から読者が去ってゆくのを誰も非難することはできない」という指摘があり⁹、文学界の病理を見抜いている。

大衆文学研究家の尾崎秀樹は、「松本清張は現代の大衆が何を望んでいるかを本能的に知っていた。それは彼自身が大衆の中で育ち、大衆の苦しみや喜びを体験をとおして理解してきたからでもある」と指摘している¹⁰。清張文学の根底に大衆性があることを認めているのである。作家は社会大衆の中において、「広い読者をもつことを目的」とすべきだ¹¹、という松本清張の文学観は、小林多喜二が提唱していたプロレタリア文学大衆化の道と一致するように思われる。

清張の文学が広い読者の支持を受けている原因は、何といたっても面白いからである。清張の小説は、文章に気取りがなくて分かりやすく、リアリズムの精神に貫かれている。また、彼の小説には娯楽性があるが、思想性も深い。清張は大衆読者に親しみやすい文体を作り出した。その成功は、「小説は面白さが本体なのだ」という清張の文学観から生まれたのである。「広い読者を持つことを目的とした」清張の文学は、広く読まれるために、面白く書かれねばならず、従来の純文学としての私小説に対するアンチテーゼでもあった。

清張は、日本近代文学の行き詰まりの原因を見出した。彼は日本の純文学が「一は思想がありそうにみえるがいかにも晦渋であり、一は身につまされる話がいかに単調で随筆と変わらないものがある」から、読者の支持を得られないと指摘した¹²。そして、「小説が面白いと批評家の軽蔑を買う」と¹³、日本文壇の歪みをも厳しく批判した。

7 藤井康栄編「作品と完全年譜」『松本清張の世界』『文芸春秋』10月臨時増刊号、1992年10月。

8 「姚雪垠と松本清張の対談：歴史小説の創作について」『当代文芸思潮』、1984年3月。

9 松本清張「推理小説の読者」『松本清張全集 34』文芸春秋、1974年。

10 尾崎秀樹「解説」『新潮現代文学 35』新潮社、1978年、381頁。

11 松本清張「推理小説の読者」『松本清張全集 34』、377頁。

12 松本清張「推理小説の読者」『松本清張全集 34』、377頁。

13 松本清張「小説に『中間』はない」（『朝日新聞』1958年1月12日）、『松本清張全集 34』、448頁。

自然主義以来、面白さをけいべつする迷信のようなものがまだ文壇の底流にあるようである。面白い物語を書く、「大衆の愚かしい要請に対する作家の妥協」ときめつけられそうである。(中略)私は興味が知性ある作家の障害とは思わない。それは、根の無い、手先だけで作られた低俗な「面白い」小説とは当然区別されるであろう。¹⁴

この自然主義以来の日本文壇の迷信を破るために、松本清張は絶え間なく模索した。彼は小説の一つの方法として、「プロットに富んだ小説」を求めている。「小説は、やはり読んでおもしろくなければならないと思うから、私はプロットにできるだけ物語性をもたそうとしている」¹⁵という小説作法を持ち続けていた。

いわゆる「文学の大衆性」というマルクス文芸論のスローガンはこの時代の中国においてもよく唱えられていたが、「文化大革命」を通して、紋切り型の作品が横行していたので、中国の読者はイデオロギー優先の文学に飽きていた。当時、清張の通訳を務めた作家協会の陳喜儒氏は、清張の文学論に新しさを感じたことを、清張の印象記「砂漠の棗の樹」というエッセーに書いている¹⁶。清張の中国訪問は、中国の文学界にも新風を吹き込んだと思われる。

5. 中国の高度成長と清張文学の受容

次に、1980年代に推理小説ブームを起こした清張ミステリーの翻訳が、90年代以降から今日まで、どのような変遷を辿ったかについて考えてみたい。1980年代から90年代にかけて、日本の推理小説は大量出版によってブームを引き起こした反面、質の悪い翻訳が氾濫し、通俗化を求める大衆読者に媚びるような低俗な装丁や印刷によって日本の探偵・推理小説の持っている思想性や芸術性を損ない、徐々に読者が離れるようになった。それに加え、1992年に中国が「ベルヌ条約」に加盟して以来、著作権による出版の制限が生まれ、中国では探偵・推理小説を出す出版社の数がかなり減り、かつて、何十社もの出版社が争って日本の探偵・推理小説を出版していたような現象は見られなくなっ

¹⁴ 同上。

¹⁵ 松本清張「私の小説作法」(『毎日新聞』1964年9月13日)、『松本清張全集34』、446頁。

¹⁶ 『日本文学』、1985年第4期。

た。しかし一方で、群衆出版社や珠海出版社などが専門的に日本の探偵・推理小説を出版するようになると、より健全に一般の読書志向をリードすることになった。

日本の探偵・推理小説が20数年間にわたって、中国の読書界に与えた影響は無視できない。中国の読者にとっては、日本文学の享受だけでなく、日本社会を理解するのに役立ったのである。清張ミステリーの数々の名作が、日本の「高度成長の時代」を背景に1950年代後半から60年代に書かれている。1990年代以降の中国は日本の高度成長期と良くも悪くも重なっている。そうした社会背景を持つ中国の読者は、清張ミステリーによりいっそう強い共鳴を感じたのである。

一方、1990年代以降、社会主義市場経済へ転向した中国社会だが、大きな変革の時代を経て、かつて共産主義を目指して歩んできた社会主義の道は、ソ連・東欧の社会主義制度の瓦解に伴って疑問視されるようになった。経済システムの変化による社会システムの変化も目立っている。それによって、人間の価値観も大きな変化を見せた。プラス面から見れば、自由・民主・効率・競争などの意識が強化され、個人の努力によって経済的に成功できる社会環境が整い、活力のある社会ができつつある。

しかし他方において、経済優先の社会意識は、社会システムや人間の精神世界に数々の混乱をもたらしもしたのである。既成の社会体制は、経済の高度成長に釣り合わない綻びとして現れる。その典型的な例が権力の乱用である。また、共産主義の集団精神は個人主義に転じ、利他主義から利己主義へと転換した。物的欲望がますます膨らみ、道徳教化も効かなくなった。その結果、金銭と個人の成功が社会生活の中心となりつつあり、個人主義、拝金主義が横行するようになる。制度の不備と価値観の失墜による混乱は、「公平」「公正」「正義」などの価値と背離した汚職問題をもたらした。官僚の横領や贈収賄などの汚職（腐敗）は1990年代以降、中国社会の中心問題となっている。例えば、2007年に中国経済体制改革研究会の大衆意識研究センターが北京や上海など23都市で行ったアンケート調査によれば、民衆は官僚の「腐敗」に最も注目しているという¹⁷。新聞の社会面を開けば、毎日のように「腐敗」に関連

17「中国経済体制改革研究会は、市民意識アンケート調査の結果を発表」『新京報』、2007年3月24日。

する記事が載っている。汚職事件や犯罪は絶えることなく、中央政府のトップレベルの官僚から、政治末端にいる国家公務員にまで蔓延する様相を呈している。

こうしてみれば、1990年以降、一連の汚職事件の中で、国民に衝撃を与えた重大事件は枚挙にいとまがない。そうした社会背景を持つ中国の読者は、なぜ高度成長期に「腐敗」（汚職）が蔓延するのかに思いをめぐらせるであろう。清張ミステリーの受容は、むしろ1980年代よりもリアリティーを持つようになった。

松本清張を研究する日本近現代文学研究者の藤井淑禎氏が指摘するように、高度成長期の日本は「かつては道義心なり正義感なりの精神性が歯止めとなっていたのに、物質的価値万能の風潮下では、富さえ手に入ればいいということになり、制御され飼い慣らされていた情念はいともたやすく事件＝犯罪へと転化してしまう。（中略）この時期の清張ミステリーの定番である汚職や贈収賄事件の背後にあるのも、そうした根本的な価値観の逆転という出来事にほかならなかった」という¹⁸。同じ価値観の逆転は、「高度成長」に入った中国社会にも蔓延するようになった。中国の読者が清張小説から時代の落差を感じないのは、1990年代以来の中国社会に高度成長の日本と似たところが多く見られるようになったからであろう。

この間、1980年代に翻訳・紹介された清張作品が続けて読まれた一方、新たに翻訳された作品もある。その中で、注目すべきは、『点と線』『ゼロの焦点』『砂の器』などの作品が異なる訳者によって新たに翻訳出版されたことと、「世界ミステリー名作文庫」（群衆出版社）に収録されたことである。さらに、いわゆる「黒い」シリーズの新訳出版——『影の地帯』＝『黒影地帯』（葉栄鼎訳、四川文芸出版社、2005年5月）、『黒い福音』＝『黒色福音』（同前）、『黒の線刻画』＝『黒点旋渦』（同前）、『黒い空』＝『黒色の天空』（侯為訳、北嶽出版社、2005年2月）——が、中国の読者の興味に合わせて企画された¹⁹。

また、2007年6月から南海出版公司では『砂の器』や『点と線』を新たに翻訳し、出版する企画も実施している。このように、1990年代以降、それぞれ異なる出版社から、『点と線』は3度（1998年中国社会科学出版社、2003年同前、

18 藤井淑禎『清張ミステリーと昭和三十年代』文芸春秋、1999年。

19 葉栄鼎「あとがき」『黒い福音』四川文芸出版社、2005年。

2007年南海出版公司)、『砂の器』(1998年群衆出版社、2007年南海出版公司)と『ゼロの焦点』(1991年中国青年出版社、1999年群衆出版社)は2度ずつ出版されている。むしろ1980年代よりも清張ミステリーは深く浸透していることがわかる。こうした状況から『点と線』『ゼロの焦点』『砂の器』は、清張ミステリーの名作として中国においても定着したと考えられる。

日本の高度成長期の汚職や贈収賄事件を描いた代表作と言え、もちろん社会派推理小説の第一作『点と線』である。この小説は世界推理小説のトップテンに数えられると中国では見られている。政府某省の汚職事件を摘発中の課長補佐佐山憲一が、料亭の女給お時と九州の香椎海岸で心中したという事件の解決をめぐって、ベテラン刑事鳥飼重太郎と警視庁の三原紀一警部補の二人が緻密な調査と推理によって、機械工具商人安田辰郎の列車ダイヤを利用したアリバイを崩す。4分間のトリックと交通機関を利用したアリバイ作り、粘り強いベテラン刑事の仕事振り、九州から北海道までの鉄道の駅を連想させる場面などは、読者を引きつける魅力である。しかし、高度成長期の中国の読者がこの小説から読み取るのは、何とんでも、官僚と商人が結託し、汚職の摘発を防ぐために、部下を犠牲にする残虐な陰謀であろう。官僚と商人が結託して経済利益にとどまらずに殺人にまで及んだ犯罪は、既に日本社会特有のものではなく、経済社会の持病と認識されるようになった。

また、清張が同情を寄せる下層階級のお時という人物のイメージは、中国の現実とも結びついている。辺鄙な田舎から東京に出て料亭のホステスとなるお時は、東京という大都会では匿名となりやすい存在である。彼女のプライバシーについては同僚もほとんど知らない。辛い過去を一人で抱えて、生き延びるために体を売り、果てには孤独のままに殺される人物として、当然、同情を引く。お時のような人物は、1980年代の中国ではあまり見られなかったが、90年代以降は増えてきた。田舎から北京や上海などの大都会に出て水商売をする女性が犯罪に巻き込まれる事件も頻発している。また、日常生活から事件を解決するヒントを見出す描写もリアリティーを感じさせる。例えば、高度成長期の日本では鉄道を利用して出張や旅行をするのが日常化していたのに対し、90年代以前の中国では列車を利用する人は限られていた。しかし、90年代以降、経済活動に伴って、列車や飛行機に乗って移動する人が激増する。旅行もレジャーの一つとなった今日では、読者は鉄道旅行をする際の気持ちを作中人物から感じ取りやすくなった。

このように、『点と線』のプロットを通して清張は、高度成長期に起きた汚職事件の背後にある政治構造や社会のシステム、人間性を透視しようとした。平野謙が指摘したように、「彼の作品には従来の小説に見られぬ新しい社会性があった。読者は推理小説の枠組みにもられた社会機構上の虚偽や犯罪の暴露を大いに歓迎した」²⁰と考えられる。藤井淑禎もまた、「それ以前の推理・探偵小説がもっぱらトリック一辺倒であったのに対して、清張のミステリーは犯罪動機重視への転換を図り、ひいてはその動機の担い手である人間と彼を取り巻く時代と社会とに鋭く迫っていったことから、「社会派」と称されたことはよく知られている」と述べている²¹。つまり、清張ミステリーが中国の読者に与えたのは、高度成長期に起きた社会の諸問題について、社会機構や人間性からその動機を読み取る方法であった。

以上、見てきたように、高度成長期の中国の読者にとって、中国社会は、高度成長期の日本社会に近づいたため、その時代を描いた清張ミステリーにリアリティーを感じるようになった。それは、清張ミステリーに含まれるリアリズムの力に負うところが大きい。読者に鮮明なイメージと深い感動を与えたのはその力である。新訳の『砂の器』に寄せられた書評に、次のような文章がある。「20世紀80年代の読者にとって、日本の映画『砂の器』は記憶に残っている。人々は小説の文章が一言一句急所を突いていることに感心する一方、天才音楽家と賀英良の運命を嘆き、涙した」、「人を引きつける推理小説は、不公平な社会への批判と下層エリートへの同情を表している」²²。今日の読者がいち早く感じたのも、この社会批判の力である。松本清張の推理小説が求めたのはリアリズムである。社会派と呼ばれる作風も、リアルな現実世界尊重の異名に他ならない。

ところで、清張の作品の中で読者の心をつかむものは多い。『球形の荒野』は日本人の読者によく知られている作品である。1960年1月～61年12月の『オール読物』に連載され、1962年1月に文藝春秋新社から単行本が刊行された。1975年に松竹で映画化、1962年から2014年まで8度テレビドラマ化されている。

20 森信勝編『平野謙松本清張探求』同時代社、2003年。

21 藤井淑禎『清張ミステリーと昭和三十年代』文芸春秋、1999年。

22 「暁嶽『砂の器』また現れる」『北京晩報』、2007年6月7日。

終戦工作に携わる一人の外交官が「第二次世界大戦の亡霊」として日本に現れる。それに伴って、殺人事件が起こる。家族が動揺する。敗戦の前年、中立国にいた野上一等書記官は自分のすべてを捨てて、敵国機関に身をゆだね、終戦工作を進める。終戦後、死亡したはずの野上書記官が日本に現れる。実にミステリーに富んだ物語である。この作品の中に、東京六本木の「国際文化会館」が登場している。

高台の静かな一角に、世界文化会館は建っていた。付近は外国の公使館や領事館が多いから、閑静な場所である。緩やかな丘の起伏がそのまま道の勾配になっていた。坂道は鰐を刻んでいる。

藁の生えている長い塀が続き、茂った植え込みがどの邸からも覗いていた。事実、その界限は、林の間に洋館が見え、其処から異国の国旗がはためいているといったエキゾチックな地域である。²³

これはリアリスティックに描写された文章である。『松本清張全集 6』の解説を書いた加瀬俊一は外交官で、「自身が終戦工作に深い関連を持っている」という²⁴。彼はこの小説をフィクションとして成功していると評価する。「これは面白い着想であって、いかにもありそうなことに思われる。その限りにおいて、この構想は成功したようだ」と語る²⁵。『球形の荒野』は、奈良・京都・東京などの名所旧跡を舞台に、読者を引きつける小説である。この作品は最近中国でよく売れ、話題を呼んでいる。1980年代に『重重迷霧』として翻訳出版されたものの、まったく知られず、最近は新たに『日本を裏切った日本人』と題して訳され、清張の名作として売られている。

ベストセラーになった原因について、インターネット新聞紙上で、出版社の関係者は次のように説明している。「名作が売れない理由はさまざまだが、最大の原因は読者がイメージしにくい難解な書名。『球形の荒野』を再出版する際、当社は書名を『日本を裏切った日本人』と改めた。この書名は物語の内容を正

23 『松本清張全集 6』文藝春秋、1971年、35頁。

24 同上、450頁。

25 同上、455頁。

確に要約しており、シンプルで読者も一目で理解することができる。装幀のデザインにもこだわり、表紙では純白をバックとした真っ赤な日の丸が刀に切り裂かれている。第二次世界大戦の敗戦前夜、ある日本人外交官の生死を賭けた闘いに関する物語の魅力が読者に十分伝わってくる」²⁶。これは大衆読者に媚びる販売戦略が功を奏したのかもしれないが、書名に騙されて愛読した読者は、「やはり『球形の荒野』という書名が好きだ」（離歌笑「一个背叛日本的日本人」豆弁評論）と言うのである。その書名による要約は分かりやすいが、必ずしも原作のテーマを伝えていない。原作を読めば、「野上さんにとっては、パリも砂漠も同じことさ。地球上のどこへ行っても、彼には荒野しかない。結局、国籍を失った男だからね。いや、国籍だけじゃない。自分の生命を十七年前に喪失した男だ。彼にとっては、地球そのものが荒野さ」²⁷ という滝の言葉は訴える力があるのではないか。

翻訳や出版戦略の結果、清張作品は時代に翻弄される人間のドラマとして、日本の戦争認識や日本理解のための読み方にもシフトされている。中国の読者は松本清張の作品を通して、日本を理解する傾向が強い。最近の中日間のギクシャクしている現状が、読者の日本理解を促したため、「読松本、懂日本」（「松本清張を読んで、日本がわかる」）というキャッチフレーズも納得できる。

6. 中国における清張ミステリー風の推理小説の登場

中国における清張ミステリーの受容は、中国の文学界にも大きな影響を与えた。1980年代、革命リアリズムに束縛されていた作家は、清張文学に新しさを感じていた。多くの作家が清張文学を愛読し、自分の内に取り込もうとした。例えば、中国現代文学の代表者の一人である王蒙は「生活の息吹を傾いて」という文章において、「時には、松本清張の推理小説を面白く読んでいます」²⁸ と、自分の読書経験を語っている。とりわけ、その当時、頭角を現した「前衛派」といわれる作家たちは清張ミステリーを愛読していた。さらに、いわゆる大衆読者だけではなく、清張ミステリーの読者は幅広い層を成していた。言うまで

26 「松本清張作品、中国語名変更でベストセラーに」、2012年4月7日。http://www.recordchina.co.jp/a60222.html。

27 『松本清張全集6』、292頁。

28 『文芸研究』、1982年1月。

もなく、清張ミステリーの手法は、中国現代作家の学ぶ対象でもあった。その結実である中国初の社会推理小説『火の杏』（中国名『杏焼紅』）を、ここで取り上げよう。

「中国初の社会推理小説」と銘打たれ、2007年6月に刊行された『火の杏』のプロットは次のように展開する。

中国の南方で不動産経営の有力者二人が相次いで死亡した。報復殺人であるかどうかをめぐって、雑誌記者が刑事に協力して、事件に挑む。事件の解決に伴い、28年前、都会の若者たちが農村部へ「下放」された歴史を背景とした暗黒面が暴露される。文学性を損なわないトリックの布置と、殺人事件の裏に隠された社会性を小説の両翼として求めるその姿勢は、清張ミステリーの特徴に似ている。作者である松鷹は、この作品は松本清張の推理小説を真似して書いたものだと述べている²⁹。ちなみに、本の帯にはっきりと、「日本の推理小説家松本清張の『砂の器』『霧の旗』『点と線』に匹敵する中国初の社会推理小説」というキャッチコピーが印刷されている。この小説は清張文学受容の実りとと言える一方、清張ミステリーの中国における影響力の大きさを表してもいる。

まとめ

中国の「改革開放」の歴史は30年を超えているが、日本と比較すると、時間的には30年のずれがある。中国における松本清張文学の受容はその歴史に伴って今日に至っている。

1980年代の「改革開放」の中国は、外国の先進文化を取り入れるのに夢中であつた。一方、プロレタリア文学大衆化の理念を掲げた中国の文学界では、清張の書いたような文学作品は生まれなかった。伊藤整が指摘したように、清張は日本のプロレタリア文学の理念を実作において実現した継承者である。その文脈で見れば、清張の文学は大衆化の理念を掲げて、大衆に愛読された。方法的には、清張の社会派推理小説は資本主義の悪を抉り出して、人間のエゴイズムを批判し、社会の公平と正義を訴えるメッセージを、犯罪の原因を追究する形で、読者に送り届けることができた。

²⁹ 松鷹「あとがき」『火の杏』、花城文芸出版社、2007年、245頁。

何よりも清張の小説はおもしろい。中国の読者は清張文学を通して、世界を認識できたし、社会批判や自己批判をする機会を得たと思われる。例えば、映画『砂の器』をめぐる討論によって、自己を和賀英良のような人物に照らし合わせて、人間のエゴイズムを反省する機会を与えられた。

1990年代以降の中国は、輸出主導型の経済、外国技術や経営理念の導入などで高度経済成長を遂げてきたが、同時に、環境問題や汚職問題などを抱えている。「経済優先」によってもたらされた社会問題は後を絶たない。都市化の進行に伴って、消費型の市民社会が形成され、拝金主義が蔓延し、人間の欲望が膨張している。中国社会には前近代、モダン、ポストモダンが同時に併存している。日本の高度成長に似たような現象も起きつつある。

比較してみれば、30年間で、日本の100年にあたる近代化の道を歩んできた。中国の作家が書けないもの、批判しきれないものが、清張の文学には読み取れる。高度成長の時代に生まれた清張の文学は、人間の欲望、社会の構造、文化の伝統、歴史認識などを、様々な物語を通して、批判的に表現した。中国では、清張文学の受容によって、社会派推理小説を書くような作家がようやく生まれるようになったが、清張文学のような批判精神を持つ優れた小説にはまだほど遠い。中国の読者は清張の文学を通して、異なる時代や環境を越えて、普遍的な批判精神や教訓を得ている。越境する文学の力がそこに感じられるのではないだろうか。

Comparative Sociological Research in the Field of Japanese Studies in Bulgaria

Maya Keliyan

Introduction

Over the last two decades, since 1994, I have examined Japanese society in a comparative transnational context. There are three aspects to my research. First, I began my work in the field of Japanese studies with comparative research on Japanese and Bulgarian modernization, middle strata, rural communities and farming systems.¹ My study was sociological in that I employed methods of rural sociology and social stratification theory. Second, I continued my research focusing on a comparison of Japanese and Bulgarian social stratification systems and socio-structural changes, middle strata patterns of development, consumption patterns and lifestyle, and local community resources and development. Third, since 2006 I have included post-reform Chinese society and since 2014 Taiwan in this Eastern societies comparison, studying Japanese, Bulgarian, Chinese and Taiwanese trends of post-modernization, globalization, glocalization and internationalization, through changes in their middle classes formation, recruitment, composition, socio-structural boundaries, consumption patterns, leisure, and lifestyle.

What is the value of such an approach? On the one hand, I am following my belief that when Japanese studies are conducted using a comparative method, fresh insights into Japan can be uncovered, and new discoveries revealed. On the other hand, this research is important for better understanding the societies and cultures with which Japanese society and culture are compared, as well as for fuller comprehension of contemporary society and culture in general.

Basis for and Significance of Comparison

As a result of my research I arrived at the conclusion that despite the obvious differences in civilization, culture, economy and geography between Japanese and Bulgarian society, there are also more than a few important shared traits. More precisely speaking, firstly,

1 The comparison made is between separate social structures, processes, and phenomena in Japanese and Bulgarian societies, but without entering the territory of those comparative investigations that use specific statistical methods, analyses and verification of statistical hypotheses.

in Japan and Bulgaria, the processes of modernization have been similar in nature, orientation, and objective; moreover, these changes occurred simultaneously in the two countries in the third quarter of the nineteenth century and again after 1945. In their development one observes certain features common to late modernization: state policy and state priorities prove a particularly important factor in the direction of social development, in the achievement of preset goals, and in the final result of changes. The Japanese and Bulgarian experience proves the importance in periods of great social-economic transformations of the specific morals of the political, economic and cultural elite, of the elite's capacity to merge its personal interests with the overall goals of society, and of its willingness to assume moral responsibility (Keliyan 1999: 64–67).

Secondly, another similarity in the two countries is the new middle class patterns of recruitment and growth during the 1950s and 1960s. During the two country's post-war modernization and industrialization, the agricultural sector was the main yielder of material and human resources for the development of industry. The proportion of the working class and of the new middle strata grew at the expense of the decreasing number of people occupied in the agrarian sector. An analysis of the middle strata in Japan and Bulgaria shows that in both cases state policy has had a decisive impact on their status characteristics and the recruitment patterns of these strata. The chosen aims and directions of post-war modernization have also defined the development trends of the working class on one hand, and of the place of the new middle strata on the other, in the changing system of social stratification (Keliyan 2012b).

Thirdly, identical processes have occurred in agriculture, and rural communities and farmers in these two societies have shared similar moral values and norms. In Japan and Bulgaria alike, land ownership is small-scale in structure, the average age of those occupied in agriculture has increased, and the agrarian sector relies foremost on a female labor force and on people around and above retirement age. Most Japanese farmers work part-time in agriculture, and the same economic strategy is widespread in Bulgaria as well. The economic resources of farmers in Japan and of agricultural producers in Bulgaria are mostly those of households rather than of separate individuals. In both Bulgaria and in Japan, agriculture is assessed not only in terms of economic profit and as a business undertaking, but is also linked to the traditions and values of rural communities. In both countries, there still exists the tradition of mutual help and exchange of products and labor among farming families and some of their relatives and friends in urban areas:

people occupied in agriculture give them part of their yield as a gift, and in exchange, they rely on the help of the latter in seasons of intense farm work (Keliyan 1996).

Japanese and Bulgarian Consumption Patterns from a Comparative Perspective

Japan has a developed postmodern society, and is a leader in modern-style consumption. Its consumption patterns are exemplary for postmodern lifestyle in an age of growing globalization (Keliyan 2008: 22–27). Ever since its opening to the world in 1868, Japan has looked to the West as a model to be emulated in all respects. Today, as concerns the sphere of consumption, the Japanese have succeeded in surpassing their teachers in some respects. Japanese influence and leadership in the area of postmodern consumption culture and lifestyle has even become not only a source of economic recovery and strengthening but also one of the sources of its contemporary soft power.² Just as developments in US consumer society in the first half of the twentieth century were indicative of changes to come in the rest of the world, the case of Japan can now suggest the trends in consumption models that may be expected to come about in other societies, including those of Bulgaria and its other European counterparts.

The rapid development, expansion, and stabilization of the middle strata in Japan after World War II, especially the new middle strata, was a factor that contributed to the country's economic success. These are the active and innovative postmodern consumers, and a model for the study of the role of the middle strata as an important social-structural formation in modern consumption. To compare the Bulgarian middle strata accurately with their Japanese counterparts enables us to assess the proximity (or distance) of the Bulgarian middle class with respect to the corresponding position, role, and importance of its counterpart in developed consumer societies.

2 It is no coincidence that to foster industries the Ministry of Economy, Trade and Industry (METI) created the concept of “Cool Japan.” (According to part 2.) Summary of the report of the Proposal of the Public- Private Expert Panel on Creative Industries states like this, “The Panel focused on overseas expansion strategies mainly for six sectors in the first half of the term: (1) apparel and fashion, (2) *mono zukuri* and regional products, (3) food, (4) content, (5) tourism and (6) home. In later half, discussions were held in greater depth on Japan's fundamental sense of values and sense of beauty, including the basic notions and lifestyles constituting the ‘Cool Japan’ concept.” In other words, the most important aspects of this strategy are famous Japanese products and practices, consumption and lifestyle values, and attitudes. For more details see the METI website: http://www.meti.go.jp/english/press/2011/0512_02.html (last accessed on 6 July 2015).

Japan and Bulgaria share certain common traditional consumer values, such as thrift and self-restriction. The two societies' traditional moral systems condemn conspicuous consumption, assessing it to be something "disgraceful" and even "immoral." In both societies egalitarian values and attitudes are important and strongly influential. In separate periods of their development, the two societies have followed the leading trends in consumption and lifestyle associated with the developed Western, particularly European, models. The latter have been the object of imitation above all of the high and middle strata, who thereby strive to assimilate themselves to what are considered to be world models of emulation as regards consumption and lifestyle.

From the very start of my study of Japanese society, I was impressed by the leading position held by modern Japan in the world with respect to consumption and lifestyle. Observation of Japanese consumers shows very clearly the importance of consumption in today's global world, and the need for using the sociological concept of "consumption patterns." Japanese society is a goldmine for studying these patterns: due to the exceptionally great significance of social-group status in Japan, consumption models there are distinctly and quite visibly status-oriented (Keliyan 2008: 73–105). In Japan, due to the great variety of consumer opportunities, it is much easier to distinguish the differences in consumption models of separate social groups, categories, and strata. The Japanese consumer is known for all sorts of extravagance and bizarre whims; Japan is a leader in avant-garde consumption, but which social groups and categories embody these trends, and who are the adherents of specific fashionable tendencies, movements, phenomena, for which Japan has become famous?³

Japan is a world leader in youth consumption: in contemporary Japanese society, there are numerous, varied, and dynamically changing youth subculture groups; their lifestyle and consumer culture⁴ makes up the biggest and most influential "products" of Japanese "cultural exports" and is an example of rising soft power in East Asia and the world in recent times (Keliyan 2011).

3 For instance, do all Japanese women own or carry women's designer handbags like Louis Vuitton, and which social groups are consumers of such luxury brands?

4 For example *otaku* and *kogyaru*.

In the sphere of consumption, globalization is much more rapid, more encompassing, and more penetrating than it is in other spheres of social life, and similarities, differences and inequalities with respect to consumption are distinct and easily observable. Analysis of Japanese and Bulgarian consumption patterns goes beyond the field of regional studies. It is not limited to conclusions on their similarities and differences, but, on the basis of these conclusions, attains a more comprehensive understanding of the very concept of contemporary consumer culture, and of its glocalized characteristics and manifestations in various contemporary societies. Similarities and differences are trends of growing internationalization, of convergence or divergence, and of globalization and at the same time of localization, not only in consumption but also between separate societies and their cultures (Keliyan 2012a: 18–21).

This comparative approach places Bulgaria in a comparative context not only with Japan, but with other European societies as well; the above-mentioned global perspective is directed not only at the consumption patterns of Bulgarian society, but also European societies. The aim of this comparative sociological research in the area of Japanese studies is definitely *not* to limit itself to outlining the “particularities of the geography of consumption and the network of cultural differences” (Clarke 2003: 11), but to compare these in order to reach a fuller understanding of transformations of contemporary societies and cultures.

A Broader Perspective: Middle Class Lifestyles in Japan, China, Bulgaria and Taiwan

The internal logic of my studies led me to conclude that I needed to include China and Taiwan in my comparative sociological research on middle strata consumption patterns and lifestyle. Japan, Taiwan and China during some periods of their history have been regarded as examples of the implementation of successful reforms—Japan as the first successful modernized non-Western country and Taiwan as the first Chinese democracy; during recent years China has been held up as a model for fast economic growth. Towards the end of the 1950s Japan emerged as the second world economic power in terms of its nominal GNP and its rapid and high economic development, and until the early 1990s it was described as an “economic miracle.” From the 1960s to the early 1990s Taiwan emerged as one of East Asia’s quickly industrialized “Little Tigers” and its stunning economic growth was also seen as “miraculous” (Tsang 2012).

After World War II, both China and Bulgaria developed as communist countries under the dictatorship of their respective Communist parties. In 1949 martial law was enforced in Taiwan. In 1978 China declared a course of market-oriented changes and opened its economy; martial law was repealed in Taiwan in 1987 and the country developed democratic institutions. In 1989 Bulgaria commenced a transition to a democratic market society, joined NATO in March 2004, and since 1 January 2007 has been a European Union member state. During the 1970s Taiwanese political leaders, following the successful Japanese model from two decades before, realized that for guaranteed future prosperity a transformation from production of cheap consumer goods for export to competitive and qualitative high-tech electronics was necessary. As a result, a number of high-tech industrial parks have been opened. In turn, mainland China has used the same model since the middle of the 1990s to strengthen its economy.

Middle classes lifestyles in Japan, China, Bulgaria and Taiwan in recent years have been characterized by growing diversification, globalization, internationalization, digitalization, the increasing influence of youth cultures and subcultures, and the rising lifestyle power of women (not only as housewives, but also the influence of single new middle class representatives). The aging population and deepening socio-economic inequalities have been topics of intense discussion in these four countries. Bulgarian and Chinese middle class lifestyles are now moving through stages that Japan and Taiwan have long since passed, including “Westernization,” “MacDonaldization,” consumerism, malling, Americanization, and so on.

Although the rapidly developing Chinese economy has displaced Japan from second to third position in terms of nominal GDP, Japanese products remain desirable as status markers for Chinese and Taiwanese higher and middle classes, and Japanese consumption patterns and lifestyles are the preferred models for imitation.

A comparative study of Japan, China, Bulgaria and Taiwan makes it possible for both sociological research and Japanese studies to broaden its knowledge, methodology and perspective. This approach contributes to deepening our understanding of the nature of various contemporary Eastern societies and cultures and their experience in post-modernization, internationalization, globalization, and so on.

My sociological experience in the area of Japanese studies is not only theoretical—I have a strong background in fieldwork in Japan, where I have conducted 14 empirical

sociological surveys,⁵ studying Japanese local community lifestyles, traditions, structures, initiatives, religious practices, rituals and festivals; middle strata patterns of development, consumption and lifestyle; and Japanese villages, rural communities, and farming systems.

My comparative study on Japanese, Bulgarian and other Eastern societies is focused not only on research, but also on publication,⁶ and teaching. My lectures cover different aspects of contemporary Japan, its social-stratification system, socio-structural changes and post-modernization, such as a general course on “Japanese society,” “Japan social structures,” and “Japanese family lifestyle.” I teach Japanese society in a comparative transnational perspective, giving lectures on “Consumer Culture of Japan and China,” “Young People in East Asia,” “Consumption Patterns in Comparative Perspective: Bulgaria, Japan and China,” “Young People’s Lifestyle Diversification and Youth Sub-cultures in Contemporary East Asia,” and “Contemporary Chinese Society,” trying to teach students about the similarities and differences between Chinese, Japanese and East European (Bulgarian) approaches to modernization and post-modernization, globalization, glocalization and internationalization.

Conclusion: Practical Applied Significance of Comparison between Japan and Bulgaria

Being both a Bulgarian and East European scholar places the subject of my study in the mirror of my own cultural tradition; looking at Japanese society and culture with the “eyes of the other” emphasizes basic similarities as well as crucial differences with other Eastern and Western societies. As a Bulgarian and East European sociologist-Japanolo-

5 The different empirical sociological surveys I have carried out in Japan include “The Contemporary Japanese Village: Economic Activity, Social Stratification and Values Systems,” “Religious Practices, Rituals and Festivals as the Basis of Identity and Solidarity in Japanese Local Communities,” “City Farming in Kyoto: Case Study in Ichijouji and Kamigamo,” “Local Communities in Kumano: Local Initiatives, Traditions and Protection from Natural Disasters,” “Informal Structures of Japanese Local Communities,” and “Traditional Forms of Mutual Help and Cooperation in Japanese Local Communities.” I conducted these surveys in different parts of Japan, including Shiga, Hyōgo, Aichi, Mie, Gifu, Toyama and Kyoto prefectures.

6 Publications include four monographs, the first two of which were published with financial support from the Japan Foundation. I wrote the first three monographs in Bulgarian: *Japan and Bulgaria: Modernization, Middle Strata and Rural Communities* in 1999, *Japan and Bulgaria: Stratified Consumption Patterns* in 2008, and *Local Community Lifestyle in Contemporary Japan* in 2010. The fourth monograph was published in English in 2012: *Consumption Patterns and Middle Strata: Bulgaria and Japan*.

gist, I provide another viewpoint and approach to teaching and understanding Japanese society and culture: that of a cultural background and civilization situated between the Eastern and Western worlds, where Japan, with its history, culture and social development and achievements, is an exemplary case to follow. Contemporary Japan, like other parts of our postmodern global world, is suffering from various social, economic, and cultural problems, but from the standpoint of my cultural background, it is still a society that can be described as achieving (or proving itself capable to achieve) success. In my years of comparative study of Japanese and Bulgarian society, I have constantly pondered the root of Japanese success in the post-war years, and wondered why Bulgarian society has not managed to emulate that success. In the third quarter of the nineteenth century, and later in the middle of the twentieth century, Japan and Bulgaria embarked upon their drive to modernize from a similar starting point, at approximately the same level of development, but the results achieved by both countries could not be more different.

Since the 1990s, Japan, along with the rest of the world, has undergone periodical recessions and financial crises. On 21 March 2011, the country was devastated by a catastrophic earthquake, *tsunami*, and nuclear power plant meltdown. In the last few decades the political parties of Japan have proven incapable of forming stable governments, of following successful economic policies, and of dealing with corruption and scandals. Japanese society is rapidly aging and the future looks increasingly insecure. Japan no longer perceives itself as a successful society, but rather as an “ailing” one. However, from a Bulgarian perspective, things look somewhat different. Despite the difficulties it faces, Japan is continuing to seek solutions to its problems, and is still among the most developed countries in the world. Hence, Bulgaria can safely follow Japanese social practices that have proven successful.

The Japanese experience in the last two decades demonstrates that in our contemporary postmodern world, a society cannot be looked upon as “successful” in the same way that this was possible in the 1960s, 1970s, and 1980s. Today’s postmodern societies do not assess themselves as “successful”; rather, “success” is looked upon as an illusive dream typical of the second half of the twentieth century. In our world here in the middle of the second decade of the twenty-first century, it is more appropriate to say that certain practices and experiences have proven their efficacy and can be followed and relied on for positive results.

REFERENCES

Clarke 2003

David B Clarke. *The Consumer Society and the Postmodern City*. London: Routledge, 2003.

Keliyan 1996

Maya Keliyan. "Farm Culture and Rural Development in Bulgaria and Japan: A Comparative Perspective." *Swiss Journal of Sociology* 22:2 (1996), pp. 385–411.

Keliyan 1999

Maya Keliyan. *Yaponiya i Bulgaria: Modernizatsiyata, srednite sloeve i selskite obshtnosti* [Japan and Bulgaria: Modernization, Middle Strata and Rural Communities]. Sofia: M-8-M, 1999.

Keliyan 2008

Maya Keliyan. *Yaponiya i Bulgaria: Razsloenite modeli na potreblenie* [Japan and Bulgaria: Stratified Consumption Patterns]. Sofia: Valentin Trajanov, 2008.

Keliyan 2011

Maya Keliyan. "Kogyaru and Otaku: Youth Subcultures Lifestyles in Postmodern Japan." *Asian and African Studies* XV:3 (2011), pp. 95–110.

Keliyan 2012a

Maya Keliyan. *Consumption Patterns and Middle Strata: Bulgaria and Japan*. University of Bologna; Italy: PECO (Portal on Central Eastern and Balkan Europe), 2012. <http://www.pecob.eu/Consumption-patterns-middle-strata-Bulgaria-Japan>.

Keliyan 2012b

Maya Keliyan. "Postmodern Japan Middle Class Related Mythology and Nostalgia." *Slovak Journal of Political Sciences* 12:2 (2012), pp. 91–107.

Ministry of Economy, Trade and Industry

Proposal of the Private-Public Expert Panel on Creative Industries. Ministry of Economy, Trade and Industry. http://www.meti.go.jp/english/press/2011/0512_02.html (accessed on 6 July 2015).

Tsang 2012

Steve Tsang. *The Vitality of Taiwan: Politics, Economics, Society, and Culture*. Hampshire: Palgrave Macmillan, 2012.

A Style of the Literati: Reconsidering the Aesthetics of *Wabi* and *Sabi* in World Culture

Emilia Chalandon

In his impressions on the exhibition of two contemporary Japanese artists in Paris, the writer Genyū Sōkyū mentions the absence of Plato's "idea," the "search of something immutable and eternal," in Eastern thought. Such a quest for "the transience and void of something that came before this concept of 'idea'" in Japan he relates to "what the Greeks called *physis* or simply Nature," yet a Nature which "is not wilderness." Linking this notion of transience through the Buddhist concepts of *mujō* and *engi* with the aesthetic concepts of *mono no aware*, *wabi-sabi*, and *fūryū* all together, Genyū points to the "uniqueness of Japanese expression" and thus determines the exhibition in question as an expression of "Japanese-ness."¹

Yet, does contemporary Japanese abstract art sprout directly from the roots of *mono no aware*, *wabi-sabi*, and *fūryū*? When discussing this question with one of the Japanese artists in the above mentioned exhibition, Makoto Ofune, he admitted being influenced rather by Western trends than by Japanese tradition and I think this influence is relevant both to artists looking for the depths of transience and to those like Okamoto Tarō searching for "Japanese-ness" in pre-*wabi* times. Thus I came to a reconsideration of the place *wabi* and *sabi* occupy in Japanese aesthetics as well as the way this aesthetic influences the Japanese sense of beauty. This reconsideration became the object of research during my stay at Nichibunken in 2014. My aim was to look at the Japanese apprehension of beauty from the perspective of the whole, in its dynamism and chain-like transformation.

It is true that the Japanese, since the introduction of Buddhist thought, have always been very sensitive to the impermanence and transience of things, and although philosophically there might be some debates, saying that Buddhist philosophy contrasts with that of Christianity in this respect should not be a huge mistake. Yet, as far as contemporary Japanese art is concerned, the question is whether the idea of transience is inherited through direct transmission of Japanese tradition or is a returning influence from abroad.

1 Genyū Sōkyū, contribution in *I Puissance*, pamphlet of the exhibition of Tomoko Ishida and Makoto Ofune, 2009.

As Alexandra Munroe points in the Introduction to *The Third Mind*, “the use of Asian art and thought to inspire new forms of artistic expression is one of the greatest forces in modern and contemporary art in America.”² It seems that “from the 1840s, when Ralph Waldo Emerson and Henry David Thoreau’s readings of the Bhagavad Gita, the Lotus Sutra, Tao Te Ching, and the Upanishads influenced their quests for a wholeness of self in relation to cosmic nature, artists deliberately abstained from European empiricism and utilitarianism and looked toward Asia to forge an independent artistic identity that would define the modern age—and the modern mind—in a new transcendentalist understanding of existence and consciousness.”³ And within the stream of Buddhist philosophy flowing into the West at that time, the influence of Japanese Zen was undeniably increasing. Zen conquered the West not only with its philosophy, but also with its aesthetics, the main feature of which was related to the aesthetics of *wabi* and *sabi*. It did not gain immediate acceptance, though.

Edward Morse wrote, “Among the kinds [of pottery] most prized by the Japanese are those which come with the general name of Karatsu. Here certainly could be no greater contrast than that shown between the exquisite white porcelain and the rough, dark, and archaic looking bowls and jars of Karatsu. Of a later date may be considered the work of Goroshichi and the products of Kameyama, Bōgasaki, Utsutsugawa, and others, among which are found many pieces of interest.”⁴

Judging by the description of the Morse collection and other Western sources, *wabi* style pottery was purchased at the time as something valuable in Japan, yet not as something exactly liked and admired. Morse also mentioned the demerits of the “archaic appearance” of the Karatsu pottery, as well as its “hard, rough clay, which presents in many pieces a resemblance to cast iron.” If one admits that “there is a certain charm about it,” the person should study in order to feel that charm.

During that time, what gained the admiration of Western appreciators were the striking ukiyo-e prints, the unusual forms of kimono patterns, and the high quality of Japanese porcelain, all of these interpreted according to the principles of taste in the West, and inspiring the French Art Déco style. The *wabi* style needed some more time and knowledge of Buddhist ideas so that its charm could be appreciated.

2 Alexandra Munroe, “Introduction” in *The Third Mind: American Artists Contemplate Asia, 1860–1989*, on occasion of the exhibition of the same name, Guggenheim Museum, 2009, p. 21.

3 Ibid.

4 Edward S. Morse, *Catalogue of Japanese Pottery*, Cambridge: Boston Museum of Fine Arts, 1900.

Yet there came a time when people in the West were suddenly strongly attracted by *wabi* aesthetics. This was right after World War II. There is little wonder in this, as the War created in Europe and in North America the same spiritual turmoil as the one created in Japan by the long and severe internal-war period at the time when *wabi* philosophy fused with the Chinese Chan to give birth to Zen aesthetics. It happened that this aesthetics spread in the West exactly through Zen and that is why it is still often mistaken for and thoroughly associated with it.

The expanding democratization in Japan itself after the War opened the possibility to reach up to what was till then a quite restricted high-class culture and in this respect *wabi-sabi* aesthetics—with its restriction to an elite with the means to afford it, the intelligence to understand it, and the spiritual predisposition to accept it—became the new ideal for spiritual quality.

Yet we can hardly say that the aesthetic preferences of the Japanese masses after the War were for *wabi* ideals. Its popularization was rather limited to young women of well-off families, who would study tea ceremony with the aim to become refined ladies hoping for a good marriage. Thus, *wabi-sabi* aesthetics probably entered more and more Japanese homes through the tea-ceremony education of their daughters, yet preserved a very special form of elitism. On the one hand, it was evident on the trivial, materialistic level, insofar as not all who took lessons could afford to purchase more than the minimum of the variety of hugely expensive tea bowls and other utensils entailed. On the other hand, it was elitist also on a spiritual level, as the basic movements could be memorized with lessons, but enjoyment of the depth of *wabi* and *sabi* through the tea ceremony depended on much wider education and involvement. So the more young ladies studied tea ceremony, the more most of them found it difficult to understand and enjoy, and eventually abandoned any interest in it. As tea ceremony was the representative of the *wabi-sabi* style which reached the most popular level, we can imagine thus how less spread were other employments of this style, like Noh plays, ink wash paintings *suibokuga*, the dedication to a simple life-style devoted to poetry and art, and so on. In reality, the core of *wabi* and *sabi* was wrapped even more than in the past in the mystery of the unapproachable for the uninitiated, of something spiritually too high and too deep in terms of sensitivity.

It can be said, actually, that the elitism of the tea ceremony was an asset which corresponded to a display of opulence. It is usual for wealthy people all over the world

to show off in a flashy way, the targets being obviously attractive items, like precious metals and stones, or objects of art that are not only expensive, but also easy to appreciate from first glance. This creates an elitism based on materialistic value. With the aesthetics of *wabi* and *sabi* the value shifts to the level of intelligence and even higher—to that of refinement. Proclaiming a contempt for obvious beauty and decoration (often described as an aim at shabbiness and even poverty), this style valued materials less flashy yet no less expensive; its rough and simple design cost often more than a rich decoration with precious stones. The value in this case was often restricted only to the eye of the connoisseur. The display of materialistic power was present again, yet the elite circle was thus further limited, excluding not only those who cannot afford it, but also those who cannot understand. In other words, the few “chosen” felt still more exceptional as they were perceived as not just people of means but also of knowledge. This manner of showing off not to just everyone but to a special circle thus doubled the criteria for appreciation and with it, the pleasure of the display.

Such a kind of refined elitism lay at the base of modern art and it seems to me to be a side of the influence of *wabi* and *sabi* in the Western world after the War. The difference with the situation from before pre-War Japan was that the elite who appreciated *wabi-sabi* aesthetics changed. Although it was never linked with cheap prices or popular culture, the materialistic aspect was overcome by an abstract one, the elite of knowledge gained over the elite of wealth, and connoisseurs emerged from all levels of society. Yet it did not become a leading feature of Japanese art right away, as it is, we might say, today.

Ever since the Meiji period and especially after the War, many Japanese artists were very much concerned with proving themselves to the world in Western terms. To do so they were either exploiting the techniques and avant-garde ideas spread in the West, or, according to these ideas, they were looking deep into the pre- and early historic traditions of their people, like the painter Okamoto Tarō. Also, the *wabi-Zen* legacy was for them what *miyabi* beauty had been for the warrior class—the essential values of the previous, no longer acceptable, government.

Thus, the appreciation of *wabi* and *sabi* aesthetics in Japanese art had to reenter Japan during the 1970s from the West, where leading intellectual and artistic circles had by then begun to embrace some of its principles. That is when, after such a round-world voyage, *wabi* and *sabi* found new ground in the art of design and gave birth to the famous contemporary “Japanese style.” Through it, this beauty was newly perceived in the West,

this time on a much larger scale than before. Thus the time came when architects like Andō Tadao would make amateurs of art travel half the globe with the main purpose to visit the spaces they had created, and others, such as Sejima Kazuyo and Nishizawa Ryūe, would build admired structures not only in their home country but also in Europe and America.

韓国における日本研究——陶磁工芸を中心に

朴 正一

韓国は1945年に独立し、1950年に朝鮮半島の動乱により、国の生産基盤が壊滅的な被害を受けたが、1970年代から始まる国家再興のための努力により、「漢江の奇跡」と呼ばれる経済産業の発展を成し遂げたことで有名である。

それとともに、教育や学問分野への関心も向上し、70年代に入り、日本に関する研究も行われ始めた。大学教育においては、60年代からソウルの韓国外国語大学や国際大学に日本学科が設けられ、のちに大邱の啓明大学、釜山の国立釜山大学、釜山女子大学などに日本学科が設置された。当時、大学院の修士課程は、韓国外大、啓明大など数か所にしかなかった。80年代、東国大学に初めて日本学研究所が設置された。

1980年代から、日本語を教える高校が急速に増加し、大学にも日本語を教える学科が増え続けた。現在、4年制大学は170校をはるかに超えているが、その中で日本語科、日語日文学科、日文学科を設置している大学は100校以上ある。学科名に「日本学科」という名称を持つ大学は一時10校近くあったが、2000年以降は減少傾向にある。韓国の大学は学内の統廃合が急速に進んでおり、学科名が多様化して、「日本語科」も減少している。

過渡期を過ぎて、状況が安定するまでにはまだ時間がかかりそうだ。日本学を学ぶ大学院は、全国において修士課程だけでなく、博士課程も多く設置され、その数は驚くほどである。また、日本関係の学会も、初期の「日語日文学会」と「日本学会」だけの二極構造から、全国規模の学会が地方に複数できた。さらに、大学の10余りの研究所が、韓国科学財団の公式認定を受けた論文集を発行し、日本研究の量と質はかつての時代とは比較にならないほど進歩している。

韓国における日本学では、日本のすべてを学習・研究の対象として包括的に捉えている。浅く広い傾向から、より深化したものになったのは、90年代もかなり過ぎた頃からであり、特に日本の新しい研究方法を学んだ若い研究者が増えてきた。しかし、成長の期間が短いため、日本研究の中で注視されていない分野があり、その一つが陶磁器関係の研究である。

韓国の陶磁器研究は、伝統的には朝鮮の官窯の流れがメインであり、民窯の発達も注目されている。一方、日本に伝来したいわゆる「粗質白磁」は考察の対象になることはあまりなかったが、広い文化史的観点からそれに言及することは可能なはずである。考古学や美術史などの観点からみれば、高邁純潔を求める儒教思想の影響を長く受けたため、高麗青磁を経た後、朝鮮白磁としてはより純白なものを目指す陶磁器が作られ続けた。それがために、隣国日本に伝来した陶磁器に対する研究に深い関心に向けることはほとんどなかった。その傾向は、15、16世紀の陶磁研究において特に強いのではないと思われる。

例えば、釜山の草梁の和館の再検討は、20世紀初期に浅川伯教の「釜山窯と対州窯」によって始められたが、半世紀以上過ぎてても日本側からの研究が主であった。モノ・人・情報の移動する現代の学術研究では、外国研究者を交えた共同研究と、充実した情報の共有は重要である。集学的 (multi-disciplinary)、学際的な (cross-disciplinary, inter-disciplinary) 情報通信技術 (ICT) は、陶磁器文化の研究調査にも活用する必要がある。

韓国側から見た朝鮮陶磁器と日本との関係については、壬辰・丁酉の大戦後の朝鮮捕虜に関する研究や、北九州を中心とした陶磁器と朝鮮の陶磁器との関係をテーマにした論文がいくつかあるが、非常に少ない。陶片の発掘調査では、日本との比較研究はほとんどない。近年、韓国での発掘調査が増え、ある程度の成果も出ているが、全体として、発掘調査の件数は少ない。例えば、釜山においては1970年代以降、特に80年代から急速な市街化が進んで、所謂、埋蔵文化財が69箇所、年間の発掘数は約30件に過ぎないのが現状である。

また、伝世品に関しては、その実態が完全に把握されていないのが実態であり、比較的な研究が期待される。さらに、茶礼の中の茶器と、茶の湯で使われる茶道具としての茶碗との関係性、それらを支えた社会経済的側面からのアプローチも大切だと考える。

次に、韓国の陶磁器教育に関しては、日本と大きく違い、初中等教育機関だけでなく、大学の学科で陶磁器を教える機関も多い。例えば、ソウル地区では梨花女子大学、慶熙大学、国民大学等、釜山地区では東亜大学、釜山大学、新羅大学等、また他の地区にも陶工育成機関や陶芸を学べる教育機関がある。その中には、梨花女子大学のように大学院課程で陶芸を学べるところもある。

韓国の焼き物産業は、赤焼きを最初として4千年の歴史があり、高麗期の青磁、朝鮮期の白磁など優れた作品を産出してきた伝統を継承しようとする高い理念がある。陶磁器の町である利川は、2010年ユネスコ工芸分野でクリエイティブ・シティに認定され、韓国の沈滞した陶磁器生産を復興させる契機となっている。日本の陶磁器生産は、17世紀から始まる磁器生産を出発点として、有田、伊万里、薩摩など世界的なブランドを作り出し、近現代まで息の長い生産活動を行ってきた。韓国の過去の輝かしい栄光それ自体は高く評価されているが、近現代以降の停滞からの脱却は容易ではない。このような状況下で、技術的にも美術的にも日本からの文化受容が盛んに行われている。

韓国の自国文化としての陶磁器と日本の陶磁文化を比較研究する時、いわゆるモデルと複製、文化の相互影響を合わせ鏡として、より創造的な見地から研究する動きがある。昨今、新しい研究者が中心となって日本の研究者と少しずつ行われ始めた共同研究により、史料的記述が少なく、大きな限界を持つこの分野でも、韓国と日本との全体的様相を浮き彫りにすることができると考えられる。

具体例を示すと、日本の茶の湯で重宝がられる高麗茶碗の多くが、16世紀朝鮮の南部地方で焼かれたものと考えられる。当時の朝鮮で焼かれた白磁や粉青沙器の一部は日本に伝来し、数寄者や武将に好まれ、侘び茶の世界で茶器として大切なものと見られた。その後、注文茶碗という形で、組織的に日本に持ち込まれるようになった。

その中で伝世品の「井戸茶碗」は特別な位置を占めている。現代韓国の陶磁器の見方からすると、すべてが「粗質白磁」の中に分類されている。あるいは、「軟質白磁」と捉えられることもある。言語の違いがあるため、日本研究者の間に、次のような用語の差異がある。

韓国語	日本語
粉青瓷	粉青沙器、三島、粉引、刷毛目
青画白瓷	青画白磁器、青花白地
鉄画	鉄絵
銅画	辰砂
熊川サバル	青井戸

以上のような差異は複雑な課題を含んでおり、今後の検討が必要である。ただし、日本語のひらがなによる韓国語表記は、韓国の言語習慣を尊重し、韓国の伝統文化を考慮しながら、その整合を図らなくてはいけないので、研究課題の一つである。

最後に、朝鮮陶磁器の編年史については、日本側では浅川伯教の5期説、奥平武彦の2期説、韓国側では金元龍の2期説、鄭良謨の3期説、姜敬淑の4期説などがある。昨今の研究調査の結果、3期説が次第に有力になりつつある。このような全体的な大きな流れの中で、茶の湯で取り立てられたいわゆる高麗茶碗は16世紀から18世紀以前までに作られたものであり、井戸茶碗は16世紀に作られたことも次第に明らかになりつつある。ただし、調査資料が極めて乏しい韓国において、古窯地は明らかになりつつあるが、井戸茶碗の陶片はまだ発見されていない。今後の考古学的調査結果が期待される場所である。

また、白磁といっても、実際には枇杷色もあれば、アイボリーもあり、青もあれば、黄色もあり、色彩一つをとっても多種多様である。これら全部を包括して呼称しようとしても、その指し示す対象は非常に広範囲であり、造形的にも自由な創造性と魅力に富んでいる。

昨今、マルセル値を使って表記するなど、近似色を釉の発色や胎土の色調の記載に使用している。科学的に色彩を捉えようとしているが、例えば、10Y6/2と7.5Y6/2の違いは何かと言えば、オリーブ灰色と灰オリーブ色の違いということになり、人間の色彩感覚とは少し距離がある。このような実態の本質・意味・特徴に対する究明はまだ充分になされていないように思う。今後の研究成果に期待したい。

Europe

スウェーデンの日本研究

トウマン武井 典子

海外での日本研究は「日本学（ジャパノロジー）」として、日本語・日本文化・日本史・宗教・社会など各分野の日本に関する研究としてスタートした。スウェーデンでは、まずストックホルム大学で1963年に日本語教育が始まり、1975年に教授職ができ、大学院が新設された。その後、ヨーテボリ大学で日本語教育が始まったのは1974年で、1996年には教授職が新設された。他のヨーロッパの国に比べてスウェーデンの日本語教育、日本研究のスタートはかなり遅かったと言える。各地のカレッジ（ヒューグ＝スクーラ）で日本語教育がスタートして、経済学部や工科大学と共催のコースが全国にいろいろとできたのも1980年代に入ってからのことだ。

日本語教育は前述のようにスウェーデンの北から南まで各地の大学、カレッジにあるのだが、教授職を持つのはスウェーデン首都にあるストックホルム大学と西海岸にあるスウェーデン第二の都市ヨーテボリのヨーテボリ大学だけだ。したがって、日本語・日本学として博士課程があるのもこの二大学だけなのだ。現在、日本語教育はルンド大学にもあるが、ルンド大学の日本語科は2006年の大学改革の結果、大きな言語文学センター（SOL）に統合された。そのため、博士論文は一般言語学や文学、文化研究論文として、特に日本語や、日本に関する問題について焦点を当てる、というかたちでそのセンターから提出されることになる。

スウェーデンの日本学は、日本古代の母音について博士論文を書いた初代ストックホルム大学教授、趙承福教授の言語研究からスタートした。1975年にストックホルム大学に大学院が新設されて以来、研究テーマは言語とともに文学研究が中心となった。これはヨーテボリ大学でも同様で、言語・文学研究が中

心だ。しかし、現実には早い時期からテーマの選択はかなりリベラルで、院生自身の関心を尊重するテーマが選ばれている。ちなみにストックホルムで博士号第一号の論文は1981年の古代の部民制についてだった。言語、文学以外ではこれまで政治、文化といった分野の論文が出ている。

1980年代には日本経済への関心から、スウェーデンでも「地域研究」への関心が高まり、ストックホルム大学、ヨーテボリ大学、ルンド大学にそれぞれ地域研究所が新設された。ストックホルム大学には「太平洋研究所 (CPAS)」が新設され、政治、社会など学際的な研究が行われた。後年は「平和研究」の色彩が濃くなり、日本というより、他のアジア諸国研究の比重が大きくなった。残念ながらこの研究所は数年前に閉鎖されて今日に至る。

1997年には政府の要請により、ルンド大学に「東アジア・東南アジア研究所」が設置された。スウェーデン国内のこれらの地域研究を奨励するためだった。この研究所は現在も研究活動を続けていて、日本・中国・東南アジア専門の研究者がいる。ヨーテボリ大学にも「アジア研究センター」があるが、現在はグローバル研究に吸収され、スタッフを常時置くには至っていない。80年代以来奨励された地域研究と言語学科との緊密な研究提携は、現在でも求められているのだが、実際にはなかなか難しいところがある。

2000年に入ってから、スウェーデンの大学組織はボローニャ方式に統一された。それに伴って、各大学で組織再編成の動きがあった。大学によりその内容が違うのだが、ウプソラとストックホルムに比べると、ルンドとヨーテボリには大きな変化があった。ルンド大学では2006年、ヨーテボリ大学では2009年に文学部の再編成により、日本語科が文学部内の大きな学科の一部となった。ルンドは前述のように言語と文学がセンターとして一つになり、ヨーテボリでも日本語科はスウェーデン語以外のすべての言語と一緒に、「言語文学学科」に所属することとなった。ちなみにこの学科は文学部内で最も大きな学科だ。これにより、ヨーテボリはそれまであったアジア・アフリカ語学科の時代に終わりを告げた。

大学改革とともに各大学のプロフィール強化が求められた。ヨーテボリでは新しい言語文学学科の研究プロフィールとしていくつかの研究テーマが設定された。ちなみに、「言語における普遍性と多様性」「言語と言語習得」「人生を語る—ライフ・ライティング」「ポピュラー・カルチャー、ポップ・カル

チャー」「トランス・カルチュラルイティー、翻訳と伝達」が現在も続いている研究テーマで、ヨーロッパ、英米、ラテンアメリカ、ロシア、東アジア、中近東、アフリカといった諸国の言語・文学研究者がこれらのテーマでセミナーを開き、外部からの講演者を招待し、論文集を刊行している。上記のテーマは国際的な日本研究の動向とも連鎖していて、特に文学は学際的な文化研究の側面を強く持っている。

1990年代からは特に、国際的な大きなプロジェクトを諸基金が奨励する傾向にある。スウェーデン内だけでも他大学の研究者との協力が要請され、できる限りの国際的なネットワーク作りが奨励されている。例えば、1990年代後半にスタートした翻訳をテーマにしたプロジェクトでは北欧の諸大学から言語・文学研究者を集めて、多くの Ph.D. 取得者を輩出した。その後、1990年代終わりから2000年代前半にかけても、世界文学史の国際的プロジェクトが、北欧を中心に国際的な研究者を集めるフォーラムを開催し、世界文学史の再考に貢献した。文学研究のために個人プロジェクトで研究費を獲得するのは非常に困難になっている。こうした傾向とともに各大学がそれぞれのプロフィールを強化することを要請されると、以前のようにテーマ設定に院生の意志を尊重することは難しくなる。日本関係専門の Ph.D. 取得者は、これまでも多くはないが、これからはさらに減るだろうと予測される。

ストックホルム大学日本学科で政治学分野のテーマにより Ph.D. を取得した研究者が2、3人いるが、現在、諸研究機関で研究活動が続いている。例えば、スウェーデンではごく珍しい私立のストックホルム商科大学欧州日本研究所と、外交政策研究所 (UI) に所属している。これはストックホルムの日本語科がジャパノロジーの性格をまだ強く持っていたため、彼らも政治的テーマで博士号を取得できたわけだ。今後は院生ポストをめぐり他の政治学の学生と競争することになるので、日本をテーマにして博士号を取ることはこれまでより難しくなるだろう。ちなみに、商科大学欧州日本研究所には現在、院生とポストクのスタッフがいて日本経済の研究を進めている。

その他、スウェーデン各地の大学の社会学科や文化・映像関係の学科、文化人類学などからも日本関係の Ph.D. 取得者が出ている。彼らは大学に所属する研究者となったり、あるいは図書館やジャーナリズムの世界で仕事をしたりしている。

最後に、スウェーデンの日本研究に見る将来の展望だが、これは多くの他の言語状況とも連携していて、大学内における文学部自体の位置にも左右される。必ずしも明るいだけではないのだが、日本研究者養成に必須の日本語教育の面では、各大学の日本語コースはスウェーデン人学生に変わらぬ人気がある。また、大学協定などによって日本で学ぶ学生が増えているので、日本語能力は以前とは比較にならないほど高くなっている。国際的な研究者の流動性も高くなっているので、こうした学生の中から将来優秀な日本研究者が誕生することを願ってやまない。

リトアニアにおける日本研究——歴史・現状・課題¹

高馬 京子

はじめに

リトアニアというと、日本ではナチスドイツの迫害から逃れたユダヤ人に日本の通行査証を発給した杉原千畝の名をまず思い浮かべる人も少なくないだろう。リトアニア観光局調査によると、2012年は、年間約1万人弱の日本人観光客が訪れたといわれているが、日本人にとってまだリトアニアは、それほど馴染みのある国ではないのではなかろうか。

バルト海に面するバルト三国の一番南に位置する国リトアニアは、14世紀にはリトアニア大公国としてバルト海から黒海に至る領土を持つ大国であったが、現在、面積約6.5万km²、人口約297万人、在留邦人69名（2013年現在）という小さな国である。1236年にリトアニア大公国が成立した後、1336年にリトアニア・ポーランド王国成立、1795年にロシア領となり、第一次世界大戦後に独立したものの、1940年にはソ連に編入されるなど、近隣大国との緊張関係に長期にわたり直面してきた。1990年の独立回復後は、1991年10月10日に新たな外交関係を復興し、1997年1月に首都ビリニュスに在リトアニア日本大使館も開設した。NATOおよびEUへの加盟を2004年に実現し、2013年後半にはEU議長国にもなった²。そのようなリトアニアで日本研究がどのようになされてきたのか、以下に概観していきたい。

リトアニアにおける日本研究の第1期

ビルーテ・ライリヤネ（Birutė Railienė）氏によると、1891年に新聞 *Žemaičių ir Lietuvos apžvalga*（ジヤマイティス・リトアニアレビュー）に掲載された、日本におけるカトリック師団の活動についての情報が、日本に関する最初の記述とされている。その後、1900年までに、日本における信仰、詩、政治活動な

1 本報告は、2014年8月時点で調査した情報に基づく。

2 在リトアニア日本大使館情報 http://www.lt.emb-japan.go.jp/japanese/ryoji_j/anzen/keitai_lithuania.pdf (2013年11月22日参照)。

ど、日本に対する印象記として5つの記事が紹介されているとする。ライリヤネは、当時のリトアニア解放最高委員会委員長であり、1918年のリトアニア独立宣言の署名者、また技術者、教授であったステポーナス・カイリース (Steponas Kairys, 1879–1964) によって書かれた3冊の著書 *Japonija seniau ir dabar* (日本昔と今)、*Kaip japonai gyvena dabar* (日本人の現代生活事情)、*Japonų konstitucija* (日本の憲法) が、リトアニアにおける日本学最初の書であろうと指摘する³。日露戦争当時、リトアニアはロシア帝国に併合されていたが、日本勝利後の1906年(明治39年)、日露戦争でロシアを負かした小国日本に、帝政ロシアの支配下で独立への悲願を抱いていた作者は勇気づけられ、訪日経験のないカイリースがペテルブルグ、ビリニュスで収集した情報で執筆したといわれている⁴。

リトアニアにおける日本研究の第2期

旧ソ連時代は高等教育機関として、独立したアジア研究の教育機関を設立することがかなわず、当時日本学を含む体系的なアジア研究のためには旧ソ連の教育機関に留学するしか方法はなかった⁵。そのような状況下、ビリニュス芸術学院 (Vilniaus dailės akademija) では1977年以降、日本の文化・哲学・美学・芸術に関する講義がアンターナス・アンドリヤウスカス (Antanas Andrijauskas) によって開講される。その中から、中国画・日本画の伝統について研究したイェバ・ディヤマンテイテ (Ieva Diemantaitė) や、「メルロポン

3 Birutė Railienė, “Pirmosios žinios apie Japoniją lietuviškoje spaudoje. Stepono Kairio trilogija (1906 m.)” (リトアニアの新聞における日本に関する最初の情報ステポーナス・カイリースの三部作). In *Rytų Azijos studijos Lietuvoje/East Asian Studies in Lithuania*, ed. A. Zykas, Vytautas Magnus University, 2012, pp. 93–101.

4 ステポーナス・カイリースについて調べた日本人ジャーナリスト平野久美子の『坂の上のヤポニア』(産経新聞出版、2010年)による(62頁)。

5 ビリニュス大学アジア学センターホームページ <http://www.oc.vu.lt/en> (2013年11月22日参照)、および Dalia Švambarytė, “On the development of Japanese Studies at Vilnius University” in *Japan and Europe in Global Communication*, Mykolas Romeris University (K. Koma, G. Ciuladiene, 2014) を参照。ダリヤ・シュヴァンバリーテによると、1810年、ビリニュス大学に東洋言語学が開設され、1822年にアラビア語、ペルシャ語などが教えられるようになったものの、1832年に時のロシア皇帝によって大学自体が閉鎖され終焉を迎えた。アイヌ研究で知られるポーランド文化人類学者 Bronisław Piłsudski (1866–1918) もリトアニア出身である。また、ソ連時代もアジア研究は推進されなかったものの、サンスクリット語とリトアニア語の類似から、インド学が盛んであったことを指摘している (Švambarytė, 同上)。

ティと西田幾多郎」を考察した、書道家でもある元リトアニア文化大臣アルーナス・ゲルーナス (Arūnas Gelūnas) などの美学・哲学を専門とする後進が育っている⁶。

また、リトアニア東洋学会 (Lietuvos orientalistų asociacija) が1979年に発足し、ビリニュス芸術学院やビリニュス大学が中心となって、哲学・美学という分野における、西洋と東洋の比較研究コンフェランスが行われた。その会長を務め、ヴィータウタス・マグヌス大学の教員でもあったネイマンタス・ロムアルダス (Neimantas Romualdas, 1939–2009) は自らの日本への旅行を基に、日本の文化や芸術、伝統や風習に関する「印象記」として、*Gyvenimas ant ugnikalnio* (火山の上の生活、1984年)、*Pasaulis puodelyje arbatos* (茶碗の中の世界、1994年)、*Nemuno iki Fudzijamos* (ニヤムノ川から富士山まで、2003年)などをまとめている⁷。

リトアニアにおける日本研究の第3期⁸

A. 独立後の日本学

独立後の1993年、リトアニアの首都ビリニュス大学 (Vilniaus Universitetas) にアジアセンターが設立されたが、その設立に先駆けて、ビリニュス大学では、サントペテルブルク (旧レニングラード) 大学で日本学を学んだダリヤ・シュ

6 この記述は、2013年11月21、22日に筆者が行ったアンターナス・アンドリヤウスカス教授とのメールを通してのインタビュー、また、同氏の論文“Orientalistikos atgimimas Lietuvoje (1977–1992): orientalizmo transformacijos į orientalistiką pradžia” (リトアニアにおけるオリエント学の誕生 (1977–1992): オリエンタリズムから東洋学への変化の発端) in *Rytų Azijos studijos Lietuvoje/East Asian Studies in Lithuania*, ed. A. Zykas, Vytautas Magnus University, 2012, pp. 19–54に基づいている。

7 ネイマンタス・ロムアルダスに関する記載は、Aurelijus Zykas, ed., *Rytų Azijos studijų raidos Lietuvoje bruožai* リトアニアにおける東アジア研究の軌跡 (ibid, p. 12) に依拠する。

8 ビリニュス大学における日本学・日本研究については、2013年11月16日に筆者によるビリニュス大学、ダリヤ・シュヴァンパリーテに対するメールによるインタビューおよび Dalia Švambarytė, “On the development of Japanese Studies at Vilnius University” in *Japan and Europe in Global Communication*, ed. K. Koma and G. Ciuladiene (Mykolas Romeris University, 2014) を基にしている。また、ヴィータウタスマグヌス大学については、同大学アジア研究センターホームページ <http://asc.vdu.lt/> を参照。ミコラスロメリス大学については http://www.mruni.eu/lt/universitetas/struktura/azijos_centras/aktuali_informacija、および筆者の体験からの叙述である。

ヴァンバリーテ (Dalia Švambarytė) 現ビリニュス大学准教授らが1992年から日本語教育をスタートさせている。また、同アジアセンターではリトアニアで初めて、人文科学を中心とした日本学を含むアジア学プログラム学士課程が2000年に⁹⁾、日本専攻を含む現代アジア学修士課程が2006年にスタートしている。当初、日本語教育や日本語、中国語の古典テキスト読解が中心でなされていたが、近年は学生の興味に従って社会科学の幅広い領域へとシフトする傾向にある。また、シュヴァンバリーテが中心となり、学生とのワークショップを通して『漢り字典』を出版するなど、日本語教育に力を注いでいる。

1995年には、俳句研究者であるヴィータウタス・ドウムチユス (Vytautas Dumčius) 主導の下、クライペダ大学に東洋学センターが設立され、日本語・日本文化の授業が開講された。全学部共通自由選択科目としての日本文化講義は毎年80名から230名の学生が集まるほどの人気であったといわれている¹⁰⁾。

また、二つの大戦間にビリニュスがポーランド領となっていた際、当時首都であったカウナスにある、筆者の前任校でもあったヴィータウタス・マグヌス大学 (Vytauto Didžiojo Universitetas) では、1993–95年、現中部大学の小島亮教授によって「日本の歴史、文化、社会」の講義が、1996年にアリヴィーダス・アリシャウスカス (Arvydas Ališauskas) 講師¹¹⁾ 主導で、本格的に日本語教育が始められた後、2001年に、日本人外交官杉原千畝が亡命ユダヤ人に通過査証を発給したことで知られる旧日本領事館跡地に同大学の日本学センターが設置された。2007年9月に政治外交学部地域学科との協力の下、東アジア地域研究修士課程(政治学)を設置したアウレリユス・ジーカス (Aurelijus Zykas) がセンター所長となり、2009年には日本学センターはアジア学センターへと移行した。また、同センターは、2012年9月、人文学部との協力の下、「東アジアの言語文化」学士課程を開設し、現在に至っている。

9 そこに入学を許可された学生の推移は、2000年10名、2002年9名、2004年8名、2006年12名、2008年12名、2010年14名、2012年27名、2013年16名である。学士論文のテーマも文学、言語学、社会学と、人文科学が中心である。

10 2013年11月24日、筆者によるヴィータウタス・ドウムチユスへのメールインタビューを基にしている。

11 リトアニアで最初のリトアニア語-日本語の翻訳、日本語-日本文化教育の普及に貢献したことで、リトアニアの民間人としては初めての旭日小綬賞を2012年に叙勲している。

ミコラスロメリス大学では、2013年2月にアジアセンターが開設されたのを機に、日本語・日本学を含む東アジア文化などの選択科目の設置、大使館の協力の下、茶道、書道、和紙作り等、教員・学生向けの日本文化ワークショップの開催、日本からの招聘教授の集中講義、国際交流基金助成による日本からの招待講演者（コミュニケーション、政治国際関係、経済学、言語学、文化学）を招聘してのコンフェランス「グローバルコミュニケーションにおける日本とヨーロッパ」の開催（2013年11月7日-8日）および出版等の諸活動を通して、日本学を中心としたアジア学課程への準備がなされている。

以上見てきたように、リトアニアでは、日本学という独立した形ではなく、アジアセンターの中の一環としての日本学という傾向が強い。日本学関連の教員は、現在ビリニウス大学に7名（日本文学、日本語学、美学、哲学など）、ヴィータウタス・マグヌス大学に4名（日本語学、政治学など）、ミコラスロメリス大学に2名（2013年11月現在）である。

また、日本語学習推進のため、日本語スピーチコンテストが2004年にビリニウス大学で開催された後、2010年から国際交流基金の助成を不定期に得ながら、毎年、ビリニウス大学、ヴィータウタス・マグヌス大学で交互に開催されている。また一般向けには、在リトアニア日本大使館主催定例俳句コンテストも、*Paparčio šventi ženklai (Bracken saint signs)* (Klaipėdos universiteto leidykla) という日本の俳句選集を翻訳紹介しまとめた著者、前述のヴィータウタス・ドゥムチュスなども参加し、定期的に開催されている。

B. 独立後の日本研究

独立後の1991年にリトアニア東洋学会の会長職をネイマンタス・ロムアルダスから引き継いだ前述のアンターナス・アンドリヤウスカスは、*Tradicinė japonų estetika ir menas*（伝統的日本の美と芸術）という著作の中で、ジャポニスム現象および、その西洋文化やリトアニアの芸術家（M.K. チュルリョーニスやフルクス運動のJ. マルチューナス）に与えた影響を分析している。さらに、リトアニア系アメリカ人で、禅仏教と現象学の関係を研究するオハイオ大学名誉教授のアルギス・ミツクーナス (Algis Mickunas) も、リトアニアで2012年に *Per Fenomenologija į Dzen*（現象学から禅へ、Vilnius: Baltos Lankos）を出版している。その他、リトアニアでの日本関連の研究者（博士）は、ダリヤ・

シュヴァンバリーテ（日本文学における中国文化の影響）、ラムーナス・モティヤカイティス（Ramūnas Motiekaitis、日本の哲学・音楽）、ユルギータ・ポロンスカイテ（Jurgita Polonskaitė、日本の現代文学）、アウレリウス・ジーカス（政治学）、アンドリユス・タモシャヴィチユス（Andrius Tamoševičius、現象学と禅の美学の比較研究）等である。

また、2000年以降、アジア関連の学術雑誌も以下の通り出版されるようになった。

Acta Orientalia Vilnensia. Audrius Beinorius (editor-in-chief). Vilnius University Press (from 2000).

Rytai-Vakarai: komparatyvistinės studijos (East-West: Comparative Studies).

Antanas Andrijauskas (editor-in-chief). Institute of Culture, Philosophy and Art Press (from 2000).

International Journal of Area Studies. Aurelijus Zykas (editor-in-chief). Vytautas Magnus University Press.

また、これら学術雑誌の中で日本特集が組まれたものも含め、出版された日本関連の書籍、および日本研究プロジェクトの成果としての主な日本関連研究書（単行本、論集のみ）は、以下の通りである。

Dalia Švambarytė. *Japonų-lietuvių kalbų hieroglifų žodynas* (Japanese-Lithuanian Character Dictionary 漢り字典). Vilnius: Alma Littera, 2002 (ISBN: 9955-08-130-9).

Acta Orientalia Vilnensia 6:1 (2005), Special Issue: Frontiers of Japanese Studies, ed. Kyoko Koma. Act of Conférence “Image of Japon in Europe.” Kaunas: Vytautas Magnus University, 2008（東芝国際財団助成事業）。

Kyoko Koma, ed. *Contemporary « Japon » seen from European Perspectives*. Kaunas: Vytautas Magnus University, 2009（東芝国際財団助成事業）。

Kyoko Koma, ed. *Japan as Image*. Kaunas: Vytautas Magnus University, 2010（国際交流基金助成事業）。

Dalia Švambarytė. *Intertekstualumas klasikinėje japonų literatūroje* [Reading the Intertextuality of Japanese Classical Literature]. Vilnius: Vilniaus universiteto leidykla, 2011.

- Kyoko Koma, ed. *Japan as Represented in European Medias: Its Analytic Methodologies and Theories—In Comparison with Korean Cases*. Kaunas: Vytautas Magnus University, 2011 (国際交流基金助成事業).
- Kyoko Koma, ed. *Acta Orientalia Vilnensia* 12:1 (2011), *Modern Japan and Korea Seen through Various Media*. Vilnius: Vilnius University, 2012.
- Kyoko Koma, ed. *Reception of Japanese and Korean Popular Culture in Europe* (1, 2). Kaunas: Vytautas Magnus University, 2011, 2012 (サントリー文化財団助成事業).
- Kyoko Koma, ed. *Development of “Japan” in the West: Comparative Studies*. Kaunas: Vytautas Magnus University, 2012 (国際交流基金助成事業).
- Kyoko Koma, ed. *Representation of Japanese contemporary popular culture in Europe*. Kaunas: Vytautas Magnus University, 2013 (国際交流基金助成事業).
- Kyoko Koma and Grazina Ciuladiene, eds. *Japan and Europe in Global Communication*. Vilnius: Mykolas Romeris University, 2014 (国際交流基金助成事業).

また、アジア関連著作、プロジェクトの成果において日本が論じられたものとして、以下の書籍が挙げられる。

- Antanas Andrijauskas. *Grožis ir menas. Estetika ir meno filosofijos idėjų istorija: Rytai–Vakarai* [Beauty and Art. History of Ideas of Aesthetics and Philosophy of Art: East–West]. Vilnius: VDA leidykla, 1995.
- *Civilizacijos teorijos metamorfozės ir komparatyvizmo idėjų sklaida* [Changing Theories of Civilization and the Spread of the Idea of Comparative Studies]. Vilnius: Gervėlė, 1999.
- *Orientalistika ir komparatyvistinės studijos* [Oriental and Comparative Studies]. Vilnius, 2001.
- *Lyginamoji civilizacijos idėjų istorija* [A Comparative History of the Idea of Civilization]. Vilnius: VDA, 2001.
- *Istorinė Rytų ir Vakarų civilizacijų santykių raida* [The Historical Evolution of Relations between Eastern and Western Civilizations]. Vilnius, 2002.
- *Komparatyvistinė vizija: Rytų estetika ir meno filosofija* [Comparative Vision: Aesthetics and Art Philosophy of the East]. Vilnius: KFMI I–kla, 2006;

Kultūrologijos istorija ir teorija [The History and Theory of Cultural Studies].

Vilnius: VDA leidykla, 2003.

— *Kultūros, filosofijos ir meno profiliai (Rytai–Vakarai–Lietuva)* [Profiles of Culture, Philosophy, and Art (East–West–Lithuania)]. Vilnius: Gervelė, 2004.

— *Neklasikinės ir postmodernistinės filosofijos metamorfozės* [Metamorphoses of Non-classical and Postmodern Philosophy]. Vilnius: Vilniaus aukciono biblioteka, Meno rinka, 2010.

Aurelijus Zykas, ed. *Rytų Azijos studijos Lietuvoje*. Kaunas: Vytautas Magnus University, 2012 (国際交流基金助成事業).

研究プロジェクトとして、ビリニュス大学アジアセンター主催のアジア学バルティック同盟 (Baltic Alliance of Asian Studies [BAAS]) の活動の一環としての「アジアにおける伝統知の体系」などもあるが、上記した成果論集に見るように、LIETUVOS MOKSLO TARYBA (リトアニア研究評議会) のみならず、国際交流基金、東芝国際財団、サントリー文化財団など日本の公私助成機関の日本研究活動への助成は重要な役割を占めている。このようなプロジェクトを通して、リトアニア内のみならず、欧州、日本の問題意識を共有する研究者ネットワークを国際的に形成できると同時に、国際的かつ学際的側面から、研究テーマを議論することも可能となるため、プロジェクトの実現を支援してくださる助成団体の存在はリトアニアの日本研究にとって大変心強いものである。

リトアニアにおける日本研究の今後の課題

独立後のリトアニア国内で本格的に日本語教育が始まって20年余り、そして、日本研究を体系的に学べるようになって10年となり、リトアニアの日本学・日本研究は今、発展途上の段階にあると言えるだろう。今後の発展のための現状の課題として筆者は以下2点を列挙したい。

1点目は、リトアニアにおける日本研究分野の拡張である。現状、日本に関する研究分野も研究者の人数もまだ限定的である。しかし、独立以前に旧ソ連で日本学を学んだ第一人者たちがリトアニアで育てている学生たちが巣立ち、日本の文部科学省等の留学助成制度を利用して、日本へ留学し、リトアニアに

における日本研究の分野もさらに広がってきている¹²。今後、日本研究をより深くそして拡大していくために、それらを推進する研究者や教育者の育成、また、日本研究を専攻した後の彼らの就職先の検討を考慮することなども課題として上がってくるだろう。

2点目として、中国をはじめとする他のアジア諸国の台頭を反映してか、東アジア、東南アジア、またインドまでを射程にいったアジアセンター、アジア学が主流となるリトアニアにおいて、いかに日本学を推進していくかということである。現在、日本学関連の博士論文を準備する場合は、政治学・社会学など、それぞれの学問、専門分野で日本を研究対象に選択するというケース、もしくは日本の大学に博士論文を提出するのが現状である。このような状況において、アジア学という枠組みで日本を学べるという国際性・学際性の利点も踏まえながら、アジア研究の中に埋もれてしまわない、リトアニアにおける確固たる日本研究を推進する意識を常に念頭に置いておく必要があるだろう。そのためには、日本、海外の研究機関とも提携しつつ、国際的・学際的な日本研究の交流を推進しながら、さらにリトアニアにおける日本研究を構築していく必要があると考える。

12 日本の国立大学を中心とした博士課程の学生の研究テーマは日本語、日本研究のみならず、自然科学、経済、芸術、ライフサイエンス、技術開発、海洋科学、E ビジネスマネージメントと多岐にわたっている(2013年11月30日付け在リトアニア日本大使館広報文化担当[当時]クリスティーナ・シモナイティエ提供データによる)。

Japanese Studies in Ireland

Aisling O'Malley, Louis Cullen, Donagh Morris

The Ireland Japan Association (IJA), concerned with inadequate resources for Japanese language education at third-level institutions, appointed a subcommittee in December 2012 to compile a report on the state of Japanese studies in Ireland and to make recommendations on necessary steps for improvement. The report adopted by the Council of the IJA in June 2013 was submitted to the Higher Education Authority (HEA). A deputation from the subcommittee was received by the HEA on 30 September 2014. The HEA gave an interim response; this slow progress reflects the pressures faced by the HEA, as well as the delicacy of the issue at hand. While the HEA has a far-reaching role, Irish universities value their autonomy. Perhaps more importantly, the likelihood of progress has been directly affected by severe cutbacks in state funding for higher education. This factor in particular works against funding for minority subjects, as universities seek to redirect resources towards other areas. The good news, however, is that the report seems to have led the HEA to initiate a study of minority languages at third-level education. A negative offshoot of this linking of Japanese to the much broader issue of minority languages in general is that the deliberation and decision making process will take far longer than is desirable.

It is not possible to present the IJA report in full here, as some of it is confidential. However, the key recommendations can be summarised as follows:

- (i) Funding should be confined to Dublin City University (DCU) and the University of Limerick (UL), the two centres of higher learning which at present provide four-year courses in the Japanese language. Any funding for expansion in four-year courses in other centres should be provided only if demand should expand;
- (ii) The two existing centres themselves require extra funding. DCU has a solid staff base, but the viability of the teaching at UL could be in danger if extra resources are not allocated;
- (iii) A full-blown four-year course in Japanese Studies (combining language and other topics) should be instituted, involving appointments of staff in human-

ities and social studies, and including the creation of one post at professorial level. The sub-committee report does not make any recommendations as to the physical location of this endeavour. But if not located in an existing centre, language teachers should be purchased from one of them. This would entail extra expense, but such costs would be smaller than if an entirely new language teaching unit were established.

The HEA has proposed a further meeting with the IJA subcommittee once the HEA's study of minority languages has expanded. It should be noted that, at this stage, reduced state funding for higher education rules out, at least for the mid term, any progress in regard to more expansive Japanese courses in Ireland. The introductory section of the IJA subcommittee report (dated 21 October 2014) follows below.

Introductory Section of Report by Subcommittee as Adopted by IJA Council

The Development of Japanese Studies in Ireland

- A. The challenge of Oriental Studies (para. 1)
- B. Japan's place in Irish perceptions and interests (paras. 2–8)
- C. Development of Oriental Studies (paras. 9–12)

A. The challenge of Oriental Studies

1. Oriental languages have had a very minor place in public attention in Ireland. Japanese did to a modest extent hold such a position in the late 1980s and 1990s, but on a lesser scale than Chinese does today, where the issue has been given added impetus by the establishment of Confucius Institutes. There is no questioning the value of Chinese (Mandarin); interest in it began late, and current interest is therefore doubly welcome. The mistake was made at an earlier date to concentrate exclusively on Japanese, just as now Mandarin is mentioned in current commentary usually to the exclusion of other East Oriental languages. The real case which has to be faced is that Ireland needs to develop Oriental Studies at large. This requires a balanced approach including the language most in demand at any point of time, a secure place for other languages which have an established place such as Japanese, and at this or at some later stage support for other East Oriental languages. Oriental languages are not essentially in competition with one

another. In general, a wider awareness of any one language makes it easier to achieve a balanced approach embracing Oriental Studies as a whole.

B. Japan's place in Irish perceptions and interests

2. The significance of Japan and of the Japanese language is too important to be allowed to slip entirely out of focus. The interest in China is both necessary and healthy in itself, but can have unintended results if it leads to ignoring the importance of Japan to Ireland. The problems of the decade of the 1990s and beyond have dimmed somewhat the image of Japan. However the vibrancy of Japan has been understated in much commentary. Moreover, there have been many recent stirrings within Japan that have potentially major significance for Ireland in both business and academic terms.

3. (i) *Economic issues.* In the mid-noughties the Japanese initiated discussion on the feasibility of a significantly improved trading relationship with the enlarging and integrating EU. The Authorities on both sides took the view that the shared values (human rights, democratic process, rule of law, market discipline) should allow for greatly improved economic and social interaction but a certain reluctance was evident in EU business/industry because of the administrative difficulties and non-tariff barriers impeding penetration of the Japanese market. An extensive scoping exercise of the issues involved was carried out over the past two years and the European Council decided in late November last year to authorize the opening of negotiations between the EU and Japan on an Economic Partnership Agreement ("EPA"). Under the Irish Presidency of the EU negotiations began in mid-April in Brussels.

4. Conscious of the potential for Ireland in an EU-Japan EPA, in recent months senior public and private sector persons have been convening to consider public and private sector initiatives in relation to Japan. This should include private sector institutional interaction (IBEC with Nippon Keidanren through Business Europe, and directly Dublin Chamber of Commerce with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry) and renewal of earlier public sector initiatives which had lapsed in recent years (engineering graduates' two year assignments in major Japanese companies; executive training programme of one year intensive Japanese language study in Japan followed by six months experience in a major Japanese company/institution; participation by mid-level managers

in the Industrial Cooperation Centre four month programmes on industrial technology and 'lean' production techniques in Japan).

5. The Japanese Authorities have cooperated with the European Commission in providing European Centres in four Japanese universities. Considerable interest in this initiative is evident in Japanese local authorities and it is likely that the recently established EU External Actions Services will seek to add to, or accelerate, progress in these Centres. Apart from sabbaticals by individual academics there has been little enough interaction between Irish and Japanese third level education. This is in contrast with the vigorous pursuit by Irish academic interests of connections/interactions with Chinese third level.

6. (ii) *Tourism*. While small compared with numbers from established centres in North America and Western Europe, the movement of people in both directions between Japan and Ireland is not insignificant, and has grown. On the estimate of the Japan Association of Travel Agents, the flow of tourists from Japan has fluctuated between 16,000 and 31,000 annually over a decade. In reverse, the number of Irish people travelling to Japan, as estimated by the Japan National Tourist Organisation, has fluctuated between 10,000 and 18,000 per year over the same period. As a very young branch of tourism between the two countries, this movement has a potential for further expansion.

7. (iii) *Cultural issues*. In terms of culture, literature and history a significant number of people in Japan have a keen academic interest in Ireland. The scale and range of this interest compares very well with interest in Ireland by major European countries. It can be measured in the regular publication of books and in a large annual output of articles on a wide range of topics, current, cultural and historical. In Japan the interest in Ireland is larger than that for other countries of a comparable size, and even bears some comparison with Japanese cultural interest in Britain. This disproportionate scale is due primarily to the attention devoted to Yeats, Joyce and Beckett, authors who have a large following in Japan. Yeats was at an early date recognised in Japan. This was initially due at the outset of the 1930s to Shotaro Oshima (who later also wrote a very substantial history of Irish literature); Joyce has a large following, and Beckett completes this remarkable pleiad whose appeal is world-wide. There are active academic societies in Japan for all three writers. Their appeal is helped by the fact that English, as easily the most widely

known western language in Japan, has helped to make them accessible. There is also, on a modest scale, an active interest in the Irish language, and a small number of Japanese scholars speak and read the language. A translation of a collection of poems by Nuala Ni Dhomhnaill was recently published and a wide-ranging and innovative study of Irish literature by Matsuoka Toshitsugu appeared within recent years, *Airurando no bungaku seishin: Nana seiki kara niju seiki made* (The Personality of Irish Literature: From the Seventh Century to the Twentieth).

8. From the Irish side the reciprocation is more muted in terms of literary and cultural themes (in part because of language problems), but at a more popular level it is both lively and growing nonetheless. Karaoke, sushi, manga, haiku, sūdoku are now not only familiar terms, but have their devotees. At a more scholarly level, an awareness of Lafcadio Hearn's role as an interpreter of Japan and of his place in Japanese appreciation of his writing has become widespread. Japanese art too has acquired an Irish interest, and, in part a consequence of the Chester Beatty Library, it has also a practical follow-up: a class in TCD draws regularly about 35 second-year students and 50 extra-mural students. A striking measure of the scale of the popular interest is afforded by the recent "Experience Japan," an annual event, attended in Farmleigh House, Phoenix Park, on 8 April 2013 by 25,000 people. This event, now in its fourth year, was organised through the cooperation of Dublin City Council, 3rd level Japanese Societies (including UCD, Trinity, and DCU) and the Japanese Embassy. It underlines the existence of a widespread interest and curiosity about Japanese culture, whether it be dance, language, food, arts, crafts, or fashion.

C. Development of Oriental Studies

9. In the case of Oriental language at large a combination of limited resources and a comparatively small student demand for serious language study means that the approach has to be at once economical and bold. The example of what happened in Britain in the case of "minority" languages, with the boom in Russian departments in the 1960s, and in Japanese departments in the 1980s, is salutary. Many departments have long since closed down (including what was in terms of resources an impressive department in Japanese Studies in Coleraine).

10. Hard studies in non-linguistic areas (meaning cultural or technical courses which require serious competence in an Oriental language) are negligible or non-existent in Ireland, though the Confucius Institutes, as they become established, may open a gateway for serious Chinese studies. The financial situation of universities offers little hope in the short or medium term of any improvement in support out of their resources. The Chester Beatty Library is of course a real asset. While it adds weight to prospects for Oriental Studies in Ireland without itself making an extra demand on public resources, the real problem is that competence within Irish universities to exploit its resources is limited.

11. The emphasis has to be on hard (i.e. linguistically demanding) studies. Otherwise there is the danger of various streams of Oriental Studies with soft and fashionable options coming into existence. This danger is notoriously well illustrated in many areas of non-linguistic academic studies at third level in Britain, with undemanding programmes and a large take up (precisely for that reason). In the case of Chinese studies, the Confucius Institutes, which have attracted comment (see “Confucius goes to College,” *Irish Times*, 8 September 2012), may give rise to some of these issues. The Institutes have been created by the Chinese government. This of itself in no way detracts from them or their work, but a distinction has to be drawn between a very understandable Chinese interest which may take the form of broad and popular courses to make China and its culture known, and the Irish interest in demanding programmes to create a small base of graduates, with real competence in an Oriental language (for academic purposes, diplomacy or business). These two things are not wholly in conflict, but the priorities are nonetheless different. While the Confucius Institutes provide initial funding, at the end of a short period the funding has to be taken over by the host countries. In other words, though welcome, they have very serious cost implications.

12. Serious language teaching is central to the development of Oriental Studies. But there is also a challenge for the provision of worthwhile non-linguistic courses necessary for the creation now or later of full four-year programmes in Oriental Studies, whether Japanese or Chinese.

Challenges and Perspectives: Japanese Studies in Bulgaria

Gergana Petkova

In the last decade a number of detailed articles were published on the topic of Japanese studies in Bulgaria,¹ so the aim of the following report is to give a brief overview of the history and the present state of Japanese studies, followed by a more detailed portrait of the current situation in Bulgaria in regard to Japanese studies, in order to outline the challenges facing specialists in this field.

More than one hundred years have passed since the first book introducing Japan and written by a Bulgarian appeared: the travel diary of the tradesman Anton Bozukov marked the beginning of a long period of active relations and exchange between the two countries. Political interaction between Bulgaria and Japan began in 1927, the first diplomatic relations were established in 1939.² In 1937 and 1938 the first literary translations of Japanese poetry (although not directly from Japanese) appeared, followed by an introduction to Japanese literature presented by Svetoslav Minkov in 1941.³ In this way political and cultural interactions went hand in hand from the very beginning.

In the following decades more literary works found their way to the Bulgarian public, while the 1970 Osaka World Exposition became a turning point in bilateral relations. Despite the Cold War and ensuing political differences, Bulgaria and Japan began

-
- 1 Boyka Tsigova. “20 Years of Japanese Studies Program at Sofia University: What we have done and what we must do.” In *Conference Proceedings Bulgaria-Japan-the World*, Sofia 2013; Gergana Petkova. *Promotion and reception of Japanese culture in Bulgaria*. Seijo CGS Reports N1. Tokyo, 2012; Petkova, Gergana ベトコヴァ・ゲルガナ. “Sofia Daigaku Nihongaku senkō ni okeru ibunka kan komyunikēshon nōryoku o sodateru katsudō/akutibitei” ソフィア大学日本学専攻における異文化間コミュニケーション能力を育てる活動・アクティビティ. *Kokusai Kōryū Kikin Budapesto Nihon Bunka Sentā 2013 hōkokusho* 国際交流基金ブダペスト日本文化センター2013報告書.
 - 2 Further reference on the topic in Evgeniy Kandilarov, „Поглед към българо-японските отношения след Втората световна война (Bulgaria-Japan relations after the Second World War),” *Evolution* N 6, 2005 and „България и Япония. От Студената война към XXI век (Bulgaria and Japan: from the Cold War towards 21st century),” Sofia, 2009.
 - 3 Further reference on the topic in Boyka Tsigova, “Ibunka no sokumen: Burugaria no Nihon bunka kan—Sono rikai to Nihon bungei sakuin no kaishaku o megutte” 異文化の側面: ブルガリアの日本文化観—その理解と日本文芸作品の解釈を巡って, *Bulletin of the International Research Centre for Japanese Studies* N 28 (2004), pp. 377–90; and Boyka Tsigova, „За превода на японска поезия в България (On the translation of Japanese poetry in Bulgaria),” *Panorama* 2005, pp. 145–53.

interacting regularly in various spheres such as technology, trade, and art; knowledge transfer and skills exchange that began in the 1970s are still flourishing to the present day.

The 1970s also marked the birth of the nucleus of Japanese Studies in Bulgaria, with the first specialists who graduated abroad returning to their home country and becoming the driving force in the teaching, research and promotion of Japan in Bulgaria. The past 40 years have seen the translation of many literary works, and research findings and essays on Japan have continued to foster awareness of and interest in Japan. As a result of the efforts of specialists, translators, researchers, journalists and writers, it is not an exaggeration to say that nowadays Japan occupies a very special place in the hearts of Bulgarian people.

Survey results on the image of Japan in Bulgaria support this sentiment.⁴ Asked to describe Japan and its people, respondents use only positive adjectives (such as exotic, gorgeous, harmonious and traditional with regard to the country itself, and disciplined, dutiful, hardworking and polite with regard to its people). These conclusions, as surveys show, are the result of a solid knowledge about Japan, with precise answers about traditional and contemporary Japanese culture, technology, lifestyle and thinking.

In response to the Bulgarian public's increasing awareness of and keen interest in Japan, more and more institutions are offering various ways to experience Japanese culture. Private language schools and state education institutions offering Japanese language courses⁵ are on the rise. There has been a proliferation of cultural experience clubs like Urasenke and Ikebana, martial arts associations, Internet forums for young

4 The current paper refers to a number of surveys conducted in the years 2010–2014 by the Japanese Studies Program at Sofia University: *The image of Japan in Bulgaria* (145 participants, general public, May 2010), *Are you familiar with the Japanese traditional culture and way of life* (87 participants, general public, November 2010), *Career path of Japanese studies graduates* (50 JS graduates, March 2011), *Hayao Miyazaki's anime art* (85 participants, JS students and general public, March 2014), *Japanese students' profile* (53 current JS students, May 2014). Further details on some of the results could be found in Gergana Petkova, *Promotion and reception of Japanese culture in Bulgaria*. Seijo CGS Reports N1. Tokyo, 2012.

5 In the capital city of Sofia there are three state schools with already well-established programs in Japanese language (“William Gladstone” School N18 with its Japanese Culture Centre, “Prof. V. Zlatarski” School N 138 with its Ikuo Hirayama Centre, and the professional school “Henry Ford”), and currently a new program is being introduced to 40 SOU in the Lyulin residential area by Lyulin Municipality within a broader educational and social scheme to motivate students.

people interested in manga and anime, aniventure events, and haiku contests. It seems that after being introduced to Japanese culture, Bulgarians do wish to include it in their everyday lives.

Of all these institutions Sofia University “St. Kliment Ohridski” plays a central and important role. Established in 1888, the university is the oldest and the largest institute of higher education in Bulgaria. It is also the sole institution where Japanese language and culture are taught as a major at B.A., M.A. and doctoral levels.

The first ever course in Japanese language to be offered to the Bulgarian public was held there in 1967, while in 1990 the M.A. program in Japanese studies was established.⁶ In less than 25 years the Japanese Studies Program produced over 300 graduates who formed an active and productive Japanese studies community in Bulgaria (see Photo 1).

As these are the people who presently and in the future will work toward Bulgaria-Japan bilateral relations, it seems necessary to review how they are formed as specialists, what their motivation is, and what their future perspectives might be.



Photo 1. A Japanese language class.

In May 2014 the Japanese Studies Program at Sofia University conducted a survey among students to verify their background, interests, motivation and expectations. 80% of those surveyed stated that they had not studied Japanese prior to enrolling in the B.A. program. Most of them came from specialized language schools (75%); they defined their reasons for enrolling in the Japanese Studies course as stemming from an interest in languages in general (55%), and the Japanese language in particular (83%), their keen interest in Japanese traditional (53%) and contemporary culture (64%), as well as in anime (47%). Another survey on the art of Hayao Miyazaki’s animation, conducted in April of the same year among a broader target group, showed that anime is indeed a major motivating factor for young Bulgarian’s interest in Japanese language and culture (60%).

On the other hand, going back to the survey results, career prospects do not appear to be the main reason for applying to the Program—most respondents do not know for

6 In the beginning it was a 5-year course combining classes in language and culture. With the introduction of the European framework for the development of education, known as the Bologna system, the program was reorganized in a 4-year B.A. course, followed by a 1-year M.A. course in Japanese studies and a 3-year Ph.D. course, as it operates currently.

sure what they want to do after graduation (75%). From this we may conclude that enrolment in the Japanese Studies B.A. program does not stem solely from practical reasons but is directly linked to young people's interests and lifestyle. These are people who take an interest in reading (80%), music (77%), cinema (53%) and arts (38%), who believe that this kind of study brings them intellectual pleasure and challenges (91%), who think of themselves as slightly different from their peers (62%) and who are convinced that this kind of study will make them a better person (90%).

Even among answers regarding their expectations about the final outcome of their study in the B.A. program, practical outcomes such as gaining a professional level of language command (77%) or going to Japan for a one-year training (60%) are outweighed by answers such as intellectual development (70%), better understanding of culture (70%), opportunities to communicate directly with Japanese people (68%), broadening personal horizons (68%), and making friends (66%).

Indeed, it would appear that their initial motivation is not triggered by practical or materialistic motives but rather by a desire to become more open-minded, more intellectually challenged and better positioned not simply in the labor market but rather as human beings, which they believe arises naturally from contact with the Japanese culture. Most of them see themselves working in the field of international relations (20%), in arts (11%), in culture (9%), in language education (9%) and in literary translation (9%), while those envisaging themselves in the fields of science and research, economy, tourism, as interpreters, or politics, are fewer, despite the fact that the latter are generally considered career opportunities for philologists from Asian Studies majors.

What happens to these students after graduation is a further topic of interest, and to examine this we conducted another survey in March 2011.⁷ About only one fifth continue

7 The survey on career paths of our graduates shows that many young Japanologists have found a career utilizing Japanese studies, which in these times of a very tough labor market should be appreciated. For example, Sofia University is currently an employer of 4 full-time and 7 part-time graduates; Ministry of Foreign Affairs: 7; 18 "William Gladstone" School: 5; 138 "Prof. V. Zlatarski" School: 3; Embassy of Japan: 3; European union structures: 2; Toshiba International (Bulgaria branch): 2; while there are graduates employed at state and private schools and universities in Sofia, Varna, Plovdiv; at IT companies and call centers, tourist companies, and publishers. Many of our graduates have continued to further their education abroad and are still living and working outside Bulgaria, among whom three have become university staff in Hong Kong, the USA and Germany, while over twenty work for Japanese companies in Japan, and a number for Japan-related companies in Europe; there are also many translators and interpreters.

on to M.A. and Ph.D. levels in the field of Japanology, while half of all graduates choose M.A. and Ph.D. programs in other fields like PR, Economics, Management, Business Administration, and Virtual Culture. The graduates reported that Japanese Studies alone is not enough and that broadening the philology studies and gaining knowledge and experience in other fields is of greater advantage. Despite the fact that about half of them work in the field, putting to use their Japanese Studies (41%), a large number of respondents stated honestly that in Bulgaria there are no real chances for a good career involving Japanese (25%). And indeed, only half of the survey participants live at present in Bulgaria, while the other half reside in Japan, Europe or elsewhere; this is partly due to the fact that economic cooperation is lagging far behind educational and cultural exchange.

Despite this, in recent years interest in Japan continues to grow and there are new opportunities for career development opening every day. To say that it is an easy or natural process would be an exaggeration, as without the constant efforts on the part of all sides involved in the promotion of Japanese culture in Bulgaria this would hardly ever happen. Of course, having more business opportunities and cooperation would make things easier and make for a more optimistic outlook, yet as this is not the case, the Japanese side and the Japanese Studies community place special emphasis on creating career opportunities for young people. Only time will tell whether or not these efforts are successful.

In other words, the mission of the Japanese Studies community in Bulgaria is to foster awareness of Japan in Bulgaria and to facilitate the flow of information from Bulgaria to Japan, in order to create societies with knowledge and interest in each other, from whence further opportunities for cooperation will arise in the future. It is no secret that the image of Bulgaria in Japan is a most positive one and one our country can boast of, compared to the attitude (or even lack of awareness at all) towards Bulgaria in other developed countries around the world. On the other hand, for over 50 years already in the minds of Bulgarian people Japan has been synonymous with advanced technology, rich culture, perfect organization, and desirable harmony. There is hardly any other country in the world that can raise such unquestionably positive feelings in the hearts of all Bulgarians of various genders, ages and backgrounds. And this is thanks to the decades-long efforts on both sides.

The current state of Japanese Studies today reflects the efforts of the generations before us. Hereafter they will be presented as an example of what is happening nowadays in regard to the promotion of Japan in Bulgaria.

In order to reach the public the Japanese Studies Program at Sofia University has undertaken a number of steps to: 1) respond to the growing interest in studying Japanese Studies; 2) educate highly-professional specialists to continue the promotion of Japan in Bulgaria; 3) publish and disseminate research results in various fields of interest for the general public; and 4) expose the Bulgarian public to Japanese culture in interactive ways.

It is no secret that in the last few decades Japanese studies freshmen at Sofia University gained entry to university with the highest scores of all other majors. Competition is stiff and enrolment depends on entrance exam results (in a foreign language) combined with their overall secondary school diploma. In this way it might be said that Japanese Studies students are among the top students not only in our university, but also in Bulgaria. They are highly motivated and well trained in foreign language learning. In order to respond to the growing interest towards Japanese studies as a major, in 2013 the University announced a rise in the enrolment quota from 15 to 20 people per year, yet together with transfer students, the class still topped out at around 25 freshmen. There is a certain number of drop-outs, yet despite the difficulties in the mastering of the language (80% of our students define the study process as a difficult one), 90% of students manage to graduate, a third to half of the graduates with level N1 in the Japanese Language Proficiency Test, the rest with N2 by time of graduation.

In order to educate qualified specialists in Japanese Studies, we conduct regular screenings of the motivation and expectations of students, follow their career paths after graduation, and react to the needs of the labour market by adjusting and updating syllabus and curriculum.

During its 25-year history Japanese Studies at Sofia University has always followed the philosophy that language training and cultural awareness must go hand in hand. Ever since the beginning of the open public courses back in 1967, Japanese language classes have been combined with an equal amount of classes in Japanese literature, history, culture, and economics. Nowadays, the B.A. program is updated with classes in visual culture, ethnography, arts, and contemporary subjects. Even the theoretical courses are enriched by discussions of culture and its relevance to the discussed theoretical themes.

In accordance to the European Framework of Reference for Languages⁸ and the Japan Foundation Standards⁹ in Japanese language teaching, in recent years we have

8 http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/Source/Framework_EN.pdf.

9 <http://www.jfny.org/language/standard.html>.

introduced many “can-do” based techniques, so that our students learn how to upgrade and make use of their knowledge. Simple examples include blogs introducing Bulgaria in Japanese,¹⁰ presentations followed by discussions with Japanese native speakers, intercultural exchange sessions with Japanese students (Bunkyō Gakuin Daigaku, Hitotsubashi Daigaku), tourist guide training classes, and others (see Photo 2).

One of the most successful projects in recent years proved to be the “Japanese language summer camp: Balkan Peninsula”—an international event supported by the Japan Foundation Sakura Core Projects Funds. The event has been successfully conducted for three successive years, and is seen as a platform for intercultural communication combined with the study of Japanese

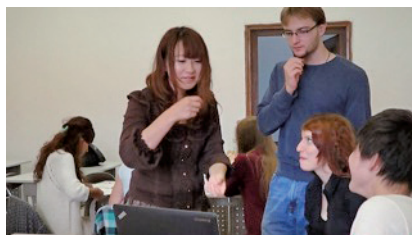


Photo 2. Bunkyō Gakuin Daigaku Students visiting Japanese Studies at Sofia University.

language and culture. Around 50 Japanese studies students and academic staff from 5 Balkan countries (Bulgaria, Macedonia, Serbia, Romania and Turkey) come together for a week to study Japanese, communicate in Japanese and interact actively in a kind of Balkan Peninsula network. The schedule of the event varies from year to year, with the aim of the study being the development of “can-do” techniques including all aspects of language with special emphasis on output skills development.¹¹ In addition, there are classes in Japanese culture (e.g. ikebana, sadō, calligraphy, haiku composition, manga) and a special public event to promote Japanese culture among the local public (a festival of Japanese culture for the general public in the city of Bourgas, in a language secondary school and in a kindergarten). There are also many workshops, evenings of cultural exchange, sports events, and so on to give the participants the opportunity to experience intercultural dialogue and to nourish intercultural awareness in young Japanologists. According to the questionnaires about the event it seems that indeed such an event is of great importance for the motivation of students and for their career development. We do hope that the Japanese language summer camp will continue as an event and will even broaden its scope in the future.

10 <http://bulgariaforjapan.wordpress.com/>.

11 <http://yaki.holy.jp/blog/>.

Another major effort on the part of Japanese Studies at Sofia University is its investment in the publishing and dissemination of research findings, in literary translation and in organizing academic events. An example of the first is the list of monographs published in the last five years by the regular staff (Appendix 1). A project on the translation of *Ise monogatari*, with 11 students taking part, has been completed as a part of efforts to promote Japanese classical literature with the help of young Japanologists (see Photo 3). To involve and motivate our students, an annual magazine was initiated, where students can publish their translations and research findings, presenting at the same time various aspects of traditional and contemporary Japan to the Bulgarian public. Furthermore, three conferences with international participation were successfully held (2009, 2010, 2012) with another one to come in 2015, celebrating the 25th anniversary of the program.

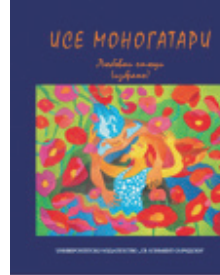


Photo 3. *Ise Monogatari*, edited by Gergana Petkova, translated by student team, Sofia University Press, March 2015.

Parallel to its B.A., M.A. and Ph.D. course, the Japanese studies section maintains a non-degree course in Japanese language and culture open to the general public, the history which can be traced back to the first courses in Japanese back in 1967. Nowadays specialists from various fields who wish to further develop their understanding and appreciation of Japan enrol in this 2-year course and then further combine their interests and professional activities with knowledge of Japan and its language.

The high motivation levels of our students is one of the prerequisites to successfully carry out other public events, like the annual festival of Japanese culture (*bunkasai*) at Sofia University, which has been held for the public for ten successive years. Traditional and contemporary Japanese culture is being introduced in an interactive way so that the Bulgarian public can experience it first-hand, get involved, and share the appreciation of Japan. Our students radiate during these events.

In the beginning of the anniversary year for Japan-Bulgaria relations, on 15 January 2014 our students became the driving force for the exhibition “Bulgaria for Japan” held in cooperation with the National Ethnographic Museum, which presented for the first time to the Bulgarian public the culture of *wagashi* and “house and garden” with models designed by our students. The exhibition was warmly welcomed by visitors and became a very successful example of how our students’ enthusiasm, guided by the expertise of

the academic staff, can result in highly effective cultural promotion (see Photo 4).

Currently, Japanese Studies at Sofia University is launching another project, which began in October 2014, together with the Municipality of Sofia, Lyulin District as part of the student motivation action plan: Japanese language and culture classes in kindergartens and pre-school. The aim of the project is to raise awareness of Japan, its culture and people, and to nurture appreciation of Japan from a young age. The project is entirely on a voluntarily basis, and the Japanese Studies students are again at the fore, with constant support from the teaching staff.

Here we come to the pressing problem of funding, which very often prevents the launch of large-scale events and long-term projects. The university research funds are still very limited, and the private sector does not see the use of investment in academic initiatives, so Japanese Studies either needs to work on a mostly volunteer basis, or to search for funding from outside. In this way we received financial support from Mitsubishi Corporation as a part of the Development Grant policy for three successive years. This helped upgrade the premises, the research facilities, and build an encouraging atmosphere for study and research (with an overall amount of nearly 150, 000 Euro for the years 2012, 2013 and 2014, renovation of facilities took place, library resources were upgraded, technical support like computers, audio-visual system, and an interpretation booth for language training was installed). The grants also helped the publishing and dissemination of research and translation works, and other Japanese culture promotion activities were included as a part of the project in order to reach the general public.

It is also true that in recent years Japanese Studies has faced increasing competition from the growing popularity of other Asian cultures, supported by active promotional policies, and the tension of competition is being felt in all directions—education, culture, business, technology, trade. This also poses challenges to our community which does its best, with scarcely any resources, to maintain the elevated position of Japan in Bulgaria, and to further stimulate bilateral relations. In 2014 the efforts of Japanese Studies at Sofia University was recognized with an honorary certificate from the Ministry of Foreign Affairs of Japan.



Photo 4. Interacting with the public—Exhibition at the National Ethnographic Museum.

There is of course much to be done in the future. Yet we believe that working for the promotion of Japan in Bulgaria and for the image of Bulgaria in Japan will bear fruit in future, so without hesitation much effort is being invested on the part of the Japanese studies community in Bulgaria. It is our firm belief that Japanese Studies at Sofia University will continue to strive to educate highly qualified specialists to work for the development of Japanese-Bulgarian relations, will further produce original research, and will work for the promotion of Japanese language and culture in Bulgaria and abroad as it has done for the last quarter of a century. And we do hope that the Japanese side will support us all along the way.

Appendix 1: Recent Publications by Japanese Studies Staff at Sofia University (2010–2014)

Author/Editor	Title	Language	Year	Publisher
Student team of translators, under the supervision of Gergana Petkova	<i>Ise Monogatari—Love Etudes, Golden Selection</i>	Bulgarian	2015	Sofia University Press
Gergana Petkova	<i>Japanese Fairy Tales, Part 1</i>	Bulgarian	2015	Sofia University Press
Boyka Tsigova	<i>Zen and the Japanese Traditional Arts</i>	Bulgarian	2014	Sofia University Press
Anton Andreev	<i>Introduction to Japanese Phonetics and Phonology</i>	Bulgarian	2014	Sofia: Zvezdi
Tsigova, Petkova, Andreev, and Koleva, eds.	<i>CIRCLE—The Magazine of Young Japanologists</i>	Bulgarian	2014/vol. 2; 2013/vol. 1	Sofia University Press
Tsigova, Petkova, and Andreev, eds.	<i>Bulgaria-Japan-the World: Conference Proceedings</i>	Bulgarian, English, Japanese	2013	Sofia University Press
Petkova, Andreev, Koleva, and Todorova, eds.	<i>Japan—Times, Spirituality and Perspectives: Conference Proceedings</i>	Bulgarian, English, Japanese	2012	Sofia: Zvezdi
Nako Stefanov, Evgeniy Kandilarov	<i>Japan: Economics, Technology, Innovations and Management</i>	Bulgarian	2012	Sofia: Iztok-Zapad
Gergana Petkova	<i>Promotion and Reception of Japanese Culture in Bulgaria</i>	English	2012	Seijo CGS Reports
Nako Stefanov	<i>Information Development of the East Asian Countries</i>	Bulgarian	2011	Sofia: Iztok-Zapad
Gergana Petkova	<i>The Home of Miracles: Architectural Symbolism in the Japanese Fairy Tales</i>	Bulgarian	2011	Sofia: Zvezdi
Gergana Petkova	<i>Japanese Ethnography: Eight Introductory Themes</i>	Bulgarian	2010	Sofia: Zvezdi

アデレード大学アジア研究学部の歩み

米山 尚子

1. オーストラリアにおける日本研究・日本語教育の位置づけ

オーストラリアは、日本研究・日本語学習への関心が特に高い国の一つである。オーストラリアの日本研究の始まりは古く、1917年、イギリス出身の日本研究者であったジェームス・マードックがシドニー大学で陸軍士官用の日本語講座を設立した時に遡るとされる。その後、第二次世界大戦で日豪は「敵国」同士となり、軍事的な実用日本語の他はあまり重視されない時代が続いた。戦後、1957年に通商協定が結ばれ、日本の経済成長とともに貿易相手国としてのプレゼンスが増してくると、日本および日本語教育は徐々に注目を集めていく。1960年には、いち早くオーストラリア国立大学に「アジア研究学部」が設立され、日本学科が立ち上がる。国家政策としても、60年代から、それまでの「白豪主義」を退けて多文化主義が奨励され、地理的に近接し、経済発展の可能性に満ちたアジアに着目するようになっていく。

この流れは言語教育にも及んだ。まず、1987年に初等・中等教育レベルから多言語の学習機会を開く「ロート」(LOTE: Language Other Than English) が採択され、さらに1994年には「ナルサス」(NALSAS: National Asia Languages/Studies Strategy for Australian Schools) が始まった。日本語は、LOTE・NASLAS ともに対象言語の一つとなっており、学習機会の増大とともに学習者も増加していった。80年代以降は日本の経済力の追い風を受け、大学でも積極的に日本研究・日本語学習プログラムが整備されていった。日本が経済的退潮を迎える90年代後半以降は、国内の中等教育で日本語を履修し、大学で日本語上級レベルに達する学習者数は減少する一方、アジアからの留学生の急増を反映して、オーストラリアにおけるアジア系日本語学習者数は増加した。この間、日本語教育は幾重にもグローバル化してきたと言える。

2. アデレード大学アジア研究学部の日本研究の歴史

アデレード大学のアジア研究学部 (Department of Asian Studies) は、40 年におよぶ歴史を持ち、オーストラリアにおける日本研究・日本語研究の発展に独自の視点から寄与してきた。アデレード大学は、海を挟んで南極に向き合う南オーストラリア州の州都に位置し、オーストラリアを代表する 8 つの研究大学「グループ・オブ・エイト」の一員である。オーストラリアでは 3 番目に古く、学生総数約 25,000 人 (留学生約 5,500 人を含む)、教員数約 2,000 人を抱える。世界の大学ランキングでは常に上位 1% に入り、ノーベル賞受賞者を 5 人輩出したことを誇りとする¹。

2015 年現在、当アジア研究学部における教授体制は、日本研究者 1.5 名・日本語専任講師 2.5 名を含む日本・中国合わせて 8 名枠の専任講師と、その他数名の非常勤講師に支えられている。関連科目としては、社会科学・地域研究科目である「日本社会・文化入門」「現代日本政治論」「現代日本の文化とアイデンティティー」「日本の外交」「アジア経済と環境危機」等に加え、初級から上級までの日本語科目を提供している。2015 年における履修者数は、日本語科目では延べ約 750 名、日本研究を含むアジア関連の社会科学・地域研究科目では約 650 名だった。これに加え、オナーズ (Honours) と呼ばれる 4 年生の特別研究課程に在籍する 2 名、大学院の博士課程の 3 名が日本研究に取り組んでいる。2015 年に教養学部全体の再編でアジア研究学部と改名したが、それ以前の公式名称はアジア研究センター (Centre for Asian Studies) であった。

アジア研究センターは、1975 年、政治・経済的な重要性を増しつつあったアジア地域へのいっそうの理解の必要性を背景にスタートした。開設当初の規模は、日本研究と中国研究を合わせても、専任教員はわずか 4 名、学生は 104 名であり、日本語に履修登録した学生は 11 名だった。その後、政策的な追い風の中、スタッフ・学生ともに急速に数を増やしていき、80 年代からは大学院教育にも着手する。1987 年には日本研究の教授ポストが置かれ、Gavan McCormack 氏 (歴史学・現オーストラリア国立大学名誉教授) が、日本研究の最初のチェアとして就任した。専任教員数は、1993、94 年がピークの 19 名

1 John Robin Warren (2005 年ノーベル生理学・医学賞)、John M Coetzee (2003 年ノーベル文学賞)、Howard Walter Florey (1945 年ノーベル生理学・医学賞)、William Lawrence Bragg、William Henry Bragg (1915 年ノーベル物理学賞)。

であり、うち日本語講師は9名と約半数を占めた。日本経済を背景とした一時の「ブーム」が去った2000年代以降、専任教員数は減ったものの、アニメや若者文化・伝統文化等の日本のソフト面への人気を背景として、日本研究や日本語を履修する学生の数は安定している。

当学部の特徴は、「社会科学的研究と言語教育の二本柱」というものである。これは単に「地域研究をしながら言語も学ぶ」というものではなく、適切な言語理解と運用に根ざしてこそ、その社会をより深く探求することができ、また文化や言語も同様に、社会科学的な知識との関連においてこそ真に身につく、という両者の有機的な関連性を重視している。この「二本柱」は、開設当初から今日まで、当研究所の中心的な理念であり続けており、多方面で活躍する優秀な学生を生み出してきた。

また、アデレード大学のアジア研究学部は、数々のアジア研究関連の学会を主催してきた。2005年には豪州日本研究（Japanese Studies Association of Australia）学会、2010年には豪州アジア研究（Asian Studies Association of Australia）学会を開催した。さらに2015年には、同じくアデレードにある南オーストラリア大学とフリンドラーズ大学と提携し、南オーストラリア政府・国際交流基金アジアセンターの支援も得て、ICAS 9（9th International Convention of Asia Scholars）をアデレードで開催し、世界中から1,000名に及ぶ研究者が参加した。

3. アデレード大学における日本研究者

アジア研究学部の日本研究をリードするのは、Purnendra Jain氏（教授、国際関係学、日本政治）である。オーストラリアにおけるアジア研究・日本研究の第一人者であり、1990年代前半にJapanese Studies Association of Australia（JSAA 豪州日本研究学会）の学術雑誌 *Japanese Studies* の編集に携わり、それまでニューズレターであったこの学会誌を世界屈指の日本研究の学術雑誌として立ち上げた功績は特に大きい。その後、JSAA 会長（2003–2005）、Asian Studies Association of Australia（ASAA 豪州アジア研究学会）会長（2011–2012）などを歴任した。ICAS 9では、Convenorを務めた当学部の学部長である Gerry Groot氏（上席講師、中国研究）と共に Co-convenorを務めた。Jain氏は日本を含むアジア太平洋地域の政治・国際関係分野で国際的に著名な研究

者であり、数多い著作の中には『現代の日本政治—カラオケ民主主義から歌舞伎民主主義へ』（原書房、2013年）、『日本の自治体外交—日本外交と中央地方関係へのインパクト』（敬文堂、2009年）など和訳された著書もある。氏の主著は *Japan's Subnational Governments in International Affairs* (Routledge, 2005; paperback edition in 2012) である。その他にも、猪口孝氏との共編書 *Japanese Foreign Policy Today* (Palgrave MacMillan, 2000) 等がある。教授歴も多岐にわたり、東京大学社会科学研究所・政策研究大学院大学・ハーバード大学ライシャワー日本研究所・オックスフォード大学日産現代日本研究所等で、客員教授または客員研究員を務めた。

アデレード大学における日本研究について考える時、本学で2012年から2014年まで副学長を務めた Kent Anderson 氏（教授、日本を中心とする国際比較法、現西オーストラリア大学副学長）の存在は大きい。Jain 氏同様、オーストラリアにおけるアジア研究・日本研究をリードする研究者であり、豪州日本研究学会会長（2007–2008）、豪州アジア研究学会副会長（2013–2014）などを歴任した。さらに、副学長としてアデレード大学と日本の大学との交流を促進し、東京大学、名古屋大学、大阪大学、岡山大学、鳥取大学、立命館大学、中央大学、関西外大、上智大学、関西学院大学等、数多くの日本の大学との関係を深めた。留学体験の推進を目指すオーストラリア政府のニュー・コロomboプラン（New Colombo Plan）の連邦政府レベルでの政策決定への貢献も大きい。また、任期中には数多くの日本関連の講演やセミナーを主導し、日本研究の奨励に寄与した。

本学部のもう一人の日本研究者として、筆者、米山尚子（上席講師、社会学博士）の取り組みにも触れておこう。筆者は現在、「社会科学研究と言語教育の二本柱」という理念に基づき、日本を事例に社会科学の課題を取り上げる「アジア経済と環境危機：持続可能な社会の模索」等の科目と、日本語科目の両方を担当している。専門は教育社会学で、主著は *The Japanese High School: Silence and Resistance* (Routledge, 1999; paperback 2007; kindle 2012) である。さらに、日本研究を土台として西洋発の社会科学の認識論の根幹を問う知識社会学的研究に従事し、その成果である“Life-World: Beyond Fukushima and Minamata”（いのちの世界：フクシマとミナマタを越えて）、*The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, vol. 10, issue 42 (*Asian Perspective*, vol. 37, no. 4 に再掲

載)が評価され、2014年にはオーストラリア国立大学 Japan Institute 主催の日本研究の旗艦学会 Japan Update で11名の発表者の一人として招待された。現在は、アニミズムを日本の近代化と市民運動との関わりから社会学的に捉え直すプロジェクトに取り組んでいる。学会関連では、Japanese Studies の社会科学担当編集者を10年間務めた(2002-2012)。ASAA 豪州アジア研究学会の日本および北東アジア担当理事(2015-2016)でもある。教育面では、オーストラリアの学生が日本の地方およびエネルギー問題に触れる機会を持てるよう、2013年に鳥取大学への短期研修プログラム Gateway Japan Study Tour を立ち上げた。さらにコミュニティ・レベルでの日豪交流促進にも力を入れており、2012年にはメルボルン日本総領事館と提携して、アデレード大学図書館で福島の子供たちによる絵画・東北復興写真展を企画・実行した。

これらの社会科学系の日本研究者の他に、当学部の広い意味での日本研究は、2名の日本語専任講師、榎本佳世子氏(上席講師、言語学)と富田明子氏(講師、語学教育)、さらに最近定年退職した2名の講師、青木尚美氏(語学教育)と Sejin Pak 氏(社会学博士)によって長年支えられてきた。榎本氏と富田氏は二人ともオーストラリア政府の最優秀教育賞の受賞者であり、日本語の教授陣はこの20年ほどの間に、この他にもいくつもの教育賞を受賞してきた。人員削減による合理化や、中国経済の興隆に伴うプレッシャー等、様々な圧力がある中で、アデレード大学における日本語学習者数が長期にわたり、かなりの数で一定に保たれているのは、例外的に質の高い教育が一つの大きな要因であると考えられる。

また、ここでは日本研究に焦点を絞って当学部の紹介を行ったが、アデレード大学における日本研究はその開設以来40年間、常に中国研究と二本立てで、アジア研究センター(学部)として機能してきたという点を強調したい。日本と中国の政治・経済的立場の変化を反映して、日本研究と中国研究の位置づけは、学内でも、南オーストラリア州内でも、オーストラリア国内でも双方向に変化してきた。しかしながら、当学部における日本研究者の同僚は常に中国研究者であり、日常耳にする言葉は英語と日本語と中国語である。そのことが当学部の研究者が政治・経済・社会・国際関係等の理解において、常に複眼的、相対的視座を持ってきたことの基盤となっていると言えよう。

4. 結語

総じて、アデレード大学の日本研究は、「日本ブーム・アジアブーム」にうまく乗りながら、その後も独自の理念で地道な発展を遂げてきたと言える。日本はかつての急速な経済成長とその後の繁栄による世界的な注目度こそ薄れたものの、成熟した先進諸国の一員としてその存在感は大きい。日本国内で理解されている以上に、海外、特に中国をはじめとするアジア諸国の若者の間で、日本語と日本文化の人気は非常に広範で根深い。グローバル化の進行とリスクの増大により、先進諸国が見通しの悪い混沌の中に沈んでいる現在、西欧諸国とは異なる仕方で近代化を遂げた社会として、日本社会が新たな道を切り開くための素材を提供する可能性と必要性は、むしろ増していると言える。今後は、地理的に限定された地域研究としての日本研究にとどまらず、日本というフィールドを通じて見出された知を世界へ発信していくことが、よりいっそう求められる。

参考文献

Gerry Groot. "The History of the Centre for Asian Studies at the University of Adelaide." In *A History of the Faculty of Arts in the University of Adelaide 1876–2012*, ed. N. Harvey, J. Fornasiero, G. McCarthy, C. Macintyre and C. Crossin. University of Adelaide Press, 2012. <http://www.adelaide.edu.au/press/titles/faculty-arts/>

Japanese Studies in the Ibero-American Context

Amaury A. García Rodríguez

Given the sheer size in terms of territory and population, along with the number of countries and academic institutions spread over the area known as Hispanic Ibero-America (countries in Europe and Latin America united by the Spanish language), and given the prevailing situation of Japanese Studies in these regions, we can safely say that there is still much work to be done in this field. The reality is that there are only a few programs and scholars devoted to Japanese Studies, certainly not enough to cope with the growing interest in Japan seen in Ibero-America largely during the last 25 years.

There are at least three major reasons for the slow progress of Japanese studies in these countries. One of these is the complicated and dissimilar modern destinies of each of these nations. There is also a decided need for trained specialists capable of carrying the field forward in academic circles. Unfortunately, these factors have coincided with a frequent lack of a strong institutional vision and consequent allocation of resources. In addition to this, the perception of Japan within the popular imagination of the Hispanic world has often been that of a distant and even exotic territory (a kind of locally creolized version of Orientalism). Occasionally, even the nearness of Japanese contemporary cultural products and so-called “globalization” contribute even further to the propagation and pervasiveness of a stereotyped version of the complex reality of Japan’s diverse pasts and presents.

In this sense, and regardless of the efforts undertaken by different institutions throughout the Hispanic world, there exists at present only a single undergraduate program in Japanese Studies in the region. This is a Japan area program that carries out its functions simultaneously at both the Autonomous University of Madrid and that of Barcelona, Spain. It was established about ten years ago, and it is mainly centered on the teaching of the Japanese language, along with other general courses about the area such as history, anthropology, literature and political science.

The Spanish have also recently established a Master’s program in Japanese Studies based at the University of Salamanca, but it seems to have faced several difficulties during the last six years and unfortunately I do not have sufficient information to discuss the specifics of this academic program.

In the case of Latin America, we should point out the Center for Japanese Studies at the National University of La Plata in Argentina, as well as the Center for Oriental Studies, at the Catholic University of Peru. However, neither of those centers has any programs whatsoever in Japanese Studies. The main function of these centers is to offer language courses and only occasionally other courses related to Japan and Asia for the humanities' programs in their respective institutions. The only Japanese Studies programs in Hispanic Latin America, then, are those housed in the Center for Asian and African Studies at El Colegio de México, based in Mexico City.

El Colegio de México is a public graduate institution dedicated to study and research in the humanities and social sciences. In 1964, with the support of UNESCO, the Center for Asian and African Studies (or CEAA) was created, modeled upon the structure of SOAS at the University of London. The Center is divided into six geographic areas of study (Africa, The Middle East, South Asia, Southeast Asia, China and Japan), and it boasts the oldest graduate programs (Master's and Ph.D.) in Japanese studies in the Hispanic world. Although CEAA was originally designed to serve the Mexican Ministry of Foreign Affairs in training future diplomats, it drastically transformed itself during the 1980s into a Latin-American initiative with the mandate to produce future researchers in Japanese studies. It is also important to point out that the Center receives students from different Latin-American countries, and sometimes also from Spain, who study here. Many of these graduates have returned to their home countries and currently hold positions at universities and research centers, working to promote the study of Japan.

The Master's Program in Japanese Studies is a two-year program mainly focusing on Japanese language, Japanese history and political science. Its permanent staff includes six professors, although every year the Center receives visiting professors from Japan, Europe and the United States, who teach additional courses. Among some of the visiting professors who have recently visited CEAA, we should mention Befu Harumi, Ueno Chizuko, Wakabayashi Mikio, Katō Tetsurō, Gina Barnes, Constantine Vaporis, Andrew Gordon, Oguma Eiji, and Martin Collcutt, among many others. Such visits to Mexico continue to be generously sponsored by funds received mainly from the Japan Foundation, the Mexican Ministry of Foreign Affairs, the Colegio de México itself, and also thanks to the exchange agreements the institution has with various universities.

The Ph.D. Program in Japanese Studies was created in 1997 as a four-year curriculum with a primary focus on Japanese history. It is expected that all students carry out a

year-long research stay in Japan, in order to work with primary sources and to exchange opinions with Japanese scholars. The current number of Ph.D. students graduated from this program is eight. It is also worth mentioning that two of the Ph.D. dissertations in Japanese Studies produced by the Center have been honored with the Mexican Academy of Science National Prize for the best Ph.D. dissertations in the Humanities for the years 2003 and 2007.

Another strong feature of these graduate programs is the extensive library collection regarding Japan related topics that the institution has built up over time. Although it cannot be compared with major libraries in Japan, or the United States and Europe for that matter, the library Daniel Cosío Villegas holds the largest collection of books about Japan (and in Japanese) in the Hispanic world. It holds approximately 22,717 titles regarding Japan of which 8,808 are in Japanese. In addition to this, the library also stands as a major reference point for many Latin-American scholars working on Japan within the region, many of whom carry out brief research stays in order to work with the library holdings.

Nevertheless, there are some problems we have faced in the area over the course of the last 20 years. First of all, and despite the important efforts of different institutions and scholars, there is, to date, only a limited body of original research about Japan which has been published in Spanish. Even translations of critical classical texts about Japan remain few and far between. Still, there has been an impressive volume of original research published in Spanish by the El Colegio de México Press, and, very recently, the significant endeavors of Ediciones Satori, a small publishing company from Spain, which has undertaken the translation of Japanese literature. Another problem we have had to grapple with is the fact that the present distribution networks for scholarly books in Spanish language are intricate and very local. In this sense, the impact and availability of many of these publications in Spanish is also limited. This problem is not exclusive to the Hispanic world, but it has become an obstacle in the wider spectrum of Japanese studies globally. As a result, there is a concurrent need to publish such materials in either English or Japanese (or both), in order to broaden the discussion with other scholars outside of the Spanish-speaking world.

There has also been a marked shift in the topics that are of interest to many students. During the last 15 years it has become common for students to express interest in literature, religion, art history, and contemporary history, for example, which differs from the

focus on economic history and political science, which was more prevalent during the 1980s. This has been a major change, and we have been looking for ways to expand our permanent staff.

Some other challenges need to be added to our list of priorities in the near future. For example, the importance of an undergraduate program in Japanese Studies in Hispanic Latin America is becoming increasingly clear. The two years allocated to the Master's program at El Colegio de México are insufficient to give students the necessary language skills in order to carry out relevant research. Currently, it is becoming more and more common to receive students who arrive with previous knowledge of the Japanese language, but we cannot rely on this as a norm. It is impractical then to think that a single institution will be able to cope with the growing need of an enormous region such as that of Hispanic Ibero-America. It is here where we should investigate the possibility of organizing collaborative projects with other universities and research institutes throughout Ibero-America, as well as with other major centers worldwide. This will most certainly not be an easy task, of course, but I strongly believe that it will soon prove to be an inevitable next step in the evolution of the field of Japanese Studies in this region.

Living in the Bermuda Triangle: Prague, Toronto, Nara

Anthony Liman

The beginnings of interest in Japan in central Europe date back to the last decade of the nineteenth century when the Austrian count and diplomat Heinrich Coudenhove-Callergi married a trained geisha from an antique shop-owner's family by the name of Aoyama Mitsuko. When the couple returned to Vienna, Mitsuko became a countess and mistress of several castles in Austria and Bohemia, where the Coudenhoves spent a lot of their time. Her husband was a very liberal man who firmly believed in the idea of pan-Europeanism and educated his children in that spirit. All of their children were well-educated and spoke multiple languages; Mitsuko's second son, Richard Nikolaus, became the founder of the "Pan-Europa" movement after WWI. Mitsuko did her best to familiarize her noble friends with the basic facts of life in Japan.

The first Czech visitors to Japan were the two professional globetrotters, Josef Kořenský (1847–1938) and Enrico Stanko Vráz (1860–1932), who were both active around the turn of the century. Vráz visited Japan in 1896 during his voyage through eastern and southeastern Asia. The main purpose of his trip was to assemble a collection of artifacts for Prague museums. Kořenský's travelogues—e.g. *Travels in the World: Japan*—are still readable, because he describes things accurately in great detail.

One of the major contributions towards an accurate knowledge about Japan was Alois Svojsík's (1875–1917) *Japan and Its People*. Svojsík was a well-educated priest, and a chaplain at the well-known Holy Trinity Church in Prague. This devoted traveller not only visited Japan twice, but studied over a period of several years all the available Japan-related literature before publishing his major work.

Their successors were Jan Havlasa (1883–1964) and Joe Hloucha (1881–1957). Hloucha was the son of a beer brewer and studied economics and accounting. However, in 1908 he gave up his job with the Prague magistrate and became a full-time collector of art. He loved Japan from his early youth and wrote his most popular novel, *Sakura in the Storm*, at 24 before he even visited Japan. Havlasa was the son of a writer and wrote interesting "adventure novels." Several of them were about Japan, which he visited several times later.

An interesting though not well-known figure is Barbora Eliášová (1885–1957), the first woman traveller to the Orient. After her first trip she published a book called *A Year of Life among the Japanese and around the Globe* (1915). She was so enchanted by Japan that she returned right after WWI, intending to stay there longer. She lectured about the new state in the heart of Europe at Japanese schools, and wrote for Japanese journals. She also worked for the embassy of the newly founded Czechoslovak Republic. In 1923 she embarked on her third visit to Japan where she barely survived the devastating Great Kantō earthquake, losing all her possessions. After returning to Prague via Vancouver, she published a collection of Japanese fairy tales and a novel called *Hanako*.

Chinese and Japanese studies in Prague both got their start in the 1930s. Czech Sinology was established by eminent scholar Jaroslav Průšek (1906–1980) and Czech Japanology by his first wife Vlasta Hilská (1909–1968).¹ Průšek was well known in international scholarly circles and his book *My Sister China* was very popular in China itself. He is best known for his studies of folk storytelling in China. In his later years he committed three fatal “mistakes”: first, he supported China’s position in the China-Soviet border dispute; second, he supported the Prague Spring and Alexander Dubček; and third, he asked for a job at Harvard after a cycle of very successful lectures. Harvard did not take him on, but Ann Arbor would have welcomed him with open arms. However, he returned to “normalized” Prague and ended his life in disgrace. He was even banned from his beloved Oriental Institute, even though he was the founder.

Vlasta Hilská was my own teacher for five years, teaching Japanese classics, such as *The Pillow Book* by Sei Shōnagon, *Essays in Idleness* and *The Tale of Genji*. She translated a number of Japanese classical works, both poetry and prose as well as contemporary novels. Her *Verses Written on Water*, an excellent selection of *waka* poems, was first published in 1943 and became very popular. She was a leftist idealist of the First Republic and died, somewhat fortunately, in 1968, a few months before the Soviet tanks rolled into Prague and could shatter her socialist dreams.

In 1961 I finally made it to university after eight or nine years of odd jobs with the

1 Professor Vlasta Hilská (1909–1968) was the Head of Japanology at Charles University. She taught classical Japanese literature and we read *The Pillow Book*, *The Tale of Genji*, etc. in her interesting seminars. She translated a number of masterpieces of Japanese literature, both classical and modern, into Czech. As a member of the Communist party she tried to shelter her beloved department from political pressures. She died a few months before the Soviet invasion of Czechoslovakia.

help of a lawyer and family friend; I was very lucky to have the unstinting support of my wife and my parents. Many of my friends from high school had already started families and had decent jobs, so it would not have occurred to them to embark upon university studies so late in the game.

So one spring morning I came to take the entrance exam at the Faculty of Philosophy at Charles University and went directly to the Department of Russian, my wife Eva and I thinking that I would have the best chance of getting accepted there. The professor who interviewed me questioned me about my knowledge of classical Russian literature which I knew fairly well, then we switched to less orthodox writers such as Isaac Babel or Anna Akhmatova, Boris Pasternak and such, and we understood each other quite well. The great thaw in Prague cultural life was just beginning then. Perhaps I mentioned my translations of American literature (Ray Bradbury and others), because the professor suddenly asked: “Are you sure you want to study Russian literature? What if I take you upstairs to the English department?”

And so I ended up in the study of Professor Vančura, Head of the English Department. I think his assistant Professor Květa Maryšková was also present. They asked me to read an older text which contained words like “hilarious,” words that I did not know at the time. Even so, when I translated the text, Professor Vančura asked: “Your English isn’t bad. Wouldn’t you like to study another difficult language along with it?” So I asked: “And what could you offer me?” “We have Arabic, Persian, Tamil, Swahili, Chinese, Korean ...” It was not until almost at the very end he mentioned Japanese, and I said: “That’s it, I’ll take that.” I was reading *The Tale of Genji* and Bashō in English translation at the time, so I had a general idea about Japanese literature and I liked it a lot.

Of course the Japanese are not satisfied by this answer, so I give them a shorter, more emotional one about a karmic connection from a previous life. In 1972 I travelled in Western Japan on my bike and somewhere near the Great Shrine of Izumo I came upon a small rounded village of wooden cottages (*minka*). It looked like a Southern Bohemian village and from its high-pitched shingled roofs the smoke of afternoon baths was rising. In front of one of the cottages sat a white-haired granny who gave me a lovely smile and I was flooded by a feeling, almost a certainty that I knew this village for I must have lived here at some time in the past. The grandma probably felt something too, because she invited me into her cottage and put me up for a few days. Every time she was warming up the afternoon bath, she chuckled and said: “This is Goemon’s bath...” Goemon was

a famous Japanese criminal whom they boiled alive in a bath. A year later I sat with the writer Ibuse Masuji 井伏鱒二 in a small pub in Shinjuku when a fairly drunk editor of a large publishing house came over to our table and said: “Master, how can this foreigner understand the beauty of your writing?” Ibuse looked at him severely and replied: “This man isn’t a foreigner, he is a Japanese from olden times.” He confirmed what I felt in the Izumo village.

Professor Vančura said at the end of the interview: “You are handing in an application for extramural study while working, but this particular combination of English and Japanese is very demanding, so you’ll have to enroll as a regular full-time student.” I asked for one hour to think it over, went out into the street and from the nearest phone booth I called Eva at the hospital where she worked. She did not hesitate for a moment and said: “Take it, we’ll manage somehow.” I owe her a great deal, but this was one of the crucial moments in life when one can win everything and also lose everything. I will never forget that.

I was twenty-nine years old and from the very beginning of my studies it was crystal clear to me that from the steamer I had to board that I saw just a thin ribbon of smoke on the horizon. So I worked very hard and after a year asked my professor of Japanese if I could switch English to a minor and Japanese to my major. He said OK.

The five years of study went by rather quickly and in 1965, the fourth year of my studies, my grandma Hildegarda Pošík celebrated her 89th birthday and the whole extended family attended her festive lunch, including my favourite uncle Ivan Záhorský. At that point I was just completing my studies at Charles University and thinking about a trip to Japan. So when Uncle Ivan asked what I intended to do, I said I wanted to spend some time in Japan. It must have sounded like a wonderful joke, because everybody started to laugh, as if a small child had said: “I’ll be flying to Mars.”

I was lucky as that very summer Mr. Ikeda Tsuneo 池田恒雄, the Tokyo publisher of an extremely popular journal called *Baseball Magazine*, came to Prague on business. Together with my friend Ivan Krouský we interpreted for him and he fell in love with Czech art. He immediately came up with the idea to publish several monographs about Czech gothic and baroque painting and later invested so much money into this project that his company almost went bankrupt. He promised me that if I came to Tokyo he would help me in any way he could.

One summer morning I went to meet Mr. Ikeda at the Alcron Hotel and while I was waiting for him I chatted with his daughter, Miyoko, who accompanied him and was about sixteen at the time. I happened to be reading a lot of Japanese war stories, preparing for my dissertation. They were quite rough and full of military slang that was difficult to understand for a beginner. As chance would have it, one of the words I asked her about was *kintama*, or testicles, balls. When she heard the terrible word, the girl turned deep red and stared at the ground. Later this story became a favourite yarn of the Ikeda family and they told it in their circle of friends. I had no idea at the time that after some years I would introduce my best Japanese friend Tsuruta Kinya 鶴田欣也 to the Ikeda family and that he would fall in love with this shy teenager and leave his wife and three children for her. I had even less of an idea that this modest *yamato nadeshiko* would one day become a bestselling author called Kudō Miyoko 工藤美代子² and in turn will leave my friend. Her father died in 2002 and was inducted into the Japanese Baseball Hall of Fame. I will always fondly remember him, for he looked after me as if I were his own son.

And so it came about that after graduation in June I worked for a few months at the Oriental Institute and then in late August made it to Japan. After a week of plodding along through Russia—from Vnukovo Airport to Domodedovo, a long and uncomfortable flight to Chabarovsk, and from there a night train to the small Nachodka Harbour on the Pacific Coast, so that we would not see Russian cruisers in the Port of Vladivostok—after two or three days the Russian ship finally made it to Yokohama. I was truly relieved when I saw the red star on its bow for the last time.

In the harbour waited Mr. Ikeda and his limousine and in the welcoming group there was also my friend and fellow student Vlasta Čiháková, who had been in Japan for some time. After the journey through grim Russia I felt like Alice in Wonderland the first night—a comfortable little room in a modern hotel, and on the numerous channels of colour TV a language which so far was just a dreamland fantasy, but I could already follow a good deal of it.

2 Kudō Miyoko is a non-fiction writer of semi-documentary and documentary books and articles, some about Westerners who played an important role in Japanese life, such as E. Herbert Norman, a Canadian diplomat and historian, and Lafcadio Hearn (*In the Middle of a Dream: A Life of Lafcadio Hearn*). She also wrote a controversial book called *The Great Kantō Earthquake and the Truth about the “Korean Massacre”* (*Kantō daishinsai: “Chōsenjin gyakusatsu” no shinjitsu*).

In the summer of 1967, after a fruitful year in Tokyo, my uncle Vlad (who had fled the communist regime back in 1948), discovered an announcement in a Canadian staff bulletin that the University of Toronto was looking to fill a position in the newly formed Department of East Asian Studies; I wrote to them and was accepted for one year as a visiting assistant professor. Our departure from Japan went smoothly on the whole, except that I got a bad flu from running around too much to express my thanks to all the people who helped me during my stay. On 6 September 1967, we arrived from Tokyo's Haneda Airport at Vancouver and right after disembarking we were stunned by the magnificent wreath of snowed-in mountains on the horizon. We found accommodation for a few days at the comfortable Sylvia Hotel, a significant historical monument on Pendrell Street, dating back to 1912—very recent by our Czech standards, but ancient according to Canadian ones—just steps away from one of Vancouver's greatest ocean-side attractions: Stanley Park. I had no idea at the time that in my older years I would move into this street and live by the park on Pendrell Street.

Right after our arrival in Toronto I dove headlong into the academic life. The University was like a gentleman's club at the time, its president a distinguished scholar of English literature by the name of Claude Bissell. Our newly founded department had very few students, but my colleagues organized so called staff seminars where in fact we lectured to them and some visitors from Japan. That fall we had as guest professor Saeki Shōichi 佐伯彰一 from Tokyo University, who was a leading expert on American and European literature, but he was also very knowledgeable about Japanese literature. To teach a man of his knowledge anything at all was out of the question; all I could do was to survive with honor and avoid too much embarrassment. Saeki was a true scholar, but not a dry-as-dust one, and recalled during his lectures highly entertaining personal memories. For example after the war he met William Faulkner who sent him through the American embassy an essay called *To the Youth of Japan* in which the great writer speaks about the Japanese disaster and despair in the recently concluded war. To Saeki's great surprise Faulkner compared its meaning to the defeat of his own homeland, the American South. He said that just like Japan, the American South experienced the same defeat and although he did not spell it out he suggested that they were defeated by the same enemy: the Yankees.

It was clear what he meant when he said: "The intruders devastated our homes, our gardens, our farms..." He then added that the American South suffered from a longer and

more cruel occupation than Japan. Professor Saeki also told us an interesting story about his first trip to the United States where he was invited to give lectures at a prestigious American university. When he was passing through customs he got a form with various questions at the immigration gate, including “What is your religion?” Saeki truthfully replied “Shinto,” but the immigration officer read it and said: “Such a religion doesn’t exist, you must write something we have here.” Saeki refused that and finally was allowed to write “Shinto” into the space marked “Other.” How sad that the oldest and perhaps the most honest religion in the world is not designated on official documents.

Saeki offered me the first key to a critical understanding of Ibusu’s greatest novel *Black Rain*, which he evaluated as follows about a year earlier:

Ibusu Masuji took a stance of a very reserved, ordinary observer to these shocking and extraordinary events. He is an observer whom nothing will upset: he records the smallest details such as what people had for lunch, how they raise fish in Hiroshima’s countryside, seasonal ceremonies and festivities like *matsuri* in farming villages. It is an almost incredible triumph. Perhaps it’s the very essence of Japan.

At the time I was just beginning my research work on Ibusu Masuji, Saeki helped me a lot with his infallible critical judgment; I would even venture to say that he opened my eyes as to how one should approach this writer correctly. I must say that my view of Japanese literature was slightly biased from Prague towards so-called proletarian literature which our teachers (with the exception of Dr. Novák) viewed as the very pinnacle of modern Japanese writing. Here I met with the opinion held not only by Professor Saeki, but also Professor Tsuruta, namely that these leftist artists are second, or third rate writers, whose class awareness is perfect, but their artistic value negligible. Still, I would say from today’s perspective that Kobayashi Takiji’s novel *The Crab Cannery Ship* (1926), nicely translated by my Professor Hilská is not bad, since it portrays the inhuman conditions under which the Japanese crab fishermen had to fight for their livelihood. Kobayashi raised the level of proletarian writing, instead of trite ideological twaddle he mastered the art of artistic shorthand, dynamic plot and the technique of reportage.

I have researched the immediate postwar period in Japan in detail and collected a lot of articles and studies about influential literary groupings, including *Modern Literature*, *Postwar Literature*, and an important discussion called “Polemic about Second-Rate Art.”

In the spirit of postwar democracy—often just a superficial imitation of America—an opinion prevailed in critical circles that the majority of older artistic genres and disciplines are for the birds. Haiku is an outdated, old-fashioned and ossified form, unable to express the complex feelings of modern man, while Noh plays are in fact an aristocratic pastime, not understandable to the common people and of no benefit to it. Other popular polemics took place in the turbulent postwar period, for example, “Polemic about Subjectivity,” “Polemic about War Responsibility,” “Polemic about Apostasy,” and others. These were mainly reactions to the war defeat and thoughts about the belated development of Japan and political responsibility. Thanks to my dissertation I also had a fair idea about the Second World War, yet I had to prepare my weekly seminar called “Postwar Japanese Literature” very carefully for a whole week. It often happened that my wife woke up and asked: “You are up already?” And I answered: “No, I didn’t go to bed yet.”

I still remember those long nights and days of backbreaking toil, but I felt in my bones that I must make it in this new environment no matter what. Never in my life did I work as hard as in that first year in Toronto, but I was 35 years old, had a lot of energy, and enjoyed the work. Among the guests of my seminar was Makoto Ueda, an outstanding expert on classical and modern Japanese literature, especially the poetic tradition of haiku. Later he became famous for his studies of Bashō and books on the poetics of modern Japanese prose, for example, *Bashō and His Interpreters*, *Modern Japanese Poets and the Nature of Literature* and *The Mother of Dreams and Other Short Stories: Portrayals of Women in Modern Japanese Fiction*. I think I earned Ueda’s respect with a lecture on Mishima aesthetics, where I developed a theory that Mishima only seems to be a sworn romantic, but he is essentially not capable of truly romantic passion and his writing is by and large a cool intellectual construction. At that point he had not yet completed his massive final tetralogy *The Sea of Fertility*, the last volume of which (*The Decay of the Angel*) came out only after his suicide in 1970, but even that is fairly schematic and à la these to my taste. I still have the piles of notebooks in which I wrote down these lectures and numerous quotes from Japanese sources.

Next to a group of American draft dodgers we had very few Canadian students in our starting years and they were mostly talented adepts of literature who wanted to expand their horizon, or second and third generation Japanese who were trying to get acquainted with their cultural heritage. I remember a thoughtful and extremely well-read young man from the Maritimes, John Steffler, who wrote a brilliant essay on *The Tale of Genji* for my class. It was in fact so good that Ken Tsuruta (Kinya) included it in one of his

critical volumes. John had an unusual literary gift and so I am not surprised that he later received the Governor General's Award for his novel and in 2006 became Poet Laureate of the Canadian Parliament.

Among my Japanese students there was also an inconspicuous, modest girl by the name of Kerri Sakamoto, who once shyly handed me a short story about a third generation Japanese woman who looks in the mirror and asks in desperation: "Who is this?" The story was so good that I encouraged Kerri the best way I could and she fortunately listened to me. Today she is one of Canada's most promising writers.

After a year in Canada, on the morning of 21 August 1968, around ten o'clock in the morning we were staying as guests in our Czech friends' cabin on Christian Island (an Indian reservation) when I went shopping across the bay on the Štástný's motor boat. While I was choosing my potatoes, veggies and fruit, the owner of the grocery shop, an Indian lady, said: "Aren't you people Czech? You better look at that newspaper!" I looked and saw Toronto's *Globe and Mail* with large red titles that I had never seen before: "RUSSIAN ARMY INVADES PRAGUE." I looked at the article and asked the owner, "You better give me a bottle of whisky too, we're gonna need it!"

Before we returned to Toronto in early September, my wife and I agreed not to go back to occupied Prague. The first day at the university I went to see Professor Ueda and asked him if there was a permanent post at the Department of East Asian Studies for me. I will never forget Ueda's answer: "I think for a man of your caliber there will be." Ken Tsuruta later told me that a meeting was called about my possible job and the chairman of the department, a man by the name of Anthony Warder, dismissed the proposal with: "We don't need a Communist here." Warder was a somewhat puffed up Englishman who pretended to be aristocracy and did not know me at all. Ken talked him out of it, because he already knew my life story and was well aware of my hatred for Communism.

Shortly after the "entrance of the armies" (invasion or occupation were taboo words) the mass emigration of Czechs began. Canada behaved in a truly cavalier way, because it gave the newcomers free housing, decent pocket money and free language courses. A number of Czech academics also came to the University of Toronto and some of them became associate professors, even full professors on the spot. Quite a few never abandoned orthodox Marxism even in their new country and I found it a little funny that while I had to start at the lowest rung of the academic ladder, the authors of a regime that prevented me from study were immediately given the highest position since they had longer work

experience, and titles such as Candidate of Science, etc. We could not explain this to our Canadian friends; they simply did not understand, just as they did not understand that someone who was sentenced to three years in jail did not really commit any crime.

In the career of an academic it is not important how many nitpickers—my friend Wayne Schlepp calls them accurately *Fehlerschnüffeller* or “error sniffers”—throw spanners in his works, but how many genuinely great people influence his life. The greatest figure of Japanese Studies in Prague and the man who gave me most is and forever will be Dr. Miroslav Novák. As Karel Fiala wrote in his obituary, though Novák did not lay the cornerstone of the Japanology building, he built the most important and finest parts of its structure. One of my oldest memories of him that comes up in my mind as if it were yesterday is the day when we stood by the window in Celetná Street towards the end of my first year of studying Japanese and I asked: “Dr. Novák, will you stand behind me if I apply for a change of English to Japanese as my major?” Without hesitating one moment he replied: “I will.” I respect Dr. Novák so much that this was a lifetime commitment. I hope I fulfilled it with honour. Novák had a gift that few people have: a rare combination of exact linguistic thinking and a great artistic imagination. My critics sometimes object to switching from subject to subject, a free usage of different genres, but that is caused on one hand by my love for the Japanese associative art of the free brush, called *zuihitsu*, but also by a lack of Novák’s strict discipline. He too had some objections to the free argumentation of my dissertation. “You have enough material here for two dissertations, but you must document everything very carefully,” he would stress. I think in this respect Novák taught me well, since in my analyses of Japanese literature—for example in *Landscapes of the Japanese Soul*—I support all critical statements with quotes from the original text.

Together with Professor Vlasta Hilská, Novák founded the school of Czech translation from Japanese. In the first period of his translator’s career he tended towards cooperation with well-known poets, for example, with Jan Vladislav. He also praised the cooperation of Professor Hilská with Bohuslav Mathesius. Gradually he became convinced that Japanologists should work out their own style of translation of Japanese poetry and that it was therefore better to try to create one’s own poetry. Miroslav Novák says in an interview with Jiří Šebek that he does not mean to criticize his own cooperation with the poet Vladislav, but that he respects the gradual ripening of his own translating efforts. In one period of his creation he simply cooperated with a major poet, but then came a period when he decided to translate

everything by himself. Though most of the haiku in the collection *Moons, Blossoms* reads beautifully to this day, in some I am slightly disturbed by the many diminutives, by the rhyming and a slightly “sweet” Slavic lyrical tone. Even in Hilská’s work Novák perceived in Mathesius’s undoubtedly skillful touch the strong influence of a Slavic type of verse that we find in the work of Čelakovský or Erben. Where Mathesius was unable to detach himself from his Slavistic background, Novák was striving for a more direct linking of older Japanese and modern Czech. For example, his translation of Saikaku’s famous novel *The Greatest Courtesan* is a work of sheer genius that brings together the rich, colloquial Japanese of the Edo period with contemporary, extremely idiomatic and inventive Czech. Novák cleared the way for us younger translators to set out in our own direction. Of course everybody has certain doubts, and so when I started translating the *Manyōshū* collection I sent examples from the first volume to my friend Pavel Šrut—a leading Czech poet—asking him if he would like to do this with me. He replied: “You don’t need me for this, you can manage by yourself.”

The great Japanologist Donald Keene sent me a beautiful New Year’s card a few years ago in which he fondly recalls Dr. Novák:

I met Dr. Novák once. We spent most of the time together by walking the streets of Prague. Very rarely in life did I meet someone who attracted me as much as he did. I had a feeling that here is a real teacher. I’ll never forget him.

What a dreadful contrast between these enthusiastic words and the way Novák was treated in the last years of his tenure at Charles University which he loved and refused to leave when Jiří Jelínek³ tried to convince him to emigrate. The Japanese naturally knew about Novák’s giant contribution to Japanese studies and he was nominated a number of times for the most prestigious prizes. He was not allowed to accept any of them, all being rejected by the Ministry of Culture.

In those long years at Charles Novák was allowed to make only one trip to Japan, though he was invited many times since the time that Japan Foundation was established. After 1970, in the years of normalization he was not even allowed to attend receptions at the Japanese Embassy. He was a very reclusive and shy man and even if we knew each other very well, he never said a word about his fundamental aversion to the Communist regime.

3 Jiří Jelínek, one of Novák’s best pupils and a brilliant linguist who specialized in machine translation. After 1968 he went abroad and worked for the Japanese Sharp Company for some years.

It is no mistake that the Japanese residents of Prague gave him the very fitting nickname of Monk Takuan. Sōhō Takuan (1573–1645) was an influential Zen master of the Rinzai sect who was active during the time of transition from the Ashikaga Shogunate to the Tokugawa government.

A great Canadian intellectual who profoundly influenced me was a colleague from the University of Toronto, Professor Robertson Davies, nominated in 1963 to become the first master of Massey College. Though this exclusive college is a part of the university, it is conceived as a copy of an elite English university college, something like Oxford or Cambridge. It has its own library, dining room, comfortable rooms and selected students from all over the world. I also lived there a year, so that I came to know the atmosphere of Massey quite well. I met Davies in the corridor or at his lectures. He was an imposing gentleman with a beautifully cultivated full beard, an eccentric of the English type in the best sense of the word. Though he came from a Puritanical cultural background, he did not like boring Presbyterian goody two-shoes. Exactly for that reason he set his immortal novel *Fifth Business* in the tranquil, even pokey little town of Deptford, a faithful copy of his native Thamesville in Southern Ontario. In my view *Fifth Business* is one of the five finest novels of the twentieth century. It fascinated me especially with its central theme, the search for a figure that is so painfully missing from the Puritanical culture, namely the Goddess of Mercy or the merciful Holy Virgin. Guilt in this culture is absolute and nobody can take it off you. Spending time with my students I realized that you cannot put aside your moral responsibility even in moments of leisure or relaxation. In my old country you can make any outrageous statements by the campfire and they will all be forgotten in the morning. Not so here, the appalled boys looked at me and whispered: “How can you say that...”

Davies impresses me especially with his reasonable and sober application of Jungian archetypes, his great respect for myth and generally his aversion to what he so fittingly calls “modern twaddle.” I am also not very fond of Neo-Freudians like Jacques Lacan with their cynical relativism and if I do indulge in any kind of psychological explanation in my essays on Japanese literature, it is rather Jungian. Where I speak about the explication of myths, I stick rather to the pioneering studies of Mircea Eliade, especially his *Myth of the Eternal Return*. Among the later researchers I was mostly influenced by Joseph Campbell and the British Japanologist Carmen Blacker.

Among those who had a decisive influence on me, no matter how briefly I met them, was the American critic and writer Leslie Fiedler who sometime in 1979 gave a fantastic lecture in the packed large auditorium of Medical College. This lecture confirmed my basic approach to literature. Fiedler is the author of path-breaking studies on American literature, especially the outstanding book from 1960 called *Love and Death in the American Novel*. He was a rebel and a firebrand, called the “wild man of criticism.” This is how he started his lecture:

I have a few years to go before retirement, the university gave me tenure and so I can finally tell you the truth. They try to convince you that the study of literature is extremely hard, that it's very difficult work for which you need strict scholarly discipline, etc. Don't believe them, literature is above all emotion... The other day I was lying in my bathtub and reading Dickens' *Little Dorrit*. Suddenly I hear the dripping of water—tap, tap, tap—and I think that I left open the faucet. Then I look and it's tight, but the dripping are my tears falling into the water. I repeat, literature is emotion.

When my friend Ken Tsuruta read my first study on Kawabata Yasunari 川端康成's *Snow Country*, he said, “It's interesting, but why do you have to put on that Germanic armour?” By Germanic armour he meant the theoretical apparatus, difficult Latinized words and the like. I understood that I was standing at a crossroads and had to make up my mind as to which road to follow: the road of theory, structuralism or postmodernism in the direction of the highly theoretically oriented University of Chicago, or hold on to great Czech critics F.X. Šalda and Václav Černý, or Northrop Frye, Robertson Davies and Leslie Fiedler and forge my own path.

I was extremely lucky that around that time the greatest Canadian critic and literary scholar, Northrop Frye, was lecturing at the University of Toronto. His pivotal study of Canadian identity and imagination called *The Bush Garden* became my favorite book, almost a key to my new homeland. The way Canadians understand the word *bush* is unique to this country and very difficult to translate, because it denotes those huge, impenetrable spaces that stretch thousands and thousands of miles above the narrow strip of inhabited territory along the US border. We realized the giant size of the Canadian landmass and an entirely different perception of distances at first when after arrival in Toronto we bought

a second-hand Volkswagen and set out for the North. A wild wind that nearly blew us off the highway was hissing from the fields and by the time we reached Barrie, a town barely 100 km away from Toronto we were so frightened that we reversed the car and returned to the city. Frye documents his penetrating insights about the absolute difference of the Canadian wilderness in comparison with anything European with a discussion about the famous painters' Group of Seven, the most famous being Tom Thompson, Lawren Harris and Emily Carr, who was also a gifted writer. Thompson painted in Algonquin Park on Georgian Bay, and every schoolchild in Canada knows his lonely and weather-beaten gnarled pines on rocky cliffs or his floods of golden-red leaves in the autumn woods. Frye was the first one to notice that on the canvasses of these painters there is no horizon and human beings are missing from them. And that is the basic Canadian experience: there is no horizon in the bush, because the other end cannot be seen and in the Canadian landscape there are so few people because "neighbors" are at least 10–15 kilometres away. That sparse inhabitation brings with it the danger of what Frye calls "garrison mentality," where a small defensive community of people is besieged by a hostile wilderness whose size and power are overwhelming:

To sum up, Canadian poetry is at best the poetry of incubus and *cauchemar*, the source of which is the unusually exposed contact of the poet with nature which Canada provides. Nature is seen by the poet, first as an unconsciousness, then as a kind of existence which is cruel and meaningless, then as the source of the cruelty and subconscious stampededings within the human mind. As compared with American poets, there has been comparatively little, outside Carman, of the cult of the rugged outdoor life which idealizes nature and tries to accept it. Nature is consistently sinister and menacing in Canadian poetry.

Frye's lecture on the Holy scriptures was called *The Great Code* and later published as a book, in which Frye convincingly developed the idea that the Bible is the basic source of inspiration for all Western literature. This helped me to clearly understand what is then the great code of Japanese literature, on which the Bible did not have the least influence. The code of Japanese literature that so radically differs from the biblical one is the dramatic changing of seasons, seasonal rituals, identification with the natural cycle and natural moods. It is most extensively and convincingly codified in the first great anthology of

Japanese poetry, *The Collection of Ten Thousand Leaves (Manyōshū)*. For this crucially important understanding I am indebted to Professor Frye.

Thanks to Professor Nakanishi Susumu 中西進 in 1994, I was invited to the International Research Center for Japanese Studies (Nichibunken) in Kyoto where I spent six months from January to the end of June after returning from Prague. It was a priceless experience, because Nichibunken was and still is the meeting place of foremost Japanese intellectuals. Next to Professor Nakanishi, whom I came to know a few years before, I became acquainted with extraordinary people like Umehara Takeshi, Yamaori Tetsuo, Haga Tōru, Kawai Hayao and others. Umehara Takeshi was at the time director of the institute and I am still puzzled as to how he managed to find the time amidst his responsible and demanding job to write a series of solid books. One of his most original studies is called *People of the Manyōshū and the Heart of the Poems*. Umehara was the first scholar who dared to honestly analyse the rough political background and state that meant that Kakinomoto Hitomaro, Ōtomo no Yakamochi and others were in fact scapegoats who were either exiled or executed.

Professor Yamaori is a foremost Japanese expert on the history of religion and the author of many books; the most important ones are *Religious Consciousness of Modern Japanese*, *The Ethnology of Death: Japanese Views of Life and Death and Burial Rituals*, *Critical Problems in Facing Death*, and *Evil and Rebirth*. Professor Yamaori made categorical statements about a number of contemporary ethical problems, e.g. the question of the problematic sect Ōmu Shinrikyō, organ transplants from brain-dead people, or some speeches of the previous prime minister Mori Yoshirō that have the unfortunate reputation of many *faux pas*. The beauty of Professor Yamaori's style is that he can explain the most complex psychic phenomena in a lucid, clear way.

Professor Haga devoted several years to the study of Oriental utopias and wrote in a very revealing way about the Chinese fable *Peach Blossom Spring* in a book called *Ideal Places in History: East and West*. At Nichibunken he directed an outstanding seminar on ideal places (archetypes) in Japanese and Western culture which inspired me so much that I later wrote a book on the same topic called *Between Heaven and Earth: Ideal Places in Japanese Culture* and dedicated it to Professor Haga.

Professor Nakanishi, a foremost expert on *Manyōshū*, led a seminar entitled *Japanese Imagination*. I contributed to it a study of Miyazawa Kenji, whom I like a lot. On New Year's Day the imperial couple compose festive poems and Professor Nakanishi is

their advisor. His trail-blazing seminar inspired me to write my best critical book thus far, called *Landscapes of the Japanese Soul*, which received the Publishers' Award for Best Book of the Year, 2001 in Prague. In 1993 Professor Nakanishi visited a symposium in Prague and I invited him and his wife to my *furusato* in Stará Boleslav.

The lectures of Professor Kawai were extremely instructive; he considers himself a Jungian and interprets Japanese fairy tales in Carl Jung's spirit (*The Japanese Psyche: Major Motifs in the Fairy Tales of Japan*). The conclusion of his wonderful seminar on Jungian archetypes and psychology sounded like a revelation to me. Professor Kawai said:

Where your Western concept of the human mind sinks in a descending motion from the social persona, personal I, anima and animus all the way down to non-consciousness towards the *id* where you find only inert elements of nature, we find the soul of nature and nothingness as everythingness and a source of the universe. Where you come to an end, we find a beginning.

In the spring of 1995 I was greatly honored by an invitation to an important conference on Tanizaki, prepared meticulously on the premises of the illustrious University of Venice by Professor Adriana Boscaro. All the world experts and translators of the master's work gathered in the lagoon city: Professor Howard Hibbett, Anthony Chambers, Paul McCarthy, Ken Ito, Donald Richie (with an interesting contribution on film adaptations of Tanizaki's novels and short stories), Jacqueline Pigeot and many others. Edward Seidensticker was also to come, but he already had problems with his legs and the only way to get around in Venice is on foot. I met Seidensticker at the University of Toronto once and would have loved to see him again: he was an upright and honest man, almost abrasive at times, but an extremely gifted translator. I had his *Sound of the Mountain* at hand when I translated Kawabata's novel into Czech and it was truly brilliant.

I chose a seminal work by Tanizaki called *Love for Mother* (*Haha o kouru ki*), without which one cannot understand the master's work. The afternoons were usually free and so we travelled the lagoons with Eva, watched the sun-tanned Venetians repair the soaked foundations of their houses and visited the famous cathedral of San Marco. We even made a trip to nearby Padua, where Antonio of Padua, my own and my son's patron saint is buried in a stately basilica. There we saw beautiful paintings by Titian and Veronese. An unforgettable trip was also to the "island of glass," Murano, where my wife bought a beautiful doll. Italian

food—*zuppa di pesce, grigliata mista marinara, pizza marinara, risotto, tartuffo* sweets—was divine. We spent a wonderful week in this blessed country and I again clearly realized that Italians may be bad soldiers, but they are artists of life.

In April of 1997 I finished my lectures at the University of Toronto and according to the nonsensical rules of that time about mandatory retirement I became Professor Emeritus at the age of 65. These days the rule does not apply anymore, and an academic who has not lost his marbles and delivers a solid performance in his job can stay as long as he or she wishes. In that ensuing decade or so, I could still have educated a few good postgraduate students, but not much time would have been left for my *Manyōshū* translation. In June 1996 an ASPAC (Asia Pacific) conference was held at the University of Alberta in Edmonton, and it was attended by two Japanese professors, Mori Michiko from Ōtemae University in Kobe, and Odagiri Hiroko from Fukui University. Ken Tsuruta knew Professor Odagiri very well and she informed him that she and Michiko were given the task of finding a visiting Canadian professor of Comparative Literature and Culture for Ōtemae. In the fall of 1996 both ladies came from Budapest to my *furusato* of Stará Boleslav and my son drove us on beautiful excursions to the castle of Karlštejn and Prague's monuments. Stará Boleslav is an ancient place, so I could show my son the memorable sites of our native town such as the church of Saint Wenceslas, where we were both baptized, the church of Holy Ascension and many others. Ken Tsuruta recommended me to Ōtemae University and so by the end of April 1997, even before the semester ended, I was sitting on a plane headed for Kansai International Airport in Osaka.

Ōtemae University was at that time a strictly female university and its campus was located in the residential area of Nishinomiya between Osaka and Kyoto, an ideal location and a very comfortable environment with the Inland Sea on one side and the evergreen mountain range of Rokkō on the other. The university also offered a spacious free apartment for visiting professors, the salary was generous and my living conditions were absolutely ideal. One of my courses had the unusual title of “Communication with Foreign Cultures” so I could tell the students in the first class that they see in front of them a living example of the symbiosis of three cultures. When I now imagine the complete isolation of these pampered wellborn girls from any kind of direct international experience and the fact that the outside world was mediated to them only through popular music groups and the Internet, it is clear to me that they must have perceived me as a very outlandish creature at the beginning.

Since their life experience was so incompatibly different from mine, communication with them was not easy. To rely on what we had in common with their well-educated grandfathers, namely the cultural heritage of Japan and Europe, was out of the question. My friend Ken got a job at Ryūkoku University in the nearby town of Ōtsu and told me how in the first class he asked, “And what books have you read lately?” and the students answered with a bored expression, “We don’t read books anymore.”

To my question if they had ever heard the name Kawabata Yasunari, my students answered simply that they never had. In my day it would have been unthinkable if Czech university students were not familiar with the name Karel Čapek, but times have changed. I asked them to buy a pocket edition of *Yama no oto*, Kawabata’s most important novel, to read it and come to a discussion seminar about it. They all came and they had all diligently read the novel. A two-hour discussion showed that they understood the novel very well, and their reactions were to the point; from this I understood that the generation of these twenty year olds is not stupid or insensitive at all, just hopelessly drowned in the *tsunami* of irrelevant information that keeps coming at them day after day. The main problem is how to orient oneself in that flood of information and find the right pieces.

Another time I showed them Kurosawa’s remarkable film *Dersu Uzala* that takes place in Siberia and whose protagonist is a hunter from the Goldi tribe, but in essence it is a search for the original Japanese identity. Kurosawa is interested in the parallels between an existing representation of the hunting culture and the ancient Japanese of the Jōmon period, when they made their living as hunters and food gatherers. Of course I did not realize that to suggest to pampered girls from the families of managers, dentists, businessmen, bankers and engineers that their direct ancestor was a shabby, bandy-legged savage from the taiga, was a little bit too audacious. When I asked them how the film impressed them, one of them said, “It’s too complicated, we don’t get it.” “And what would you like to see, what would be more understandable?” I asked. “My Neighbor Totoro” (*Tonari no totoro*), they replied. It was now my turn to be lost, for I knew next to nothing about Japanese anime and up until then I considered it a genre for children. When the girls gave me a copy of Totoro and I had a good look at it, it was clear at first sight that the director of the film uses a whole array of Japanese archetypal motifs such as the land of roots (*ne no kuni*), the sacred rope of *shimenawa* and that the round fluffy animal protagonist is a perfect representation of Jung’s archetype of consoling roundness that acquires special significance in times of cultural turmoil and despair. The course

taught me a lot, expanding my horizons, and I do hope that my students also derived some benefit from it.

My colleagues from Ōtemae said, “If you want to know the real age of your students, you have to deduct twelve years from their physical age.” So I was teaching girls around eight years old and indeed their real psychic setup corresponded to this age. Psychologists have been talking for a number of years now about the gradual infantilization of mankind, but it seems to me that this process is more pronounced in Japan than in the West. I called my lectures at Ōtemae “an endurance test in a ‘Papin’ cooking pot,” because the officials there asked me to lecture partly in English, but tuition in spoken English was not very good at the time so the students did not understand me and I had to switch completely to Japanese. This was of course very good for my oral language skills.

So when I finished teaching at Ōtemae in 1999 I took a one-year leave of absence and concentrated fully on the translation of *Manyōshū*. I owe the original idea to my dear friend Ken Tsuruta, who was born in the same year as I and when we both retired, he told me, “Modern literature is interesting, but the real treasures are in the classics. All the rest is already derived.” In the fall of 1999 a malicious ailment took him away forever, but I will always fondly remember him. I started working on this enormous project around 1997–98 and searched for a suitable publisher during my frequent trips to Prague. Larger publishers are not eager to publish a four-volume edition of poetry, so I settled on a small publisher called Brody, run by young, enterprising people. They entrusted the graphic layout to a leading graphic artist, Mr. Ziegler, who did a wonderful job. This huge project took me about twelve years to complete, years when I lived like a hermit or a Zen monk. And yet, it was an exciting time immersing oneself in this marvelous text and finding something new every day. It was a time of great adventure. I use the last poem of the collection, 4516, as a New Year’s greeting and likewise one can find in *Manyōshū* a poem for any situation or mood in human life:

Like today’s snow that falls on the first spring day, may all the things in the New Year be good.

I tried to find out into which world languages the *Manyōshū* has been translated, and it seems that aside from Korean and Chinese, so far there is only French. I had this translation by the already departed Japanologist René Sieffert at hand when I was translating the

last fourth volume and I must say that it is an outstanding translation. Sieffert managed something that all translators from difficult languages long for: to combine scholarly accuracy with poetry and readability. I have only one objection: Sieffert left out all pillow words (*makura kotoba*), poetic epithets that complete the atmosphere of individual poems.

A perfect English translation does not yet exist: there is only the first volume, superbly translated by Ian Hideo Levy. I spent some time with him at Nichibunken in Kyoto and I know that he is basically bilingual. His father is an American and his mother Polish, so this project was ideally suited for him. Before he managed to start the second volume, he became a famous writer in Japan who published a bestseller called *A Room Where the Stars and Stripes Cannot Be Heard*. I have not read it, but found it awkward to imagine how somebody can “hear” a flag. Then my colleague Paul McCarthy explained to me that it is not the flag as such but the popular musical composition *The Stars and Stripes Forever*. Ian did not return to translating, to the great regret of Professor Nakanishi who spent a lot of time with him and wanted to educate him as the foremost translator of his beloved collection. He had the gift for it, since his Japanese is as good as his English, which is beautiful and poetic.

Comparing Czech and English I realized the difference in their linguistic possibilities. Though Levy’s translation is outstanding and his language has a nice, soft flow, Czech is a priori closer to the original Japanese for its natural lyrical tone and thus better suited for emotional Japanese poems than the more sober and factual English. When we imagine a time without newspapers, telephones, email and text messages, we realize that *Manyōshū* was in fact a substitute for these modern tools of communication.

Instead of an email message or telephone call the nobleman of the eighth century simply sent his message in the form of a short poem, which he tied to an appropriate present or simply a sprig of seasonal blossoms. When he did not like something in the political life of the realm he could write long poem called *chōka* and endow it with intelligible innuendos. The court society was of course so small that any kind of subtle suggestion was understandable to its members.

I loved singing from early childhood and all Czech folk songs entered my bloodstream, so that even nowadays I can sing a few stanzas of every one of them. Only when translating some of the work songs or folk songs from the *Manyōshū* did I realize how close they are to ours and that helped me find a natural, colloquial tone for them. The essential symbiosis of a country person’s emotional life and the metaphorical expression

in both cultures is surprisingly similar. The identification of a beautiful girl with a flower is as common in the *Manyōshū* as it is in the Czech folk song: “You Katie, are a white rose...” Let us compare a poem by J.V. Sládek, who also started out from the folk song, with its Japanese counterparts:

“Into the depths of your soul, into the pool of your thoughts I lower my head like a bundle of forget-me-nots into the river.”

思い草の茎が川に向かって屈みこんでいるように、私も、貴女の心奥の深みの前でうなちを下げ、あなたの奥深いたましいの底にある淵まで沈みます。

335 The Abyss of Dreams

I trust my journey won't be long; may Yume no Wada, the Abyss of Dreams not turn into rapids but still be an unmoving pool.

我が行きは久にはあらじ夢のわだ瀬にはならずて淵にありこそ。

The feeling of emotional depth, an immersion into one's partner's soul is perfectly captured here by the “botanical” and natural metaphor.

Czech and Japanese *kunimi*:

Roughly at the time when Emperor Jomei was ascending the Heavenly Mountain of Kagu to perform his famous *kunimi*, a forefather Czech went up a similar Sacred Hill, called Říp, and performed much the same ritual:

Behold, this is the land you were looking for. I often talked to you about it and promised that I'll lead you here. This is the promised land, abounding with honey, full of birds and beasts. You'll have plenty of everything and this land will protect us from enemies. Look, a country of your dreams!

Many are the mountains of Yamato, but I climb the heavenly Kagu hill that is cloaked in foliage, and stand on the summit to view the land. On the plain of land, smoke from the hearths rises, rises. On the plain of waters, gulls rise one after another. A splendid land is the dragonfly island, the land of Yamato!

Border guards' songs (*sakimori no uta* 防人の歌)

Japanese translation from czech

僕が馬に乗り、
サーベルはびかびかと光るが、
愛しい人の心が割れるのではないか

***Manyōshū no uta* 万葉集の歌**

By the order of the Emperor I said goodbye to my beautiful wife, took her hand one last time and now I sail along the islands.

おほきみの、みことかしこみ、うつくしけ、まこがてはなり、しまづたひゆく (4414)

When translating a poetic anthology that is as difficult as *Manyōshū*, the translator runs into many seemingly unsolvable linguistic puzzles. I was often wracking my brain for days, even weeks before I found a viable compromise. For example the expression *tamakushige o akeru*, literally to open an inlaid box with combs, has concrete erotic connotations in the original text. But opening a box with combs is not very poetical in Czech and does not sound like something very precious. With a heavy heart I decided to translate this expression as “box with jewels” or “jewelled box,” as Levy renders it in English.

While translating *Manyōshū* I was very lucky that this long and demanding task was faithfully supported by my wife, who has as a writer an infallible feeling for the Czech language and is not burdened by the perfectionism of a specialist. I wrote a basic draft for many of the poems and Eva turned them into beautiful Czech poetry. She was especially successful with the women’s poems, for her feminine sensitivity enabled her to deeply immerse herself into the original meaning of the poems.

Whenever I felt miserable in the last ten or fifteen years, I always turned to *Manyōshū* and found solace in it. Only after immersing myself for ten years in this marvelous, wise text and losing myself in it, I discovered myself again, finally grasping the depth of the Japanese concept of *mono no aware* that I did not understand as a young man; now I know that it is the unbearable beauty and sadness of life.

In the fall of 2014 I received an unexpected email from Nara Prefecture Complex of Man’yo Culture 奈良県立万葉文化館 that took my breath away. They offered me the

prestigious Nara Manyō World Prize, under two conditions: first, that I would appear in person at the acceptance ceremony and second, that I would give a speech in Japanese. These conditions were fairly easy to fulfill, though I was a bit worried about the long and exhausting trip. Thanks to JAL I made it without any problems, arriving in Nara on the evening of 19 March. The elegant and dignified ceremony, hosted gracefully by Professor Nakanishi, took place on 21 March.

The reward ceremony was attended by officials from the Nara Prefectural government and some of my Japanese and Czech friends. From Fukui came Professor Karel Fiala, a man who did more for the awarding of the prize than anybody else. I was very happy to see the dear faces of my friends from Ōtemae, Mori Michiko, Tamaki Akemi and Odagiri Hiroko from Fukui Graduate Women's College in the audience. The graphic designer of several of my books, Ms. Daniela Renčová, even came all the way from Prague. A few days later came Jura Matela, a younger Czech colleague from Brno University.

The three weeks in Japan went by like a dream. I visited all the great sites in Nara related to *Manyōshū*: Mt. Miwa, the Three Sacred Mountains of Yamato in Fujiwarakyō, and places associated with other classics or historical personalities, such as Kashihara Jingū, Asuka-dera, etc. Again I realized that this is one of the last fully functioning human communities in the world.

Jura took me for an unforgettable trip to a mountain spa, Yunomine Onsen in the Kii peninsula of Wakayama prefecture, where we spent about three days. It is called “the mother of Japanese *onsen*” and it is probably the oldest, the smelliest and most sacred among all of Japanese spas. A few steps from it runs the venerable pilgrim's old path of Kumano (Kumano Kodō).

When I was leaving Nara and saying “*sayonara*” to my Japanese friends, I added, “And if I happen to be reborn in the future, let it be in Japan!”



日本史研究の春秋

趙 建民

私が大学でレポート「日本法西斯的形成和衰敗」（日本ファシズムの形成と崩壊）と卒業論文「明治政府的産業政策与資本主義発展」（明治政府の産業政策と資本主義の発展）を書いた1960年代初期からは、もはや半世紀が経っている。思いがけないことだったが、当時のレポートと卒業論文の題目は、1980年代の改革開放後の中国の日本史学界で最も注目されるテーマとなった。

日本史研究を生涯の仕事として、78歳になった今、長年の日本史教育と研究を幸せに思うと同時に、今後も研究を続けていき、限りなく美しい夕日のように残り少ない人生を有意義に過ごしたい。

1. 日本史研究の始まり

私は1938年1月5日に現在の上海市宝山区羅涇鎮（長江の近くにあり、当時は「小川沙」と呼ばれた）に生まれた。そこは、1937年の「八・一三淞滬会戦」（第二次上海事変）の際、日本軍が最初に上陸した地域で、2,200人余の地元住民が殺戮され、1万軒余りの家屋が焼失した。そのため、私はそれを日本軍の「南京大虐殺」の源と見ている。日本軍が上海を占領し、南京を攻略して大虐殺を起こしていた時、私は産声を上げた。戦乱の中で幼少期を過ごし、小学校から中学校までである疑問を抱き続けた。古代において中日は友好関係を保っていたのに、近代になってなぜ日本は何度も中国を侵略したのか。この疑問を解き明かすために日本の歴史を学習しようと決めた。

何年間かの社会人生活を経て1959年に復旦大学歴史学科に入学した。在学中、異例にも日本語を第二外国語として習った。1964年に卒業後、復旦大学国際政治学部で教鞭を執り始めたが、「文化大革命」（1966-76年）の間、日本語版の『毛沢東選集』と『北京週報』が日本語学習の教材であった。

1979年、復旦大学歴史学科に戻って、翌1980年9月に遼寧大学日本研究所が主催し日本人研究者が担当する「日本古代史講習班」に参加した。その後、大連で「東北地域中日関係史研究会第1回国際シンポジウム」に参加し、関西

大学の大庭脩教授をはじめとする日本の研究者たちと出会った。私の日本史・中日関係史の教育と研究の始まりであった。

1979年からは歴史学科の基礎講義「世界中世史」と大学公開講義「中日文化交流史」を担当した。数年後、学部と大学院のために「中日文化関係史」「中日文化交流史專題研究」「日本史」「日本古代中近世史」「日本史文献導読」「日本史研究理論及方法」などを開講した。「从浙東佛跡看中日文化交流」（浙江省東部の仏跡から中日文化交流を見る）という現地調査、『日本外史』読書会、「伝統文化と現代化」などのゼミを組織して、個性あふれる教育システムを作り出した。

1983年夏、中国日本史学会が江西省の廬山で開催した「日本史教育経験交流会」において、私は中国の日本史教育研究現状が「北強南弱」である状況を説明し、簡潔でわかりやすい日本史教科書を作ることを提言して、参加者の賛同を得た。その後、「新しい枠組み、明確な主張、豊富な史料、詳簡のバランスが取れた」教科書を目指した。新中国成立40年後、大陸の学者による最初の『日本通史』が1989年8月に復旦大学出版社により刊行された。その後、台湾の五南図書出版会社が繁体字版を刊行し、再版して香港、マカオおよび東南アジアでも出版された。私はまた、日本民俗学者吉野裕子先生の講義を企画し、その後、氏の著書『陰陽五行と日本の民俗』の中国語訳を1989年に上海学林出版社より刊行した。

1987年8月、上海市対外友好協会と日中人文社会科学交流協会（有沢広巳会長）の共催で、安藤彦太郎、衛藤瀋吉両氏の引率した代表団による、「第1回中日関係学術討論会」が行われた。その後、私の提案と準備により、翌年5月8日に「上海中日関係史研究会成立大会暨学術報告会」が開催され、上海社会科学院歴史所の湯志鈞研究員が会長に、私は常務副会長兼秘書長に推された。日本国駐上海総領事館はこの研究会の成立を重視し、副総領事が総領事吉田重信氏の祝辞を代読した他、『読売新聞』でも報道された。その後、中根千枝、佐藤誠三郎、佐佐木毅諸氏を招き、「上海中日関係史研究会」で講演をしていた際には、蓮見義博総領事も来場し、中日研究者のために官邸で宴席を設けていただいた。その他、石田一良、賀川光夫、石島紀之、鈴木靖民、譚汝謙等10余名の講演会をはじめ、日清戦争100周年記念会、台湾光復50周年記念会シンポジウム、日本東海大学との「江戸時代中日文化交流」国際シンポジウ

ム、県立長崎シーボルト大学（現在は長崎県立大学）との「上海と長崎の交流」国際シンポジウムなどをそれぞれ開催した。さらに、京都浦田能楽団の訪中公演、日中桜花友誼林建設訪中団による復旦大学での桜の植樹など、積極的に民間交流を推進した。

1988年10月、北京で開催された「中日関係史国際シンポジウム」では、香港中文大学の譚汝謙先生と初めてお会いした。譚先生のおかげで、私は初めて海外へ出かけて、1990年8月に香港で行われた「近百年中日関係国際シンポジウム」に参加することができた。また、1996年11月、アメリカのスタンフォード大学で行われた「近百年中日関係暨世界抗日戦争史実維護会」（百年の中日関係および世界の抗日戦争史実保護の会議）国際シンポジウムでは、「抗日戦争期間中に中国文化財産に対する日本の略奪と破壊」を報告した。この模様は11月11日付の『星島日報』で報道された。それと同時に、台湾金禾出版社社長郭俊録氏とメリーランド大学の薛君度教授が主宰する「アメリカ黄興基金会」の助成により、「日本の中国侵略時の組織的な中国文化財破壊の史実」を研究するプロジェクトがスタートした。1999年12月、東京で開催された「戦争犯罪と戦後補償を考える国際市民フォーラム」において「南京大虐殺時の図書略奪とその返還」と題して行った報告が、アメリカの李培徳教授（Professor Peter Li）によって英訳・編集され、論文集 *Japanese War Crimes: The Search for Justice* (Transaction Publishers, 2002) に収録された。

1992年には、上海と大阪府の姉妹都市締結20周年を記念し、大阪府国際交流財団の招待により「日中文化交流講座」において「中日文化差異及其歴史原因」（中日文化の差異とその歴史的な原因）、「留学生的作用与日中両国的發展」（留学生の役割と日中両国の發展）と題して講演を行った。その後の数年間、関西大学大庭脩教授と「近世中日文化関係史研究」、慶應義塾大学山田辰雄教授と「二十世紀前半の中日関係—留学生を中心に」、早稲田大学安在邦夫教授と「十九世紀末の西学東漸に対する東アジア知識人の反応—崔漢綺、呉汝綸、福沢諭吉を代表とする教育観の比較」、鳴門教育大学高橋啓教授と「中日文化交流史の中の教育交流」などの共同研究を行った。

1993年、広島大学頼棋一教授の案内で頼山陽史跡資料館を見学した際には、拙論「頼山陽の『日本外史』と中日史学交流」を寄贈した。その縁で、頼山陽文化記念財団会長石松正二氏からの礼状とともに、『頼山陽全書』8冊を復旦

大学歴史学科に寄贈していただいた。1997年、「論『日本外史』的撰刻和在中国的流傳」（『日本外史』の著述と中国での流布）（台湾『漢学研究』14巻2期、1996年12月）というテーマに対し、日本の住友財団から「頼山陽史学思想研究」助成金を得ることができ、その成果は「頼山陽の史学思想試論」として、北京『日本学』（13輯、2006年3月）に掲載された。

1998年5月、広島県生涯学習協会の斎藤清三会長（吉備国際大学教授）が設けた特別講演会「中国人の見た日本の光と影」に際し、私は頼山陽の故郷である広島竹原市で頼山陽研究の講演を行い、『中国新聞』の取材を受けた。頼山陽の子孫、頼惟勤氏（お茶の水女子大学名誉教授）と病院で面会することができ、ご自身で編集された『頼山陽』（日本の名著28、中央公論社、1997年）と、ご先祖の頼成一（頼山陽五世孫）著『日本外史の精神と釈義』（旺文社、1944年）の2冊を恵贈していただいた。『日本外史』の中国での復刻と流布は、日本に伝わった儒学の「逆輸出」であり、中国人の日本理解を深め、中国儒学史観から西洋文明史観へと脱却する日本の一つの転換点を示している。

1999年7月、私は、上海市日本学会（郭焯烈会長）が主催した、オーストラリア国立大学 Gavan McCormack 教授の著書 *The Emptiness of Affluence* の中国語訳『虚幻的樂園』（郭南燕訳）の出版記念会に出席し、この本に啓発されて人と自然との調和的關係を重んじるようになり、日本自然史の研究に対するシーボルトの貢献を研究し始めた。2002年3月28-30日、小笠原父島で開催された国際シンポジウム「アジア太平洋の自然と人間—持続可能への摸索」（郭南燕企画）にも参加して、シーボルト研究の論文を発表した。

歴史認識の問題は中日関係にも、日本自身の発展にも関係している。2002年4月5日、植竹繁雄外務副大臣の主催によって東京の日中友好会館で開かれた「日中学者歴史認識問題座談会」では、日本側から宮本雄二、山田辰雄、小島朋之、天兒慧諸先生の出席の下、私が「従文化的認知認同中尋求更多歴史共識」（文化のアイデンティティーから歴史の共通認識を求める）と題する発表を行い、日本の学者たちと日清戦争の性質について議論した。また同年11月には、韓国釜山の東アジア教育学会、海洋大学校で「『新教科書』的要害：欲使日本重頭戦争‘雄風’」（「新しい教科書」が日本に戦争の「威風」をもたらす）という基調講演を行った。歴史は現実の教科書で、現実にも目を向けさせてくれるものでもある。歴史事実を歪曲し、侵略の本質を否認するあらゆる言動は他人の利益

を損なうばかりか、自分にも利益をもたらさない。歴史の教訓を銘記し、東アジア各国の政府や人民と友好関係を結び、和平発展への道を歩むべきだ。

以上、簡単に私の学術人生を振り返った。1998年1月、復旦大学歴史学科で定年を迎え、現在は復旦大学日本研究センターの兼任研究員、南開大学日本研究院兼任教授、中国日本史学会学術顧問、上海市歴史学会中日関係史專業委員会名誉主任を務め、日本史の研究と交流をできる範囲内で続けている。

2. 緻密に日本史を研究した30年

私の日本史研究は「中日文化の差異およびその歴史的原因」からスタートした。中国では1980年代以来、中日文化に関しては、「同文同種」という言葉がよく使われる。私は言語学、文字学、文献学などを利用し、歴史と地理環境の違いを分析して、「中日の文化は同文ではなく、同種でもない。ただし、その「不同」の中に「同」があり、「同」の中に「不同」がある。ともに東方の文化に属しているが、「同性異質」であり、異質の文化である」という結論を導き出している。

中日文化の差異は、文化そのものの差異以外に、外部の影響にもよる。最も大きな要因は、西洋近代文化が両国に与えた影響の違いである。すなわち、中日両国の西洋近代文化の摂取方法、態度、思想、認識上の差による。私の研究は、論文「中日両国的吸取欧洲近代文化之比較」（中日のヨーロッパ近代文化受容の比較研究）（『近百年中日関係論集』台北：中華民国史料研究中心、1992年）に結実した。さらに、家永三郎『外来文化摂取史論—近代西洋文化摂取の思想史的考察』（1974年再版）、伊原沢周『日本と中国における西洋文化摂取論』（1999年）を通読して、「中国在日本摂取欧洲近代文化中的作用」（日本のヨーロッパ文化受容における中国の役割）（上海『学術月刊』12号、1987年12月）、「中日両国吸取外来文化的歴史考察」（中日両国の外来文化受容に関する歴史的考察）（北京『世界歴史』3号、1989年6月）、「外来文化与傳統文化的融和」（外来文化と伝統文化の融合）（上海『文匯報』1989年7月4日）などの論文を続けて発表した。この分野における中国の研究者としての独自性を示して、それをもって国際的な対話と交流を行うことができた。

日本の西洋文化の摂取（日本では南蛮学、蘭学、洋学という）について学ぶため、1992年、関西大学東西学術研究所で近世中日文化関係史の研究を行っ

ていた時、古稀を過ぎた名誉教授有坂隆道先生のお宅に伺う機会があり、矍鑠として悠然とした議論が10時間にも及んだ。先生は私の質問に丁寧に回答し、奥様には手作りの精進料理を出していただき、先生が編集された『日本洋学史の研究』10冊と新著『山片蟠桃と升屋』（1993年）も恵贈していただいた。

有坂先生の親切な指導を得て、「我田引水から始まり、洋学を深く研究する」と先生がおっしゃったように、私は大阪蘭学開祖橋本宗吉、町人学者山片蟠桃、『歴象新書』の訳者志築忠雄に関する論文を書いた。すなわち、「大坂蘭学始祖：橋本宗吉的生平和業績」（北京『日本学刊』2号、1997年3月）、「山片蟠桃：江戸時代傑出的町人学者」（北京『世界歴史』4号、1998年8月）、「志築忠雄的『歴象新書』翻譯与儒学自然観」（上海『日本研究集刊』、1998年下半年刊）である。これらは日本の洋学史における人物・著作研究の一環であり、上述した中日の西洋近代文化の摂取という研究のさらなる進展でもある。1998年10月には、早稲田大学アジア太平洋研究センターで「文化の側面から見た日本の国際化」という講演も行った。

以上の研究と深く関わるのは、留学生派遣と教育制度の近代化である。中日関係史上の3回にわたる留学ブームと、清末の京師大学堂総教習呉汝綸（1840-1903）の日本視察について、「呉汝綸赴日考察与中国学制近代化」（呉汝綸の日本考察と中国教育制度の近代化）（上海『档案与史学』5号、1999年10月）、「派遣与接納留学生的理念和事实」（留学生の派遣と受け入れにおける理念と事実）（蔡建国編『亚太地区与中日関係』、上海社会科学院出版社、2002年）を執筆した。日本最初の文部大臣森有礼（1847-89）が1873年1月にニューヨークで出版した *Education in Japan* についても研究した。同書はアメリカ宣教師林楽知（Allen Young John, 1836-1907）による中国語訳『文学興国策』として1896年に上海で出版され、中国の知識人に多大な影響を与えた。*Education in Japan* の日本語完訳は1963年になってようやく出版されている。ゆえに、英中日という三つのバージョンの比較は、歐美教育をモデルとする教育近代化を推し進める過程における中日両国の差異と原因を探求するのに役立ち、異文化の伝播と受容の現実性と可能性を探ることもできるとして、「森有礼の *Education in Japan* の中国訳とその影響—異文化の伝播と受容の現実性と可能性を論ずる」（東京『国際教育』8号、2002年10月）を執筆した。

日本の対外戦争に関して、私は「『大東亜共栄圏』的歴史与現実思考」（北京

『世界歴史』3、1997年6月)を書いた他、戦時中の図書掠奪に関して、「抗戦期間日本对中国文化財産の破壊和掠奪」(上海『档案与史学』2号、1997年4月)、「略論『南京大屠殺』中的図書劫掠」(『南京大屠殺』における図書の掠奪に関する概論)(台北『近代中国』122号、1997年12月)、「侵華日軍在浙江地区的図書文物掠奪」(寧波『天一閣文叢』1輯、2004年12月)、「占港日軍劫掠馮平山圖書館之始末」(香港占領日本軍の馮平山圖書館掠奪始末)(香港：国民教育中心網、2011年11月30日)など多数の論文を発表した。

私の「略論『南京大屠殺』中的図書劫掠」に対して、立命館大学の金丸裕一氏は「曲論の系譜—南京事件期における図書掠奪問題の検証」「批判と反省戦時江南図書『掠奪説』誕生の歴史的背景」「『南京図書大掠奪』のまぼろし」を書いて反対意見を述べた。それに応えるために、私は上述の既刊論文に「兼評金丸裕一教授關於南京大屠殺中図書掠奪的研究」というサブタイトルを付け加えて、雑誌『日本侵華史研究』2013年6月、2期に再掲載した。

大量の史実を見て、特殊な状況においては「戦争も一種の文化交流」だという結論に至った。当然、文化交流には、平等・自由・相互的な交流と、不平等・強制的・掠奪的な交流の別がある。戦争の過程における多くの文化の問題は、日本史あるいは中日関係史研究が見過ごすことのできない課題であり、それは、歴史認識、現実把握、未来予測にとって、学術的価値と現実的意味の両方を有している。

東アジア地域の文化交流は時間が長く、規模が大きく、影響が深い。1607年から1811年までの200年間の朝鮮通信使の訪日は、今でも韓日両国の歴史研究の注目点である。朝鮮通信使の訪日そのものは朝日両国の関心事であるが、その中で中国事情にもよく触れられてきた。なぜ朝日両国の使者はみな中国に注目していたのか？それについての論文「17-19世紀初東亜地区的文化交流—朝鮮通信使訪日与朝日两国对中国歴史文化的関注」(17世紀～19世紀初期の東アジアの文化交流—朝鮮通信使と朝日両国の中国歴史文化への関心)(天津『東北亜学刊』2号、2002年6月；ソウル『韓国伝統文化的反思和新探』大旺社、2002年)を書いた。これは中国の角度から試みた最初の朝鮮通信使研究であり、朝鮮通信使が朝日両国を戦争から和平へ、また和平から戦争へと導き、東アジアの国際関係に影響を与え、中朝に対する日本の態度が友好から蔑視へと転じた契機になったと指摘した。

2012年10月、南開大学の世界近現代史研究センターと日本研究院が共催した学術講座「跨文化傳釋研究」（文化をまたぐ伝播と解釈）は、多元的・開放的に時空が交錯する動的なアプローチによって、伝播側（作者）の意図と受容側（読者）の解釈意欲を俯瞰するものであった。政治・経済・外交・軍事と多方面にわたる文化的影響力が高まる中で国際的な発展と変化にも適応しており、伝統的な静的研究を新しい動的研究に変えるのに有効な方法で、実践に値する。2013年1月『東北亜学刊』に掲載された拙論「一幅近世近代中日交流的な文化地図—從『日本外史』『日本教育』中窺探跨文化傳釋」（近世近代の中日交流の文化地図—『日本外史』と『日本教育』から多文化的伝播と解釈を見る）は、この初歩的試みである。また、2014年4月に上海人民出版社より出版された拙著『晴雨耕耘録—日本和東亞研究交流文集』は、30年間の学術研究と交流を回顧・概括したものである。

以上の研究から得たいくつかの経験をここで述べよう。第一に、研究の規模は予め設定しないが、明確なテーマは必要である。すなわち、学術研究は社会発展に貢献し、社会の現実から歴史研究の問題を見出すだけでなく、歴史研究から現実問題の解決方法を探り、啓示を提供する。歴史研究は、現実問題の研究とは異なる。現実問題の研究は空腹を満たす「ファーストフード」だが、歴史研究は味も色も備えたフルコースである。歴史研究は、問題意識を強調し、根幹に遡り、斬新な論点を提出し、現実性と啓発性を備えるべきだ。現実に関心を向けることは学術の品格である。

第二に、日本史、とりわけ江戸時代の歴史と日本文化史の研究を重視しなければならない。江戸時代は日本史全体において過去を受け継ぎ、未来を切り開く位置を占めている。政治史・経済史はよく重視されるが、たとえば言えば、政治史は人間の骨格、経済史は筋肉である。軽視されがちな文化史は血液で、その重要性は前の二者に勝る。そのため私の研究では、江戸時代と文化史が大きな割合を占めている。

第三に、学術研究には常に新しい史料発掘、新しい理論、観点、研究方法が必要で、深く掘り下げ、幅広く見渡し、「マクロ的視野」で実証と比較を行わなければならない。

第四に、学術研究と交流を結びつける必要がある。私は、「上海中日関係史研究会」（現在は、上海市歴史学会中日関係史專業委員会）、「中国世界中世紀

史研究会比較史学分会」、「中国世界中世紀史研究会東亜研究中心」の設立と準備に参加した。香港大学、香港中文大学、大阪大学、神戸大学、愛知大学等と交流を重ね、1992 から 2002 年にかけて国外の大学を 50 余校訪問し、30 余回の学術講演を行った。大阪大学広田昌希教授が 1993 年 5 月 7 日に主催したシンポジウム「日中文化の差異について」で、私は問題提起者として「中日文化の差異と比較」をテーマに発表した。広田教授との交流は今日まで続いている。このように、研究と交流は互いに補完し促進する関係にある。

3. 東西文化交流においてシーボルト研究を深める

関西大学で短期研究を行った 1992 年以來、私は日本洋学史の研究に関心を持ち始め、編集担当の東海大学森陸彦教授から日蘭学会編『洋学関係研究文献要覧（1868–1982）』（日外アソシエーツ、1984 年）をいただき、シーボルト（Philipp Franz Von Siebold, 1796–1866）が日本で最も多く研究されている外国人（研究論著は 400 本以上）だと知った。1999 年 5 月、長崎を訪れ、出島資料館、シーボルト記念館、新築のシーボルト大学を見学した他、『シーボルト評伝』の著者中西啓先生と会い、シーボルト研究に取り組むことを決めた。

2001 年 9 月 8–10 日、南開大学日本研究院と東アジア比較文化国際会議の共催、日本国際交流基金の協賛で行われた国際シンポジウム「変動期的東亜社会と文化」において私は、「西方文化と日本文化撞撃出的火花—西博爾德的日本研究及其国際影響」（西洋文化と日本文化の接触による果実—シーボルトの日本研究およびその国際的影響）（楊棟梁他編『変動期的東亜社会と文化』天津人民出版社、2002 年）と題し、中国人研究者としては初のシーボルト研究論を発表した。その後も、「西博爾德：日本開国的‘第一誘導者’」（シーボルト：日本の開国に与えた最初の契機）（上海『社会科学報』2003 年 11 月 20 日）、「日本由本草学趨向植物学研究的転机—西博爾德对日本自然史両研究的貢獻」（北京大学『日本学』12 輯、2003 年 12 月）を執筆している。後者は、前述した小笠原の国際シンポジウムで発表し、「日本における本草学から植物学へ—東西交流」とのタイトルで、郭南燕他編『小笠原諸島—アジア太平洋から見た環境文化』（平凡社、2005 年）に収録された。また、シーボルト研究の第一人者である東海大学の石山禎一・沓澤宣賢両氏から、『新・シーボルト研究』（全 2 巻）、『シーボルトの生涯をめぐる人びと』、『シーボルト年表：生涯とその業績』を恵贈され、最新研究に触れることができた。

2015年2月27日-3月28日には、国際日本文化研究センターの来訪研究員として、郭南燕准教授主催の共同研究「キリシタン文学の継承」に参加した。「宣教師のアジア言語習得に貢献した華僑」をテーマに、1カ月という短い期間、インドネシアの華僑郭成章が、メドハースト（Walter Henry Medhurst, 1796-1857）とシーボルト、ホフマン（Johan Joseph Hoffmann, 1805-78）の言語習得と著作出版に協力した事実に関する史料を発掘した。これは私自身にとって研究の新しい出発点であり、日本史・中日文化関係史研究のさらなる進歩でもある。

これからの東西文化交流に関する研究を主に四つの課題に分ける。

(1) 郭成章とシーボルトの日本研究。郭成章は、広東大埔県大麻郷出身のインドネシア華僑で、文章家である。1830年、シーボルトの助手として、バタヴィアからライデンに移り、シーボルト、ホフマンと共同で6冊の「日本叢書」(*Bibliotheca Japonica*)、すなわち、①『新增字林玉篇』(1834)、②『和漢音釈書言字考』(1835)、③『千字文』(1833)、④『類合』(1838)、⑤『日本輿地路程度全図』(出版年不明)、⑥『倭年契』(1834)を編集した。①、②、③、④の4冊はすべて郭成章の署名による。6冊全体の体裁とドイツ語チェックはシーボルト、ラテン語の序文執筆はホフマン、字句配列、いろは順序の統一、修正は郭成章と、分担は極めて煩雑である。また、『新增字林玉篇』に関しては当時活字がなかったため製版の仕事も郭が担当した。彼はまたシーボルトとホフマンに中国語やマレーシア語を教え、彼らの東方言語の習得に尽力した。今後、「日本叢書」に携わった三人の努力をまとめて、「シーボルトの日本研究に対するインドネシア華僑郭成章の貢献」という論文を書く予定だ。

(2) 著書『シーボルト評伝—中国と中日関係研究を中心に』を執筆する。日文研で収集した資料によって、総合的な評伝を書く考えは諦めた。なぜなら、これまでに、呉秀三『シーボルト翁伝』(1896)、『シーボルト先生 其生涯及功業』(上中下、1896、1926)、板沢武雄『シーボルト』(1960)、ヴォルフガング・ゲンショレク著・真岩啓子訳『評伝シーボルト—一日出づる国に魅せられて』(1993)、ドイツ-日本研究所編『シーボルト父子のみた日本—生誕200年記念』(1996)など、多数の本が出版されている。すでに入手したシーボルトの伝記・評伝・年表は15冊以上に上る。シーボルトは2回目の日本訪問に向かう途中、上海に10日間滞在し、徐家匯天主堂を見学した他、上海郊外で標本18種を採

集したことがある。上海と長崎間の定期航路の開通も最初に彼によって提起された。彼と中国との関わりは密接であり、著書『日本』には、中国と中日関係に関する研究が多く散在する。そのため、中国と中日関係研究を中心としたシーボルト評伝は、今まで研究されていない課題であり、中国人研究者がこの課題を担当するのは適当と言えよう。

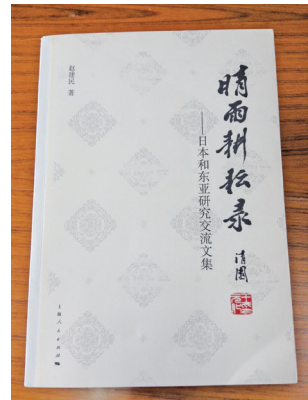
シーボルトは、1796年にドイツ中南部の学園都市ヴェルツブルクの医学界の名門に生まれた。1820年にヴェルツブルク大学の医学博士号を取得し、1823年に長崎に派遣され、オランダ商館の医師兼自然調査員を務めた。「鳴滝塾」を開設し、オランダ商館長の江戸参府に随行し、道中を利用して実地調査を行った。1830年からはライデンで日本研究に携わり、豊富な成果を上げている。1859年に上海を経由して再び日本に赴き、1862年以降、ライデン、ヴェルツブルク、アムステルダム、ミュンヘン間を往来し、各地に「日本博物館」を開設した。最後の著述である小冊子『日本博物館の概要と所見』は、博物館民族学研究の先駆けとなった。「国際人」であったシーボルトは、日本文化、日欧関係、東西交流史に大きな影響を与えた人物である。1879年に長崎公園に建てられた「施福多君記念碑」（現在長崎県立図書館前の長崎公園にある）に記されている文章「使欧洲各国知有日本者、施君之功也。使日本知有欧洲各国者、亦施福君之功也。蓋我邦絶交外国也久矣、君来我国、我邦之名大顕於彼、而彼之交際制度學術、始得其要焉。…欧洲学者称君為発見日本於學術上之人、詢不誣矣、為之銘曰：觀我国華、伝諸欧土、偉功夙成、英名万古、刻之貞珉、永在瓊浦。…」の通り、シーボルトは豊富な知識と広い胸襟と熱情を有する東西の架け橋であった。

(3) フロイスの『日本史』、シーボルトの『日本』から日本観を整理する。ルイス・フロイス (Luis Frois, 1532-97) はポルトガル・リスボンの出身のイエズス会宣教師で、最も早く日本に到着したヨーロッパ宣教師の一人である。年刊『イエズス会日本通信』を編集し、『日欧文化比較』(1585)などを著した。その代表作が『日本史』(*Historia de Iapam*)である。これは編年体の史書で、1549年にザビエル (Francisco de Xavier, 1506-52) が日本に上陸した時点から、日本の戦国末期、織豊時代までの史実が記述されている。一方のシーボルトは日本研究を行った最初のヨーロッパ人ではないが、その日本研究はヨーロッパ人の中で最も領域が広く、成果が豊富で、影響力が大きい。代表作は『日本』

(本文6冊、図版3冊)である。フロイスの『日本史』とシーボルトの『日本』とは300余年の隔たりがあるため、ヨーロッパ人の日本観の変化と特徴を知ることができる。

(4) マカオと日欧文化交流。1540年代、マカオは中国東南部の小都市から東アジア最大の商業都市へと成長した。カトリック教の日本伝播とともにヨーロッパ医学も日本に伝来した。例えば、1556年に宣教師ルイス・アルメイダ(Luis Almada, 1532–85)は日本で医術を行い、病院をつくり、「南蛮流之祖」と呼ばれている。マカオは、日本人にとって「南蛮流医術」を学ぶ重要な場所であった。ポルトガル人沢野忠庵(フェレイラ Christovao Ferreira, 1580–1652)は天文学の他、医術にも長け、長崎人豊田順庵に医学を教授した。豊田はそれだけに満足せず、マカオに赴き医学を勉強し、帰国後日本で名を馳せた。マカオでは1580年に教会が教育センターとなり、1594年には中国史上初の洋式大学「聖保禄学院」が創立された(1762年閉鎖)。ヨーロッパから日本に赴く宣教師はここで日本語を学び、日本人はカトリック教研究のためにここでラテン語を学ぶ、「東方のパチカン」となっていた。したがって、「日欧文化交流におけるマカオの位置と役割」という論文を書く予定だ。(マカオの中国返還に伴って、中西文化交流におけるマカオの役割に関する研究は増えた。しかし、日欧文化交流におけるマカオの役割は中西文化交流に劣らないものの、研究自体はまだ少ない。)

以上、四つの課題を通して、16世紀以来の東西文化交流の盛況を垣間見、日本と西洋の相互認識を深め、東西文化交流の特徴を見出すことができるだろう。そのような文脈の中でシーボルトに関する研究を深めれば、中国人研究者にとっては、日本史、中日関係史、中欧文化交流史に新しい境地を開くことができると信じている。



趙建民著『晴雨耕耘録—日本和東亞研究交流文集』
上海人民出版社、2014年

(翻訳：陳凌虹)

My Four Decades at McGill University¹

Yuzo Ota

Thank you for giving me a chance to talk about my thirty-eight years at McGill University before my retirement on August 31, 2012.

Last Thursday, April 12, 2012, when I gave my last lectures as a McGill Professor, turned out to be a very pleasant, memorable day for me. Both in HIST 352 Japanese Intellectual History 2, and HIST 359 History of Japan 2 the students listened to my lectures attentively and seemed to truly enjoy them. When my lectures were over, in both courses many students came up to me to express their appreciation for my courses in a very cordial manner.

Virtually every student picked up a copy of my one page essay titled “My lifelong passion: Marathon and long distance running,” copies of which I brought to the classroom just in case some students wanted to have something to remember me by. Later I read messages in the card that the students of HIST 359, several of whom are also enrolled in HIST 352, had given me and opened the present from three students of the same course that they brought to me after class with their thanks written in Japanese. I was surprised to find in the card word after word of warm appreciation, such as, “Your stories of Japan taught me more than any textbooks ever could. McGill will miss you!”, “I’ve learned so much from your class. It was truly a privilege to have taken History of Japan 2”, “Thank you for making one of my own last classes such a wonderful and enlightening experience”, “Thank you for showing to us that being different is awesome!”, and “Tremendously knowledgeable, entertaining, & kind,” and I was moved deeply.

After reading these messages, I read a lengthy e-mail from a person living in England to whom Basil Hall Chamberlain (1850–1935), the subject of my book titled *Basil Hall Chamberlain: Portrait of a Japanologist* (Richmond, Surrey, U.K., Japan Library, Curzon Press Ltd.) published in 1998, is a great-grand-uncle. Apparently he had only recently discovered my book and had written this e-mail to express his deep appreciation for my book as a member of the family. Although I published eleven books so far—all written after I started teaching

1 This is the text of the speech given on April 16, 2012 at the End-of-Year Party of the Department of History and Classical Studies, McGill University.

at McGill—only two of them, *Basil Hall Chamberlain: Portrait of a Japanologist* and *A Woman with Demons: A Life of Kamiya Mieko (1914–1979)*, published by McGill-Queen's University Press in 2006, are written in English. I remember that my biography of Kamiya Mieko was also highly appreciated by her family, judging from two letters from her eldest son, a professor of the University of Tokyo, one of which I received shortly after the publication of *A Woman with Demons*. These two books are important books to me personally. I would like to explain why. In order to do that, I would like to begin by explaining how I came to teach at McGill in the first place and how I have remained at McGill much longer than I had initially anticipated vaguely.

I was ignorant about Canada and did not even know that McGill University existed until Professor J. F. H. of the University of British Columbia, a specialist of Japanese history, arrived at the University of Tokyo as a Fulbright Exchange scholar in 1966 and taught two half-year seminar courses in the 1966–67 academic year, which I took. Before his return to Canada, he asked me if I was interested in coming to Canada. I said, “No.” Professor H. then said, “If you ever come to feel like coming to Canada, please remember me.” A few years later after I had started working full-time at the University of Tokyo, for a purely personal reason not at all related to academic matters, I started to look for a place to live outside Japan. I wrote a letter to Professor H., reminding him of his words of a few years before. Thanks to him, I was able to spend the 1972–73 academic year at UBC.

During my year at UBC I got acquainted with Professor B. of McGill University, a specialist of Japanese history. When Professor B. took two years' leave from McGill University during the 1974–75 academic year, I believe he strongly recommended me as his replacement, and the McGill History Department offered a position of visiting lecturer for two years to me, who at the time was still looking for a place to live outside Japan. When I spent the 1972–73 academic year at UBC, I was granted a paid leave of absence from the University of Tokyo. This time I gave up my secure, comfortable position at the University effective on August 31, 1974, and became a visiting lecturer at McGill University from September 1, 1974.

I had never before studied for a degree or diploma anywhere except at the University of Tokyo. I must have looked like a person ill-prepared to start teaching at McGill University. On the other hand, my childhood experience of living in nine different places all over Japan and attending seven different schools before I finished Grade 9 had made me a cosmopolitan of a sort. I always focused on similarities rather than differences between

peoples and cultures. I was shy but I was not particularly intimidated by finding myself in Montreal or McGill University where I had to teach courses in English.

When I went to the Department of History shortly after my arrival in Montreal, a tall handsome man who seemed to know everyone in the Department kindly introduced me to my colleagues. That was R. R., a specialist of Canadian history, who actually arrived only a few days before me to take up his position in the same year with me. I also met a brilliant specialist of Eastern European History, A. H., who, I believe, was replacing somebody for that academic year. I immediately became and remained good friends with people like them, who also treated me as their friend from the beginning. I did not forget that my position at McGill would last only for two years. I realized that if I wanted to remain in North America, I had to obtain a doctorate as soon as possible, forgetting a fairly widespread notion in Japan that a doctorate in the humanities and social sciences was something that would crown your lifework.

I went back to Japan during the summer vacation in 1975 to write my dissertation. My former colleagues at the University of Tokyo enabled me to use a room close to my former office as my study space even during the weekends when the building was closed. Arriving each day with two huge bags filled with books and research notes, I spent many days in that building, writing my dissertation half naked as it was so hot and humid. Several days before the beginning of the 1975–76 academic year, I went to the Graduate Office of the University of Tokyo carrying a large bag containing three copies of my completed dissertation, roughly 1,450 manuscript pages long, the length equivalent of three or four ordinary books, and submitted them.

During that summer, I had an unexpected pleasant reunion with a British scholar named A. C. R., only four or five years older than myself. After teaching at Oxford and MIT, he came to Japan and taught subjects like British Economic History at the University of Tokyo during my student days there. A voluntary reading group met in his apartment regularly while he taught at the University of Tokyo and by attending the meetings of this reading group led by him I learned more than from any formal courses at the University of Tokyo. He was now teaching economics at the University of Canterbury in New Zealand. He said that one of the reasons why he had made a stopover in Tokyo was that the University of Canterbury had commissioned him to find a suitable person to teach courses on Japan. When I explained to him that my position at McGill would come to an end at the end of the 1975–76 academic year, he said that he would be delighted to

recommend me for this position. I felt relieved, but before I received a formal offer of a position from the University of Canterbury, Professor B. notified the McGill History Department that he would not return to McGill. A search committee was created to find a person to fill the vacancy created by his resignation, and by the end of March 1976, the Department decided to hire me. In 1982 I was granted tenure. However, by around 1980 the initial reason that made me resign from the University of Tokyo and come to McGill seemed to have disappeared. I had left Japan to achieve a certain goal that was dear to me. Ostensibly, I had failed to achieve that goal, but I felt that I had tried my best and felt no regret.

Now I started thinking of returning to Japan to resume my academic career in Japan. Just around that time, a position as Associate Professor at the Research Center for Japanese Culture at one of the most prestigious national universities in Japan was offered to me. As I published a book based on my dissertation in 1977, my second book in 1979, and my third book in 1981 all from Japanese publishers, apparently I had become quite well known in Japan fairly early, and that was presumably the reason why such a very attractive position was offered to me. I decided to accept it and sent a letter of acceptance by registered mail. Then something quite unexpected happened to me. I had something like an attack of anxiety neurosis and it continued until I sent a telegram to cancel my acceptance of the position offered by that university. I tried to understand what had happened to me.

Mr. T., a very prominent Japanese intellectual, spent the 1979–80 academic year at McGill as a visiting professor. He and his wife, a university professor, showed extraordinary kindness to me and I spent several hours discussing all sorts of things with them in their apartment quite regularly, often until 2 a.m. When he learned the reason why I had come to Canada, he pronounced that I was a person who had a demon within me.

He explained how he had dealt with his own demon. What was important was to keep a promise you had made to your demon. He added, “Mr. Ota, your demon is now standing before you blocking your way, preventing you from doing what you want to do. Your demon may eventually come to help you pushing you from behind in the direction that you wanted to go.” I never took what he said literally. I never believed in the existence of a demon outside the mind, but I thought I understood what he meant to say. To return to the topic of the completely unsolicited offer of a position from a Japanese university, to my surprise, the same university repeated the offer of the previous year. The rational

side of me prevailed, and I sent a letter of acceptance once again. And exactly same thing was repeated. I had to cancel my acceptance once again by sending a telegram. To my amazement, the same university tried to recruit me to their research center for Japanese culture for the third time. This time Professor M. who esteemed me very highly as a scholar and was the driving force to recruit me to the center said that I did not have to reply immediately. I should visit the university, talk with various people, and then decide if I should accept their offer or not. I did visit the university, and my visit made me feel that it was a very attractive place to work. However, I was nervous. Professor M. who was behind the offer of the position to me the two consecutive years previously explained to me that he would have to resign from the university if I accepted their offer for the third time and cancelled my acceptance for the third time. Finally, I accepted the offer.

An attack of anxiety neurosis did not occur immediately, but I continued to feel quite nervous. Things took an unexpected turn. I learned later that when the recommendation to hire me was forwarded to the higher level for their approval, there were people who objected to offering the position to a person who had already rejected their offer twice and the recommendation could not get enough number of votes necessary for its approval. My reaction to this news was a deep sigh of relief.

After my experiences with the research center, I decided that my demon was still very much alive, to use Mr. T.'s term. I decided to live pursuing values as close to those that had made me leave Japan and come to Canada. I also decided not to accept any permanent position in Japan as long as I was not sure that my demon had left me.

Unsolicited offers of university positions continued for a long time. One year the day I arrived in Tokyo to spend the summer vacation, I learned that the president of a private university had phoned me the day before and left a message asking me to return his call as soon as possible. It was again an offer of a position to me. I declined it as politely as possible. I believe that I was already in my late fifties when a professor of a private university in Kyoto tried to recruit me.

Let me explain the reasons why *Basil Hall Chamberlain: Portrait of a Japanologist* is a book for which I have a strong attachment. First, Chamberlain also unexpectedly spent many years away from his native country, England. He was a very sensitive young man interested in literature and philosophy. Instead of sending him to Oxford University, his father made him enter Barings Bank to start a career completely unsuited to him. Chamberlain had a nervous breakdown within a few months, and his family sent him on

a long ocean voyage to help him to recover from his nervous breakdown. He arrived in Yokohama, Japan, in 1873 as a young man of 22 years of age. He liked Japan and did not leave Japan definitively until 1911, that is, 38 years later, when he left Japan to retire in Geneva, Switzerland.

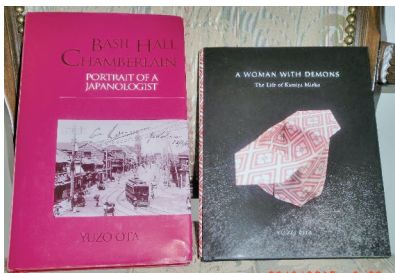
When I also became a person living in a country different from my native country unexpectedly for a long time, I felt that I should live in two worlds in the way he did. Chamberlain regarded himself as an uprooted man, “uprooted,” because he could “never quite [be] satisfied at one end of the world because [he was] equally fond of the other” (as quoted in *Basil Hall Chamberlain: Portrait of a Japanologist*, p. 9). Chamberlain became a Japanologist with a profound knowledge of Japan and deep love for Japan, but at the same time he remained a man with profound knowledge and love for European civilization. I decided to remain what I was, a person born, brought up, and educated in Japan.

After my arrival in Montreal, I quickly acquired the reading knowledge of French necessary to grade examinations and papers written in French by rereading works of Tolstoy and Dostoevsky, which I had read in Japanese translation, in French translation. Beyond that I did not try hard to assimilate myself to Canada or the North American academic world. I felt that I could make a contribution to McGill by remaining somewhat different. Chamberlain became a person dear to me when I realized that he was a person who embodied values that were also my values. I admired Chamberlain not only as a Japanologist, but also for “his general intellectual probity, freedom from greed for power and fame, and a warm consideration towards other people” (*Basil Hall Chamberlain*, p. viii).

The reasons why *A Woman with Demons* is a book for which I have a strong attachment are, first, because I was also a person with a demon. I used the past tense and the singular “demon” rather than “demons.” Kamiya once wrote, “A person possessed with seven demons—that truly is me” (*A Woman with Demons*, p. xiii), but unlike Kamiya, a very complex person divided within herself, I was and still am a simple person with little inner division. Kamiya was traumatized by the death of a young man whom she wanted to marry when she was twenty. My biography interpreted her life in the light of this loss to which none of previous biographers had paid any attention. I had had an experience that made me a person capable of understanding her loss with empathy. For me that was the only source from which my demon could arise. I tend to think that my demon, a very cute one because what my demon wanted was only that I should continue to center my life around the value of love.

Hiroko, my wife, doubts that I still harbor a demon within me. I also have a feeling that my cute demon decided to leave me when my book *A Woman with Demons* was published. After all, *A Woman with Demons* is a biography that strongly reaffirms the value of love.

I regard my thirty-eight years at McGill as a very fortunate time. I have found close friends not only in Montreal but also in Japan, Europe, and New Zealand. Among them are some unexpected people. Professor M. who tried to recruit me to his university three times in vain and his wife have become very close friends of Hiroko and myself. We spent numerous very happy times together in his house, in our house in Tokyo or at various restaurants. We have become friends with people with whom there did not seem to be much points of contact at first, such as a Canadian journalist and her husband who was a prominent Japanese voice actor. At McGill, too, some people, such as M. S. and C. D., treated not only myself but Hiroko as close friends. It is a shame that many of my McGill friends are no longer members of the McGill faculty. Nevertheless, I feel that my McGill years taken as a whole have been a very blessed time for me and Hiroko.



日本との出会い 30年

楊 際開

1985年1月15日、成田空港に降り立った私にとって、初めて目にした日本の印象は、成人式を迎える着物姿の娘たちでした。27歳の誕生日を迎えたばかりでした。

研究経歴

来日した私は、学習院大学の修士課程で、中国の反満革命家である章炳麟（号・章太炎）の思想の研究を始め、その後、東京大学の平野健一郎先生の下で、博士課程を修了しました。修士課程の時に手にした島田虔次の『中国革命の先駆者たち』（筑摩書房、1965年）から、章太炎と同時代の人である温州籍変法家宋恕の存在を知ったことが研究のきっかけでした。

1990年の温州への調査の際に、いまは亡き胡珠生先生から宋恕・陳虬・陳黻宸という近代温州の三傑について伺う機会がありました。この三傑を通じて章太炎を理解する新たな視点が得られるのではないかと思い、温州への調査で手に入れた陳虬の資料に基づき、陳虬研究でファイナル・コロキウムまで進みました。平野先生からは、陳虬は一流の思想家ではないと言われたのですが、私にとっては学術研究への道に入る端緒として、とてもいい訓練となりました。

1994年11月21日に帰国し、最初に発表した学術論文は「章炳麟はなぜ『反満』をしなければならなかったのか」（『二十一世紀』香港中文大学、1998年4月号）でした。19世紀末の東アジアの国際関係から章炳麟の反満思想に新たな照明を当てることは、今までの通説と異なっていましたが、その時から、彼の政治思想が近代温州の三傑と絡んでいることに気がついていました。前出の宋恕は、李鴻章に見込まれて、章炳麟・譚嗣同・梁啓超等とも親交があった、清末の著名な改革派の思想家です。帰国する前に、1993年に出版された『宋恕集』を購入してはいましたが、本格的な研究は1998年からだったと思います。2006年に宋恕研究の成果を書物にし、原稿を3回改め、2010年に『清末変法と日本—宋恕の政治思想を中心に』と題して上海古籍出版社から出版しました。

私の勤めている杭州師範大学では、2011年に国学院が創設されました。私は国学院の専任研究員になり、俞樾や章炳麟ら、杭州ゆかりの清末の思想家の研究を再開しました。その成果として書いた論文には「宋恕と譚嗣同—『仁学』を中心に」（『杭州師範大学学报』、2014年第2期）、「章太炎と辛亥革命—清代学術史の政治的ジレンマを手掛かりに」（『政治思想史』天津師範大学、2015年第3期）と、「章太炎の東アジア連邦構想」（『東アジア文化交渉研究』関西大学文化交渉学教育研究拠点、2015年第8号）等があります。伊東貴之教授の『思想としての近世中国』（東京大学出版会、2005年）を中国語に翻訳したことが縁で、2013年1月から台湾大学に一カ月滞在させていただきました。そこで、章太炎の東アジア連邦構想への理解を深め、また、政治大学法学部の陳惠馨女史との出会いで、宋恕の改革思想を理解する法制史的なヒントを得ることができました。2014年1月、マカオ大学歴史学部が主催した東方外交の国際シンポジウムに参加した時に提出した論文「中華世界秩序の近代的変貌—魏源の海防思想の形成と伝播を中心に」は、魏源海防思想の意義を再考するものです。

2014年3月1日からは、世界の日本研究交流の拠点である国際日本文化研究センター（日文研）に外国人研究員として1年間滞在することになりました。この滞在中、日本との出会いからの歴史をもう一度自分の中で整理する機会に恵まれました。例えば、京都大学の寺田浩明教授との対話を通じて執筆した「近代中国の思想と革命研究覚書—日本からの思想的な要因を中心に」が、日文研発行の学術誌『日本研究』第51集（2015年3月）に掲載されました。日文研外国人研究員への申請課題である「東アジアという視野における徂徠学とその意義—辛亥革命の思想史的意義を手掛かりとして」も既に完成しています。

日文研では、伊東貴之教授主宰の「『心身／身心』と『環境』の哲学—東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み」と題する共同研究会で発表した「吉田松陰の革命思想とその天下観—東アジアの社会動員という視点から」が同氏編著の論文集（汲古書院、2016年）に収録されました。特任助教の宮崎康子女史のバタイユ研究に導かれて出会ったJ=L・ナンシー『無為の共同体—哲学を問い直す分有の思考』（西谷修・安原伸一訳、以文社、2001年）から、西洋流のいわゆる国民国家の思考枠を突き破るような発想法に感銘を受け、また、小松和彦所長の民俗学研究との出会いにより、古代日本史への理解に重要な視点を獲得することができました。さらに、副所長でもある井上章一教授の『日

本には古代があったのか』(角川選書、2008年)との出会いもまた、私のこの感銘を新たにしてくれました。

将来の方向

この間、博士課程の指導教官だった平野先生のご研究は、エスニシティー論から、近代国家を相対化させ、アジアにおける「文化の共通性」の問題に至っており、私の唱える「文明の共同性」というテーマと問題圏を共有しています。異なる点は、平野先生の言われる「文化」は国民国家という前提に立っていますが、私はむしろ、文化ではなく、「文明」としての共通性を考えています。つまり、東アジア世界における新たな人の国際移動は、文化の共通性ではなく、文明的絆というようなものを実感させるものであり、それゆえ、文明の共同性への復権を要求し、今まで一つのパラダイムと思われた近代国家の辺境をなし崩し的に文明レベルで再構築していくものではないか、と考える点にあります。したがって、東アジアにおいては、西洋流の国民国家にビルド・インされた物差しから離れて、如何にして自分たちの文明的な共同性への回帰を果たすべきかが問題になるでしょう。

文明の共同性への復権は、国民国家へのアイデンティティーから、山や川への帰属意識の復権を通じて達成されるものです。そのため、「山と川を主とすべき」と主張する魏源や、魏源のこの主張を自分の中に受け止めた吉田松陰の思想的原点に立ち返って再出発しなければなりません。私は、内藤湖南を吉田松陰の思想と精神の後継者だと考えており、井上章一教授主催の共同研究会「人文諸学の科学史的研究」で、「内藤湖南の中国観の形成と清末変法運動」と題した報告をし、以下の問題を提起しました。

内藤の政治思想は章炳麟に呼応する

内藤の平民史観は『碧巖録』に由来する

内藤の社会史観は章学誠に基づく

内藤は近代国家の価値基盤を東アジア文化史に置く

内藤は東洋の多元的地域文化による連邦制を提議する

内藤から見れば、日本文化は東アジア連邦制を造る要にある

内藤は吉田松陰の魏源理解を受け継ぐ

内藤は朴学における清朝自由主義の伝統に立脚する

これら八つの視点を、今までの私の近代中国の思想と革命についての研究の中に組み入れながら、東アジアの文明触変史観を再構築することが、これからの研究課題となります。現在は、博士号の申請も兼ねて、これまで中国語で書いた諸論文を日本語に訳し直し、『中国革命の起源』として、日本語での出版を目指しています。執筆中の宋恕伝『宋恕とその時代』も日本語に訳し、日本語での出版を考えています。

また、「近代日本のアジア思想と近代中国思想の中の日本的な要素」という研究テーマについても、東アジアにおける文明安全およびその文明外交、文明触変という視角から考えていくつもりです。

日文研に滞在した1年、萩や博多、長崎、それから弘前等へ旅行し、見聞を広めました。また、二人の子供が暮らす札幌を訪問する際に目にした北海道の山と川など、日本の山河の美しさに感動しました。

日本との出会いからすでに30年、私の生命も日本と一体となっており、東アジア世界の存在を実感しております。早稲田大学の劉傑教授の言うように、「経済的な空間としての東アジアが一応その姿を現している現在、重要なのは文化空間としての東アジアである」（西川潤・平野健一郎編『国際移動と社会変容』岩波書店、2007年、69頁）と強く感じています。この「文化空間としての東アジア」とは、内藤湖南がかつて『新支那論』の中で述べた「東洋文化の発展は国民の区別を無視」しているということと同じレベルで捉えるべきだと考えます。なぜなら、内藤のいう「東洋文化」の中身は東洋諸国に共通の「文明」を指すもので、一国中心主義的な「文化」ではないからです。したがって、東アジアにおける共同性を考察するためには、近代国家アイデンティティーから東アジア文明アイデンティティーへの転換こそ急務なのです。自分の研究の意義をここに見出しています。

東アジア文明アイデンティティーに関して、1年間の京都滞在中でもいろいろと発見がありました。一番感動したのは、宇治の萬福寺（黄檗宗大本山）です。萬福寺を建立した隠元禅師は、明朝時代の臨済宗を代表する僧で、開寺に当たり、中国での自坊（福建省）と同じ「黄檗山萬福寺」と名づけました。黄檗宗は中国大陆での長い道程を経て長崎に入り、さらに大阪の普門寺を経て、

京都の宇治に根を下したのです。また、信貴山の飛倉の話は、杭州靈隱寺飛來峰の話と多くの共通項を持っています。

これらは、私の唱えている「文明の共同性」の表象として、東アジア世界の人々の国境を越えた文化よりも深く広い文明の共同性の歴史的・文明的絆の証左となるのではないのでしょうか。国民や国家の利益とは、共通の文明的基礎の上に成り立っているものです。萬福寺の黄檗宗や信貴山の飛倉のような倫理的連帯が海を越えて、中国をはじめとする東アジア世界へ広がっていくように、京都はこれからの東アジアにおける文化的発信源として、文明規模の共同性の回復を目指すための拠点の一つとなるのではないかと期待しています。

Studying Japanese Contemporary (and Traditional) Music from Italy

Luciana Galliano

Japanese musical sounds were among the first objects of the new ethnomusicological research in the early twentieth century, an interest that challenged the harsh opinion of Japanese music held by Jesuit missionaries in the seventeenth century, who noted that “our vocal and instrumental music wounds their ears, and they delight in their own music which truly tortures our hearing.”¹ It was at the Berlin School of Comparative Musicology that Japanese music samples (contemporary by necessity) were recorded at the Phonogram Archive of the Society for Oriental Music Research, founded by Carl Stumpf and Erich von Hornbostel in 1900.²

There were monographs about Japanese music and musical instruments, the first written by Leopold Müller (1874), then by Francis Piggott (1893) and Rudolph Dittrich (1897), followed by Noël Peri (1939), but these were concerned with traditional music, which although fascinating and unique, no longer enjoyed favor in Japanese society, where the popularity of Western music had been firmly entrenched since the beginning of the nineteenth century. Since its introduction, mainly through school education,³ there have been Japanese composers, musicians, orchestras, conductors and musicologists in the Western tradition, making up a successful and complete musical world, which is in turn the result of a large project of acquiring knowledge and inevitable exchange.

In the 1980s, fully trained in music and with an M.A. in musicology, I was very much aware of the discourse on contemporary music in the West (in which I specialized) but had never heard of a Japanese discourse, or indeed anything similar related to the Japanese experience of incorporating Western music and developing an (inter)national musical language that built upon their native tradition.

My eyes were opened thanks to the 21st Annual Festival Pontino in 1985, in which a workshop on Contemporary Music, chaired by Goffredo Petrassi, was dedicated to Japan. It was an important event that hosted, in beautiful locations such as Fossanova and Caetani castle at Sermoneta, figures from the musical world such as musicologist

1 Boxer 1951, p. 77.

2 McCollum and Hebert 2014, p. 310.

3 Galliano 2002, Chap. 3, pp. 1, 93.

Charles Rosen, interpreters Alicia De Larrocha, Cecilia Gasdia, Massimiliano Damerini, Roberto Fabbricani, and so on. The Festival Director, Riccardo Cerocchi, wrote in the program notes (which contained some explanations in Japanese): “Distinguished Japanese musicians [...] have honored us with their participation [...] This unique and coveted opportunity for dialogue is realized during three days of work with a detailed comparison of the musicians of the East and some of their most authoritative Italian colleagues.”

These “distinguished musicians” included Takemitsu Tōru, Ichianagi Toshi, Jō Kondō, and Matsudaira Yoriaki, together with Tanba Akira and Yoshihisa Taira, who came from Paris where they had long been active. Their works, both symphonic and chamber music, were presented in three concerts organized by Mario Bortolotto, together with pieces by the “authoritative Italian colleagues” Francesco Pennisi, Salvatore Sciarino, Paolo Castaldi, Aldo Clementi, Luciano Berio, and Camillo Togni, whose works had been commissioned for the occasion. The concerts were broadcast by the national radio RAI culture channel; the event was of great importance, and garnered intelligent criticism and excited comments from a positive public.

At the concert that I attended on June 15, I listened to pieces by Matsudaira Yoriaki and Takemitsu Tōru, both representative of the new melding of traditional Japanese and Western music, and by Ichianagi Toshi who was by then already beyond the profound influence of John Cage. At the corresponding conference, the composer Tanba Akira and the architect Isozaki Arata engaged in dialogue with their Italian counterparts. It was on that day that I was struck by the different quality and sensitivity of the music of those composers compared to what I knew of the European scene, and I decided to further my study of contemporary Japanese music. The pieces played there were different from the average “good” European writing, some beautiful, others opaque and impenetrable. I had to understand more, but at the time there were no studies of Japanese modern music available in Western languages.

There had been a Japanese musical presence in Italy since the late 1950s, including at the Festival of the International Society of Contemporary Music (SIMC, Rome 1959), and at the various Venice Biennales (1938, 1942, 1954, 1958, 1961, 1962, 1966, etc.). The Third Annual International Week of New Music in Palermo, held in the first week of October 1962, was a cornerstone in terms of the influence it had on Italian composers.⁴ The

4 *Bugaku* by Matsudaira; a Quartet by Mayuzumi Toshirō; *Succession* [sic] by Matsushita Shin'ichi run alongside *I canti di vita e d'amore* by Luigi Nono (then titled *On the bridge of Hiroshima*); *Puppenspiel* by Franco Donatoni; *Hétérophonie* by Mauricio Kagel; a *Klavierstück* by Karlheinz Stockhausen; John Cage's *Atlas eclipticalis*, etc. See Tessitore 2003, p. 116.

presence of Japanese contemporary music in Italy increased from the end of the 1960s and during the 1970s, with a constructive partnership created between two new contemporary institutions in Rome in 1962, the Associazione Nuova Consonanza and the Japanese Cultural Institute, where we find such important figures as Giacinto Scelsi and Hirayama Michiko.⁵ Together the two institutions produced concerts, meetings and exchanges of knowledge between Japanese and Italian composers, whereby both groups referred to and used a new international contemporary musical language. However, the ensuing response from the media was lackluster, with newspaper and magazine critics unable to truly grasp the specificity of what I had heard and what had intrigued me at the Sermoneta concert.⁶

Therefore I embarked on a long-term research project that involved not only studying texts but also getting to know composers, musicians, and musicologists: this was a new musical landscape that built upon a traditional one, and one about which there were few reference books in European languages (Malm 1959; Harich-Schneider 1973; Garfias 1975; Kikkawa 1984). My aim was to shed light on the state of contemporary Japanese music.

In 1987 I left for my first extended period of study and research, funded by a Monbushō grant, and in 1991 I graduated with a DMA in Musicology from Tokyo Geijutsu Daigaku (Tokyo University of the Arts, known more commonly as Geidai). My efforts culminated in 1998 with the Italian publication (Cafoscarina) of my book *Yōgaku: Japanese Music in the 20th Century* (English edition published by Scarecrow Press in 2002), hailed by some as the first comprehensive text on Western-style modern and contemporary Japanese music available in a Western language. Fellow researchers at the time in Tokyo included Judith Herd who had just completed a study on Japanese *yōgaku* for her Ph.D. (Herd 1987), Ury Eppstein (Eppstein 1994), and Emmanuelle Loubet, who was exploring the electroacoustic music scene (Loubet 1997–98). I had to study Japanese in order to be able to read the scarce Japanese literature (Togashi 1956; Inoue and Akiyama 1966; Akiyama 1979; Takeda 1980; Akiyama 1981, etc.) and to write my dissertation thesis. Virtually my entire cohort at Geidai Musicology—Chōki Seiji, Narazaki Yōko, Numano Yūji, Takaku Satoru and myself—turned to contemporary Japanese music, and ever since then we have all been fully active in research and publication.

5 Nuova Consonanza was founded in 1959 by a group of young composers associated with Franco Evangelisti—Egisto Macchi, Mauro Bortolotti, Domenico Guaccero, Mario Bertoncini—and committed within the European trends of avant-garde music. See Tortora 1994, also the Appendice I “Michiko per Nuova Consonanza,” p. 173.

6 Galliano 2004.

It goes without saying that in order to understand music, we need to know where it comes from—the history and the people—and I was able to learn this musical tradition at Geidai. Nevertheless, at a certain point I felt I had to go deeper. Thanks to my first Nichibunken Fellowship, for ten months (September 2004–June 2005) I was able to study the history, theory and aesthetics of Noh theater, a keystone and source of different uniquely Japanese performing arts. I analyzed the themes and techniques of the music performed in Noh theatre, or Noh *opera* as I prefer to say, since this form is primarily singing accompanied by musical instruments. Previous scholarship tended to emphasize the literary and performative aspects of Noh, whereas I shifted the focus to the music itself. I was able to develop an understanding of the complex Noh repertoire with the wonderful resources of the Nichibunken library, conversations with fellow scholars, the musicians who made themselves available to my questions, and especially the ample time to research afforded me by the Nichibunken Fellowship. All of these factors allowed me to finish a manuscript on the work of composer Yuasa Jōji, the subject of my doctoral thesis, whose style was deeply influenced by his many years of experience as a *kokata* (child performer) in Noh. This was published in 2012 as *The Music of Jōji Yuasa* (Cambridge Scholars Publishing); the Japanese translation by Ono Michiko will be released by Artes Publishing in 2016.

I have been asked why I chose Yuasa, and not the more famous and established Takemitsu Tōru, to devote years of study and analysis to. Firstly, I very much liked Yuasa's music, of course, but I also found it fascinating that while Takemitsu was internationally known and considered intriguing *because* of his “exotic” nationality and unprecedented sensitivity to phrasing and instrumental color, Yuasa enjoyed an international reputation as a composer pure and simple (that is, with no regard for nationality), although his special mastery of techniques and time flow were obviously not Western but deeply Japanese.

Having studied in depth contemporary Japanese music and compared the output of both Italian/European and Japanese composers, I found the 1960s of great interest, and perhaps the most fertile and interesting period for contemporary music in Japan and in almost all Western countries. There has been much interest from scholars in this period and I felt compelled to continue to explore the Japanese music scene of the 1960s, looking at a group of extremely radical avant-garde Japanese artists that were part of an international movement called Fluxus. Fluxus was an incredibly innovative and creative movement, critical to the ensuing vanguard; it was the first, and to date the only, truly international

group in which music played an important role conceptually. I started researching Japan Fluxus thanks to a Japan Foundation Fellowship (September–November 2011), and I was able to complete it with a second Nichibunken Fellowship (September 2014–March 2015). I examined important materials, and this led to a better understanding of the uniquely Japanese creative aspects within the international avant-garde movement.

By looking in depth at the restlessness of radical young artists in the 1960s, I was able to reveal a new dimension to avant-garde, one different to that of the “official” or recognized trope of Takemitsu, Yuasa, and their contemporaries. The musicians and the aesthetic of Fluxus in its Japanese meaning, i.e. the movement I studied and that existed, in my opinion at least, from the end of the 1950s until 1968, dwelt in a different concept of freedom, in an unprecedented depth in terms of the great themes of life, art, expression, social community, otherness, and gender. This new research involved a new survey focusing on the Japanese social scene and its discourse—this meant adding to music (in the conceptually wide understanding of Fluxus artists) the themes of contemporaneity and interculturality, and elaborating on concepts of “otherness,” and on aspects of various social identifications and expressive issues in Japan mediated by musical production (performance, technology, textual and visual productions). I presented my research in two lectures (a 2014 Symposium titled “Music and Modernity in East Asia” at the Research Center for Japanese Traditional Music of the Kyoto City University of Arts, and at a 2015 Nichibunken Thursday seminar), and I am working toward publication.

Since I began my research on Japanese contemporary music, the number of scholars has increased and the caliber of research has greatly improved. It is true that musical “cultural postmodernism can be seen as an ideology *tout court* in the classic sense of a cultural system that conceals domination and inequality,”⁷ as composer Hosokawa Toshio confirms: “when we speak of culture, all of us understand that it is Western culture which is spoken of.” Nevertheless, certain musical exchanges can act as paradigms of a “communicative action” as defined by Jürgen Habermas. “[C]ultural postmodernism... [can conceal] domination and inequality,” yet musicians, composers, musicologists, performers, organizers, institutions—an army of people—work together to produce a common world of (musical) intentions and meanings. This is a *communicative action* vis-à-vis Habermas: a negotiating, a using and exchanging of languages and representations,

7 Born and Hesmondhalgh 2000, p. 21.

sounds and thoughts, humanity and proximity, in which the Japanese are actors along with Italians, other Europeans, Americans and so on, and of which I am proud to be part of.

REFERENCES

- Akiyama Kuniharu. *Nihon no sakk'yokuka tachi*. 2 vols. Ongaku no Tomosha, 1979.
- Akiyama Teruo, ed. *Ongaku no techō: Takemitsu Tōru*. Tokyo: Aonisha, 1981.
- Gianmario Borio and Luciana Galliano, eds. *Music Facing Up to Silence: Writings on Tōru Takemitsu*. Pavia, Italy: Pavia University Press, 2010.
- Georgina Born and David Hesmondhalgh, eds. *Western Music and Its Others*. Berkeley: University of California Press, 2000.
- Charles R. Boxer. *The Christian Century in Japan: 1549–1650*. Los Angeles: University of California Press, 1951.
- Rudolph Dittrich. “Beiträge zur Kenntnis der japanischen Musik.” *Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für die Natur und Volkerkunde Ostasiens* 58:6 (1897), pp. 376–91.
- Ury Eppstein. *The Beginning of Western Music in Meiji Era Japan*. New York/Lewiston: Edwin Mellen, 1994.
- Luciana Galliano. *Yōgaku: Japanese Music in Twentieth Century*. Lanham MD: Scarecrow Press, 2002.
- . “La ricezione della musica giapponese in Italia.” In *Italia Giappone 450 anni*, ed. A. Tamburello. Roma: Isiao-Iuo, 2004, pp. 522–29.
- , ed. *Ma. La sensibilità estetica giapponese*. Torino: EAM, 2004.
- . *The Music of Jōji Yuasa*. Newcastle upon Tyne UK: Cambridge Scholars Publishing, 2012.
- , ed. *Lotus. La musica di Toshio Hosokawa*. Milano: Auditorium, 2013.
- Robert Garfias. *Music of a Thousand Autumns: The Tōgaku Style of Japanese Court Music*. Los Angeles: University of California Press, 1975.
- Jürgen Habermas. *The Theory of Communicative Action: Reason and the Rationalization of Society*. Boston: Beacon Press, 1985.
- Eta Harich-Schneider. *A History of Japanese Music*. London: Oxford University Press, 1973.

- Thomas R. H. Havens. *Radicals and Realists in the Japanese Nonverbal Arts: The Avant-garde Rejection of Modernism*. Honolulu: University of Hawai'i Press, 2006.
- Judith A. Herd. *Change and Continuity in Japanese Contemporary Music*. Ph.D. dissertation, Brown University, 1987.
- Ichiyonagi Toshi. *Oto o kiku: Ongaku no ashita o kangaeru*. Tokyo: Iwanami Shoten, 1984.
- Inoue Takeshi and Akiyama Ryūei. *Nihon no ongaku hyakunen-shi*. Tokyo: Daiichi-hōki Shuppan, 1966.
- Kikkawa Eishi. *Vom Charakter der japanischen Musik*. Kassel: Bärenreiter, 1984.
- Kondō Jō. *Sen no ongaku*. Tokyo: Asahi Shuppansha, 1979.
- Emmanuelle Loubet. "The Beginnings of Electronic Music in Japan, with a Focus on the NHK Studio: The 1950s and 1960s." *Computer Music Journal* 21:4 (1997), pp. 11–22.
- . "The Beginnings of Electronic Music in Japan, with a Focus on the NHK Studio: The 1970s." *Computer Music Journal* 22:1 (1998), pp. 49–55.
- William Malm. *Japanese Music and Japanese Instruments*. Tokyo: Tuttle, 1959.
- Jonathan McCollum and David G. Hebert, eds. *Theory and Method in Historical Ethnomusicology*. Lanham MD: Lexington Books, 2014.
- Leopold Müller. "Einige Notizen über die japanische Musik." *Mitteilungen der deutschen Gesellschaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens* 6 (1874), pp. 13–31.
- Noël Peri. *Essai sur les gammes japonaises*. Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner, 1939.
- Francis Piggott. *The Music and Musical Instruments of Japan*. London: Batsford, 1893.
- Takahashi Yūji. *Ongaku no oshie*. Tokyo: Shōbunsha, 1978.
- Takeda Akimichi. *Gendai ongaku nōto*. Tokyo: Shin'ya Sōshosha; Tōkyō Ongakusha, 1980.
- Takemitsu Tōru. *Ki no kagami, sōgen no kagami*. Tokyo: Shinchōsha, 1975.
- Floriana Tessitore, ed. *Visione che si ebbe nel cielo di Palermo. Le Settimane Internazionali Nuova Musica (1960–1968)*. Roma: CIDIM - Rai Eri, 2003.
- Togashi Yasushi. *Nihon no sakk'yokuka*. Tokyo: Ongaku no Tomosha, 1956.
- Alison Tokita and David W. Hughes, eds. *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. Burlington VT: Ashgate Publishing, 2008.
- Tōkyō Geijutsu Daigaku Hyakunen-shi Henshū Inkai, ed. *Tōkyō Geijutsu Daigaku*

hyakunen-shi: Tōkyō ongaku gakkō hen dai ikkan. Tokyo: Ongaku no Tomosha, 1981.

Daniela Tortora. *Nuova Consonanza 1989–1994*. Lucca: LIM, 1994.

Bonnie Wade. *Composing Japanese Modernity*. Chicago: University of Chicago Press, 2014.

Yamada Kōsaku. *Jiden: Wakakihi no kyōshikyoku*. Tokyo: Chūō Kōron Sha, 1966.

Yuasa Jōji. *Gendai ongaku: Toki no Toki*. Tokyo: Zen'on Gakufu Shuppansha, 1979.

日文研随想——やぶにらみ私論

琴浦 香代子

1. 「日本研究」とは？

2009年4月-2015年3月末の6年間にわたり、日文研に「海外研究交流プロジェクト員」として勤務して、海外研究交流という立場から多くの国内外の研究者と事務方の仕事ぶりを見聞する機会に恵まれた。

縁あって日文研に勤めることになったわけだが、当初（募集時）の所属先であった海外研究交流室は、着任の2009年4月1日は混乱の極、交流室は物理的に消滅し、着任先は研究協力課にいつの間にか変更、事務室の私にあてがわれる椅子も電話も何もない光景は、その後の波乱万丈の幕開けに相応しかった。

日文研では、世界は広いと思知り、能力・熱意・人格の三拍子揃った多くの研究者たちとの出会いは何ものにも代えがたい人生の宝となった。年齢や知名度に左右されない分け隔てない対応、ご家族の生活や健康問題をも含めて慣れない海外生活での不安と不便を軽減し、ご自身の研究に少しでもプラスになるような滞在生活全般の支援を続けてきたつもりだ。私の海外生活で受けた様々な心遣いやトラブルから学んだ教訓などを、日文研の仕事に活かすきれたと思っている。

さらに日文研の中で悟ったことのひとつは、（私を含めて）日本人は驚くほど世界を知らない、日本のこともあまり知らない、かなりのどかな一国民であるという実感である。そもそも「日本文化を研究する研究所」という存在が（いまだに）明確に把握しきれず、日本文化研究センター=Center for Japanese Studies と日英語不一致、センターなのか研究所なのか曖昧で、問合せのたびに「日本に関連するすべての事象を研究対象とする機関」と煙に巻くような回答は最後まで続いた。

現在は、広い視野のアジア研究としての日本研究という大きな流れができてはいるが、「日本」研究と「日本文化」研究との違いはいまだに明確にわからず、

今日に至っている。小所帯ゆえ、私の在職期間中の対象分野は人文・社会学、実際には(今議論の渦中の)人文系がほとんどであった。JSPS(日本学術振興会)や国際交流基金のフェローシップ取得者は無条件で受け入れていることから、「国際研究協力を推進する日本研究の一大拠点」という立ち位置を世界のアカデミズムにおいて明確にする必要を感じていた。日本唯一の国立の日本文化専門の研究機関として国際的な連携・協力の下で研究を行い、海外の日本研究を支援するという二大使命の下、急激に台頭するアジア諸国と共に多角的に相互理解を深めなければならない21世紀の現在では、1987年設立当初とは立ち位置や世界観などが異なっているはずだ。

「日本が世界に伍していく、貢献していく」という創設当初の志が実現できているかどうかを振り返ると同時に、30年近い研究と交流の蓄積をグローバルな視野で、現代的諸問題の分析・解決を含むすべての日本研究分野に積極的に貢献する道筋が常に明らかにされていなければ、公費を費やしての研究の意義が問われるのではないだろうか。この面では、海外の研究機関の世界戦略の組み立て手法と、国際的に通じる広報の上手さに学ぶところが大きいだろう。日文研の個性と有用性を世界中に堂々とアナウンスできる広報力が問われるところだ。

2. 「日本研究」のこれからは？

2009年の着任当時は欧米の研究者の採用が多かったが、その後急速に韓国・中国・台湾の研究者の割合が増加し、現在まで続いている。外国人研究員枠の国別バランスを慎重に配慮せねばならぬほど優秀な東アジア出身者の割合が増え、英国・ドイツ・フランスの研究者の採用が激減、米国からの採用がゼロの年もある。近年、米国は学術分野への助成が激減し、国を挙げて資金援助をしている中国研究・韓国研究へと日本研究者が「アジア研究者」として流れ、ベテラン層の高齢化と若手研究者層が薄いままという現状を見受けている。あるハーバード大院生(博士課程)は、「大学院の日本研究専攻者は僕一人で、専門ではない内容の講義まで手伝った(他に誰もいないため)」と語ってくれたが、優秀な若手研究者が日本研究の先進国たる米国で減少傾向であるとすれば、問題だろう。

一方、欧州の日本研究が下火になっているわけではなく、EJAS (European Association for Japanese Studies) などは会員数を増やして活発な活動を続けており、ぜひ日本に長期滞在し、実のある研究を行いたい、と熱望する研究者は少なくない。

全体的に見て、日教研の利用を希望する海外の日本研究者は増えている。日教研初の国からの来訪者は増え、同時に短期滞在から長期滞在傾向が進み、宿泊施設の日教研ハウスの稼働率はかなり上昇している。

京都大学では外部資金獲得の手段を兼ねて、完全にアジアのメンバーとして「アジア研究の世界最高峰となる研究拠点」を目指し、学部と大学院を束ねる大きなユニット単位で多角的な活動を行い、巨額の外部資金を獲得する専門官も雇用している。来年度から全学生に語学認定試験が義務づけられ（無償）、海外留学を推進するなど、語学力向上には相当の知恵とお金を注ぎ、明らかな成果が見えており、巨大な組織としてのトータルな海外情報発信もかなり進みつつある。

日本国内には、「日本文化研究所」と銘打つ私立大学の機関も少なくなく、「アジア研究」という視点からの展開を重要課題として動いている。また、中国、韓国、シンガポールなどはその国際性と資金力を総動員して、アカデミズムにおけるアジアの頂点を狙う勢いで活動を行っている。比べてみて、日本側からのアジア諸国に対する研究は依然として弱いのではないかと思う。

私は日教研の行った国内外の数多くのシンポジウムと研究交流に関わって、中・韓・日・英語を操る研究者に接するにつけて、国際的に通用する言語で、海外の研究者と学術交流を行い、自己の研究を国際的視野から考察できる回路を持つことは非常に有益なことだと観察している。さもなければ、日本抜きのアジア研究の国際化がどんどん進行するのではないか、いや既に日本抜きで欧米の諸大学との多くの共同研究が実施されているようである。

アジアやそこから拓ける世界の視点に立った日本研究を世界に発信する役割は日教研が担うべきであるし、それが可能なだけの情報の蓄積と優秀な研究者が揃っていると信じている。

3. 海外研究協力ネットワークの役割は？

数字の上では海外の日本研究者は増加しているが、実際の日文研の研究支援の目玉のひとつである「外国人研究員」の受入れは順調であろうか。

2年先の申請という「外国人研究員」一般公募の性格と認知度の低さ等が原因で、東アジアを除くその他の地域からの応募は伸び悩んでいる。それと対照的に、受入期日や条件に柔軟性のある「外来研究員」への申請は、6年間で倍増（やはり中国籍が3倍近く増加）し、まさに世界中の様々な国から来られている。また、日文研の催しや共同研究会にも積極的に関与される研究者も多い「外来研究員」制度は、より時代の流れに沿ったスピード感と柔軟性のあるシステムである。金銭的支援も重要だが、滞在期間も2週間から1年という幅の広さ、3カ月前位まで申請可能で、宿泊施設まで提供できる、パソコン一つで研究可能なというオープンな日文研の研究協力システムに磨きをかけ、広く世界中で認知され活用されたい。

そのためには、英語での密な情報発信を可能とする広報体制、海外情報の収集とその不断の編集作業、それらをリアルタイムで活用するロジスティックな面での三位一体の協力体制が極めて重要だろう。それには長期的にその業務に従事でき、高い能力を発揮できる有能なスタッフが不可欠なことが自明なのだが、2～3年ごとにスタッフや責任者が入れ替わるようでは、そのシステム作りすらままならないのが実情であった。

情報はパソコンに入ったものだけではなく、現場の人間が持ち、豊穡させていくものだ。それらの見えない情報を含めて日文研の財産として取り込み、情報編集を継続していくのが「海外日本研究データベース」の基本だろう。IT革命は研究のあり方、手法に今後も大きな影響を与え続けるだろうが、システムとしての「情報力」は個人研究レベルではもちろんのこと、組織としての実力に直結するインフラであると思う。

また、海外の研究者を招へいするためには、受入教員が必要となるが、海外ネットワークを個人レベルで築いていることが前提となる制度のため、世代交代が進行しつつある現在、過去に蓄積された人的ネットワークは機能しなくなることが多い。大きな催しを海外で催すだけでなく、ワークショップ、セミナーなどピンポイントで適任者が出向いたり適任者を招へいできる体制にすれば、より活きた人的ネットワークが将来的にも継続・発展していけるだろう。

4. 日文研の将来は？

人間社会は、国境や性別、年代を越えてすべてが繋がっている。豊富な知識と知見を持った優れた研究者が現代の諸問題に積極的に関わり、果敢に情報発信、社会への提言という、生きた学問のあり方として実践することを期待しながら、研究者たちをサポートしてきたつもりだ。

日文研が誇る外書や春画、妖怪資料のコレクションや研究に続き、最近では国内外でサブカルチャー系や映像系研究に関する問い合わせが多くなり、この分野で真剣に研究を深めたい世代がとりわけ海外で育っていると実感する。彼らの興味の深さと熱意に驚くことしばしばで、これは一過性のものではなく、日本文化の顔の一つとして深められていく分野となると期待している。

政府主導のクールジャパンとは異なる位相で、日文研が新たな展開を可能とし、日本文化の研究拠点としてますます発展していく姿を想像するだけで楽しくなる。世界の日本研究の伝統と革新の場、優れた研究者を惹きつけるアカデミックな磁力を持つ「羅漢」「妖怪」「奇人」あるいは「精鋭」のたまり場として、「いつ行っても刺激的でワクワクする Nichibunken」であり続けることを期待している。

執筆者一覧

[編者]

- | | |
|------------------|--------------------------|
| 郭南燕 (Nanyan Guo) | 国際日本文化研究センター准教授 |
| 白石 恵理 | 元国際日本文化研究センター出版編集プロジェクト員 |

[執筆者]

- | | |
|---------------------------|--|
| Takashi Shogimen (将基面 貴巳) | Professor, Department of History and Art History, University of Otago |
| Yuzo Ota (太田 雄三) | Emeritus Professor, McGill University |
| Takeuchi Emiko (竹内 栄美子) | 明治大学文学部教授 |
| 梁 嶸 | 北京中医薬大学基礎医学院教授 |
| 王 鍵 | 中国社会科学歴史研究院近代史研究所研究員 |
| 高 文勝 | 天津師範大学政治文化・政治文明建設研究院研究員 |
| 陳 紅 | 浙江工商大学日本語言文化学院講師 |
| 竇 新光 | 神戸大学大学院人文学研究科博士課程、韓国成均館大学比較文化研究所客員研究員、日本学術振興会特別研究員 |
| 王 成 | 清華大学教授 |
| Maya Keliyan | Professor, Institute for the Study of Societies and Knowledge at Bulgarian Academy of Sciences |
| Emilia Chalandon | 京都大学研究員 |
| 朴 正一 | 釜山外国語大学校教授 |
| トゥンマン武井 典子 | ヨーテボリ大学名誉教授 |

高馬 京子	明治大学情報コミュニケーション学部准教授
Aisling O'Malley, Louis Cullen, Donagh Morris	Members of the Ireland Japan Association (IJA) Subcommittee
Gergana Petkova	Associate Professor, Sofia University “St. Kliment Ohridski,” Bulgaria
米山 尚子	Senior lecturer, University of Adelaide, Australia
Amaury A. García Rodríguez	Professor, Center for Asian and African Studies–El Colegio de México
Anthony Liman	Emeritus professor, University of Toronto
趙 建民	復旦大学歴史学科教授
楊 際開	杭州師範大学研究員
Luciana Galliano	カ・フォスカリ大学客員教授
琴浦 香代子	元国際日本文化研究センター海外研究交流プロジェクト員

編集後記

世界の研究者ひとり一人が長い時間をかけて実らせた豊饒な知の成果を前にするとき、現在の日本を取り巻く閉塞感と、近視眼的な経済効率を優先する、余裕のない社会構造に暗澹たる気持ちにさせられます。しかし一方で、人間がいる限り、人の思想・文化・社会を研究する学問はけっしてなくなるという思いも強くします。次世代の学問分野や研究対象の幅を狭めるような事態だけは招きたくありません。

本号の編集にあたり、Raquel Hill 博士と Patricia Fister 教授には前号同様、英文校正で大変お世話になりました。原稿とりまとめには輝川尚子氏にご尽力いただきました。また、編集委員の松田利彦教授、海外研究交流室長（当時）の瀧井一博教授から貴重なご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

白石 恵理

表紙図版

(表)

「ウィレム3世<雑種> 黄花八重咲きヒヤシンス、ギヨーム3世」『園芸学・植物学年報、オランダ王国庭園植物誌』第3-4巻、1860-1861。

(裏)

「アルメニアカ・ムメ・ファル・ブラエコキッシマ・ルビフロラ、シーボルト・エトゥ・ド・フリース (梅、早咲きの紅梅)」W.H. ド・フリース『オランダ本土と海外領土の園芸植物誌』第1巻、1855。

(いずれも国際日本文化研究センター所蔵)

世界の日本研究 2015 Japanese Studies around the World

非売品

編者 郭南燕・白石恵理
発行日 2016年5月31日
発行 国際日本文化研究センター 海外研究交流室
京都市西京区御陵大枝山町 3-2 (〒610-1192)
印刷 株式会社 図書印刷同朋舎

© 国際日本文化研究センター
ISBN 978-4-901558-80-8



JAPANESE STUDIES AND THE WORLD

INTERNATIONAL RESEARCH CENTER FOR JAPANESE STUDIES